


定価7000円＋税210円(税込7210円)

定価(7000円＋税)

ISBN4-7877-9609-7 C1321 P7210E





Digitized by the Internet Archive
in 2024

https://archive.org/details/isbn_4787796097

邪馬台国

徹底論争

全3巻

邪馬壹国問題を起点として

第1巻

A5判上製

3090円

第1部 言語 報告 鏡銘が明かす邪馬台国問題 三木太郎／天皇の物語と「記紀」の創作 奥田尚／漢字の意味・音から探る古代史 山田宗睦／邪馬台国、九州東岸説 千歳竜彦／「大海」と大陸からみた日本列島 鎌田武志／倭人伝の固有名詞をどう読むか 古田武彦 討論 考古学的出土物と編年問題／「三国志」の書誌学の問題／「大海」「海東」をどうとらえるか 第2部 行路・里程 報告 行路・里程記事の構成と近畿説 山尾幸久／中国古典の中の里・歩・尺 白崎昭一郎／倭人伝にみられる交易と諸国統治 奥田尚／「周髀算経」「山海経」の里単位 谷本茂／魏の使いの実際の行路 田島芳郎／「穆天子伝」の証明と短里一〇の論点 古田武彦 討論 里程記事もデタラメ？／方数千里：ほか／コメント 横佐知子他 会場からの質問と補足・自由討論

第2巻

3090円

第1部 考古学 三角縁神獸鏡の国産説 奥野正男／弥生後期の九州・瀬戸内・畿内 下條信行／倭国と「三種の神器」 藤田友治／邪馬壹国と考古学編年問題 西 博孝／倭人伝と「シユリマン」の原則 古田武彦 第2部 総合 邪馬台国とヤマト国の関係 田中 卓／委奴国・倭奴国と奴国と邪馬壹国 坂田 隆／古代史論争の坎どころ 中 小路駿逸／古代史入門・神社と地名と 灰塚照明／神武東侵と糸島・博多湾岸 古田武彦

第3巻

信州の古代学、古代のタ・対話ほか

3296円

主要目次 信州の古代学 「縄文の王国」 信濃と倭国時代の信濃 戸沢充則／縄文土器から見た神話の誕生 小林公明 古代のタ 洛陽古城跡に立って 小松左京・山田宗睦／古典医学にあらわれる古代像 横佐知子／吉野ヶ里遺跡発掘の広がり 高島忠平・七田忠昭／「古事記」のなかの女たち 中山千夏／私は古代史の王様 上岡龍太郎／対馬「亀ト神事」 岩佐教治 古代の対話 儒教と邪馬台国 加地伸行 古田武彦／日本語を遡行する 吉本隆明 古田武彦

東方史学会・古田武彦編 邪馬「台」国なのか邪馬「壹」国なのか、九州にあったのか、近畿だったのか。――いまだ解決されていない「邪馬台国」問題を、古田武彦と反対論者が会して、六日間 にわたり徹底的に討論したシンポジウムの全記録。新たな発見、新たな提言が相次ぎ、今後の解明・論争に欠くことができない。



台湾独立運動のバイブル！

17世紀以来、異民族に支配されつづけてきた台湾。いまやっと解放への動きが始まった。1635年にオランダに支配されて以来、清・日本・中国蒋政権と400年にわたって異民族の支配を受けてきた台湾。圧政のもとにさらされてきた台湾民衆の苦悩と闘争の歴史を語り、民族の解放に生涯をかけた著者が、情熱と信念をもって書きつづった台湾人の手になる初めての台湾通史。

◎史明氏略歴

1918年 台北・士林に生まれる。本名・施朝暉。第2次大戦中早稻田大学に学ぶ。1942年卒業して上海に渡り、中国共産党に加わって抗日に従事。中国共産党の台湾人差別に絶望して台湾にもどる。49年から台湾独立運動を指揮。

1952年 秘密組織「台湾独立武装隊」を結成し指名手配。基隆より日本に密航し、「独立台湾会」を組織。62年「台湾人四百年史」を刊行。

1993年 10月ひそかに台湾にもどり、いったん逮捕されるが即日保釈。12月台北に「独立台湾会」事務所を開いて台湾独立の啓蒙運動を展開中。

台湾人 四百年史

秘められた植民地解放の歴史

史明 著

新泉社

〈新装版〉

◎主要目次

- 第1章 台湾のあけぼの
- 第2章 原住民の生活と文化
- 第3章 上代の台湾
- 第4章 漢人移民の始まり
- 第5章 世界史に浮び上がった台湾
- 第6章 オランダ人の台湾経営
- 第7章 鄭氏の台湾支配
- 第8章 清朝治下の台湾
- 第9章 台湾民主国の抗日と日本軍の台湾占領
- 第10章 日本帝国主義下の台湾
- 第11章 台湾社会と台湾人
- 第12章 第二次大戦と台湾の変革
- 第13章 国民政府の台湾占領
- 第14章 二・二八事件
- 第15章 二・二八以後の台湾人
- 第16章 蔣政権亡命後の台湾
- 第17章 世界のなかの台湾
- 増補 蔣父子独裁専制下の植民地統治

A5判上製・800頁
定価13000円＋税390円
(税込13390円)

山本信良・今野敏彦著

大正・昭和教育の天皇制イデオロギ―

〔Ⅰ〕●学校行事の宗教的性格 A 5判上製 536頁 6000円

大正・昭和期において、教育方針や学校経営の目標に「敬神崇祖」が掲げられた。敬神崇祖は伝統的遺風として皇室尊崇の觀念養成の思想と合体し、この時期の国體觀念の基底をなした。これらの点は学校行事においても具体的に表出している。本書は、御真影、行幸啓、御大葬・御大典、天皇・皇族の冠婚葬祭などにまつわる学校行事を檢分し、そのうえで「マツリ」としての学校行事を解明する。さらに、宗教的性格をもつ学校行事の実態を神社参拝、靖国神社・皇大神宮・宮城の遙拝、朝礼・参宮旅行等において考察し、学校行事における宗教的性格の統合形態を分析する。

〔Ⅱ〕●学校行事の軍事的・擬似自治的性格 A 5判上製 552頁 7000円

昭和十年代から学校行事に、「天皇制マツリ」の色彩がより強化された。その宗教的性格は民俗的部分は、根底的な位置を占めている。それは、教育における天皇制を支える学校行事の基盤であった。その基盤に二つの楔が打ち込まれた。一つは軍事的性格に色どられた楔であり、いま一つは擬似自治的性格という楔である。これら二つの楔は、相互に連携を保ち、比喩的にいえば「橋」をかけて相互交流を行っている。しかもこの二つの楔が打ち込まれることによって、基底の宗教的性格は強まったのである。本書は、軍事的・擬似自治の学校行事の実態を通して、教育を受ける側の苦悩と悲劇を克明に復元する。

全訳精解 棋佐知子

だいどうるいじゆほう
〔普及版〕

大同類聚方

全5卷

〈呈内容見本〉

A5判上製各5150円

第一卷―用藥部の一 山草部 原野草部 蔓草草木部 木類部
第二卷―用藥部の一 土類 石 金類 貝類 魚類 虫類 禽類
第三卷―処方部の一 第四卷―処方部の一 第五卷―処方部の一
処方の対象分野は、疫病、風邪から関節病、憑依、脚気、めまい、耳鼻咽喉、婦人病、小児病、皮膚病、さらには、喉つかえ、乗り物酔いといったるまでの病百般にわたっており、現代でも有効な処方である。

奈良時代の宰相・藤原麻呂の邸宅跡でみつかった木の樋が日本最古の水洗トイレ遺構とわかり、続く溝からは食べ物かすに混じって寄生虫の卵やベニバナの花粉が発見された。(中略)ベニバナは平安時代の医学書「大同類聚方」に煮詰めて虫下しに使ったことが……。(92年6月20日朝日新聞)

'86年、菊池寛賞
'87年、エイボン功績賞受賞

推薦者——緒方富雄・加藤楸邨・串田孫一・矢数道明・山中太木

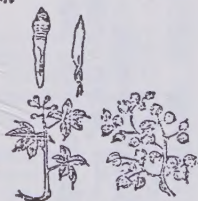
日本文化史・博物誌の宝庫

『大同類聚』は平安時代のはじめ、全国の神社や豪族などに伝わる医薬と処方をも、勅命によって集大成した空前絶後の文獻である。明治時代に偽書説により封印されて以来、謎に包まれて歴史の闇に塗り込められていました。本書は全百巻を異本も含めて校合、原文を掲載して解読し、詳細な解説を付し全文を訳しています。

その解説は「**医心方**」や「**中葉大辞典**」の訳出を土台に、**医書・本草**書はもちろん、**和漢の史書・記紀・万葉・王朝女流文学**ほか、**伝承・民俗行事**の記述を紹介しながら、**所伝のルーツ**を明らかにするなど独自なものです。

したがって、単に医薬関係者のみならず、史学、古典文学、民俗学、文化人類学、動植物・鉱物の研究家、作家など、さまざまな分野で活動する皆様に資すること大なるものがあります。

本書は、一九八五年、平凡社より刊行されましたが、すでに絶版になっております。今回、研究者や一般読者の便をはかり、普及版を刊行いたしました。



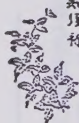
五味
黑通切藥 武內治方 其元

風寒邪氣入出黃痰或自沫血或
胸疼或頭痛不食上逆者方

米田反
波白如反

之良又佐
波知須称

保皮称



移民史

●全3巻

今野敏彦・藤崎康夫編著

A5判上製

I 南米編

増補版

定価九〇〇〇円（税別）

ブラジル編 第一部初期ブラジル移民の歩み 第二部ブラジル移民の実態(1) 第三部同(2) 第四部ブラジル移民の組織と文化 第五部戦後移民の動向
ペルー編(その他諸国を含む) 第一部ペルー移民 第二部その他の国々の移民(メキシコ、アルゼンチン、ボリビア、パラグワイ、チリ) 第三部戦後移民の問題点(ドミニカ移民 付南米移民年譜 移民は棄民だ!! この言葉を実証する戦後ドミニカ移民の実態を明らかにする(戦後移民の問題点)を増補する。日系移民が現地に残した数々の邦文文献をベースに、移民の実像を可能な限り移民自身の声より掘り起こす。人類のさまざまな歴史は過去の累積のうえに築かれる。移民一世の苦難の生きざまを無視して今日の移民二世、三世、さらに続く後世の生活の諸相を語る事はできない。

III アメリカ・カナダ編

増補版

予価一〇〇〇〇円(5月刊)

アメリカ編 元年ハワイ移民 カリフォルニア渡航者 ハワイ官約移民への道 ハワイ私的移民時代
ハワイ移民自由渡航時代 北米移民者たち 太平洋戦争前後の日本移民 (増補) 強制退去損害賠償
問題の推移と結末
カナダ編 草分け期の日本人 日系娼婦の実態と排日の激化 太平洋戦争とカナダ日系人
付アメリカ・カナダ移民年譜
一九世紀は「移民の世紀」といわれる。とりわけアメリカ合衆国は、西部開拓の時代であり、産業化も急激にすすみ、多くの労働力を必要としていた。一九世紀末、大量の日本人がカリフォルニアをめざした。大部分は農業労働者から小規模自営農民となり、日本式集約農業を成功させたが、その成功は排斥を惹起し、戦時強制移動へと苦難の道を歩むことになる。

山本信良・今野敏彦著 教育における天皇制研究 全3巻

近代教育の天皇制イデオロギー

明治期学校行事の考察 A5判並製 452頁 4000円(税別)

本書は学校儀式や行事の形成過程とその目的を、おびただしい数の各府県教育史・学校沿革誌や当時の教育雑誌、さらには公文書を用いて、具体的にまた詳細に明らかにした最初の労作である。著者たちは、このような儀式を『天皇制マツリ』とよびつつ、みずからの視座をつぎのように規定する。「一つ一つの『事実』をもつて語ることにある。なによりも、事実認識を欠落することなく、事実の恐怖を飽食することなのである」。本書によって、天皇制イデオロギーの浸透のカラクリを、内側から見すかすことができることに、とかく変えられないものというけいれがちの学校儀式を、相対化する視点をもそだてることができる。(朝日新聞評・一九七四年)

●主要目次——序章／第一章明治期学校行事の概要／第二章祝日大祭日儀式の成立・定着過程／第三章祝祭日儀式以外の儀式／第四章遠足・修学旅行／第五章明治期「試験」の実態／第六章展覧会・学芸会・運動会／終章

移民史 Ⅱ アジア・オセアニア編

1996年3月31日・増補第1刷発行（初刷八〇〇部）

定価 二七、〇〇〇円十税

編著者 Ⅱ 今野敏彦・藤崎康夫
こんのとしひこ ふじさきやすお

発行所 Ⅱ 株式会社 新泉社

東京都文京区本郷2-15-12

電話 Ⅱ 3815-1662

印刷 Ⅱ 萩原印刷所 製本 Ⅱ 関山製本所

ISBN4-7877-9609-7

となった。

妻のお腹には子どもがやどっていたが、その誕生をみることも許されなかった。

帰国後、一度、輸送船に乗り、妻子のいるダバオ行きを企てたが、台湾沖で米軍の攻撃を受け、失敗した。

やがて戦争は終わった。老人は思いつくかぎりの手だてをつくして妻子の消息を求めた。フィリピンの船舶が長崎港に入港したと聞けば、そこに行き手紙をたくした。役場や県庁にもたのんでみたが手がかりはなく、歳月だけが流れ去っていった。

事情は異っているが、フィリピン移民は、老人と同じような境遇におかれた。日本軍の軍属として手足となった移民やその子どもは、戦争終結とともに日本軍協力者として同国から追放された。しかし、現地人の妻や幼い子どもたちが残った。この戦争で現地人の妻をもつ移民は、家庭崩壊の悲劇を味わうことになった。

私が老人の家族を探し、訪ねたとき、すでに妻と長女と二女は亡くなっていた。戦争では生きのびたものの避難生活のきびしさのなかで身体を壊し、また戦後の激しい反日感情のなかで逝った、とのことである。

養子となった義弟、長男、二男、そして老人が去るとき、母親の胎内にあった三男が、無事であった。長男、二男は父親の戸籍に入っており、日本国籍をはっきりともっている。

片ことの日本語を覚えている義弟は、姉である妻やその娘がどんなに父を慕いながら死んでいったか、涙ながらに語った。父と別れ、戦中、戦後の日々を生きのびるのが、どんなに大変なことであるか、私にも十分にわかった。家族を守ることを約束した義父は高齢で視力を失い、聴力もかなり落ちていたが、娘の夫が生きていることを知りよろこんだ。彼は約束を果すことに必死だったそうである。

彼がダバオに帰ってくることを義父は、強く願った。一族をあげて彼を迎えたいともいう。

義弟も子どもたちも、日本に去った父親をどんなに探したかったか。しかし、彼らは父の消息を求めるにも、日本の文字も、英語も、タガログ語も書けない。書けても山中での生活で切手を買う余裕などなかった。それが

フィリピンに残された現地人の妻やその子どもたちの現実の姿だという。子どものなかには無国籍も多い。かれらに戦後はないのである。

ダバオを中心に、ミンダナオ島の各地を訪ねるなかで、私は父をはじめとする兄や姉など家族を探し求める多くの人びとに出会った。その傷の深さをあらためて知った。

私は帰国後、老人を訪ね、家族の消息を報告した。妻と娘たちが亡ったことを知り、落胆もしたが、義父や義弟や息子たちの無事を知って、ほっとしたようだった。しかし、老人ホームに身に寄せる今、もうそつとしておく以外なく、またそれが一番いいことだ、と老人は寂しそうに語った。

なお、本書全体の構成は、アジア・オセアニアを明確に分けていない。それというのもこの地域への日本人の社会的移動は、きわめて複雑であり、また相互に関連し合っているために、簡単に整理しえないためである。また、移民史の面からスポットしてみても、すでに知れるように地域的に単線を描いていない。念のため、お断り申し上げておきたい。

日本移民を語るとき、フィリピンのミンダナオ島のダバオ移民を無視することはできない。ダバオ移民は、国家を後楯とした満蒙移民とは性格を異にする、あくまで民間の移民である。自らの手で、その密林を拓き、小さな集落地にすぎなかったダバオをフィリピン第三の都市に築き上げたのである。

明治末期、ベンゲット道路工事のため、日本人が労働者としてフィリピンに渡り、その難工事に多くの犠牲者をだしたことは本書で触れた。工事が終わったけれど帰るに帰れない移民が多く、各地に散った。その一部がダバオに入った。そしてここに日本移民の一大移住地を築いたのである。

私がこのダバオを訪ねたのは一九八三（昭和五八）年だった。熊本県の老人ホームに身を置く八〇歳の老人の子どもを訪ねる旅であった。

熊本県天草生まれの老人が裸一貫でダバオに渡ったのは一九二四（大正一三）年、二二歳のときだった。

「あいつは、いつ寝るんだ」と不思議がられるくらいに働いた。そんな働きで稼いだ金を貯め、密林の土地を手に入れた。昼間も暗い密林を人力できりひらき焼きはらってマニラ麻を植えた。毎日が血と汗の重労働だった。そんな努力の末、ダバオ市北方三〇キロの地点にあるカリナンで広大な麻畑をもつようになった。一九三四（昭和九）年、三二歳のとき永住することを心に決め、バゴボ族の娘と正式に結婚した。一族はこぞって娘と老人の結婚を祝福してくれた。老人と同じように現地の娘と結婚する日本移民は多かった。

老人は妻の弟を養子にし日本人学校へやった。結婚の翌年長女が、つづいて二女が生まれた。仕事も順調で、幸福な生活だった。新天地を求め、努力をしたかいがあった。

「昭和一六年一二月八日、太平洋戦争の開戦と同時にわたしの運命は一変したんです。」と、老人はいう。

開戦の朝、日本軍の軍機が、ダバオの飛行場を攻撃した。ズズン、ズズンと重い爆発音が響きはじめた。しかし、それは演習とばかり思い、まさか日本軍の爆撃とは思わなかった。この日本軍の不意打ちにフィリピン人はいきりたっていた。

老人は、このとき車でカリナンからダバオ市にむかっていた。が、その途中、フィリピン兵士に銃剣を突きつけられ、急拠日本人強制収容所となった中学校に連行された。現地人の妻には「この家族は日本人の妻子である」と記した紙をもたせ、カリナンの家に帰した。車に同乗していた妻の父は、家族を守ることを約束してくれた。

強制収容所は、あちこちにあり、日本人はつぎつぎに連行された。その数は一万八千人にも達した、と老人はいう。脱走を企てたり、スパイ容疑で犠牲者となった日本人もでた。

一月二〇日、ミンダナオ島に上陸した日本軍により、解放された。老人は、山奥深く疎開した家族を探して、ダバオ河上流にむかった。フィリピン兵にねらわれたりもした。

日がたつにつれ、日本軍の横暴が目立つようになった。無実の村人にスパイやゲリラの容疑をかけ殺害するようになった。当時、働き盛りの老人は、軍のため働いた。移民には義勇兵として、軍の手足となったものもいた。ことばを解し、土地感もある移民は、奥地の偵察や住民の宣撫につとめた。偵察にでて犠牲になる移民もでた。

「私も機関銃でねらわれました。銃弾があごからほほにぬけて、五本の指がはいるほどの傷を負いました。それにしても日本軍の上層部はたるんでいました。現地人のめかけをつくり、軍人精神など、どこへやらといった有様でした」と、老人は当時を述懐する。

顔見知りの善良な村人まで、ゲリラとして殺すように命じる軍であった。老人は、そのたびに村人のため弁明をくり返した。そんなことが、軍の反感をかうようになっていた。

一九四二（昭和一七）年暮れ、老人は憲兵隊に呼びだされた。

「貴様は、大和魂を失っている。内地に帰り大和魂をたたきなおせ」といわれた。すでに兵役を果している老人にとって大和魂を失っているのは、むしろ軍人たちであった。しかし軍の命令である。理屈は通らなかった。マニラから日本へ向う船に乗った。マニラから、わずかな衣服類を買い妻子に送った。これが、妻子との絆の最後

マライ半島に日本軍の侵攻が始まった。タッパの町からイギリス人の姿が消えると、日本軍が入城してきた。しかし、それは勇ましい勝利者の進軍とはかけはなれた姿だった、と彼女は語る。

「それは哀れな姿でした。シンガポールから歩いてここに来たというのです。そのとき、この町の家は、みんな逃げてしまったので、からっぽでした、わしが一番、最初に姿をだして「私は日本人でございます」といったんです。」

中尉が、「おぼさんは日本人か。自分の部隊はシンガポールからここまでやってきたんで足も動かんようになってる。つかれをとるため甘いものをみつけてくれ」と、彼女にいった。そして、そのたのみを受けたという。この日から、この部隊が、町の一画に陣取った。日本軍が占領すると、イポーやタッパの町に日本人が集まり、活気づいた。ここは世界有数のすずの産地で、またゴムの木の栽培地でもある。すずの採掘やゴムの採集でにぎわった。

土地のことをよく知り、マライ語が自由に話せる彼女を日本軍はほっておかなかった。通訳として使った。

「毛唐に引張られるところを助かったと思ったら今度は日本軍に捕まってしまつて……。通訳になったら今日はあっち、明日はこっちと引き廻されて、そりや大変な忙しさでした。」

半ば強制的に通訳をさせられた。だが、彼女の気持のなかに、日本人である以上、日本のためにお役に立ちたい、という気持も強かった。

彼女は、日本人の血を忘れることはできなかった。が、一方では現地の人びとを無視することもできなかった。そんなゆれ動く心で通訳に困り果てることも度々であった。現地人のなかには日本軍に強い反感を抱いているものも多い。そんな人間と日本軍との間の通訳のときは骨が折れた。

「わしはマライ人の悪口は絶対いわんことにしていました。日本軍のいばった兵隊がわしに『嘘をつくぞと承知せんぞ』と怒鳴るんです。わしが嘘をついているんならこの首をやる、といってやりました。」

長いことこの地に住んでいる彼女の目からみると、日本軍の旗色がわるくなっていることがすぐわかった。現地人の動きや眼の色でそれがわかった。そのうち現実の姿となってあらわれはじめた。

日本兵の遺体が、イポーの町で焼かれていたが、その数が日に日に増すのである。そして日本の敗戦は最早、時間の問題と思われた。

一九四五（昭和二〇）年八月、日本敗戦。この日を境に日本人の姿が消えた。日本人にたいする現地人の怒りがあちこちで爆発した。

「まず山で、マライ人を使っていた日本人が殺されました。」

彼女にはバキスタン人の夫がおり、日本に帰るわけにはいかなかった。やがてタッパの町に住む日本人は彼女一人となった。からゆきさんの仲間もこの町に再び姿をみせることはなかった。

彼女は日本を発った遠い日を思い起こし、「船に乗った六人とも、外国がどんなところか知らなかった。ロノ津で船に乗せられ、最初に着いたのはシナの国でした。なんでも島原で女がいなくなったって日本から電報が届いていたのできびしい調べがあったそうです。でも、つれて来る人は商売ですから隠すのも上手です。」

官憲の目をくぐりぬけ、彼女たちは香港まできた。

「米、麦、粟、芋があったら、人間はまずおいしい米から食べるでしょう。女も同じことです。きれいな娘はまず香港でおります。つぎにきれいなのはシンガポール、わしは芋ですからなかなか売れんで、こんな遠いところまできてしまいました。」

彼女はマライのイポーにつれてこられた。その日からこの町で中国人や現地人を相手に身体を売った。

「昔のイポーは、日本人がたくさんいた。宿屋、歯医者、目医者、写真屋、仕立て屋も、日本人がやっていました。日本の寺も日本人の墓もあり、ペナンから日本人の坊さんがやってきました」と、当時を語る。

娘子軍の一人であった老女の証言である。

「棄民」とよばれた南米移民は、辛酸をなめ犠牲をはらいながらも、いまはしっかりと根をおろした。北米移民もしかりである。しかし、「南洋」とよばれたこの地では、かれらは根を張ることなく途絶えた。その要因は、いろいろ考えられるが、やはり大きな原因は、太平洋戦争にあったであろう。

クアラルンプールから私は再び列車に乗った。市街地を通り抜けると田畑やゴム園がつづいた。こんな車窓の景色をみながら、田舎駅で下車した。「タッパ」という小さな町を訪ねるためだった。おそらく最後の一人だろうといわれる「からゆきさん」に会うためだった。

からゆきさんはすでに本書で説明したように「娘子軍」ともよばれる海外出稼ぎ者である。明治初期から大正中期にかけて身ひとつで海外に渡り、身体を売った女たちである。唐人行、唐からひとゆきん国行からくにゆきということばがつまり「からゆきさん」になった、と伝えられる。その多くが、東南アジアとよばれるようになった土地にいた。海外出稼者であることには間違いないので、本書でも、娘子軍について触れた。

シンガポール、マレーシアのイポーの日本人墓地には「天草の人」とか、無名の墓碑がある。これらは、からゆきさんの墓である。

駅からタッパへむかう道は、緑に囲まれていたが、白い土がむきだしになっているところがあった。かつて日本人の手で経営されていたすず鉱山だ、という。

タッパは、あまりにさびしい町であった。二筋の道に数百メートルの家並があるだけである。旅装をといた宿の天井は、数匹のヤモリがへばりついていた。

からゆきさんだった老女は、二階建の建物の一室でただ一人住んでいた。私が訪ねたとき、ぼんやりと窓の外に眼をやっていた。私が日本人であることを知ると、ひどくおどろいたようであった。イスラム教徒である老女は丁度祈り入るので、明日、訪ねてきてほしい、といった。その翌日、私はあらためて彼女を訪ねた。

「一九歳のとき、こっちにつれてこられました、ことはわからんし。米が違うんでご飯がまずくて……、日本

の「ごはんが食べたくて涙が落ちましたばい」と、老女はいう。

一八九〇（明治二三）年生まれの彼女が一九歳のときならば、渡航したのは一九〇九（明治四二）年である。

「もう、おばあちゃんの友だちはいないの？」

と、たずねると、老女はいかにも寂しそうな表情でうなずいた。三、四人の仲間の女性の名前をあげながら彼女たちはすでになくなったという。

さびれたこの町も、かつては結構にぎわい、からゆきさんの仲間がいたとのことである。

「毛唐（イギリス人）が友だちを捕まえてな、セイロン（現スリランカ）に送ってしまいました。セイロンで苦勞して死んだということを聞きました。かわいそうになあ……。」と、彼女は語る。

日時の記憶がないが、彼女たちがつれ去られたのは、日本軍がマライ（現マレーシア）に入城してくるまえだった、と老女はいう。ここは当時イギリスの植民地である。太平洋戦争勃発と同時に在留邦人は敵性人となり、きびしい目でみられた。土地ですっかり深く根をおろし、現地人とも深いつながりをもつ彼女たちは、第五列となる可能性があると思われた。そのためこの土地からつれ去られたのだ、と老女はいう。

「わしも行かなきゃならんと思っていましたが……、わしはイスラム教に入って何十年もたっていたので、他の日本人と一緒に生活することができんということで行かんでもいいということになり、こうしてここにいたんです。」

一九四二（昭和一七）年二月、シンガポールを占領した日本軍は、スパイ活動と抵抗運動を恐れ、この地に住む多くの華僑を虐殺している。戦争は容赦なく民間人をまきぞえにしていた。

「みんな帰ってきません。どうなったかもわかりません。」

カタカナだけは、なんとか書けるが文盲に近い老女は、仲間との音信もできず、風のたよりだけであった、という。

いわゆる帝国主義のアジア・オセアニアへの侵略戦争とその結果としての植民地支配領域の拡大は、まさにとどまることを知らなかった。西欧支配の結果、アジア・オセアニアに起生した変動は、とりわけ経済面に大きく表出することになる。アジア・オセアニアは、世界の資本主義に包摂されてしまい、従属的な経済体制へと変身せざるをえなくなった。

アジア・オセアニアの人びとを押しつけるように、移入労働者（いわゆる労働移民）が流入し、また外資によって経営される鉱業や農園（ゴム・タバコ・麻・輸指向農産物などを栽培する、いわゆるプランテーション）が誕生し、原住民に重圧を与えることとなる。

日本は、こうした動向を明治の開幕とともにキャッチし、西欧に追いつけ追いこせと、まさに「南進への眼」を、開眼したのであった。そこに生まれたアジア・オセアニアの移民の実態については、不十分ながら、本書で復元した通りである。

さて、時代は大きくとぶのだが、太平洋戦争によって、日本の「南進」は明確に侵出の形をとった。一九四二年一月にはマニラ、同年二月にはシンガポールをそれぞれ占領し、同年三月にはビルマのラングーンを陥落させた。オランダ領インド諸島（石油産出地）へも侵出し、ジャワ島を支配下に収めたのも同年三月のことであった。一九四二年二月、連合艦隊司令長官の地位にあった山本五十六は、時の海軍大臣嶋田繁太郎に一通の書簡を送っている。そこには、日本のアジア・オセアニア支配の「虚像」が浮上している。

「第一期作戦後ハ主トシテ守勢ヲトリ、東亜共栄圏ノ整理、経営等ソロソロ勘定スル経営者多キ由ナルモ、ソナナ中途半端ニテ守勢ナド固ルモノニ無之、少クモ英米主力艦隊ヲ徹底的ニ撃滅シテ、太平洋、印度洋ヨリ近東經由独逸ト自由ニ交通シ得ル態勢マデ作戦ハ一步モ弛メ難シト存居候、カクテ印度、豪州、『ニューギラント』等ヲ分離シテ英帝国ココニ崩壊、支那平定、『ソ』連ニ圧勝、北米孤立、ココニ至ツテ初メテ漸ク大東亞ニ君臨ト相成ルベク実ハコレ迄ガ第一期作戦……云々」（防衛庁防衛研究所戦史室編『戦史叢書・大本営陸軍部へ3』）

朝雲新聞社、一九六八年、六三四頁）。

驚きを通り越して、誇大妄想としか評価しえない山本五十六の思考である。この誇大妄想は、不幸にしてアジア・オセアニアに被害をもたらした。一九四三年五月、「大東亜政略指導大綱」が決定され（いわゆる御前会議）、ジャワ、ボルネオ、マライ、スマトラ、セレベスを「帝国領土ト決定シ重要資源ノ供給地」（外務省編『日本外交年表並主要文書』下巻、原書房、一九六六年、五八三―四頁参照）とした。フィリピンについては、一応、表むきの独立を与えたが、鉱山・工場・砂糖・綿花・麻などは、日本人によって運営された。この際、日系移民の果たした役割は大きかった。

アジア・オセアニアの日本人移民を考える場合、以上に寸描した世界史の流れのなかでの日本と、太平洋戦争中の最前線の犠牲者と化した点を忘却してはなるまい。

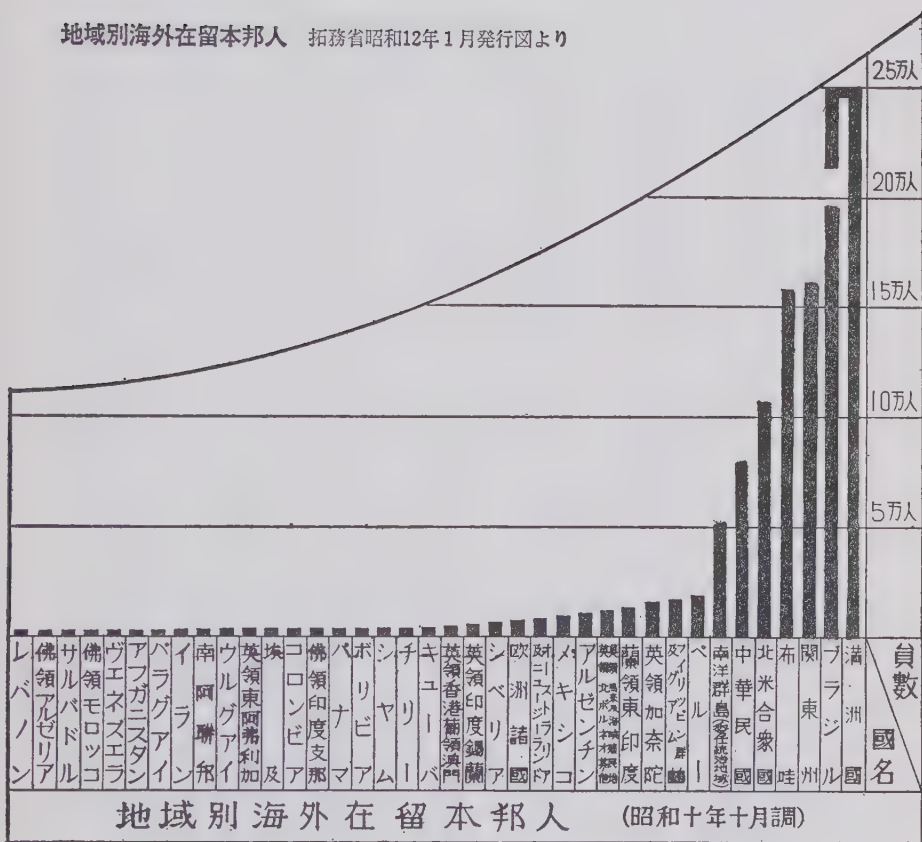
さて、編著者のひとり今野がフィリピンに渡ったのは、一九六三（昭和三八）年の夏のことであった。ルソン島のマニラからミンダオ島のダバオへ飛んで、ある日系人に出会ったのだが、年若かった今野は、移民については皆目の無知であった。むしろ先住諸種族に興味をよせたものであった。

編著者のひとり藤崎は、問題意識をもってアジアを歩いている。以下、藤崎のアジアを踏査した折りの実感を収録しておく。

海外に移り住んだ日本人の足跡をたどり、シンガポールからマレーシアに入ったのは一九七七（昭和五二）年の夏であった。ジョンホールから首都クアラルンプールへ足をのばした。

じりじりと照りつける南国の太陽。それは南米で見た太陽と同じものだった。この灼熱の地にも、南米同様、夢と糧を求めた日本人が出稼人あるいは移住者として住んでいたのである。

地域別海外在留本邦人 拓務省昭和12年1月発行図より



解 説

広域に及ぶアジア・オセアニアへの西欧の植民地支配は、そのほとんどがと断じてよいほどに、鉄道・道路の建設からはじめられた。すでに本文においてみたように、シンガポールの場合でも、フィリピンにあっても、この点に寸分の狂いもない。西欧人の資本によるアジア・オセアニアの交通機関の驚くべき発達、その蔭に、数かずの犠牲を生むことになった。

さて、一九世紀末から二〇世紀にかけて、西欧列強は、アジア・オセアニアに強大な圧力をかけた。アジア・オセアニアの各地は、そうした圧力に耐えかねて、その門戸をつぎつぎと開かざるをえなかった。手もとの年表をくれば、つぎのような事実が記録されているのである。

一八五七年 タイの西欧列強による支配。

一八七三年以降 イギリスのマラヤ支配と一八九五年のイギリスの覇権下でのマラヤ連邦の結成。

一八八六年 ビルマのインド帝国への併合。

一八八七年 フランスによるコーチシナ、トンキン、アンナン、カンボジア、ラオスなどからなるインドシナ連邦の成立。

一九世紀末 インドネシア外領地域のオランダによる支配。

一九〇二年 アメリカによるフィリピンの再植民地化（本文において若干触れたように、フィリピンは一五七一年から一八九八年までスペインの植民地化におかれ、一八九八年の米西戦争以降、アメリカの支配化にあった）。

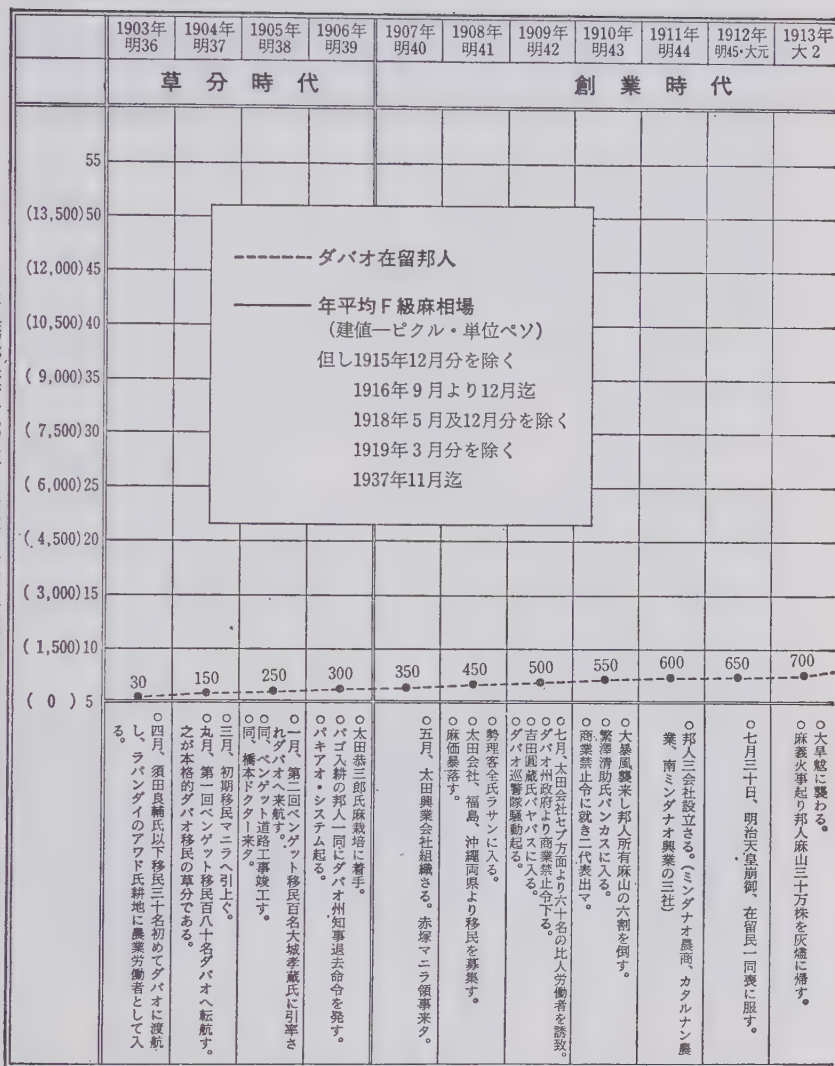
印 度	北ボルネオ サラワタ(英)	フィリピン群島 ダバオ	オーストラリア	英領大洋島	ニューギニア (仏)	フィジー(英)	タヒチ(仏)	その他南洋群島
2								
12								
3								
1								
4								
1								
1								
3								
4								
11								
12								
32								
29								
17								
652								
50								
6		12	14					
10		5	21		988			
4	3	8	295		134			
		77	155		1			
24		2,215	28					
1		2,923	118					
1		427	27	40	612			
4	6	71	2	23				
8	1	176	5	9				
	2	143	9	351				
2	5	170	9	18				
2		396	8	181	1,015		137	
		596	6		342		223	
25	18	689	6	130				42
23		930	17	62	583	2	30	
11		782	19	77	1,163	4	99	30
16	8	468	20	22	4	2	2	
26	15	1,029	20	6	2	4		17
46	36	3,170	29	53		29		1
42	78	3,046	41	18		4		
45	8	938	140	52	111	7	31	
33	10	411	105		1	3		
24	18	415	99	3	1	2		
10	11	189	228			1		
26	13	449	54			6		
17	6	548	112					
36	5	1,635	250			1		
27	83	2,197	139		9	3		
39	34	2,659	129		3	4		
16	106	2,077	270		5	9		
52	30	4,535	277		17	4		
71	97	2,685	75		30		14	1
106	58	1,109	34		18	1		7
83	70	746	92		6	2		2
52	133	941	59		2		1	9
43	174	1,544	105		4	1	4	
40	230	1,802	92	1				2
		2,809	223					
15	183	3,811	222		2			
10	531	2,367	96		15	1		
	430	854	78					4
4	293	626	44		5			
	10	347	1					1
1,834	2,705	53,027	3,773	1,046	5,073	90	541	116

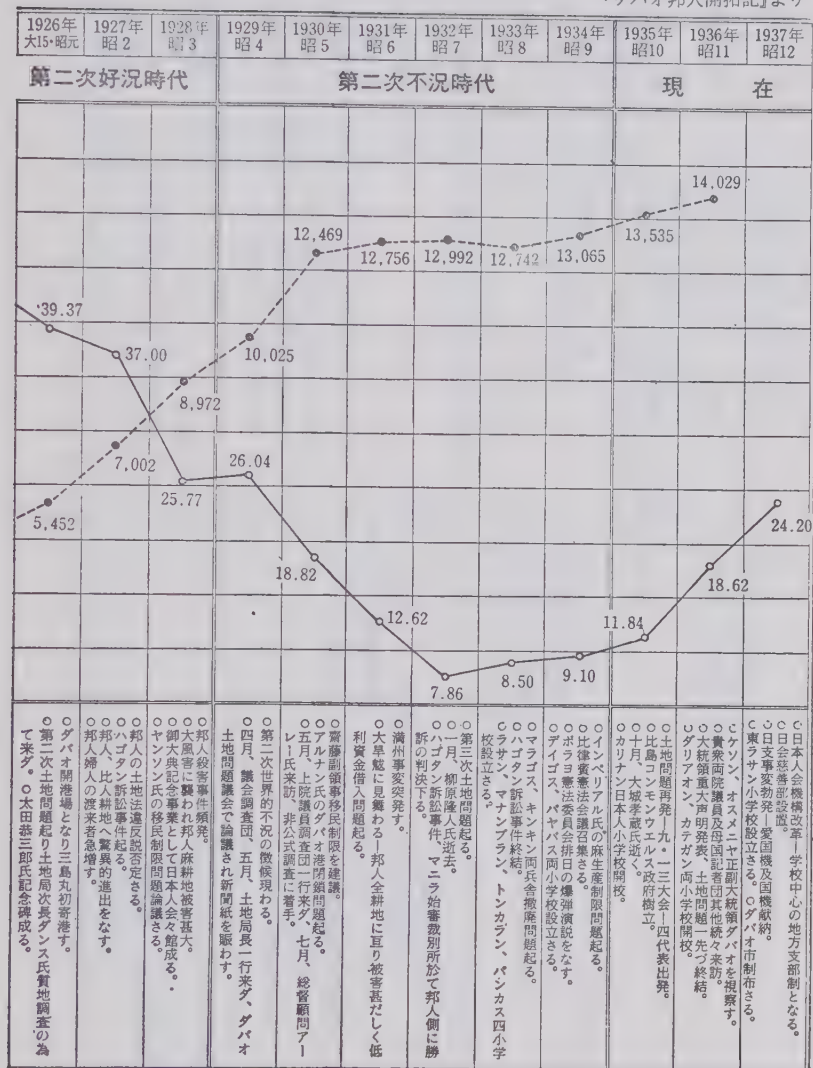
明治14年～昭和16年までのアジア・オセアニアへの移民者数

西 暦	年 号	マカオ(ポ ホンゴン(英))	印度支那(仏)	シヤム	マレー シン ガポール(英)	東 印 度(蘭)
1881	明 治 14					
82	15					
83	16					
84	17					
85	18					
86	19					
87	20					
88	21			11		
89	22			1		
90	23			1		
91	24	135		4	40	
92	25	270		5	132	
93	26	319			86	
94	27	192		48	88	
95	28	206		79	106	
96	29	184		34	144	
97	30	295		30	153	
98	31	293		22	96	
99	32	50	16		32	36
1900	33	36	10		48	30
1	34	48	8		28	26
2	35	54	9	4	21	72
3	36	33	16	6	36	22
4	37	21	4	3	57	12
5	38	11	10	3	35	26
6	39	19	14	1	39	41
7	40	24	19	4	59	35
8	41	18	13		76	53
9	42	33	19	3	58	39
10	43	30	26	1	82	49
11	44		26		16	76
12	45	34	21		386	91
13	大 正 2	2	10	2	338	192
14	3	7	12	1	250	175
15	4	26	16	2	235	115
16	5	27	12	7	334	185
17	6	35	3	2	560	210
18	7	19	27	5	412	146
19	8	90	10	5	343	128
20	9	105	10	3	240	186
21	10	46	14	4	224	130
22	11	35	6		171	90
23	12	15	17		57	81
24	13	21	5	1	152	75
25	14	19	4	4	437	169
26	15	37	6	5	402	226
27	昭 和 2	19	4	11	475	248
28	3	36	6	4	420	191
29	4	49	22	3	513	507
30	5	100	18	7	835	558
31	6	62	15	10	549	447
32	7	51	9	4	356	533
33	8	73	25	11	322	468
34	9	117	22	25	598	356
35	10	234	18	24	583	389
36	11				512	144
37	12	55	6	22	443	131
38	13	26	10	12	105	123
39	14	66			75	115
40	15	26	10	12	63	121
41	16	3	56	31	20	51
計		3,706	584	477	11,842	7,098

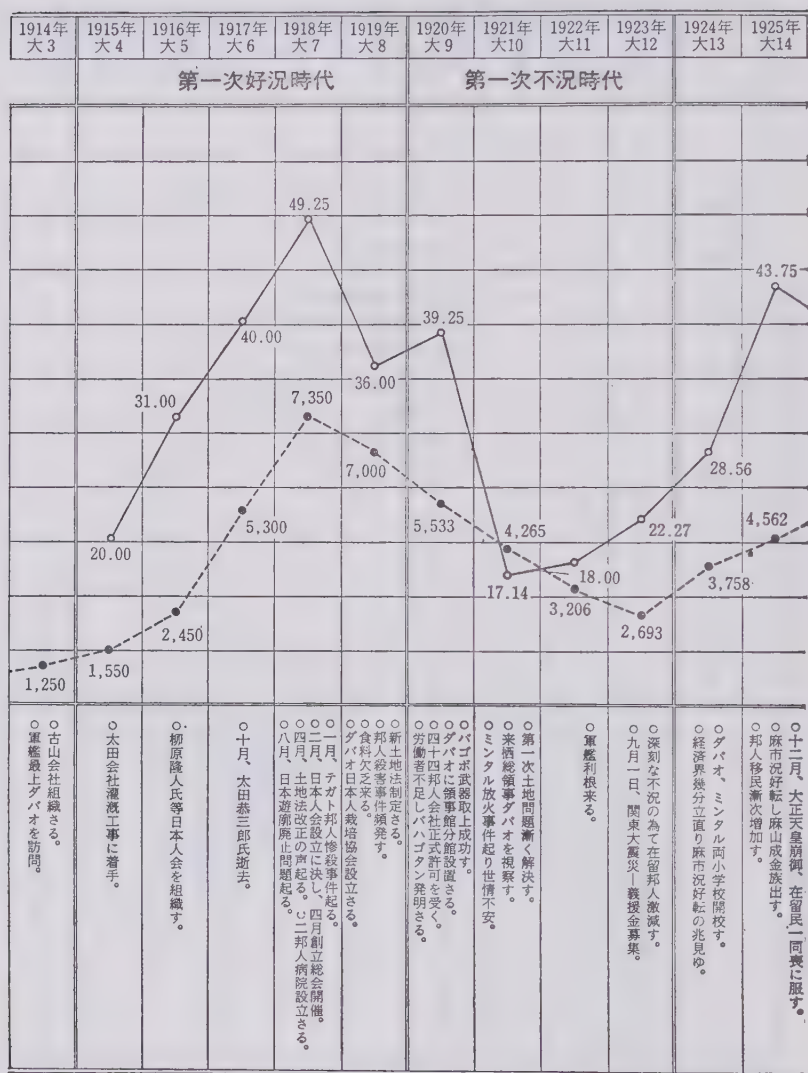
註：国際協力事業団の作成による。

註：在留邦人数一九〇三年より一九一九年迄は推定数、他は毎年十一月一日現在ダバオ領事館の調査による。





ダバオ邦人開拓史年代表



一九一九(大正 八)年	議會で土地法改正案通る。 土地法公布される。外国人は新たに官有地の租借または払下を受けることが出来なくなる。 マニラ領事館は総領事館へ昇格し、ダバオに分館が新設される。	
一九二〇(大正 九)年		シンガポールで大反日運動が起きる。 西村製糖所が西村拓殖会社となる。(サ)
一九二一(大正一〇)年		シンガポール総領事山崎平吉、管内娘子軍追放を発表。
一九二二(大正一一)年		東洋拓殖会社、蘭領ボルネオの奥地二五五〇エーカーを買収。
一九二三(大正一二)年	第一次大戦の影響による不況でダバオ在留邦人二六九三名に減る。 マニラ麻の市価が回復する。	西村拓殖、南洋興発株式会社と改称。(サ)
一九二四(大正一三)年	ダバオ市とミンタルに日本人尋常小学校が設立される。	約二五〇〇名の新移民がサイパンへ。
一九二六(大正一五)年	ダバオ港開港する。日本郵船豪州航路船が月一回寄港する。	関東大震災
一九二八(昭和 三)年		外務省主催、南洋貿易會議開催。
一九二九(昭和 四)年	ダバオ在留邦人一万名を超え、	世界経済恐慌

一九三二(昭和六年)	会社数四〇余社。	
一九三二(昭和七年)		
一九三四(昭和九年)		
一九三五(昭和一〇年)		
一九三六(昭和一一)		
一九三八(昭和一三)年	在留日本人二万五七〇〇余名中、 ダバオ市に一万三九〇〇余名。	
一九三九(昭和一四)年	日本人強制収容される。	
一九四一(昭和一六)年	日本軍ダバオ上陸。	
一九四二(昭和一七)年	東条首相マニラ飛来、青木大東亜 相ダバオ訪問。	
一九四三(昭和一八)年		
一九四四(昭和一九)年		
一九四五(昭和二〇)年	日本人送還される。	
	蘭領東インドに外国人勤労条例実 施、邦人渡航に影響。	
	日本軍シンガポール占領。	
	マッピ岬より婦女子、バンザイを 叫び飛びおりる。(サ)	
	拓務省設置 満州事変 外務省、海外実習移民をは じめる。 拓務省、第一回武装移民満 州(中国東北地区)へ。 南洋各地に留邦人三万五〇 〇〇余名に達す。 拓務省、海外拓殖要員会設 置。 蘆溝橋事件 南洋拓殖株式会社設立	
	第二次大戦勃発 太平洋戦争	
	敗戦	

一九〇三(明治三六)年	日本政府は移民取扱人によるフィリピン行、自由移民の渡航を許可。フィリピン政府代表ケノン少佐と神戸渡航合資会社との間に移民に関する契約がとり交さる。	本人雇入れの特許を与えた。(オ)笠田直吉、中川菊三、マライ半島においてゴム栽培をはじめめる。
一九〇四(明治三七)年	岩田芳人ら、マニラ市内より日本人労働者三五名を募集し、ペンゲット工事現場へ送る。 一四七〇名渡航。 在マニラ邦人三〇名、ダバオに入る。	木曜島の特許員数、極めて少数に制限される。(オ)
一九〇五(明治三八)年	一六二六名渡航。 太田恭三郎、一五〇名の同胞を率いてダバオの麻耕地へ入る。 ダバオ在留邦人四〇〇名を越す。	東洋移民会社、英領太平洋島移民開始。 高月一郎、仏領インドシナへ。
一九〇六(明治三九)年	太田恭三郎、ダバオに太田興業会社を設立。	日露戦争
一九〇七(明治四〇)年		日米紳士協定

一九〇八(明治四一)年		南洋華僑、日本品のボイコット。 シンガポールで「南洋新報」「新 嘉坡月報」が発刊。 依岡省三、サラワク王国に土地を 租借。	東洋殖産会社設立される。
一九一〇(明治四三)年			日韓合併条約
一九一一(明治四四)年		マライ半島における日本人経営の ゴム園数七九に達す。 ニューカレドニアの在留日本人数 一九三四名。	
一九一四(大正 三)年			第一次世界大戦 日本軍、南洋群島占領 南洋協会生まる。
一九一五(大正 四)年	古川殖産会社がダバオで事業を始 める。		
一九一七(大正 六)年		サイパン島に西村製糖所が設立。 マライ半島ゴム用地私下制限令実 施。 英領マライ邦人八〇八三名、蘭領 三六三五名。	海外興業株式会社設立
一九一八(大正 七)年	ダバオにおける邦人麻栽培会社、 四〇有余社に至り、所有および租 借地面積三万二〇〇〇余町歩とな る。		米騒動

一八九五(明治二八)年

一八九六(明治二九)年

に四九〇名の移民を送る。
パタビア日本商店の草分、後藤実史逝く。

クインスランド砂糖耕地に四二五名の移民を送る。(オ)

岩本千綱、三二名の移民をつれ、再びシヤムに渡る。シヤム殖民会社設立。(タ)

フィジー島移民一〇一名死亡。

宮崎滔天、二〇名のシヤム移民をつれ、英船チャシャ号で発つ。(タ)
辻謙之助、ニューギニアで土地交渉。

ガードルupp島移民一八四名帰国。

石原哲之助が三〇名の移民を率いてジョンホール国クボン市近くの移住地へ入る。(マ)

大川清、一〇名の漁夫をつれ、シガポール近海で漁業に従事する。(シ)

日本郵船会社が豪州航路を開く。(オ)

一八九七(明治三〇)年	
一八九八(明治三一)年	アメリカ、フィリピンを領有。
一九〇〇(明治三三)年	
一九〇一(明治三四)年	
一九〇二(明治三五)年	

シンガポール在留日本人約一〇〇〇名の内九〇〇名は女性、その内九九％は売春婦といわれる。(藤田敏郎回顧)
木曜島日本人採貝労働従事者九〇〇名に達し、全採貝従業者の六〇％に達す。(オ)
外務省、クインスランド州における排日運動のため、木曜島につきクインスランド渡航者を差止める。(オ)
吉佐移民会社が東洋移民会社と改称。(オ)
木曜島日本人の真珠貝、海鼠漁業船所有、または借船での独立経営を禁じられる。(オ)
東洋移民会社、明治三八年にかけて一七五九名の移民をニューカレドニアに送る。
豪州連邦成立。
「移住民制限法」の実施で、日本人が閉めだされる(木曜島真珠貝業に関するかぎり白人当事者に日

一八八四(明治一七年)	外務省御用掛後藤猛太郎、同鈴木經勲、マーシャル群島探検。	鹿鳴館時代
一八八五(明治一八年)	日本人店の元祖中川商店が呉服・食糧品店を開く。(シ)	
一八八六(明治一九年)	英人ジョン・ウィルリヤードが男子女子ども約四名を誘致、工業に従事させず、みせものにする。(オ)	
一八八八(明治二一年)	クインスランドの砂糖耕地に日本農民一〇〇名が誘致される。外務省、移民帰国費用として雇主に移民一名につき英貨九ポンドを神奈川県庁へ積立てさせる。(オ)	
一八八九(明治二二年)	シンガポール帝国領事館開設。	帝国憲法発布
一八九〇(明治二三)年	田口卯吉、東京府士族授産金を資金として南島商會を組織する。	第一回帝国議會
一八九一(明治二四年)	在木曜島小嶺磯吉、小舟でニューギニアに渡る。	
一八九二(明治二五年)	三宅雪嶺ら豪州、ニューカレドニア、ニューギニア視察のため出発。日本吉佐移民合名会社設立。(オ)	
	日本吉佐移民会社、ニューカレドニアに契約移民六〇〇人を送りだす。	
	佐野常樹、フィリピン調査。	

マニラに帝国領事館が設置される。

菅沼貞風マニラに渡る。客死。

一八九三(明治二六)年

一八九四(明治二七)年

岩本千綱、石橋禹三郎等シヤムに渡る。(タ)

外務省、高橋昌をニューヘブリジス群島およびフィジー島に派遣し、調査させる。

日本吉佐移民会社、移民五〇名をクインスランドの砂糖耕地に送る。(オ)

一屋商会、トラック島に支店を設ける。(明治二八年解散)

外務省、在シンガポール領事齋藤幹にマライ半島南部西海岸一帯を調査する。(マ)

南繁蔵、木挽職一〇名を率いてインドに渡る。ポリテニオーで木材伐採に従事する。

クインスランドの砂糖耕地に五二〇名の移民を送る。(オ)

帝国議會、海外移民奨励に関する決議案を可決する。

日本吉佐移民会社フィジー島へ三〇五名の移民を送る。

日本吉佐移民会社、ガードルupp

日清戦争

アジア・オセアニア移民年譜

＊略符号

(オ) 〓 オーストラリア
(シ) 〓 シンガポール
(タ) 〓 タイ (マ) 〓 マライ半島
(サ) 〓 サイパン

年 号	フィリピン	その他の国々	国内情勢
一八七六(明治 九)年		榎本武揚が南洋群島買収とニューギニア植民を建議する。 南豪州政府より農業移民の申込みがあるが日本政府が拒絶。(オ)	
一八七八(明治二〇)年 (頃)		島根県人野波小次郎が木曜島に上陸。(オ)	
一八八一(明治一四)年		兵庫県人中川民治が木曜島に渡航する。(オ)	
一八八二(明治一五)年		和歌山県人中川奇流、広島県人渡辺俊之助が木曜島へ渡航。(オ)	
一八八三(明治一六)年		英人ジョン・ミラー、邦人三七名を豪州に誘致する。外務省の許可を得た最初の移民となる。トレス海峡において真珠貝の採集に従事する。	

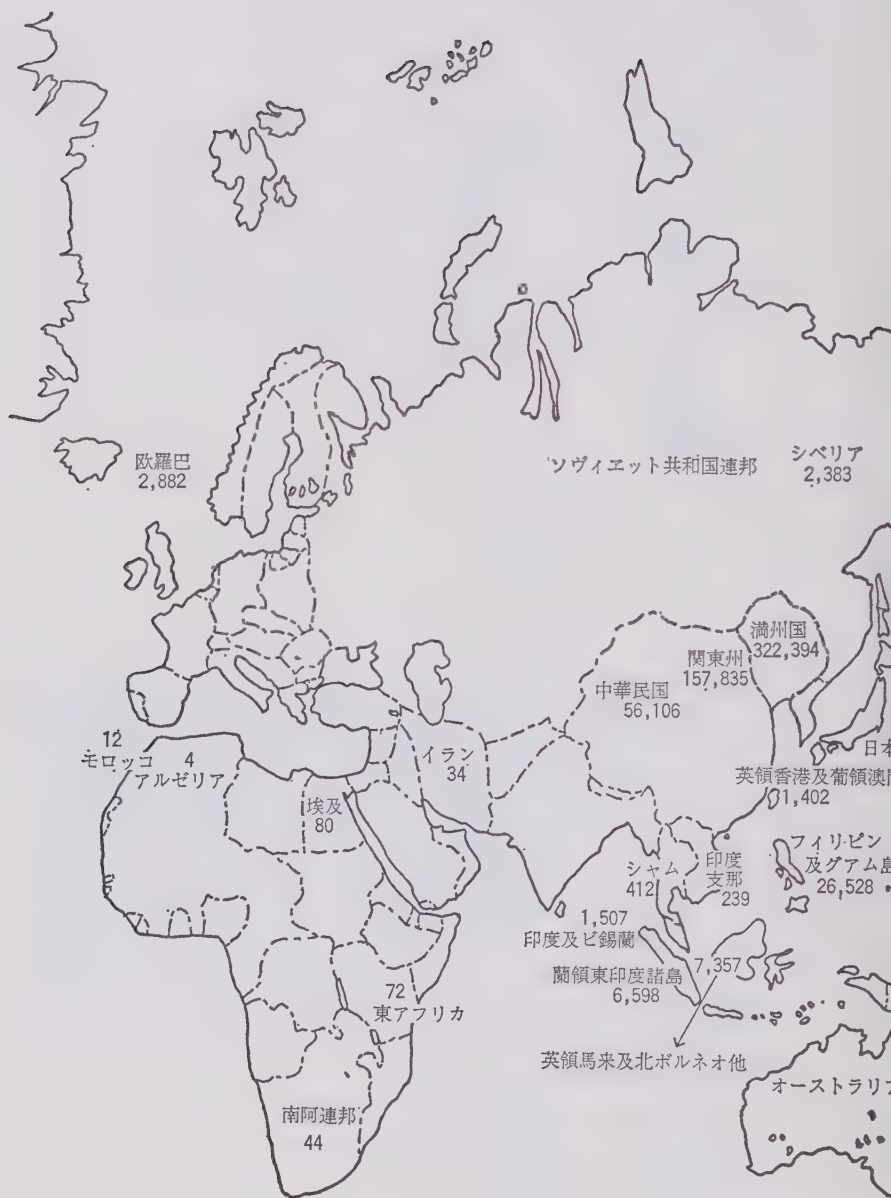
邦人
(内地人)

世界分布図

(拓務省昭和12年1月発行図による)

在外邦人総数
1,146,462人
昭和十年十月調

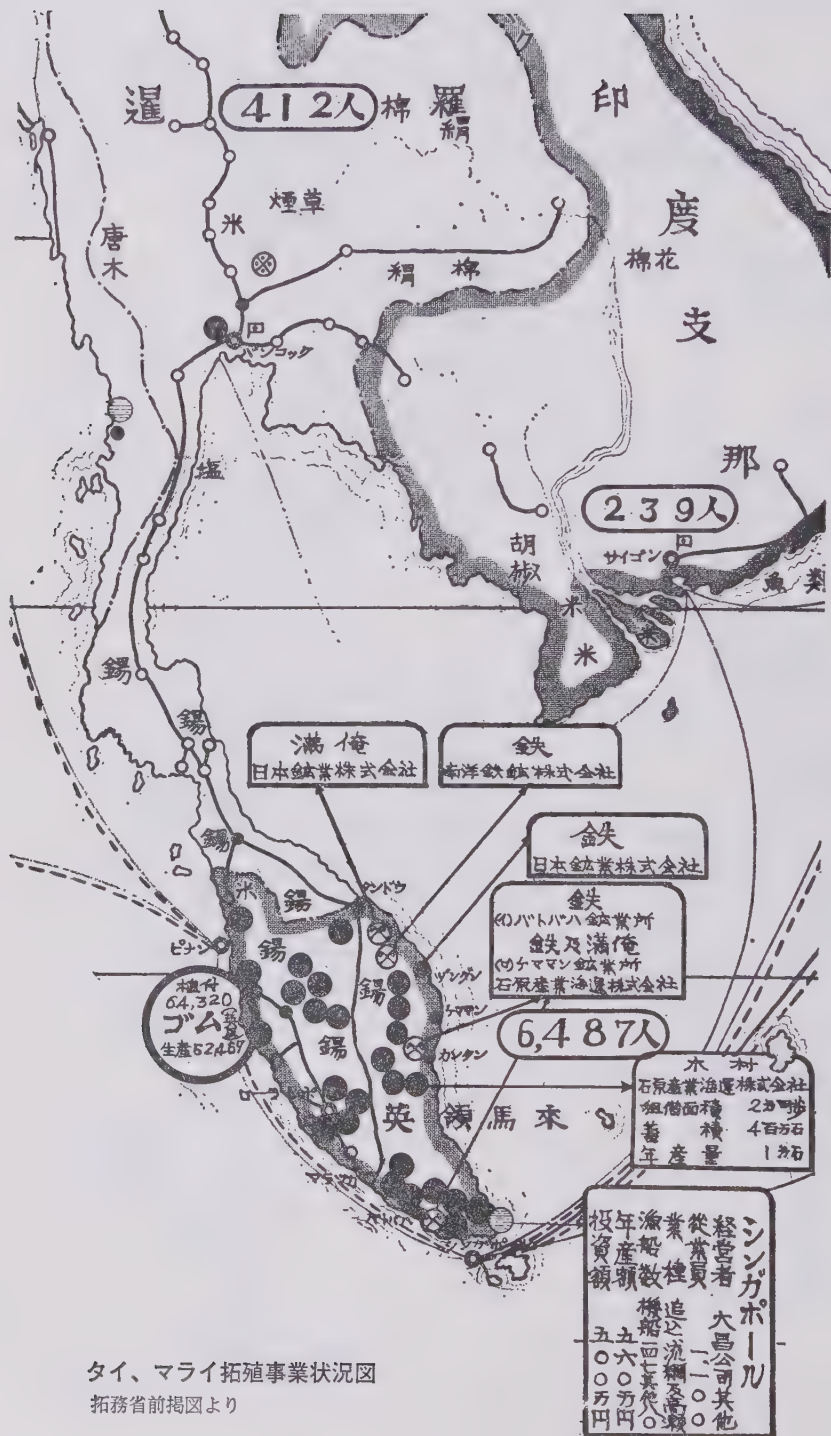




ライリビン拓植事業状況図

拓務省「南洋ニ於ケル邦人殖産事業状況図」
(昭和12年1月調)より。○内の数は昭和
10年10月調の邦人数





タイ、マライ拓殖事業状況図
 拓務省前掲図より

- (10) 右同書、四〇八頁。
- (11) 右同書、四〇八～四〇九頁。
- (12) 右同書、四〇九～四一五頁。
- (13) 右同書、四一六～四一九頁。

VI マライ半島

- (1) 入江寅次、前掲書、上巻、二〇六～二〇八頁。
- (2) 右同書、二〇八～二二頁。
- (3) 入江寅次、前掲書、下巻、一四四～一四七頁。
- (4) 右同書、一四七～一四八頁。
- (5) 右同書、一四八～一五一頁。
- (6) 右同書、二二七～二二九頁。
- (7) 右同書、二二九～二三三頁。

VII タイ移民

- (1) 入江寅次、前掲書、上巻、二二三～二二五頁。
- (2) 右同書、二二五～二二八頁。
- (3) 右同書、二二八～二三二頁。
- (4) 右同書、二三二～二二六頁。
- (5) 右同書、二二六～二二八頁。
- (6) 右同書、二二八～二三一頁。

VIII ニューカレドニア、フィジー島、ガドゥルップ島の移民、その他

- (1) 入江寅次、前掲書、上巻、二二〇～二二三頁。
- (2) 右同書、上巻、二二三～二二六頁。
- (3) 右同書、下巻、一五七～一六一頁。

- (4) 右同書、上卷、一二七～一三二頁。
 (5) 右同書、上卷、一三二～一三八頁。
 (6) 右同書、上卷、二二頁。
 (7) 右同書、下卷、一五六～一五七頁。

- (18) 右同書、四六九～四七〇頁。
- (19) 古川義三、前掲書、四五一～四五三頁。
- (20) 右同書、四五三～四五九頁。
- (21) 右同書、四五九～四六二頁。
- (22) 右同書、四六二～四六四頁。
- (23) 右同書、四六四～四六五頁。
- (24) 右同書、四六五～四六九頁。
- (25) 右同書、四六九～四七二頁。
- (26) 右同書、四七二～四七五頁。
- (27) 右同書、四七五～四七六頁。
- (28) 右同書、四七六～四七七頁。
- (29) 右同書、四七九～四八二頁。
- (30) 蒲原宏二、前掲書、六五二頁。
- (31) 右同書、六五三頁。
- (32) 右同書、六五三～六五五頁。
- (33) 右同書、六五五～六五八頁。
- (34) 右同書、六五八～六五九頁。
- (35) 矢内原忠雄『植民及植民政策』、『矢内原忠雄全集 第一卷』岩波書店、一九六三年、一四頁による。
- (36) 蒲原宏二、前掲書、六五九頁。
- (37) 右同書、六六一～六六三頁。
- (38) 右同書、六六八～六七九頁。

IV ファイリピン移民(Ⅲ)

- (1) 南洋協会編『大南洋圖』中央公論社、一九四一年、四四二～四四六頁。
- (2) 『ダバオ新聞』、一九四二年二月二〇日付による。
- (3) 右同紙、一九四二年二月二〇日付による。

- (4) 右同紙、一九四二年二月二〇日付による。
- (5) 右同紙、同日付による。
- (6) 右同紙、一九四三年五月一〇日付による。
- (7) 右同紙、一九四三年五月三一付による。
- (8) 古川義三、前掲書、一七三〜一七四頁。
- (9) 『タバオ新聞』、一九四四年五月三〇日付による。
- (10) 右同紙、一九四四年六月二六日付による。
- (11) 右同紙、一九四四年七月八日付による。
- (12) 右同紙、一九四四年七月二九日付による。
- (13) 右同紙、一九四四年八月一日付による。
- (14) 右同紙、同日付による。
- (15) 右同紙、一九四四年八月五日付による。
- (16) 右同紙、一九四四年八月一〇日付による。
- (17) 右同紙、一九四四年八月一五日付による。
- (18) 右同紙、一九四四年八月二一日付による。

V オーストラリア移民

- (1) 入江寅次、前掲書、上巻、四七〜五〇頁。
- (2) 右同書、三八六〜三九〇頁。
- (3) 右同書、三九〇〜三九三頁。
- (4) 右同書、三九三〜三九七頁。
- (5) 右同書、三九七〜三九九頁。
- (6) 右同書、三九九〜四〇一頁。
- (7) 右同書、四〇一〜四〇四頁。
- (8) 右同書、四〇四〜四〇七頁。
- (9) 右同書、四〇七頁。

- (2) 右同書、一九九～二〇〇頁。
- (3) 福本日南『大日本商業史』、右同書、二〇〇頁より重引。
- (4) 右同書、二〇〇～二〇一頁。
- (5) 右同書、二〇一頁。
- (6) 土屋大夢『比律賓跋歩』、右同書、二〇一～二〇二頁より重引。
- (7) 右同書、二〇二頁。
- (8) 右同書、二〇三頁。
- (9) 『南島巡航記』、右同書、同頁より重引。
- (10) 右同書、二〇三～二〇五頁。
- (11) 右同書、二〇五～二〇六頁。
- (12) 蒲原宏二『ダバオ邦人開拓史』ダバオ日比新聞社、一九三八年、三～四頁。
- (13) 右同書、四～五頁。
- (14) 右同書、五頁。
- (15) 右同書、六頁。
- (16) 右同書、六～七頁。
- (17) 古川義三『ダバオ開拓記』古川拓殖株式会社、一九五六年、三五～三五二頁。
- (18) 蒲原宏二、前掲書、七～九頁。
- (19) 右同書、九～一一頁。
- (20) 右同書、一一～一二頁。
- (21) 右同書、一二～一三頁。
- (22) 右同書、一三～一四頁。
- (23) 右同書、一四～一五頁。
- (24) 右同書、一五～一六頁。
- (25) 右同書、一六頁。
- (26) 右同書、一六～一八頁。
- (27) 右同書、一八頁。

- (28) 右同書、一八〇二六頁。
- (29) 右同書、二六〇二八頁。
- (30) 右同書、二九頁。
- (31) 右同書、三〇頁。
- (32) 右同書、三〇〇三一頁。
- (33) 右同書、五七〇五八頁。
- (34) 右同書、五八〇六〇頁。

III ファイリピン移民(II)

- (1) フェルディナンド・ラモス「内戦に突入したミンダナオ」『世界』岩波書店、第四七二号、一九八五年三月号、二二八頁。
- (2) 蒲原宏二、前掲書、三六〇三七頁。
- (3) 右同書、三七〇三九頁。
- (4) 右同書、三九〇四〇頁。
- (5) 右同書、六五〇六六頁。
- (6) 右同書、六六頁。
- (7) 古川義三、前掲書、三五六〇三五七頁。
- (8) 蒲原宏二、前掲書、六四頁。
- (9) 古川義三、前掲書、三五八〇三六〇頁。
- (10) 右同書、一三一〇三三頁。
- (11) 右同書、一七〇二〇頁。
- (12) 右同書、一五一〇一五二頁。
- (13) 右同書、三六〇〇頁。
- (14) 右同書、三六〇〇三六二頁。
- (15) 入江寅次、前掲書、下巻、二二〇〇二二七頁。
- (16) 『朝鮮、台湾、南洋拓務概観』、四六七〇四六八頁。
- (17) 右同書、四六八〇四六九頁。

移民史 IIアジア・オセアニア編 註

I 南進への眼

- (1) 榎本武揚『西伯利亞日記』が原典。入江寅次『邦人海外発展史 下巻』移民問題研究会刊、一九三八年、二三五頁より重引。
- (2) 「殖民協会報告第一号」が原典。入江寅次『邦人海外発展史 上巻』移民問題研究会、一九三八年、三二頁より重引。
- (3) 入江寅次、前掲書、下巻、二二六頁。
- (4) 右同書、同頁。
- (5) 右同書、同頁。
- (6) 右同書、二二七頁。
- (7) 「殖民協会報告第三号」、入江寅次、前掲書、上巻、二三頁より重引。
- (8) 徳富蘇峰『近代日本国民史・鎖国篇』、右同書、三三頁。
- (9) 右同書、三四頁。
- (10) 右同書、一九二～一九八頁。
- (11) 入江寅次、前掲書、下巻、一三七頁。
- (12) 右同書、一三八～一四四頁。
- (13) 藤田敏郎『海外在勤四半世紀の回顧』、入江寅次、前掲書、上巻、二三一頁より重引。
- (14) 井上雄二『南洋』、右同書、二二二頁より重引。
- (15) 塩見平之助『南洋発展』、右同書、同頁。
- (16) 一番ヶ瀬住雄『海外』、右同書、二三三頁より重引。
- (17) 「殖民協会報告第三二号」、右同書、同頁。
- (18) 右同書、二三三～三四頁。
- (19) 藤田敏郎、前掲書、右同書、二三四～二三五頁。
- (20) 右同書、二三五頁。

- (21) 島村抱月『滯歐文壇』、右同書、二三五～三六頁。
- (22) 右同書、二二六頁。
- (23) 入江寅次、前掲書、下巻、一五一～一五二頁。
- (24) 日沙商会『南進のさがけ』、右同書、一五二頁。
- (25) 通商局『サラワク国事情』、右同書、一五三頁。
- (26) 右同書、一五三～一五四頁。
- (27) 『海外』第九卷七月号、右同書、一五四頁より重引。
- (28) 『海外』第九卷八月号、右同書、一五四～一五六頁より重引。
- (29) 右同書、二三七～二三八頁。
- (30) 右同書、二三八頁。
- (31) 川崎良三郎、丸茂保『独領南洋群島』、右同書、同頁より重引。
- (32) 右同書、同頁。
- (33) 右同書、二三八～二三九頁。
- (34) 右同書、二三九頁。
- (35) 右同書、同頁。
- (36) 右同書、同頁。
- (37) 右同書、二三九～二四二頁。
- (38) 右同書、二四二～二四三頁。
- (39) 右同書、二四三～二四四頁。
- (40) 松江春次『南洋開拓十年誌』、右同書、二四五頁。
- (41) 右同書、二四七～二四九頁。
- (42) 右同書、二四九～二五〇頁。
- (43) 右同書、二五一～二五六頁。

II ファリピン移民(Ⅰ)

- (1) 入江寅次、前掲書、上巻、一九九頁。

① 自分たちが日本人であることを、日本政府に確認させる。具体的には旅券の申請である。孤児たちのアイデンティティの確認はこの方法によってしかない。確かに彼らは、戸籍に載っているから、日本人であることは明らかである。しかし日本政府はこれまで彼らおよび彼らの子ども達にたいする日系人としての定住者ビザの発給に關し、彼らが長年現地でフィリピン名を使つてこざるをえなかつた事実を盾にとつて、彼らが日本人であることすら認めようとしなかつたのである。したがつて、旅券の取得は彼らが日本人であることの唯一の証である。

② 旅券の申請に並行して、孤児たちのフィリピン方式による婚姻の事実を日本に報告し、戸籍に記載する。これは日本政府にたいしてフィリピン日系人社会の存在を認めさせる重要な一步である。

それに續いて、男性孤児の子ども達は日本人であるから（一九七二年以前に生まれた三世に限る）、この三世たちも戸籍に記載する必要がある。

③ 以上の手続きは、日本国内においてもできるが、フィリピンの日本領事館にて行うほうがよい。インタビューを含む身分調査は、現地で行うのが迅速で的確だからである。

(3) 父親の身元は判明しているが、戸籍に記載されていないケース

① フィリピンで身分関係の証明書（市民登録証、婚姻証明書、出生証明書など）が存在する場合には、証明書を再発行してもらつて、両親の婚姻および本人たちの出生を日本に報告して日本の戸籍に登録する。

② そうでない場合は、上記審査委員会での審査を経て、両親の婚姻、本人たちの出生などの遅延登録を行い、婚姻証明書、出生証明書などを発行してもらつて、①と同様の手続きをとる。

③ その後の手続きは上記と同様である。

(4) 父親の身元が判明していないケース

① 日本政府にたいして、名簿を提出して、父親捜しを要請する。それと同時にマスメディアや民間ボランティアな

どを通じて、市民的協力による親捜しを要請する。

(5) 旧軍人・軍属に対する補償

- ① 厚生省、県にたいし、資格該当者に関する照会を行う。
 - ② 受給資格があることが判明したら、受給手続きをとる。
- 以上は、戸籍への登載が前提となる。

く、日本の戸籍への報告は受理されるべきである。

⑤ 日本においても、出生届けなど身分関係の戸籍への報告が遅れても、当然戸籍への記載が許されるように、フィリピンでも、婚姻・出生・死亡などの身分関係の登録につき、遅延登録が、認められている。

したがって、婚姻や出生についてフィリピンでそれらについての証拠がない人たちは、それらの身分関係を証明して、遅延登録できる。特に遅延登録制度は先住民のように、自治権を行使していて、もともと中央政府にたいして身分登録を行う習慣がなかった人々にとっては大切な制度である。

そして、残留孤児たちの母親に先住民の女性が多かった事実注目すべきである。そこでは、戦前の戸籍に非嫡出児と届けられていても、実は、フィリピン方式の適式の婚姻と認められるケースがほとんどである。したがってその婚姻が遅延登録されれば、子の姻出性が確認されたことになる。

⑥ フィリピンで戦前の身分登録の証拠がないケースで、しかも証拠によって父親が日本人男性であり、しかも婿内子であることが証明できれば、フィリピンでは両親の結婚と子ども達の出生の遅延登録が許されることになる。

ところで従来、遅延登録の制度は、フィリピン法では一九三一年以前に発生した身分関係には及ばないとされてきたが、九四年三月に一九三一年制定の古い法律が発見され、それによれば、その年にさかのぼって遅延登録が許されることが判明した。

これによって、一定の証拠があれば、残留孤児にかかる両親の婚姻証書、出生証明書が遅延発行されるようになった。

⑦ 遅延登録に関して、証拠の判断をフィリピン政府が行うのはきわめて困難である。それは地域の孤児たちの住んでいた日系社会が行うのがよりふさわしい。そこでフィリピン政府は日系人に関する遅延登録に関して、各地の日系人会に遅延登録のための審査に関与することを認めた。その方法は、審査委員会のメンバーに日系人会から加わるということによってである。

この手続きが、昨年、バギオの日系人会とフィリピン国家統計局との間の協定によって確認された。すでにバギオにはこの審査委員会の審査を経た婚姻証明書や出生証明書が遅延発行されている。

⑧ 日本政府はフィリピンで適法に発行された遅延登録に基づく婚姻証明書や出生証明書の日本への届け出を受理す

べきである。上記のフィリピン法の立場、フィリピン残留孤児の特殊な事情、彼らの戦争犠牲者としての立場、日本政府の戦後処理責任などから考えると、そのことは国として当然の責任である。

⑨ 実際これまで遅延登録に基づく婚姻・出生について広島において一九八三年（昭和五八年）に受理した実例がある。

(3) 父親の身元が確認されていないケース
残留孤児全体の七割以上で達すると思われる。

◆(3)の問題点◆

① これまで日本のボランティアの血のにじむような努力で父親の戸籍捜しが行われてきた。しかし市民の善意にも限界がある。日本政府は海外渡航者名簿、引き揚げ者名簿、軍人・軍属名簿など、父親の身元に関する膨大な情報を有するはずである。これらを元に、組織的な親捜しを行えば、全体の父親の判明は容易だと思われる。この問題は、政府の積極的な協力なしには解決できないのである。

② 今後、父親の身元が確認され次第、上記と同じ手続きをとることになる。

「2」 今後残留孤児たちはどのようなことを行おうとしているのか？

(1) 日系人社会の復元作業に向けて、まず行うべきことは、フィリピン全土において日系人の登録を行い、残留孤児たちの全体像を正確に把握することである

そして身分的現状に応じて、各対象者について、以下の手続きを行うことになる。

この作業は、フィリピン全土にある一四の日系人会を通じて行い、その結果はマニラにある日本のボランティアによって運営されている法律扶助センターの事務所に報告される。またこの作業は、前記審査委員会の活動の基礎となる。

(2) 戸籍に登録されている孤児たち

〈資料〉フィリピン残留孤児の今後の身分確認手続き

標題に関して、具体的な現況と展望を示している資料を提示しておく。引用は、フィリピン残留孤児集団帰国支援実行委員会事務局・西田研志法律事務所『一九九五・フィリピン残留孤児問題』（一九九五年、同事務局刊）五九頁による。

〔1〕 フィリピン残留孤児の身分に関する現状

〈残留孤児の数と分布〉

(1) 日本人を両親とする孤児

現在判明しているだけで二〇名前後が確認されている。そのうち日本の戸籍登録が判明している者が六名。また未登録だが、明らかに日本人孤児である者が一名いる。

その中でバナイ島における戦争末期の在留邦人による集団自決の生き残りの孤児が八名にのぼるが、フィリピン全島には、もつと多くいると推察される。

(2) 日本人を父親に持つ孤児

現在判明している数は約二、〇〇〇名。今後の調査で日系人会に加入していない孤児を含めると三、〇〇〇名を超えることが予想される。

その分布は、ミンダナオ島ダバオ市周辺に約一、〇〇〇名と最も多く、つぎにバギオ周辺に約四〇〇名以上と続くが、そのほかミンダナオ全島、マニラ、セブ島、ビコール地方、バナイ島、ネグロス島など、フィリピン全土に一〇ない

し数十家族単位で点在している。

〈残留孤児の国籍問題〉

(1) 日本の戸籍に載っている人の場合

現在判明しているだけで二〇〇人を優に超える。

この人たちの場合、明かに日本人である。しかし現地ではフィリピン名をつかっているため、戸籍の人物と同一性が問題となる。

(2) 父親の本籍地が判明しているが、戸籍に載っていない人の場合

少なくとも三〇〇名を下らないが、この人たちをいかにして戸籍に登録するかが問題となる。

◆(2)の問題点◆

① 戸籍には載っていないが、その理由となっているのは、戦時下での日本への報告の不到達である。これは本人の責めに帰することのできない理由による未登録である。また日本政府は戦前、戦争協力を前提に、在留邦人全員にたいして日本の戸籍への報告を強制した事実がある。

② 一方、フィリピンでの両親の婚姻、本人らの出生を裏付ける証拠（市民登録、婚姻証明書、出生証明書など）のほとんどが、戦禍で焼失した。しかもフィリピン政府は、喪失した証明書類の再発行を怠ってきた。

③ まれに戦前の婚姻証明書や出生証明書が喪失をまぬかれて残っているケースがある。日本政府は、このような書類の提出があれば戸籍に登録している。

④ 婚姻証明書や出生証明書は滅失しているが、それらに基づく戦前の市民登録（結婚・出生・死亡）が、国立公文書館や戦禍をまぬかれた地方の市役所に残っているケースが相当ある。

フィリピン法によれば、政府はそれらについては無条件に、婚姻証明書、出生証明書などの再発行ができる。これによって、証書の再発行がなされるケースが相当あると考えられる。これは上記③のケースと同じである。これに基づ

えられる。

とはいえ、日本への戸籍記載のための報告が、戦火のなかで到達しなかったケースが多く、記載がなされていないと考えられる。しかし、この件に関して残留孤児の責任は一切ないと断じてよいであろう。

このような残留孤児の法的地位にもかかわらず、フィリピンにおける外国人登録証の原簿、婚姻証明書、出生証明書などの「証明文書」がまた戦火のために喪失したために、その立証はきわめて困難となっている。残留孤児は、そのほとんどが父親の本籍地すら知らないものである。現在、日本人のボランティアの努力で父親の身元が判明した残留孤児の割合は、全体の二〇パーセントにも満たないと考えられている。そこで、中国残留孤児問題と同様に、父親の身元確認が、今後の重要課題となるものと思われる。

本来ならば、戦争で焼失した残留孤児の身分関係の証明書（婚姻証明書、出生証明書）の回復手続きは、フィリピン政府が責任をもって、これを復元する作業をなすべきである。たとえば、わが国において沖縄県のように戸籍が戦火で焼失したところでは、戦後、ただちに、当該本人からの身分関係の「疎明」（裁判官などに、一応たしからしいという推測をいだかせる程度の証拠あげること）によって仮戸籍の編纂が行われた。

しかし、フィリピン政府は、こうした職務を今日にいたるまで怠ってきた。このことが、残留孤児はもとより戦前からフィリピンに在住してきた外国人に大きな障害となっている。なおフィリピンでは、結婚証明書や出生証明書が喪失された場合、やむをえない事情で証明書が発行されていない場に、身分関係の証明で日常生活で不便が生じないように、「遅延登録」という形で証明書の発行が許されている。したがって、残留孤児の場合も、一定の証明にもとづき、日本人の子であることを証明する父母の結婚証明書や、本人の出生証明書の発行が可能である。

とはいえ、フィリピン法上、これまで「遅延登録」は一九三一（昭和六）年以降の身分関係に限られていたの

で、限界があった。しかし、一九九四年（平成六）年四月の行政通達によって、一九三一年以前の身分関係につけても「遅延登録」が認められることになったのである。フィリピン政府が、このような行政通達をだしたのは、残留孤児たちの日本人としてのアイデンティティを求める運動の成果といえる。

なお、右にみた行政通達は、形式上はすべての外国人を対象とするものだが、主たる目的が残留孤児にあったことは明らかである。この通達に合わせて、フィリピン政府は、残留孤児の歴史的悲劇に深い理解を示し、つぎのような特例「遅延登録」の具体的な発行手続きを定めている。

(i) 全国の残留孤児とその子孫で構成されている日系人協会連合会とフィリピン政府が、証書の発行手続きについて詳細な協定を結ぶ。

(ii) (i)にもとづき、日系人協会連合会とフィリピン政府で審査委員会をつくって、審査を経て証書を発行する。こうした方向によって、父親の本籍地の判明した残留孤児に、すべて婚姻証明書、出生証明書の発行が可能となったのである。

フィリピン残留孤児問題は、わが国の戦後処理問題として、本来、日本政府が積極的になすべきことである。父親とともに「祖国・日本」のために戦い、それゆえに人生のすべてを犠牲にした同胞にたいしての日本人の国民的責務なのだ。

フィリピン移民問題の一面を紹介するにとどめるが、残留孤児は老齢化している。時は待っていてくれないのである。

軍艦など船舶用ロープとして世界に輸出されていた。一九一八（大正七）年のダバオの日本人移民は七、三五〇名であったが、その後も盛衰はありながら、一九三七（昭和一二）年には一四、〇〇〇名を越える、日本人移民社会としては世界でもっとも豊かな社会を築きあげていたのである。

ダバオには、日本人小学校が設立され（大正一三年）、日本語新聞社や仏教寺院も建立され、日本映画館・日本料理店などが出現し、フィリピン各地に日本人街が誕生した。こうした移民たちは、太平洋戦争開戦直前に、フィリピン全体で三万人を越えていたと推定できる。

残留孤児問題の歴史的背景 太平洋戦争の勃発に伴い、フィリピンに住む日本人移民たちの運命は一転した。日本軍の南進によって、当然のこととして、日本人移民社会は祖国・日本のためにアメリカ軍やフィリピン・ゲリラと戦ったのである。フィリピン人を母にもつ残留孤児たちも例外ではなかった。

適齢期の残留孤児たちは、例外なく軍人・軍属として登録され、いのちを祖国・日本のために捧げた者も数知れない。また、工業農業をあげて生産増強に励み、「銃後の守り」を万全とすべく奮闘した。フィリピンの日本人移民社会もまた、当時の日本国内となんら変らぬ光景だった。しかし、移民社会が国内と決定的に異なるのは、そこが「敵地」であり、マニラ麻耕地も工場も、家族も日本人町も、すべてが「敵」に囲まれていたのである。

四年余りにわたる戦いの末、アメリカ軍のフィリピン諸島への上陸に際し、残留孤児たちも旧日本軍と行動をとにし、ジャングルのなかで残留孤児たちは父親と離ればなれになった。また、フィリピン・ゲリラによる「敵国人たる日本人」への報復は、想像を絶するものがあつたため、多くの残留孤児たちがフィリピン人の母親の親族のもとで隠れているほかに術がなかった。なかには捕虜収容所に収容された残留孤児たちもいたが、日本へ帰国するにも、強制送還されようにも、父親と離ればなれになって、父の故郷へ帰る術とてなかったのである。

こうして敗戦に伴って、父親たちの全員が日本へ強制送還され、多くの残留孤児たちはフィリピンにとり残されてしまった。

祖国・日本のために戦った残留孤児たちの戦後は、厳しい現実と直面した。「敵国民の子」として、あるいはまたフィリピン人に銃を向けた直接の「反逆者」として、フィリピン社会から徹底的に排除され、迫害を受けることとなる。そのため、残留孤児たちは、日本人であることのすべての証拠を捨てて、フィリピン社会の最底辺でひっそりと生きる以外に、とるべき途はなかったのである。父親を失ったのちに、かつての繁栄を誇った日本人移民社会は完全に崩壊してしまった。このような悲惨な日系人社会もまた、おおいにかくすことのできない史的事実なのだ。

そして歴史は流れた。残留孤児は祖国・日本からも忘れられ、戦後五〇年を辛苦のなかで生きてきた。

しかし、戦争の傷跡がフィリピン人の心から癒えた一九七〇年の後半になって、残留孤児たちは自分のアイデンティティを求めて立ちあがったのである。父親捜しにはじまって、日本人としての法的地位の確認をめざして、日本国内のボランティアの協力と援助もあって、その運動は着実に前進した。その成果は、一九九五（平成七）年四月、フィリピン政府が自ら、残留孤児たちの日本人としての法的地位確認のための行政通達となった。

残留孤児の法的地位 残留孤児の法的地位は、旧国籍法によれば「日本人を父親とする外国人は、嫡出児、非嫡出児を問わず、日本国籍」であった。それに加えて、開戦に伴い、現地邦人はほとんど例外なく、フィリピン政府によって外国人登録をさせられたため、残留孤児のすべてが日本国籍になったものと考えられる。

その後、フィリピンに進駐した旧日本軍の軍政監は、現地邦人のすべてにたいして、軍人軍属への徴用を前提に戸籍への登載を義務づけた。したがって、残留孤児の日本人としての国籍も、ここにおいて確定したものと考

戦後日本では、独立戦争に参加した彼等を日本軍を離脱した「逃亡兵」として取扱ってきた。そんな状況の中で、残留日本兵たちは一九六一年から一九六四年にかけてインドネシア国籍を取得した。一九七九（昭和五四）年七月、残留元日本兵たちは、相互扶助を目的に「福祉友の会」（YWP）を組織し、身体不自由・貧困者への生活補助金支給、その子弟への学費援助、里帰り、子弟への日本語教育、二世への奨学金支給、月報「福祉友の会」の発行等の活動を開始した。残留日本人たちによる戦後の日系社会が生まれ、その子弟のインドネシア日系人として、各分野で活躍を始めた。

日本国が、この一部である二一名に対し一度限りの「一時軍人恩給」（支給額は一人当たりの平均額四八、二八八円）を支払ったのは一九九一（平成三）年十二月であった。わずかな金額だったが、これで逃亡兵という汚名は晴れたと喜んだ。

「軍人恩給のことは知りません。独立戦争に参加した日本兵は、英霊の墓地に祭られています。私は日本名が明らかになった日本兵の墓碑には、日本名に書き添えています。まだ遺骨の不明な仲間がいます。探し出すまで帰国できません。バリ島でただ一人生き残った私の責務です。毎年、慰霊祭には、病気の年を除いて家族と共に英雄墓地を歩き参っています。現在、少しでもインドネシア・日本両国にお役に立てばと、ボランティアで日本語を教えています。」（平良定三証言）

2 フィリピン残留孤児問題

フィリピン残留孤児 それは、二〇世紀初頭から戦前にかけて、フィリピンに渡った日本人移民とフィリピン女性との間に生まれた子どもたちで、敗戦に伴って父親たちが日本へ強制送還された結果、現地にとり残された人びとを指す。

現在、フィリピン残留孤児の数は、フィリピン全土に二、三、〇〇〇名と推定される。また残留孤児のなかには、日本人を父母にもちながら、両親の死亡や帰還によって、フィリピンにとり残された者もいる。かれらも、フィリピン残留孤児の範疇に含めておく必要がある。

明治期以降、日本の国家的要請として「南進論」の声があがり、日本人移民は南をめざして移動した。なかでも、移民地が日本に近いことと、現地の豊かな生産性によって、日本人のフィリピン移民は増加の一途をたどった。フィリピンは、マニラ麻（アバカ麻）生産の中心地であった。

一九〇三（明治三六）年、須田良輔以下三〇名の日本人移民が、はじめて農業労働者として、フィリピンのダバオに入植した。その後、明治・大正・昭和にかけて「南進論」のかけ声のもとに、日本人移民はフィリピンの開拓に従事した。

なかでも、一九〇六（明治三九）年、ダバオで日本人によるはじめてマニラ麻の栽培がはじまったことに注目すべきであろう。タバオはフィリピンにおいて、マニラ麻の栽培に適した土地であった。タバオは、当時、マニラ麻総輸出のトップの座を制していた。マニラ麻で作られたロープは耐水性にすぐれ、丈夫で水に浮くことから、

日本敗戦の翌々日八月十七日、首都ジャカルタで民族運動指導者スカルノとハッタが連名で、「独立か死か」を唱え、独立宣言を行い、オランダ国からの独立への道を踏み出し、インドネシア独立戦争に突入した。このなかには日本軍から離脱した日本兵や軍属たちがいた。

インドネシア独立戦争に参加し、バリ島でただ一人生き残った元日本軍兵士（当時伍長）・平良定三（一九二〇年生まれ。インドネシア名、ニョマン・ブレレン）の証言がある（聞き手、藤崎康夫）。

「私はスンバワ島にいました。敗戦と同時に連合軍は、日本軍の行動を禁止し、インドネシア人への武器譲渡を禁じました。私は連合軍が上陸する前に、バリ島に滞在中の中隊長の指示を仰ぐため、十数人の先発隊員を組み、私もその一人としてバリ島に向かいました。戦いに敗れたが、インドネシア住民たちは、私たち日本兵に協力的でした。島民から伝馬船を借りロンボク島を経由し、バリ島東部のバンダイ港に着いたのは九月の初めでした。ゲルゲル王朝の首都であった「クルンクン」で見たのは島民たちが、独立のシンボルの赤白のマークを胸につけ、独立を叫んでいる姿でした。独立を望むインドネシア人の願いがいかに強いものであったか、私にはよくわかりました。

私たちは、軍隊で大東亜戦争は「アジアの解放だ」と教えられてきました。日本によるインドネシア独立約束は、果たされませんでした。私は、その姿を見て胸にジーンとききました。

私たちはバリ島北部の「シンカラランジャ」の町にある兵舎で中隊長と再会しました。私は負けて帰るより今一度、インドネシアの独立を勝取るために戦おうと、心に決めました。仲間に話すと三〇人ぐらいが共感しました。そのうち先発隊として四人を選ぶことになり、私もその一人でした。四人は中隊長に面会し、そのことを告げました。中隊長は『自分はお前たちを日本に帰国させる責務がある。許可もしないが止めもしない。自分の口からは何ともいえない』といわれました。堂々と表門から出たのでは、中隊長の面子をつぶすのでその夜、そっ

と裏口から出ました。

四人は、警戒しながら村民と接触し独立軍に参加しました。独立軍の隊長から届いた連絡では私は、青年たちによる義勇軍の教育にあたりました。昼間は軍事基本を教え、夜はゲリラ戦の訓練を重ねました。また、われわれ四人と現地青年一人を加え、オランダ軍の大部隊を襲撃したこともありましたが、われわれの他にもこのバリ島で独立戦に参加している日本兵たちがいましたが、お互いにインドネシア名を使用していましたので、その名前も詳しい経歴もわかりませんでした。もちろん元日本兵であることはすぐにわかります。

激しい戦いで日本兵はつぎつぎに倒れていきました。それは大東亜戦争の比ではありませんでした。また私たち日本兵が一番恐れたのは、捕虜になることでした。お互いに負傷し歩行困難になったら射殺することを申し合わせていました。だが、現実には戦友を殺すことなど私にはとても出来ませんでした。退却のとき、安全な場所まで引きずって行ったことがありますが絶命しました。また遺体を埋めました。オランダ軍は日本兵を恐れていました。彼等は、日本兵の逮捕に必死で懸賞金のビラまで撒きました。」

インドネシアがオランダとの円卓会議で協定が成立し、独立が達成したのは一九四九年一月二七日であった。四年余におよぶ独立戦争だった。独立戦争に参加した日本兵・軍属は正確な数はつかめないが八五〇人から一千人と推測され、生存者は約三〇〇人だといわれた。

「私が山中から下りたのは一九五一（和年二六）年一月一日でした。バリ島で生き残った日本兵は私一人です。もう一人いましたが日本に帰還しました。」

戦後、インドネシア軍に入ることを勧められましたが、独立という目的は果たしたし、戦争は無差別殺人です。もう武器も見たくありませんでした。軍に勤めることは断りました。そしてともに独立軍で戦ったメリタと結婚しました。日本には家族がいます。老いた母もいます。もちろん帰国したい気持ちはあります。しかし、異郷で死んでいった仲間のことを考えると、私はここに残らなければなりません。」

於ける邦人の永借地は八七箇所で、ミナハサ永借地が約十九%を占め、農園は南洋貿易、セレベス興業、ケレロ
ンディ栽培会社経営のもの外に個人経営農園約七箇所、何れも椰子栽培に従事している。第一次世界大戦当時
独艦エムデンの隠れ場所となったピートンは現在日本人漁業の根拠地で、あたかも日本人村の観がある。ピート
ン在留邦人漁業者と地方官憲との間柄は概して良好で、種々なる特権が与えられてゐる。主たる商社は南洋貿易
のメナド支店、二葉商会の二つである。

ミナハサに在る邦人団体はメナド日本人会、セレベス産業協会、メナド商業会議所で、近年帝国領事館の開設
をみたのも同地の邦人に対する重要性を物語るものであらう。

南部マッカサルは邦人は大部分が商業方面で、南洋貿易、東洋綿花、セレベス興業貿易業の支店を始め、邦人
の輸出入業者は十指を屈する。其の外邦商に多いものは自転車商、雜貨商、理髮業店等である。北部に於けるピ
ートンと共に、南端のブートンを根拠地とする漁業は、特に鯉漁業と真珠の養殖を以て知られてゐる。

セレベスの東方バンザイ島には良質の雲母が多量に存するが、これも最近邦人の手により企業化されるに至つ
た。

ニューギニア——赤道直南に横たはるニューギニアの約西半部は蘭領に属し、開化の程度は極めて低いが、
数人の日本人は、ここで明治の末期乃至大正の始から開拓の先鞭をつけてゐた。現在ニューギニア唯一の邦人事
業である南洋興発株式会社は北沿岸モミ、サルミ地方の農場に於て八百町歩の綿作を行つてゐる。又ナビレ地方
ではダルマ樹より樹脂を採取し、小牧場をも有してゐる。

蘭印諸島東端近くに偏在するドボ島は人口約一千五百人であるが、その内百十三人が邦人である。同島の主要
事業たる真珠及びコプラの採取、製造は殆どこの邦人の手に依る状態である。」(前掲書)

一九三九(昭和一四)年五月、蘭印にガビ(インドネシア政治連盟)が成立。同年六月、第二次世界大戦が勃發。

一九四〇年五月、蘭印政府はインドネシアに戒厳令を施行。ヨーロッパ戦線においてドイツ軍はオランダを占領。同年九月、日本、ドイツ、イタリアは三国同盟を締結。日本とオランダは敵対関係となり、一九四一（昭和十六）年七月、蘭印における日本資産凍結令が發布。一月、日本人の最後の引揚船「富士丸」出航。二月八日、日本は大東亜（太平洋）戦争に突入。全蘭印残留日本国籍者二、〇三九人がオーストラリアへ抑留される。

日本軍の蘭印攻略の最大目標は、アジア最大の石油基地の確保であった。一九四二年三月、約五万の日本軍がジャワ島に上陸を開始。スマトラ島にも日本軍が侵攻した。日本軍による軍政施行。軍当局はインドネシア各界指導者を集め「大東亜共栄圏」の樹立への協力を要請した。が、軍政方針は「南方占領地行政実施要項」の決定に基づく「治安ノ回復、重要防衛資源ノ急速獲得及作戦軍ノ自活確保」で、真意は資源豊かなインドネシアを可能な限り日本領土にとどめおくことであった。

日本軍の占領により、日本人が各分野に進出。同国は戦時日本の重要な資源基地となる。一九四二年一〇月、日本は「海軍武官府」を発足。一二月には首都「バタヴィア」を「ジャカルタ」に改称。一九四三年、兵補制度を発足。しかし、開戦当初、優勢であった日本の戦況は日を追うごとに悪化。さらに一九四四（昭和一九）年、シンガバルナで反日蜂起が起きた。一九四四年九月、東条英機内閣を継いだ小磯国昭内閣は、統治方針を変更し日本は初めて将来インドネシアの独立を許容することを発表。さらに戦況は厳しくなり小磯内閣に代わった鈴木貫太郎はインドネシアの独立を一九四五年九月七日と内定した。

しかし、それを待たずした同年八月一五日、日本は無条件降伏。日本人は総引揚げとなった。

第二次世界大戦後・残留元日本兵と日系社会の誕生 第二次世界大戦終結。日本人・日本企業は全て撤退・引揚げた。が、戦後、独自にインドネシア独立戦争に参加した残留元日本兵・軍属たちにより、戦後、新たな日系人社会が芽生えたのである。

農林興業会社は大谷光瑞氏の企業で、其の国策的企業方針は邦人の南洋農企業史上に異彩を放つてゐる。現在同社の事業は西部爪哇ガル―付近に於けるシトロネラ、パチュリー等の栽培である。

首都バタヴィアは帝國總領事館の所在地にして金融機關として横浜正金銀行支店、台灣銀行支店、輸出入商の大きなものとしては、三井物産、三菱商事、大同貿易等の各支店がある。其の他、綿布、雜貨、陶磁器輸入を行ふ者は、大なるものだけでも十三、四軒に及び、トコ(TOKO 店の意)何々と称する小百貨店式の雜貨小売商十八軒、理髮店七軒、写真屋五軒等、先づこれが主なる邦人商社となつてゐる。邦人漁夫は主にバタヴィアを中心に活動し、同地に於ける總漁獲高の四分の一は邦人により占められてゐる。日本人団体としてバタヴィア日本人会、バタヴィア日本人商業協會、バタヴィア共濟会等がある。ジャヴァ第一の商業都市スラバヤは、日本人にとつても經濟活動の中心地で、横浜正金、三井、台灣の各銀行支店の外に、三井物産、三菱商事、野村東印度殖産、南洋商事をはじめとして、十四軒の雜貨輸入商社がある。その他綿布、物産、古鉄等の貿易業に携わつて数は三十に近い。小売業では殊に日本人商店の進出が目覺ましく、スバヤ市内だけでも約二十を算し、目抜き通りに日本人経営の堂々たる百貨店が開かれてゐる。ここには日本領事館が置かれ、日本人会の會館は各地の此の種建物の中で一番完備したものであると云われてゐる。其の他日本人団体に、スラバヤ日本人実業協會、蘭印日本人商業協會聯合会等がある。

スマランは中部爪哇の都市で、ここにも我が横浜正金、台灣、華南銀行、三井物産、南洋倉庫、東洋綿花、大同貿易、店舗としては雜貨小売商、旅館、写真、理髮、売藥業等に邦人が多い。

スマトラ——スマトラ在留邦人八百八十人中、三百二十余人は東海岸に居り、メダンがその中心地で、主に農業、ゴム栽培業に従事してゐる。其の他アチエ州ベンクレーン州等にスマトラ在留日本人の主たる事業たるゴム農園があり、資本金百万円以上のものを挙げてみると、古河合名、ボルネオ護謨、スマトラ興業、スマトラ護謨、南和公司、東山農事、其の他個人経営の護謨園は約七を算する。蘭印全体の邦人経営護謨園生産高の四十パーセ

ント以上はこのスマトラ邦人の生産するところである。護謨の他に、野村東印度殖産、東山栽培等の椰子園、珈琲園等もある。

邦人商業の中心地はメダンとパレンバンで、メダンの在留邦人は約二百七十人、同地には昭和三年に帝國領事館が設置され、日本人会の経営する在外指定小学校もある。大商店として三井物産を始め十数軒の邦商が活動してゐるが、他地方に比してその規模は小さい。併しパレンバンには三井物産、清栄商会等の貿易商を始め、廿数戸の雜貨商、写真屋等があり、大きな店が堂々とメーン・ストリートを占め、さすがの華僑も此処では邦人に齒が立たない。

其他東海岸地方ジャンビー、シャントール、テピンテンギ、西海岸地方シンボルカ、フォデコック、パダン、ベンクレーンに邦人が散在し主に商業を営んでゐる。

蘭領ボルネオ——蘭領ボルネオに於ても、護謨を主とする農園数は約四十に及んで居る。其の中で最も大きいものとして野村東印度殖産の野村農園（資本金五百万ギルダー）、蘭領印度拓殖（資本金三百万ギルダー）等がある。

南洋林業株式会社はサンクリラン地方に五万ヘクタールに涉つて、ラワン材の伐採を行っている。蘭領ボルネオの豊富な石油資源を目指して、邦人蘭人より成る協和鉱業会社（資本金五百万円）が事業を開始して居り、ボルネオ石油会社（ボルネオ油田組合出資日石、三井共同）が油用試掘を行いつつあるが、未だ採油する迄の成績を挙げていない。

セレベス——セレベスの北部メナドを中心とするミナハサ州及び南部商業都市マカッサルも又邦人の有力な発展地である。

ミナハサ州に在住する日本人は、メナド日本人会調べ（一九三八年八月）によると、本業者二百人を越え、これを職業別にすると、漁業に従事する者百二十人が最も多く、次で栽培業関係の者三十名となっている。同州に

當時、蘭印においてはヨーロッパ人、東洋人、原住民という差別があり、日本人は東洋人として取り扱われ、活動の場がなかった。が、一八九九（明治三二）年、日本人はヨーロッパ人同様の待遇となった。日露戦争（一九〇四～五年）の頃、日本人売薬行商人が蘭印にも進出した。が、オランダ官憲は、各地を回る日本人行商のそのほとんどがスパイであると極度に警戒していた。

日露戦争後の一九〇八（明治四一）年四月、日本とオランダの間に「オランダの海外領地および植民地に関する領事条項」を締結。海外雄飛を志す商業移民が、ジャワ島をはじめ、蘭印各地へ渡航をはじめた。翌一九〇九年、バタビアに日本領事館が開設され、「からゆきさん」は国家威信を汚す存在として、廃娼運動が展開された。「明治二十四年頃、既に爪哇のバタヴィア市で貿易に従事してゐた邦人があり、それから少し後れるともう各地にポツポツ邦人の姿を見た。」

蘭印に於て、邦人が自由に住居し、活動し得るやうになったのは、明治三十四年からであらう。日露戦争後に於ても、邦人に対する蘭印官憲の態度には、屢々明朗ならざるものがあつたが、それは邦人に対する警戒であつても、必ずしも差別待遇といふのではなかった。ところが、明治三十四、五年頃までは、全く支那人と同様に取扱われたのであつて、支那人居住地外に居住も出来ず、旅行しても支那人の旅館にしか宿泊出来なかった。役人とか、高級の旅行者などは無論この限りではなかったが。

日露戦争後、売薬行商の活躍となり、日本内地商業者のささやかなる進行となり、年と共に在留者の数も多くなって、邦人の実力も、漸く見るべきものがあるやうになった。」（一九四一年、『大南洋圈』南洋協会編、中央公論社）

第一次大戦から第二次世界大戦 日本人の積極的な進出は、第一次大戦の勃発が大きな引き金となった。戦火でヨーロッパ製品が不足し、日本製品の需要が急激に伸び、日本商品を扱う貿易業者、在留日本人商人、中国人

商人に富をもたらし、オランダ領が新しい市場となり、これを機に日本企業や日本人商業移民たちが進出した。東南アジア諸国には、多くの長い移住の歴史を持つ中国人がおり、蘭印も日本商品の大きな市場であった。

一方、この頃、台湾総督府（当時、日本の植民地）による、日本の南進施策が具体化しはじめていた。

一九一七（大正六）年八月、英領マレー連邦ペラ州では、ゴム用地払下げ制限法を發布。さらにマレー半島全域に渡って五〇エーカー以上の土地払下げ禁止など、英領のゴム用地制限があった。日本領事館やゴム栽培者はこの土地制限令は、日英同盟の意に反するものとして抗議したが埒があかず、日本人の目は蘭印に向けられ、蘭印進出へ拍車をかけた。第一次世界大戦後、知識層の渡航も増え、蘭印当局や実業家等との意見交換が盛んになり、蘭印の警戒も次第にとけ、日本商社、企業家の蘭印進出は続出した。

一九一四（大正三）年、在留日本人は二、二四九人であったが、第一次世界大戦直後の一九一九（大正八）年には四、四一四に急増した。ジャワ、スマトラ、ボルネオ（カリマンタン）各島には日本人経営の農場があった。一九三五（昭和一〇）年、在留日本人数は六、五九八人に達していた。日本人経営農場は一〇三を数えていたが、在留日本人（有職者）の約七割は商業関係者であった。

第二次世界大戦前、蘭印全体を通じ、約七千人がジャワを中心に各地に分散していたとされる。バタビア、スマラン、スラバヤなど主要都市には三井、三菱、台湾銀行、正金銀行等の大企業が各々支店を開設、また都市を離れていた地方では農園、ゴム園、茶園等を経営する日本人たちがいた。蘭印移民の特徴は、商業関係者が主流であり、農業・工業・水産業等の関係者も大資本を后盾とする企業的色彩が強いことが特徴であった。

「中部ジャヴァには、東印拓殖株式会社の経営に属する三農園がサイザル麻、護謨を栽培し、大日本製糖会社の甘藷園の栽培、個人経営のものは、ココ椰子、花卉、野菜、稲作等を行ってゐる。

西部爪哇に根拠を有する南国産業株式会社は、護謨、茶、珈琲、コカ、規那栽培の三農園を有し、その管理状態は行届いて蘭人会社に遜色がなく、又南洋興業会社は茶、護謨の栽培を行ってゐる。同じ西部爪哇の蘭領印度

増補 インドネシア移民とフィリピン残留孤児

1 インドネシア移民

蘭領印度と商業移民 日本の伝統文化の原型のなかには、インドネシアのものが多々見られる。両国は文化的に共通した基盤をもつことから、その関係の深さを見ることができるといえる。

江戸初期には、「ジャガタラ」といわれたパタビア（古称ジャガタラ、現・ジャカルタ）には、すでに日本人たちが居住していた。鎖国時代に、長崎に來航するオランダ船は、ジャカルタを基地にしており、日本のインドネシア（当時・蘭領東印度）との交流は、すべて宗主国「オランダ」を通しての間接的なものであった。

明治時代に入り、蘭印への日本人移民の先駆者は一八九二（明治二五）年、爪哇（ジャワ島）に渡った和歌山県出身の後藤実史、妻登美、実弟藤治の三人で、パタビアにおいて貿易商（玩具、食品等）を営んだ。

まだ当時、日本人の南方諸国への関心は薄く、東南アジア諸国同様に「からゆきさん」と呼ばれる海外出稼女性とその関連業者たちが、蘭印日本人社会の中心だった。一八九七（明治三〇）年、ジャワ島にいた在留日本人一二五人のうち約一〇〇人が女性であった。

しのつかぬ痛手であつた。この移民の出身地別は左の通りだ（全部男）。／和歌山県一五三人、広島県一八七人、岐阜県二人、山口県一三〇人、計四九〇人。⁽⁵⁾」

6 グアム島農作のための契約移民

「ヴァンリードの周旋によつて、元年グアム島に渡航したものは四十余人だと伝えられるが、しかし実際のところ、この一団の移民に就いては、今に徴すべき史料が見当たらない。／明治元年四月、彼（ヴァンリード）は露国ロットマン並にウイルマン会社より日本労働者百人以上を雇入るべき依頼を受け、グアム島鎮台フランシスコ・モスコリーに代り、日本労働者と契約を結び、一人一ヶ月四弗の給料を支出し、農作の爲め同島へ雇入るゝの契約文書を取換し、日本政府の許可を得て右労働者四十二名を横浜出帆アモイトレドルに便乗せしめ、同島に到着したるは六月なりき。然るに同移民は三ヶ年契約の期満したるも契約に依り帰国旅費を給して送還することなきのみならず、給金さへ其の支払ひを怠りたるを以て、同四年政府は船を送りて之を帰朝せしめたり（横浜商業会議所『横浜開港五十年史』）。」

7 大洋島移民

「東洋移民会社は、明治三十八年九月から、翌三十九年十月にかけて、六十二名の契約移民を英領太平洋島に送つた。雇主は英国太平洋燐礦会社、大工、船大工、火夫、鍛冶工、木工、料理人、みな三ヶ年契約であつた。次で

日本殖民合資会社が、四十一年一月から同島行移民の輸送を開始し、四十二年五月迄、八回に亘り合計三百四十名の契約移民を送った。雇主移民の職業など、東洋移民会社のそれと同じであるが、契約年限は二ケ年であつた。移民は原則として燐礦採掘若くはそれの關係作業に従事した。／＼大洋州サイテール群島中に、マカテア島といふがある。明治四十三年三月から、同年八月にかけて、同島渡航本邦移民三百五十名に達した。みな東洋移民会社取扱移民であつて、巴里に本店を有する大洋州燐礦会社の雇傭にかゝる。大洋州燐礦会社は、ニュー・カレドニア及び大洋島に於ける本邦移民の成績を見て、この移民を誘致したのであるが、条件はあまりよくなかつた。往復の船賃、被服、食事、家屋など会社持で、普通一ヶ月十八円七十二錢といふのであつた。優秀な熟練工で五、六十円も給せられたものもあるが、無論そんなのは稀であつた。それでも健康な移民が多かつたと見えて、四十四年十二月までに、これら移民の日本への送金は十二回、十一万二千五百六十八法五十サンチームに達した（一サンチームは三厘八毛、一法は百サンチーム）。

あるが、これより先き耕地に於て死亡したものの八十一人、船中死亡二十五人に達し、神戸上陸後また五人の死亡を出した。実に高価なる犠牲であつて、気の毒この上もないことである。移民会社の損失もまた大きかつた。後に会社はその次第を明かにして、死亡者の遺族及び一般世間に詫びてゐるが（「フィジー島移民始末」その末尾に／＼本社が此行の爲め消費したる金額は、医師派遣費用三千円、船賃一万四千円、外に死亡者一人に就て五十円の保険金を与ふるの規約なるが爲め、百六名（実は百十一人である。上陸後の死亡者を算入せざる理由は不明）の死亡者に対し、五千三百円並に出張費用等總計二万三千余円に達せり。／＼といつてゐる。当時の移民会社としては莫大な負担であつたらう。要するに調査がいゝ加減であつたのだ。しかしこれは前記高橋、荒井の二名だけの責ではない。二十二年軍艦金剛によつてフィジー島に上陸した田代安定も、この島が邦人の移住地として好適なることを地学協会雑誌に發表した由（二十四年中）、これがまた移民会社の判断の資料であつたといはれる。即ち「フィジー島移民始末」には、田代安定の發表するところとして、左の如く挙げてゐる。／＼一、フィジー島の地形は、サモア群島と大同小異にして、数多の良港に富み、氣候照燠、土質沃饒にして草木暢茂す。／＼二、甘蔗はよく土質に適応し、氣候上の障礙も少くして、製糖の業は着手後頗る好結果を生じ、之がため年々多数の移民を印度大陸其他諸島より募集するの必要を生じ、同島の殖民庁は間接に糖業を保護し、事業家は保護の便宜を得來りて、大いに糖業振興の企志を固うし、自今數年を経ば、北太平洋中に、糖業國の盛名を轟し來る布哇群島と匹敵するに至らん。／＼明治二十七年十月を以て輸送されたガルド・ルツプ島移民四百九十名は、吉佐移民会社と巴里のコロニヤール銀行との契約によるもので、同年十二月二十日目的地に上陸した。上陸して見ると、話は大分違ひ、移民は全部契約の相手方たるコロニヤール銀行の耕地に入るのではなくて、異なる雇主により異なる耕地に分割して配耕される始末だ。コロニヤール銀行との契約は、年期五年、甘蔗耕地の労働に従事し、一日十時間労働で一ヶ月三十五フランである。衣食住、医藥などみな銀行負担といふのであつたが、雇主さへ一定しない位だから契約条件の実行など、初めからいゝ加減だ。銀行は移民全部を自己所有の耕地に使用する如く装ひ、

上陸後これを各雇主に周旋して手数料を取つたのであらう。許すべからざる悪徳行為だ。雇主の移民に対する仕打を見よ。／移民は最初十八ヶ所に分布候処、其後之を小分致し、目下二十四ヶ所と相成り、随つて巡視なども行届かず候へ共、平素移民中の折合は一ヶ所に人数少なき程穩かに御座候、耕主ポーウエー氏方に在る山口県人は、他県人に比すれば其家屋、食料等悪しく、当初一ヶ月余は牛肉、生魚は少しも与へず、去月初旬より漸く一週間に二回だけ、右二品を給与することに相定め候得共、猶他耕地に比すれば非常に劣り牛肉のときは終日約書上の一日分の牛肉定量より他味付料の外一品も給せず、又海草のときも同断にして、或る場合に於ては一日分の菜とならざることあり。／これは移民監督として、この移民と共に渡航した荒井第次郎が、二十八年三月七日付を以て、殖民協会幹事安藤太郎に宛てた手紙だ。食料にして既にこの通りであるとすれば、他は推して知るべしである。即ち同じ手紙に／斯くの如き有様なるに拘らず、農事監督及びその配下の役員との折合頗るによろしく、事業に勉励致し、中には耕地取締人の休業を命ずるにも拘らず、病を推して就業するもの有之、目下未だ全く氣候と労働に慣れざれば東印度人夫に劣るも、本年末にも至れば、必ず善良なる労働夫となるべしとの希望を耕主に懐かしむるに至り、先以て慶兆に候／勿論これは監督の手紙だから、相当の掛値があつたらう。食料の給与も充分でないのに、休んでよい時間に病を押して就業する程善良であつたとは思はれない。しかし移民がよく働いたといふ証拠には充分だ。たゞこれは決して『慶兆』ではなかつた。移民は『本年末』に至つても、耕主達の希望する如く、『善良なる労働夫』とはならなかつたからである。／二十八年九月、六十余名が同盟罷業を執行した。これに加はるもの続出し、大挙して知事を訪問、雇主の待遇の苛酷を訴へて、帰国させて貰ひたい旨を懇願した。しかも容れられず却つてその数名は主謀者なりとして処罰される有様であつた。移民は愈々憤起した。騒ぎは遂に全移民に拡大し、銀行の不埒、雇主の不都合を糾弾した。同年十二月、百八十四名は帰国した。次で耕地を脱するもの続出し、二十九年一月四十一名、二月九十名、六月八十名、七月には残員全部が帰国してしまつて、一人の同地に止まるものがなかつた。まことにあつけない結末であるが、渡航移民に取つては、真に取り返

しと、其刻限に至り果して来れり、されど余は氏に面会せず、氏の立去りし後艦長の申さるゝ様、予て日本出艦の際、外務大臣より託されたる書簡、外に取調要件を氏に与へたれども、氏は直に答へ兼ねれば午後更に取締役フランセル・ロイー氏を伴ひ来らんとて帰り、尤も社長は只今礦山へ出張不在なりとて午後二時過フランセル・ロイー氏来る、余は艦長の紹介にて氏に面会せしも固より仏語に通ぜざれば、坂本大尉の通弁にて彼の要件につき回答を求めたり。氏曰く日本人已に来れり。されば此問題に付、答案を答ふるの必要なかるべし、只実地上の調査を為さんと欲せば、如何なる便宜をも与ふべし。テオ迄は一週間三回の通船あり、陸路百二十哩なれば二日間を要すと、一応尤もなれども、此事たる本艦出帆の後にして余の知るところにあらず、余は外務大臣の内命を帯び、假令その事柄は前後するとも、其責任を尽さざるを得ず、因て其の主要を差示されたと請ひければ、氏も心能く承引したり。更に今回来りたる坑夫は如何なる契約を為せしかを問へども、氏は契約上のことは社長不在にて明に答ふる克はず、只年五ヶ年なりと聞けり、又坑夫の故郷は高島炭坑近傍の百姓なる由、元來此事たる青木子爵の外務大臣たりし時、当会社より坑夫の出稼を請求したることあれば、其大体は之に基きたるものならんと。而して日本より来りたる役員は小野弥一、河田某、荒井第次郎、板屋愛次郎（医師）の四氏なりと云ふ、余は本島に付取調の責任あり、せめて礦山の現況、坑夫着後の有様を目撃せんと欲し、通艦の日取を探りたれども、本艦は十日の出帆なれば時日の乏しきを如何せん、本艦をテオへ回航せしむるの特許を艦長に請へども帰朝已に迫り、帰路尚遠し、猥りに時日を延す克はずとて之を肯ぜず／八日一夜に入り艦長より本艦は明後十日午前八時出帆すべければ、彼の要件に付明日自身にて会社に出頭して回答を促すべしとの心付ありたり。／九日一二時半会社に至り幸に回答を得たれども、仏文なればその意味の如何を知るに由なし、殊に本島形勢の一斑を聞き糺さんと欲し問題まで用意せしも、生憎候補生の来会するあり、其時なきを察し此処を辞去―数年以前支那人百五十人移住せしことありしも、氣候変化のためか、其半数死亡せり。因て此度渡航せし日本人は、出来得べきだけ丁寧に待遇せしむる旨、太守自ら森艦長へ物語られし由―（同上）。

以上は、第一回ニュー・カレドニア移民輸送に關しての裏側の消息だ。もしも富山の願ひが容れられて、日本移民六百名の就働地を見ることが出来たら、これに就いてもつと豊富な資料が呈供されたであらう。」

5 フィジー島およびガードルupp島移民

「明治二十五年六月、外務省は省員高橋昌をして、ニュー・ヘブリデス群島とフィジー島を視察させた。時に吉佐移民会社は、移民監督としてニュー・カレドニアにあった荒井第次郎をこれに加へ、同地が邦人の移住に適するや否やを調査させた。一行が同年十月帰朝しての報告によれば、フィジー島を以て邦人の好移住地であるとした。それで吉佐移民会社は、内々同島への移民送出を企画し、有力な雇主のあるのを待った。／すると翌二十六年六月、在シドニーのパース・ファイルブ会社から、同島行移民の大量申込があつた。吉佐移民会社は好機逸すべからずとして、すぐに移民募集に着手し、二十七年四月を以てこれを送出した。これが前記の三百五人である。年期三年、砂糖耕地の労働に服し、衣食住雇主負担で一ヶ月十円であつた。／移民は上陸後、左の三つの耕区に分れ、大した不満もなく働いてゐた。／第一耕区 ナメリー 五〇人／第二耕区 ランパサ 二〇五人／第三耕区 ラ・ワイ 五〇人／ところが同年九月頃から脚氣、赤痢、熱病等に罹るものが続出し、死亡相次ぎ、十二月頃になると、もう手のつけられぬ状態に陥つてしまつた。吉佐移民会社は、これ氣候風土の慣れざるためであるから、その中平常に復するものと考へ、取り敢へず東京から医者を送つた。医者は大努力をもつてこれが診療に當つたのであるが、事情如何ともすることが出来ず、翌年の一月に入ると、ファイルブ会社の方から事態容易ならず、全部引取つて呉れといふ通知だ。吉佐移民会社も最早やどうすることも出来ず、船を出して引取る外方法がなくなつた。船は二十八年一月十三日に横浜を出帆した。そして同年三月二十五日をもつて神戸に帰着したので

4 ニューカレドニア日系移民の実態

明治二四年「九月南太平洋巡航の途に上る海軍練習艦比叡が、このニュー・カレドニアに寄港するといふのだ。三宅雄二郎、藤野辰次郎、依岡省三といった連中の便乗したのがこれであるが、外務省はその便乗者の一人、富山駒吉に委嘱して、同地の事情及び同地に於ける労働者契約の状況を調査させることにした。比叡は九月二十日横浜を出帆した。／＼しかし、ニツケル会社では、至急に移民を欲しいのだ。現地調査上といふやうな、緩慢な要求ではないのである。もしも現地調査の結果、不利益な報告でも齎らされたら、実現は一層困難になる。この際一気に攻め落すことだとあつて、熱心に運動した。時恰も、同年十二月を以て吉佐移民会社が設立された。これは従来の移民周旋人とは違つて、社会的地位のある人の経営で、これに責任を持たせたら、当局の不安も減ずるだらうといふので、同社を説いた。吉佐移民会社も設立早々の珍客だ。大いに乗気で、外務省に運動した。移民のためには、監督もつけてやるし、医者も同行させるといふ。外務省はそれなら一つやつて見やうとなつた。かくして選出されたのが前節記するところの、二十五年一月の六百人である。そんなことも知らず、比叡によつて各地を巡航してゐた富山駒吉は、二十五年二月六日、ニュー・カレドニアのヌメヤ港に着いた。ところが驚いたことに、日本移民はもうとゞくに着いてあるといふのだ。これには富山ばかりでなく、みんなが一驚を喫した。富山はヌメヤに着く三日前、即ち二月二日から船の中で、上陸後の調査準備に着手してゐたのである。比叡は一月二十一日豪州メルボルン港を出帆して、ニュー・カレドニアに向つたのだ。／＼（二月）一午前十時頃、ニュー・カレドニアに於て調査すべきニツケル鉱山坑夫の契約に関する質疑三十ヶ条、該島の形勢に関する雜問三十九ヶ条を草し、之を森艦長へ差出せり。是は該島着の上、右調査に付森艦長の補助を仰がんと欲すればなり。

四日午前九時頃、森艦長より呼び来る。直ちに至れば曩に差出せる坑夫契約に関する条件、外に一般に関する条件とも、余り多数にて一々聞取る暇なかるべし、若し之を英訳して先方へ差出し、回答を得ることゝせば彼我共に便利ならんとの事故、一旦持ち帰り某々二氏に筆勞を請ひたれども終に承諾を得ざりし、因て艦長に対しては此多数の簡条たる外務省より委託されたる十二ヶ条の内訳に過ぎざれば此簡条外に坑夫に関する規則と該島の最近年報を得れば事足れり。仰ぎ願くは右調査上に御助力あらんことをと。艦長之を領す（富山駒吉『航南日誌』）。ところが、六日ヌメヤ港に着いて見ると前記の次第だ。その日午後五時、富山は先づ艦長からこれを聞いた。搭乗者一同、俄かに信ずる能はず、相当賑かな場面を展開した。搭乗者中には後の広瀬中佐、加藤大将、安保大将等がゐるのである。即ちその日の様子、及びヌメヤ港碇泊中の受託者富山駒吉の行動は左の通りだ。／六日―五時頃（午後）、艦長の召に応じて至れば、今より一週間前郵船会社の広島丸は、日本人五百人（外に女子三十余名ありしも皆帰国せしめ、一名は航海中死亡し、四百九十九名なりと云ふ）―実は六百人―を搭載し、当港の東北に当るテオと云ふ処に上陸せしめ、之をニツケル鉱山に送りたりと云ひ伝ふるものあり、果して然らば意外の出来事なり。尤も今夜は太守の夜会に招かれ、之に赴く筈なればニツケル会社長にも面会の折あるべし。因て右の事柄は一応確めたる上、彼の要件につき回答を得るの手續を為さば如何と、余は固より異議の存するなければ、偏に特別の御補助を仰がんのみと辞去して己が居に帰れば、日本人渡来の事早くも満艦に伝播し、甲曰く日本船に支那人を乗せ来りしを以て斯くは誤伝せしならん、乙曰く彼の震災に罹りたる愛知、岐阜二地方の貧民を救はんと欲し、曩に坑夫出稼の請求ありしを幸にして送り越したるものならん、丙曰く否々然らず、譬ひ多くの貧民を処置するに苦めばとて、未だ事情の明かならざる万里の孤島に送り来るの謂れなし、必ずやニツケル会社より更に社員を派し、我政府に満足を与ふるの契約相整ひたればこそ第一着手として此五百名を送りたるならん。その説区々にして取留なし。只明日を待ちて其信偽を分たんのみ。／七日―今朝艦長の話によれば、昨夜会社長に面会せざりしも、社員モンソン氏に面会せり。氏は十時頃来艦するとの事故、暫らく上陸を見合すべ

右の中、逃亡者数と残留者とを合したものが、即ち同島現在数である。合計一千九百三十四名である。而してこれら現在者数の同島内に於ける分布を見よ。同島の面積は我が国の四国と均しく、約七千六百五十方哩である。同胞移民達は、この島の中を自由に飛び廻り、海上に飛び出して漁業に従事するものさへあつたのである。

所在地	人数	職業
チオウ	六五〇	巴里ニツケル会社ニツケル鉱山労働
ポロ	二〇〇	同
コペトー又はブアンブウ	七〇	同
ドンベヤ	三四〇	ブランド、ニツケル鉱山労働
ポール・ブケ	一〇〇	ガツプ所有ニツケル鉱山労働
ピルウ	六〇	シンガー所有ニツケル鉱山労働
パグウメン又はテーバキ	八〇	シンガー所有ニツケル鉱山労働
テウヂエー	六〇	ウキウ所有ニツケル鉱山労働
ヴオー	六〇	ボーヅウ所有ニツケル鉱山労働
ドンベヤ	四七	鉄道工事労働
パイタ	四〇	同
ヌメヤ	五	漁業兼洗濯業
同	三	理髪業
同	六	ニツケル会社事務所労働
同	一	ボーイ

ヌメヤ	一	鴉片店
ブウライ	一〇	漁業
ウオー	五	同
チオウ	五	同
合 計	一、七四三	(移民調査報告第八)

現在数一千九百三十四名に対し、百九十名ばかり不足であるが、これは所在、生死不明だといふのである。『聞くところによれば、ニューヘブリヂス島に男女各一名、フィジー島にも数名渡航し居り、その他移民監督及び当総領事館（シドニー総領事館）の関知するところなくして、自由に帰国又は他に転航せしものある趣なり』（同上）。最も多数を占むるニッケル鉱山労働者の生活は、実に索莫たるものであつた。前記三穂五郎の記するところに／小官の現に視察する所に依るも、移民は大抵二十歳以上四十歳以下にして、殊に二十四五歳の壮丁最も多数を占め、概して体軀強健、元氣旺盛にして能く労働せり。唯チオウの村落に居る移民の外は、多く人家なき山嶺若くは溪谷の間に多数同棲し、休日又は雨天休業の日及び夜間は何等耳目を喜ばしむるの事物なきを以て、勢ひ賭博に耽けるの弊害あり、賭博は仏国法に於ても禁遏する所なるも、移民間の賭博は官憲に於てこれを観過し居れり。又ニュー・カレドニアに於ては、日本醜業婦絶無なるを以て、土人若くは白人の売春婦に赴くを常とせり。然れどもヌメヤに於ける一名の移民を除く外、土人の婦女を内妻となし居れるものあるを聞かず⁽³⁾。』

ふのは、そのことに關する限り忍び得ぬ訳ではなかつたのだ。しかし我が外務省では、この最初の移民送出後、続いて同地に移民を送ることはならぬとした。それは移民到着後の騒ぎにも依るだらうが、一つは前記の差別法の存在するのが氣に食はなかつたからだ。三十三年から再び移民の送出を見るに至つたのは、東洋移民会社が前記の移住規則に亜細亜人とあるのは、専ら印度、支那の労働者を指すものであつて、日本人はこの中に含まぬとの理由により、その移民送出の許可を願出で、調査の結果その通りであるといふので、これが容れられたのである。調査といつても、外務大臣から駐日仏國大使に向つて、その真否を問合せた丈けのことだ。大使曰く『いかにもその通りであつて、日本人は欧州労働者と同一に待遇することに間違ひはない。』これは三十三年一月のことだ。けれども実はこの大使の言ふ通りではなかつたらしい。賃銀が前より少くなつたといふのが先づおかしいし、移民輸送後、雇主の虐待を訴へ出るものが絶へなかつたのである。それで政府は三十四年前再び同地行移民を禁止し、三十八年に至つてまたこれを許した（通商局『移民取扱人に依る移民の沿革』。／さて移民六百名は、不満を忍んで働いてゐる中、漸次氣持も平靜になり、二十六年二月五十七名、同八月七十六名、二十七年六月三十六名の帰朝を見た外は、依然同地に止つて労働に従事し、三十年二月年期滿了を待つて引上げたと伝へられる（『佐久間貞一小伝』）。』

3 ニューカレドニア移民の変遷

ニューカレドニアに「本邦移民の輸送が開始されたのは、明治二十五年である。」「爾後八年間、移民の輸送は絶へてゐたが、三十三年に至つてまたこれが始まり、引続き旺盛に輸送された。雇主はみなニツケル会社である。二十五年六百人の移民輸送以来四十四年五月迄、こゝに輸送された契約移民は、三千六百六十三人に達した。即

ちその雇主取扱移民会社、移民内訳は左の通りだ。

雇主		取扱移民会社	移民出発年月	移民数
巴里ニツケル会社		吉佐移民会社	二十五年一月	六〇〇人
倫敦ニツケル会社		東洋移民会社	三十四年一月	一九八人
巴里ニツケル会社		同	(三十四年十二月ヨリ 三十四年六月迄)	一、〇〇〇人
同		同	三十八年十二月	五一〇人
同		同	四十四年一月	一、〇一五人
バランド・ニツケル会社		日本殖民会社	同年五月	三四〇人
合 計				三、六六三人

これらの移民は、みな原則として五ヶ年契約であつた。ニツケル鉱山の労働に従事したこと勿論である。賃銀は第一回の六百人が月額四十法であつたのを除いては、大抵三十二法乃至三十八法程であつた。往復の船賃、衣食住、医薬などみな雇主負担であり、契約満了者に対しては、帰国費も雇主に於て負担するといふのが多かつた。／＼四十四年六月、右移民状況調査のため、同島に出張したシドニー在勤領事官楠三穂五郎は本省宛報告の中に、同胞移民の異動につき、左の数字を記入してゐる。

送還若くは 任意帰国者	逃亡者数	死亡数	残留数	計
一、五九八	六四三	一三一	一、二九一	三、六六三

参（原文のまゝ）増給の事／一、給料は一ヶ月四十フラン（我が十円に相当の事）／一、休業は日曜日の外、一月一日二日、帝国天長節、仏国大祭日等一ヶ年合せて六日の事／一、疾病は会社服役に由発したる時は、治療中給料を減せず、自然によるものには、十日以内は給料三分の一、十日以後は四分の一を与ふる事、然れども過飲不品行の結果に出る者には支給せざるべし。／一、正当なる理由なくして業務を怠る時は、減給の処分を行ふ事、但し減給は如何なる場合に於ても日本総監督の承諾を要する事／一、労働者出発前一ヶ月の給料四十フランを前借せしめ、右を就役後四フラン宛毎月給料より差引く事／一、労働者取締のために総監督、副監督、医師、通弁（孰れも日本人）を雇入るべき事、但し監督、通弁等の給料を合して一ヶ月二千フラン（五百円）、其他医師の給料は未定／一、労働者中より小頭十二人を選び、之に定給の外毎月若干の手当を与ふる事、但し右給額は総監督の見込に任ず。／一、労働者には給料の外、会社より無代にて衣食住を与ふる事（明治二十四年十二月十六日時事新報）。／当時このニュー・カレドニヤは、仏国の囚人輸送地の一つで、労働者の大部分はこの囚人であつた。前記ニツケル会社の鉱山にも一千二百人からの囚人が居り、二百人の監視人がこれを監視し乍ら、矢張り労働に服してゐた。而してこの囚人と看守人が、同鉱山に於ける労働者の大部分で、この外には若干の土人（カナカ人）が使役されてゐたに過ぎない。囚人の給料は成績の如何によつて一定せず、標準を求めることは出来なかつたが、労働時間は八時間であつた。監視人は九時間で、一日五フラン、カナカ人も同じく九時間で、一日二フラン半乃至三フランを貰つてゐた。これはいづれも食糧付だ（富山駒吉『航南日誌』）。

2 日本人労働移民の待遇と暴動

「日本人は一ヶ月二十六日働いて、四十フランしか貰はないのだから、一番割が悪い訳だ。而も労働時間は十時

間だ。労働時間に於ては囚人より重く、賃銀に於ては土人よりも少ないこれで問題の起らぬ筈もなからう。雇主にしたら往復の旅費を負担しなければならぬといふこともあらう。しかも労働者の計算の基礎は自己の収入だ。日本帝国の臣民だといふ誇りを懐くものが、千里の波を蹴つて行つて、土人以下に待遇されたのでは、腹の虫が収まるまい。尤も労働の場所は、囚人、土人のそれとは少し離れてゐたやうである。しかし労働の種類は全く同じだ。／日本人は就働後、一週間から騒ぎ出した。待遇が劣等であること、取扱が苛酷であることを鳴して会社側に迫つた。運動は漸次激化して、隊を組んで事務所に迫るといふ騒ぎ、事務所の方では憲兵隊の出動を要求して、これを鎮圧した。これが日本に伝はり議會でも問題になる。吉佐移民会社も狼狽して善後処置に腐心する。だが移民は収まらず、氣候の悪いこと、数年前百五十人の支那人が来たが、氣候の変化のためその半数は斃れ、残る半数は勿々としてこゝを引上げてしまつたといふことが、会社攻撃の新しい理由となり、移民自身また不安に驅られた。／しかし会社側としても、その移民の不滿故に、すぐに帰国させる訳には行かない。これを誘致するには相当の経費も投じ、別に移民の待遇に就いて違約したのではないのだ。移民にはこれを監督すべき役員が日本から従いて來てゐるのだし、氣候の不安といふ点でも医者も居ることだとあつて、日本側の役員と共に極力これを慰撫して使役した。けれども待遇が改善されたのではない。こゝには一八七四年三月公布の『亜細亞、亞弗利加、阿西亞尼州労働移住規則』なるものがあつて、移民の待遇は人種の如何によつたのである。だからその取扱の上に幾分の手心は加へられたかも知れぬが、契約の条件を改める如きは殆んど望まれぬことであつた。／移民は不滿を称へ乍らも、労役に服した。労銀一ヶ月四十フラン（日本金十円）といふのは同地に於てこそ最劣等であるが、同じ年に豪州に行つた移民も最初は十円であつたし、フィジー島移民も十円、ガード・ルツプ島移民に至つては更に少なく、一ヶ月三十五フランであつた。吉佐移民会社は三十年東洋移民会社と改称し、三十三年五月から三十八年十二月まで八回に亘り一千七百五十九名の移民を、このニュー・カレドニアに送つてゐるのだが、このときは一ヶ月三十二フラン乃至三十八フランに低下されてゐる。だから最初の移民の四十フランとい

VIII ニューカレドニア、フィジー島、ガードルupp島の移民、その他

1 ニューカレドニア労働移民の労働条件

南西太平洋に位置するニューカレドニアは、各種の鉱物資源に恵まれ、とくにニッケルおよびクロムの世界的産地として名高く、このほか鉄・マンガン・コバルト・セッコウ・銅・アンチモン・水銀・金・銀・鉛等の鉱石の産出も多い。

「ニュー・カレドニア移民の送出されたのは、（明治…引用者補記。以下、元号のないものの年代は明治）二十五年一月である。人員六百名、豪州移民は同年十一月、人員五十名、フィジー島は二十七年四月、三百五名、ガード・ルupp同年十月四百九十名である。」「ニュー・カレドニア移民六百名は、巴里のニッケル会社（ラ・ソシエテ・ル・ニッケル）に雇はれ、同社経営の鉱山に於て、採鉱及び製鉱労働に従事した。年期五年、その条件は左の如くであつた。／一、ニュー・カレドニア島への渡航は、日本郵船会社汽船を用ゆる事／一、往復共渡航は無賃の事／一、雇期間は五ヶ年の事、但し月数は六十ヶ月にして、一ヶ月の労働日数は二十六日、又一日は十時間とす／一、労働はニッケル鉱採掘及其他会社常務の事、但し採掘は地面上とす／一、定時外の労働は一時間毎に三十

とである。⁽⁵⁾」

6 移民団の悲劇

「広島移民会社は、滔天の提議に基き重役会議を開いてこれを謀つたけれども、時期尚早といふことで断念した。滔天は移民会社遂に為すなきを察して強ひず、滞在三ヶ月にして同志四人と共にまたシヤムに渡つた。四人の同志といふのは、平山周、末永節、前田九二四郎、八戸某であるが、いづれも氣骨稜々たる人物であつた。一同は航に就くに際し、各々南字を付して別号を作る。南万里（平山）、南斗星（末永）、南天子（前田）、南桜生（八戸）、南蛮鉄（宮崎）がこれである。／＼これより先き、滔天がシヤムを発して帰国の途に就く頃、造船会社に雇役されてゐた移民達は、タルラック鉄道工事に雇はれたいといひ出した。また三谷の誘惑である。三谷は前にも記した如く、磐谷で医院を開いてゐたのであるが、なかなか食へない男であつた。青森県の出身で、上海から香港、新嘉坡を経て、磐谷に流れ込んだものである。彼れの女房はもと醜業婦。タルラック鉄道工事請負人スミソンの女房も日本人で、同じく醜業婦上りであつた。しかもこの女房同志と一緒に働いてゐたことがあり、その関係で三谷、スミソンは懇意の間柄であつたのである。彼れは無論移民の周旋料をスミソンから取つたのだが、その上また移民の日給の半額を取つた。即ち移民は一ヶ月三十円で雇はれるのだが、これは一旦三谷の懐に入り、三谷からは十五円しか与へられなかつたのである。これは前に誘惑された移民によつて明らかにされた。／＼だから、今度誘惑されやうとする移民も、そのことは勿論承知なのであるが、十五円にしても、船渠会社よりは尚三円余計だといふのが移民の目のつけどころだ。そこで滔天は給料が高いのは、瘴烟毒霧の身に適せざるものあり、土人と雖も避けてこれに至らざる所以を説いて聞かせた。大部分のものは思ひ止つたが、尚ほ八名のものは行くと

いふ。行くなら行け、その代り病氣になつても決して迷惑をかけないといふ証文を置いて行け。八名はその証文を書いて行つてしまつたのである。／＼然るに、いま滔天等の一行が磐谷に着いて見ると、移民二十名の中、十七人までが滔天の事務所病んでゐる。滔天が驚いたのは無論である。即ち滔天が磐谷を發つてから、一時思ひ止つた移民が全部三谷の誘惑に乗つてタルラツクに行き、日本商店に雇はれたもの二名がまたこれに加はり、遂にこの結果に陥つてしまふたのである。滔天は今更ら自分の意に従はなかつたといつて、放つて置く訳にも行かないから、手を尽してこれが善後処置に行つた。『手蔓を求めて重病者を慈恵病院に入れ、輕き者は事務所に於て医薬を服せしむ。又虎列刺病を併發するものあり。之を病院に運び、余自ら通弁役を勤め、看護の勞を採る。一身殆ど煩と苦とに堪へざらんとす。況や懷囊甚だ輕きをや。』滔天も眞に泣きたくなる思ひであつたらう。／＼しかも、三日目には同航の南桜生死亡し、これと前後して六人の移民が死亡し、南斗星も南万里も下痢を始め、滔天もまた猛烈なる虎列刺に襲はれるといふ風で、慘状目も当てられず、まことに悲惨なことになつてしまつた。しかし幸に南桜生一人を失つた外、同志はみな回復した。この上は移民など相手にせず、一つ我々だけで耕作に従事し、一收穫期の試作をやつて植民の道を開き、理想郷の基礎を作らうといふことになり、スリサツク侯より一家屋を借り受けて耕作を開始した。これを帝力庵といつたのであるが、無論こゝには回復した移民達も集つて来た。しかしこの仕事はすぐ駄目になつてしまつた。滔天先づ朱檀売込みのために帰国し、次で南天子、南万里も帰り、自然帝力庵は沈滅の境遇となり、滔天等これが維持のため、東京に於て奔走するところがあつたのだが、遂に如何ともすることが出来なかつた。移民は思ひ思ひに散つて了つた。⁽⁶⁾」

／この事情につき、宮崎はその著『三十三年之夢』の中で、左のように書いてゐる。／余は先発して单身暹羅に入るの決心を採り、別を告げんが為めに岩本君を其病尊に訪へり。曾て鉄の如くなりし岩本君は、今や糸の如く瘦せ細りて病尊に横れり。余を見て目礼を施し、手真似して看護婦に下知して、差出す冷水に其口を湿ほしつゝ、微声を絞りて余に謂ひて曰く、僕の身今此の如し。生死未だ知るべからざるものあり。恨むらくは暹羅農商務大臣の重託に辜負することを——語絶へて言ふ能わず、復た水を飲みて漸く口を動かして曰く、聞く移民の大半既に布哇行に変更して、残余二十人のみ頑として暹羅行を主張して止まずと。想ふに是天未だ吾志を棄ざるなり。君願くは僕に代り、彼等を引率して暹羅に航し、彼国農商務大臣スリサツク侯、及び我が殖民会社同人と謀りて殖民の基を定めよ、若し此の如くなるを得ば、豈啻に僕のみならず、亦実に日暹将来の幸福なりと。余は此の一言によりて動かされたり。従来彼の言説所作に多少の疑惑を懐きたる余は、其是非を問ふの違なくして彼の意に従へり、人を動かす豈弁説にあらんや。／滔天の熱血の志士たる所以が偲ばれて愉快である。滔天は同時に、広島移民会社の代理人たることを承諾した。仮令二十人でも、会社取扱移民を送る以上、法規に従つてその地に代理人を置かなければならないからである。月給四十円、外に旅費百円の約を以て之を諾すとある。」

5 滔天の移民団

「かくて滔天は移民引率を引受けたが、自分が連れて行くからには、もう一度移民一同の決心を確めて見る必要を感じた。／余は発航の前夜を以て移民の寄宿舎に至り、二十人の渡航者を一室に集めてその決心を確めたり。謂て曰く、暹羅の地は余未だ曾て足を容れざる処、万端の事一も之を詳にするものなし。而して世人の喋々する所も亦信拠するに足らず。成敗の果、往て而して後に之を徴すべきのみ。然れども諸子の此行を企つるや、皆利

益を以て主眼とす。即一日も早く財貨を貯へ得て、一日も早く故国に帰り、而して父母妻子と残生の安樂を計るは其本願にあらずや。されば危きを踏んで成敗を畜地に賭せんより、寧ろ事情既に明にして危険の虞なき処に到るに如かんや。余が暹羅に行くは諸子と其本願を異にす。余は諸子の悔を貽さざらんが爲めに、茲に改めて熟考を促す。若し心を翻して布哇行に変更せんと欲せば、余自ら諸子と会社の間に立ちて其便を計らん。乞ふ今夕中に之を決せよと。衆皆曰く、折角の思立で御座り升からは是非お伴を願ひ升。金が儲からぬ時には参宮したと諦め升。如何なる苦勞に逢ふとも決して恨みは致しませぬと。余は猶問を發せり。曰く金儲の出来ざるは参宮したと諦むるを得ん。然れども生命を失ふの虞あり之を如何と。答へて曰く、関ひませぬ関ひませぬ。唯此爲めに会社とも喧嘩をしたので御座り升。死ぬも生きるも皆旦那様の御命令通りに致し升と。／滔天の一行は十月二日（二十八年）、英船チャイヤ号で出發した。航行十七日を費して磐谷に着き、すぐに石橋を訪問した。石橋は殖民会社を解散して間もない頃であつたから、いきなり岩本の無責任を攻め、岩本の同志として、また旧殖民会社員として、今度の移民に関係することは出来ぬとあつた。石橋にして見れば、これは尤もなことである。滔天は殖民会社解散してしまつたことを、こゝで初めて知つたのである。病床の岩本は無論知る筈がなかつた。石橋は平戸の人で、相当の人物であつたらしく、滔天も『言語活発、宛然古壯士を見るの感あり』と評してゐる。／結局、石橋個人としての斡旋で、船渠会社に十五人、残り五人は日本人商店に雇はれて、一時落付くことにした。滔天は船渠会社移民の監督通弁といふことであつた。滔天は傍ら植民事業の調査に従事し、略ぼその事情を詳にするに及んで、その事業の必要にして有望なることを痛感した。而して一日スリサツク侯をサラデンの邸に訪ふと、侯も亦熱心であつた。侯は千綱等の失敗に失望せず却て経験の資であるとして、『若し貴国人にして資を投じて植民事業を起すものあらんか、吾は全幅の同情を以て之を迎ふべし。吾れ貧なりと雖も猶此邸宅を有す。之を売却あれば十数万金を得るに難からず、合せて以て植民の用となすに吝ならざるなり』といふのである。そこで滔天意大いに動き、広島移民会社を説いてシャム殖民会社を再興すべく、急拠帰国の途に就いた。十二月のこ

た。一行は往復六日を費してワンパテツトまで戻つて来たが、一緒につれて来たのは、一人の婦女と乳呑児だけであつた。他は悉く死んでしまつたといふ。(一人の婦女といふのは、移民が日本から伴れて行つたものかどうか判然しないが、乳呑児があつたとすれば、さうだとせざるを得ない。一月に来て九月のことでは、シヤム到着後得た女に、子が生まれる訳はないからである。しかし三十二人の移民が日本出発の時の記録には、妻帯者ありとの記入がない。)／磐谷の病院に入れた四名が回復後、石橋等はこの四名を伴つて、ブカノン鉱山に行き、エリドベスに対して、どうしてこのやうな結果に陥つたかを糺した。エリドベスに都合のいふことを言わせぬやうに、わざと四名を連れて行つたのである。けれども詳細調べた結果は、決して鉱山側が不都合な取扱ひをしたのではないことが判つた。移民達は金ばかり蓄へる氣になつて、ひどいものばかり食べてゐた。さういふものを食べてゐると、体が悪くなるからといつて、エリドベスが肉類などを与へると、大事にそれをしまつて置いて、腐りかけてからやつと引出して食ふといふ始末だつたといふ。四名のものもその通りだと認めた。実に氣の毒な連中であつたといふより外に、申し様もないのである。／ブカノン行十五名、タルラツク行数名を除いた他のものは、みな前記移民と相前後して、会社から離れ、人夫、家庭労働などに雇れて、思ひ思ひに散つてしまつた。即ち会社には一人の移民も残らなかつた。これでは会社を存続する理もない。資金もなくなつた。岩本からはまだ何の通知もない。一同は協議の上、これを解散することに決した。ブカノン移民の結末をつけた直後(十月)のことである」。

4 岩本千綱の苦痛と宮崎滔天の登場

「二十八年三月帰朝した岩本千綱は、移民の惨状も、殖民会社の解散も知らず、一体何をしてゐたのであるか。

在シヤム同志の岩本に対する憤慨は絶頂に達した。／岩本は帰朝後、気焰頗る揚り、世間の注意を引いたのであるが、移民百名の募集は意の如く運ばなかつた。当時当局は移民保護法を勵行し、岩本がどういふ人物であるにせよ、移民取扱人にあらざるものが、濫りに移民を募集し、これを外国に誘致することは許さなかつた。岩本は然らば移民会社を設立して、適法に移民を募集しやうとあつて、神戸の商人久須里某檜前某、外一名に謀つて、先づ移民会社設立に努めた。けれども当局の認可が出ない。いくら運動しても当局はその会社を移民取扱人として認可しない。恐らく内容が貧弱で永續性を信じられなかつたのであらう。／岩本は大いに弱つた。そこで仕方なく広島移民会社をして、移民を募集させることにし、やつと百名に近い移民を得たのであるが、しかしこんどは自身、病氣にかかつて死ぬか生きるかといふ騒ぎだ。岩本は決して悪い人物ではないのであつて、時に世間の指弾を受けるやうな行爲もあつたらしいが、志は却々大きく、一種の志士の人物であつた。土佐の人。遠くシヤムに残した同志に対して何の通知もしなかつたといふのも、何とかやつてゐて呉れるだらうと信じたからであらう。それがどうなつても構はなければ、移民を得るためにいろいろと苦心はしない筈だ。さういふ男でなかつたことは、後にシヤム、安南、印度方面に活躍し特に日暹貿易のために尽すところが多かつたに見ても判ると思ふ。しかし岩本が病床につくとまもなく、ブカノン移民の惨事が伝へられ、世間は岩本の無責任を攻め初めた。シヤム船渠会社の手付金のこと、スリサツク侯の刀劍のこと、みな攻め道具に使はれた。これらは何といつても岩本の弱点ではあつた。／さて広島移民会社に依つて集められた、百名に近い移民はどうなるのか、岩本重態で困つたのは、無論移民と移民会社だ。移民と移民会社は、互に反目して揉みに揉んだ。結局移民の大部分は同じ移民会社によつて布哇行に変更した。しかしその中二十名は頑としてシヤム行を主張した。／これより先き、岩本と一緒にシヤムに行く約束をしていたものに宮崎寅藏があつた。宮崎は後に孫文を助けて支那革命に尽した滔天だ。彼れは岩本と同行の予定であつたが、岩本が病氣だとあれば仕方がない。一足先きに出発しやうとして、岩本を病床に見舞つた。ところが、宮崎はここで前記二十名の移民を連れて行かなければならぬ運命を荷つてしまつた。

賦返却の事、但無利息／第五条 農業に従事する必要器具並に家屋は一時貸与可致事／第六条 農業に従事し、一ヶ年十ライを耕し米穀二百六十円、副産物九十円見積収入金ある事、但生活は自弁の事／第七条 渡邉後農業に従事し、一ヶ月間の生活は日遑協会（シヤム殖民協会のこと）に於て担当の事／右七ヶ条相違無之万一一項なりとも相違候は、往復旅費支弁は負ふと雖も本人の故意により相違する時は総て責任を有せず／此契約は渡航後二ヶ年の期限となし、更に協議の上継続することあるべし。／明治二十七年十一月二十一日／岩本 千綱／移民一同／この契約は岩本の独断によるもので、同志の与り知らぬところであつた。岩本は移民募集の方便として、かういふ契約をしたのであるが、実は彼れ自身、一人前五十円の前貸といふやうなことが出来るものでないことは百も承知だ。そんな金はない。／会社の連中は待つて呉れといった。移民は待つてぬといふ。スリサツク候に頼んで見たが、一人五十円といへば三十二人で一千六百円だ。そのやうな出金不可能だと断られた。移民は前借りが出来ぬなら仕事をせぬといふ。これではもう万事休す。岩本は帰朝してから、何の通知もない。スリサツク侯に対しては、何とも申訳のないことだ。岩本が出来もしないことを約束したのは無論悪いが、折角ここまで来て、前借が出来ぬなら仕事をせぬといふのも賞めた話ではない。⁽²⁾」

3 移民への誘惑とブカノン鉱山労働者への転身

「折も折、この移民を誘惑するものがある。在留医三谷足平がそれで、彼らはこの移民をタルラツク鉄道工事に周旋して、鉄道側から周旋料を得やうといふのである。数名の移民は誘惑に乗つて移住地を出た。／間もなく（五月下旬）、ブカノン鉱山監督仏人エリドベスなるものが、我が殖民会社に現はれ、日本人百名程誘致出来まいかといふ相談だ。百名といふのは出来さうもないが、差当り二十名位ならば何とかなると答へた。会社の連中

は、仕事をせぬものを止めて置いても仕方がないから、これを仕向けやうとしたのである。移民に謀つて見ると十五名の志望があつた。松野と荒川がこの監督として行つて行くことになつた。／ブカノン鉱山といふのは、磐谷より水路二昼夜、陸行更に四日、コラットの西北方凡そ八十哩といふから、相当に遠方だ。エリドベスとの契約は、石橋が代表して取り結んだ。／第一 日本人労働者はブカノン鉱山会社に労役中は、仏国人民と同じく仏国領事保護の下に立つこと／第二 鉱山監督者は日本労働者に対して、腕力を以て命令を強行するを得ざること、但し不都合の場合ある時は、一応暹羅殖民会社理事石橋禹三郎に通知をなし、同人に於て適當の処置をなすこと／第三 日本労働者若し疾病に罹りたる時は鉱山監督は之に向つて相當の手当を為すべし／第四 労働者の種類に依り給金を左の通り定むるものとす／大工三十五円 鍛冶四十円 普通労働者三十円／ここで鉱山監督といふのは、無論エリドベスのことである。荒川、松野はたゞ同行の十五名の日本人を監督するだけである。名は監督だが、実は世話役だ。この二人の監督の給料は鉱山側から出るのではなく、移民十五名の負担である。ところが移民達は、三十円以上の収入があり、自己の生活が安定して来ると、二人のために支出する費用が惜しくなつた。監督だの、世話役だの、そんなものは不必要だといふ。荒川、松野の兩人は怒つて引揚げてしまつた。石橋また大いに怒り、そんなことなら、エリドベスとの契約は取消だ。移民は勝手に契約するがよい。爾後責任は持たぬとあつて、その旨エリドベスに通告した。エリドベスは新たに移民各自と契約した。／ところが九月上旬になると、四人の移民が死人のように瘦せ衰へて、磐谷へ戻つて来た。どうか助けて呉れといふ。もう全く動けないといふ弱り方だ。他のものはどうしたと聞くに既に死んだものもあり、病床に呻吟してゐるものもあり、達者なものは一人もゐないといふ。欲をかいて会社と手を分つた連中だが、こうなつては見てもゐられぬので、一同協議の上、先づ四人を病院に入れ、石橋、荒川、松野の三名はすぐに準備を整へてブカノン鉱山に向つた。途中ワンピースといふ所まで行くと、石橋はリユーマチス、松野は熱病で動けなくなつてしまつた。荒川はこれを見護しなければならぬ。／仕方なく付近の土人酋長に十六人の人夫をつけ、籠、薬品などを携へて現場に急行させ

頗る投合した。即ち相携へて磐谷に至り、シヤム貴頭の間を奔走した。曰く、シヤム王国は紅毛人によつて侵蝕さるべきでない。シヤムは自ら一個の強国でなければならぬ。我々は多数日本人をこゝに入れて、その強国建設に尽したい。先づ日本人を誘致すべき移住地を作りたい。願くば助力を吝む勿れと。／これがシヤム貴頭の間、好感をもつて迎へられたことはいふ迄もない。特に農商務大臣スリサツク侯の如きは、共鳴措く能はず、自ら出馬して候補地の選定を斡旋した。結局スリサツク侯の斡旋で、磐谷付近サツパトムの皇太子チャウーア親王の御料地二百五十余町歩を借区した。兩人はすぐにシヤム殖民協会なるものを作り、この名を以て移民誘致のことを初めやうとした。同年十二月石橋は移民募集のために帰朝し、熊本で津田静一、大阪で大三輪長兵衛に謀つた。津田は明年（即ち二十六年）六月を期して、三十人の移民を連れてゆくことを承諾した。／岩本は石橋の吉報を齎らすであらうことを信じて、シヤム建築会社員佐々木寿太郎、シヤム語学生山本安太郎等を同志として誘ひ込み、銳意準備に努力した。そこへ石橋が歸つて来て右の報告である。來年六月では遅れ過ぎる、が仕方がない。待たうとなつた。やがて津田からは、更に七八ヶ月遅れるといふ通知だ。六月から七八ヶ月といへば、二十七年三四月頃になる。これでは仕方がない。行つて津田を助け、ことを捗るやう戒めなければならぬといふので、岩本が磐谷を發つた。津田は右の通知を出して間もなく、自ら新嘉坡に渡つた。」「津田は二十七年一月帰国し、愈々シヤム行を決心し、四月移民引率の準備全く成るといふ通知を出した。しかし間もなく日清戦争は勃発し、津田は郷里の義勇団々長に推されてしまつたのでとても移民どころの話でない。自然これは立ち消えになつてしまつた。／岩本は帰朝しても津田と会はず、独力移民の募集に努め、漸く三十二名を得た。二十八年一月これを率ゐて渡暹、これで一先づ事業に着手することが出来るとあつて、協会を会社にし、シヤム殖民会社とした。社長を置かず、副社長に岩本、理事に石橋、佐々木、山本、顧問に大谷、津田直亮（熊谷直亮のこと）を挙げた。熊谷は、「独力で、移住地経営を計画しつゝあつたのであるが、うまく運ばず、岩本と握手して、この顧問に推されたのである。会社書記には荒川雅五郎、移民監督には松野泰二郎、いづれも当時シヤムに在留した血氣の青

年であつた。⁽¹⁾

2 岩本千綱作成の「契約書」の悲劇

「岩本は三月また帰朝した。更に第二回の移民を募集のためである。今度は百人連れてゆくのだといふ。シャム船渠会社からも数名の職工誘致の依頼を受けた。それも連れて行かなければならぬ。当時の岩本の鼻息たるや、実に凄いのがあつたさうだ。岩本は磐谷を發つとき、右の船渠会社から数百円の手付金を取つてゐる。スリサツク侯も、家宝ともいふべき金装の刀剣を依頼した。日本で磨いて来て呉れといふのだ。そんな刀を振り廻している岩本はさぞ得意であつたらう。／＼ところが、その岩本は四月になり、五月になつても磐谷に帰らない。もう播種期だ。農作物の種を蒔かなければならぬ。日本人は優秀な農業国民であるが、シャムの農耕は自ら異なる。若し初めから失敗でもすると、移民一同の士氣に影響する。スリサツク侯はさういふ風に考へて、この播種期を指導する二人の土民を貸して呉れた。スリサツク侯のこの事業に対する援助は、一通りでなかつた。岩本、石橋等の旅費、移民の船賃、移住地開設の所要資金など大部分このスリサツク侯が出して呉れたのである。夢々この恩人の好意に背く勿れ。／＼スリサツク侯が貸して呉れた二人の土民の指導によつて、愈々これから種を蒔かうとするとき、移民一同は各々契約に基づき五十円宛前借りしたいと申し出た。会社の連中は驚いた。そんな契約があつたのかといふ次第だ。この契約は岩本がその募集の際に、各移民との間に結んだものだ。／＼契約書／今般暹羅國へ農業の爲め渡航するに付き、左の条件を契約す。／第一条 田畑一人に付十ライ（一ライは我四百九十一坪余）を貸与可致事／第二条 米穀一ヶ年二度收穫ある事／第三条 貸与せし地租一ライに付凡二十錢にして自弁の事／第四条 着暹後事務に従事するものは、本人の志願により一人五十円宛貸与し、米穀收穫後より十二月間に月

Ⅶ タイ移民

1 「シャム殖民会社」の設立

タイ王国 (Prathet Thai) の最初の王朝は一三世紀初めのスコタイ朝で、その後一四世紀中葉に成立したアユタヤ朝時代には山田長政ら日本人も進出した。国名は、一九三九 (昭和一四) 年まで「Siam＝シャム＝暹羅」、同年タイに改められ、一九四四年シャムとしたが、一九四五年ふたたびタイとした。

タイは、一六世紀にポルトガル・スペイン・オランダ・フランス・イギリスなどの侵入により、その経済を支配された。また一九世紀には、イギリスとフランスの両勢力の緩衝地帯となっていた。いずれにせよ、西欧諸国の支配下で、長い歴史を歩みつづけていたのである。

シャムへの日本の侵入も、こうした歴史の延長線に出現することになる。まず、文献をみてみよう。

「岩本千綱は、(明治…引用者補記。以下文中元号のないものは明治) 二十五年七月をもつてシャムに渡った。フランスのシャム進攻に刺激されてのことである。仏船オクサ号によつて、まづ上海に寄港した。同じ頃、同じ動機で長崎を発したものである。石橋禹三郎だ。彼れも薩摩丸をもつて上海に寄港した。両者はこゝに相会して、意気

働く白人が、みな日本ムスメを好愛した。彼れは休暇を利用しては新嘉坡に出かけて来て、日本ムスメを連れて行つた。洋妾である。在留邦商は、彼女らのお里であり、彼女らのお里帰りには、男妾の市が立つといはれた程だ。瓜哇のバタビヤの日本ムスメは、毎日夕方になると、二頭仕立の馬車に乗つて、欧州人街に出かけたものだ。示威運動である。赤い着物をヒラヒラさせて、白人の心を紊して歩いた。だが今はそれも夢である。／彼女らは、苟しくも官憲がその存在を許し、活動の余地あるところなら、どんな辺陬の地でも伸びて行つた。何物も恐れないう。何物もこれを征服する勇氣と、訓練とを持つてゐた。『私サンダカン（ボルネオ）で、日本人の共同墓地へ行つて見ると、北邱山頭一片の煙、実に唯一の土饅頭を残して、墓標等が倒れ、日本人の墓が百余りもあつた。名前を見ると多くは女で、余程前から死んで行つたものと見える。死んだものが百ばかりあるとすると、此処へ立寄つた人はどの位あるか知れない』——これは坪谷善四郎の大正五年の南洋視察談の一節である（日本移民協會『最近移植民研究』）。しかし乍ら、豈夫れ独りサンダカンのみならんやだ。馬來半島、シヤム、仏領印度支那、どこへ行つても、彼等の墓が累々として残つてゐる。長田秋濤の『凶南録』に／肉に荒み、情に疲れたる彼等は、破れたる己が青春の痛みを啣ちつゝ、自ら棄て自ら荒みて世を送る。（中略）かくて十年、色はうつろひ、香は褪せて見る影もなくうらぶるゝ。更に十年、且つ十年、早くも鬢糸に斑々の霜を加へ、昔名残りの富士額に、漣波漸く浮き立てば、こゝに彼等が悲惨なる最後は来る。試みに世界各地に於ける我が邦人の墓地を見舞へ、累々として立てる墓標の主は、十中八九必ず彼等が骨にして、所謂紅怨の亡骸なり。而して憐む可し、榴花一枝、残り骸に額きて、彼等が冥福を祈るの孫兒なく、異境の風露冷やかに骨を弔ふ。かくて歳月は無限に流れ、何時しか無名の墓となりて朽ち果つるなり。かくも悲惨なる運命を担ひつゝ、彼等は笑ひ、彼等は歌ふ。歌ふや痛恨、笑ひや切々赤くして血の如し。／これ実に日本ムスメの生涯である。勿論例外もあつた。富める外人の妾となり、又はその自ら蓄へた金を以て一家を成すものがあつた。後者に属するものが、女郎屋の主婦である。だが蘭領にしても英領にしても所詮我等の日本ムスメ達は追ひ出される運命にあつた。身を挺して新嘉坡を中心とする英領

各地の娘子軍を追ひ出した山崎総領事の決心は、また壮なりとしなければならぬ。たゞ我等は我等の女性同胞が、椰子の葉蔭に繰り広げた長い物語りを嘲笑したり、擯斥したりしてはいけない。彼女らが流した醜名は許すべきでないかも知れぬ。しかし彼女らが日本人の海外発展を通して、母国に捧げたところの功績は、真に偉大なものがあらう。」

極力これを支持し応援した。万難を排しておやり下さいと鞭撻した。けれどもこれと反対の立場にあるものも少くない。大正三年、藤井領事は、新嘉坡政庁の協力を得て、彼女等の喰ひ下つてゐる多数の嬪夫を放逐した。それ以来、嬪夫と名のつくものは、表面影をひそめた訳だが、しかしこれに類するものは絶無ではなかつた。たゞにそれが絶無でなかつたばかりでなく、明治初年以來、娘子軍の培つて来た深い根は、いろいろな方面に密接な關係を持つてゐた。彼女らの存在に、商売の基礎をおく商人もゐた。彼女らから資本を得て、事業を續けてゐるものもゐた。／だから山崎総領事が、これが放逐を執行するためには、余程断乎たる決心を要した。大正九年の天長節の時だつた。奉祝運動会の席上で、山崎をやつつけろといふ暴漢が出た。山崎は『この佳節に際し、一死国に報ゆるを得ば、吾輩の本懐である』といつて、その暴漢をキメつけたさうである。当時新嘉坡総領事館の管下に、どの位の娘子軍がゐたのであらうか。山崎の右の声明の二年前、即ち大正七年の数字によると、芸者、娼妓、酌婦の數一千六百九十三人となつてゐる。芸者は即ち芸者であつて、娘子軍といふのではないであらう。しかしこの数字の大部分がいふところの娘子軍であることは事實である。内、新嘉坡だけに二百八十八人となつてゐるが、無論實數はこの程度ではなかつたらう。五、六百人はゐたやうである。／『粉黛六百、連裳連夜、笑を提して春を翫ぐ。是れ即ち南海の一名物、日本ムスメなり。既にして毎宵彼等が細腰の奮闘によつて獲得せる黄白は、無慮二千金と称せらる』とは、当時長田秋濤の記するところだ(『閩南錄』)。一寸見ても、六百人位はゐたのであらう。／しかし問題はその六百人ではない。これを含めての、総領事館管下一千数百人である。新嘉坡政庁は、前々から何とかしてこれを追出すことに腐心した。我が歴代領事、総領事また極力これが發展の阻止に努めた。『明治二十九年、三十年頃、新嘉坡に留日本人は約千人にして、内九百人は女子、その九割九分は醜業婦なり』——當時駐在藤田領事が、これら醜業婦の日本送還に努力した。——山崎総領事の管下娘子軍追放に関する言明は、無論彼自身の信念に発することであるが、しかし一方政庁の方にも、これに関する画策があつた。政庁も実はもう我慢が出来なくなつたのである。だから山崎が決行せんとするこの挙には、政庁も熱心にこれを応援した。見

方によつては、政庁の行はんとするところに、山崎が協力したともいへるのである。山崎は追放計画の発表だけでなく、断乎これに鉄槌を喰はしてしまつた。彼れの発表通り、九年十月のことである。」⁽⁶⁾

6 からゆきさんの墓が哭く^な

『娘子軍』の陣営は潰滅した。明治初年以來の彼女らの地盤も四分五裂だ。官憲の目を盗んで従前のそれとは異つた形式に於て、これを継続するものも皆無ではなかつたが、多くは日本に帰るとか、又は官憲の手の届かぬ奥地に入るとか、急に夫を持つとかして、とにかく颱風一過の觀を呈した。彼女らが、在留邦人に融通してゐた金も、莫大なものであつた。だから彼女らに引上げられた後の、在留邦人社会には、うそ寒い風が吹いた。／當時蘭領にはもう公然娘子軍と名のつくものは少なくなつた。明治四十二年蘭領總督として、瓜哇に乗込んで來たエデンプルグは、基督教國に公娼を許すは恥ずべきことだとした。無論これを公認する直接法はなかつたけれども、衛生取締規則があつて、隨時娼婦の檢査を実施してゐた。既に檢査のことがある以上、娼婦の存在はこれを認めたとしなければならぬ。よつて總督は、三年の期限を切つて、この期限内に退去すべしと申渡した。我が駐在官憲にもその意味を傳達した。／即ち蘭領の日本ムスメは、明治の末期を期して、身の振り方を蘭領以外に求めた。上手にビヤホールなどをやつて、官憲の眼を逃れてゐるものもあつたが、無論そんなのはごく少ない。たゞ一つの例外があつた。ボルネオの東海岸にバクツクパパンといふところがある。石油工場で持つてゐるところだが、こゝから女を取られたのでは、工場に止まるものがなくなつて終ふといふので、郡長の斡旋でお目こぼしを願つたのである。しかしこれも大正十一年をもつて終りを告げた。

蘭領で、日本ムスメの最も繁昌したのは、スマトラのメダンである。広大な煙草農園がいくつもあつた。こゝに

4 ゴム園の経営法

「ゴム園では大抵苦力を使つた。日本人も全然使はぬではなかつたが、辛棒するものが少なかつた。創業時代のゴム園の作業はなかなか容易でないであつて、日本人の体力はこれを請負つて、山の中から蛮族『サカイ』人を連れて来て、これにその作業をやらせるといふのが多かつた。日本人中、たまたまこれに堪へるものがあつても、深林藪沢に入つてマラリヤにでもやられると、もうこれが続ける元気がない。伐木後の耕地には樹影を止めず、熱帯の太陽が華氏百何十度といふ高熱を投げる。夜はまた野虎が荒れ、寂寞悽慘、生きた感じさへないのである。さういふ中に働いて一体いくら賃銀を得られたのであるか。明治四十四年、新嘉坡領事代理岩谷讓吉の報告の中に、日本人経営ゴム園に於ける日本移民雇傭条件として／一、雇傭期間無し　／一、労働種類　耕地創業一般の就働（伐木、開墾、除草、焼払、整理、値付、手入等）及び切り付け、液汁採取／一、労働賃銀　一日殖民地賃四十仙以上六十仙（我が四十六錢四厘より六十九錢六厘）但し切り付けは受持樹木数の多寡に従ひ、普通一日五十仙に当る／一、宿舎　雇主支給（熱帯的簡易なものなり）／一、食費　自弁／一、薪炭及び水　雇主支給／一、労働時間　一日八時間、但し切り付け就働は朝普通四時間、昼後二時間にして担当樹数及び技術に依つて時間に長短あり／一、医薬　雇主負担のところあり、半持のところあり、事情に依る／一、渡航費　自弁を主とす。但し呼寄に係るものは雇主之を貸付、賃銀より漸次返納せしむる方法を取るものあり／つまり渡航費自分持で、一日五六十錢の賃銀しか得られず、しかもその中からまた食はなければならぬといふ勘定である。かてて加へて作業の困難なる前記の如し、これは日本人には適當な労働ではないであらう。印度人、支那人、馬來人でもなければ勤まらぬ。／明治四十三、四年頃、英人のゴム園で、百人余りの邦人を入れたことがある。しかし

成績がどうも思はしくないので、後に約束が出来てゐた移民を断つて来た。しかしその移民はもう神戸に集つてゐる。それでこの移民取扱会社（東洋移民会社ださうである）が、井上雅二に頼み込んだ。井上は百人ばかりの移民を南亜会社のゴム園に入れて見たが、矢張り辛棒が出来なくて、思ひ思ひに散れてしまつたといふ。九州地方の出身者ばかりだつたさうである。これは寧ろ当然の結果であつたかも知れない。／同じく前記岩谷領事代理の報告中に『日本人労働者は耕地に入り一ヶ月も落着きて就働するもの稀にして、熱帯風土病に犯さるゝもの多数生じ来り、友のこれを病むや早くも都会生活を思ひ、拱手為す無くして数日を空費し、逃亡して都会に出づるも事情に慣れざるをもつて、適當なる職業を得ること能はず、遂に帰國を企つるも旅費なく、空しく旅舎に横臥して宿料を支払ふことは能はず、困厄の結果、募集者の勧めに応じ、旅費を前借して豪州真珠貝労働者となつて他國に業を求むるものあり。或は浮浪の群に入り、娼婦の売買手先に使用せらるゝものあり、若くは困難民として領事館に救助送還を願ひ出づるものあり、其の甚しきに至りては精神病に罹り自殺を企つるものある等、窮乏不安の念は熱帯の極熱に驅られて甚しく没常識となり、自暴自棄の惡風に染むは、屢々新来ゴム園労働者に見受くる所なり』。

5 「娘子軍」の追放

「娘子軍」IIからゆきさんについてはIの4において触れたが、その後、シンガポールにあって追放の憂き目にあう。

「大正九年一月、新嘉坡總領事山崎平吉は、各地日本人会長の集つた席上、本年十月を期して、管下各地の娘子軍を追放する旨を発表した。娘子軍の存在と利害關係のないものは、勿論これに賛成した。賛成どころではない、

明治四十四年八月現在馬來半島邦人ゴム園の主なるもの（一千英町以上）

經營者

所在地

松下総地積

同開墾地積

事業着手

—— ジョホール州 ——

三五公司	ペンゲラン	八・三〇〇	三・〇〇〇	三九 ^年 ・一〇 ^月
松方幸次郎	サンテイ	四・五〇〇	—	四三・七
南亜公司	トロンスガイ	六・〇〇〇	—	四四・八
渡辺知頼	カンボン・ジョホール	一・〇〇〇	—	四四・一
南洋護謨株式会社	スнгаイ・テモン	二・〇〇〇	五〇〇	四三・一二
南洋護謨栽培株式会社	同	一・〇〇〇	五〇〇	同
中野光三	同	—	—	—
山川亀之助	バンチヨール	一・〇〇〇	四〇〇	四三・七
東境せい	同	—	—	—
旭護謨会社	スнгаイ・スルヨ	一・〇〇〇	—	四四・七
茂木朝起	ブラガン	一・〇〇〇	—	四四・一
藤田組	ヨタテンゲ	三・五〇〇	—	四四・八
速水捨三郎	同	一・〇〇〇	三〇〇	同
菅原清	ブラガン	一・〇〇〇	三〇	四四・一
渡辺知頼	カンボン・テンガ	一・〇〇〇	三三〇	四四・二
鈴木審三	スнгаイ・テラム	一・〇〇〇	四〇〇	四三・八
三井同族会	ラヤー	五・〇〇〇	五〇〇	四三・一二

三五公司	バトバハ	二六・〇〇〇	三・〇〇〇	四二・五
遠藤隆夫	バトバハ・ラヤー	一・〇〇〇	—	四三・一一
渡辺国重	バトバハ・バーヤン	一・七〇〇	一・三〇〇	四二・五
加藤季彦	バトバハ・ジョウ	一・〇〇〇	一〇〇	四三・八
大倉信太郎	ニヨール	一・〇〇〇	一〇〇	四三・六
長田秋濤				
——ネグリセンピラン州——				
笠田直吉				
宇佐美巳之助	スレンバン付近	二・〇〇〇	一・〇〇〇	四四・一
立松末松				

(前出・「移民調査報告」第⁽³⁾八)

「真にこれ一大偉観である。ゴムの相場がよかつたのだ。時これ自動車工業の勃興時代、ゴムの需要が激増した。明治三十九年、四十年、四十一年と段々相場がよくなつて、四十二年、四十三年は一層よく、四十三年四月には一封度の最高値段が十二志九片に達した。いふところのゴムの熱狂時代がこれである。邦人ゴム企業の開祖だといはれる笠田直吉、中川菊三が前記スレンバン付近に経営した小さなゴム園(百六十余英町)を、三十万弗で英人ガスリー会社売り飛ばして巨利を博したのもこの頃だ。前表中、同じくスレンバン付近二千英町のゴム園経営者として、笠田等の名が挙げてあるが、これは笠田が巨利を博した後、同志と新しく始めたものである。／＼ゴム園の幹部連中には、豪傑が多かつた。南亜公司は、井上雅二が森村市左衛の出資により、法華津孝治らと共に始めたもの、井上は四十四年、この事業着手のため馬來半島に渡るに際し、壁間一詩を題して／＼志在新建國不求利与名／炎陽夏六月 孤劍又南征」

く終つてしまつた。即ち二十九年十二月、彼等の努力の結晶はモール河の大洪水で悉く押流され、一同屈せず再び奮ひ起つたが翌年二月大洪水はもう一度繰返された。移民達の精神的打撃も去ること乍ら、一同はもう物質力を失つてしまつた。石原はこの窮状を恢復するために帰国して資金調達に奔走した。しかし成功せず、一同を現地に残したまゝ再びこれに赴くことが出来なかつた。／移住地では洪水直後に疫病が見舞つた。数人のものがこれで斃れた。一同は遂にこの地を去り、思ひ思ひに生きる道を考へた。豪州の方へ行つたものもあつたやうである。旅費を苦面して帰国したものも数名あつた。石原が初めこの移民を伴つたときの資金は六千円であつたといふ。親戚早川某の出資だとあるが、早川はその失敗を知つてからは、再びこれに金を出すことはしなかつた。実に不幸な結末であつた。／この移民が初めて移住地に乗込んだ時、同地官民の間に奔走した男がある。大川清といつた。通訳はみなこれがやつた。大川は千葉の人で、明治二十三年頃南洋に渡り、スマトラ、ボルネオ、ジャワ、セレベス等で行商に従事し、日清戦争の勃発で支那人の妨害に遇ひ、万事意の如く行かなくなり、二十九年秋には千葉県萩生の漁夫十名を誘致し、新嘉坡政府の許可を得て漁船二隻を以て近海漁業を開始したのであるが、漁夫の疾病者相次ぎ、中に死亡者もあるといふ風で一同の士氣沮喪し、間もなくこれを廢めて独りバンダ・マハラニーに来て雜貨商を営んでゐたのである。彼れは石原の事業失敗後も依然その地に止つて商売をやつてゐた。」「副島八十六が新嘉坡到着後、馬來半島探検を決行するに當り、通弁として同行したのもこの大川だ。副島は領事藤田敏郎の紹介で、大川を同行し、同人を通弁兼案内人として約三ヶ月に亘り、困難な探検旅行を続けたのである。しかも懷中全く無一物だ。この探検後副島はシャムに行き、再び新嘉坡に歸つて来ると大川が病んでゐるといふ。副島は新嘉坡在留邦人から藥品その他の物を携へてバンダ・マハラニーに駆けつけたが、大川はもう死んでゐた。彼れは土人に末期の水を貰つて死んだといふ。矢張り恵まれざりし先驅者の一人であつた。」

3 ジョホール沿岸のゴム園

「日本人が初めて南洋ゴム栽培事業に手をつけたのは、明治三十五年である。笠田直吉、中川菊三両名共同で、馬來連邦ネグリセンビラン州の首府・スレンバン市付近に土地を選定しゴム栽培を初めたのがそもその嚆矢である。次で三十九年、蔦田顯理が新嘉坡付近のテツコン島にドイツ人経営のゴム園を買収し、阿久沢直哉（三五公司）また同年を以て、ジョホール州ジョホール沿岸のベンゲランに、広大な土地を得てゴム栽培を開始した。爾後、馬來半島に於ける邦人ゴム企業は素晴しい勢ひで伸びて行つた。明治四十四年八月現在、同半島に於ける邦人ゴム園は、その数七十九、その地積八万三千七百八十九英町、内既墾地一万五千八百五十八英町に達した（『移民調査報告』第八）。／右の中、ゴム園三十七、その地積四万五千八百六十英町は、ジョホール州の東部ジョホール沿岸に存在した。同じくジョホール州西海岸バトバ付近に八口三万八百七十英町馬來連邦セラングール州内に十七口一千二百九十二英町、他はネグリセンビラン州セレンバン付近、ペラ州、ゲタ州、新嘉坡方面に散在した。ジョホール河沿岸の日本人ゴム園の盛況は素晴しかつた。河口ベンゲランの三五公司のそれから始つて、河を遡りコタテンゲに至る間、兩岸一帯、約三十哩に亘つて邦人のゴム園が展開した。まるで日本人の植民地だ。その地積四万五千六百六十英町は、馬來半島ゴム園全部の四分五厘に相当した。／明治四十四年八月現在、馬來半島に於ける邦人のゴム園七十九口の中、その地積一千英町以上のものを挙げれば左の通りだ。

住候補地を見つけた。齋藤がジョホール国をもつて、最も適當だとなしたのは／一、君臣上下、挙げて我が日本人の移住を希望してゐること／一、その政府は悦んで我が希望を容れ、何事にしても談判容易なること／一、土地広大にして且つ膏腴なること／一、運輸の便なること、従つて移民は商業を起すの基本たり得ること（外務省通商局『馬來半島南部西海岸諸國巡察記』）／といふにあつた。而してその二つの移民候補地といふのは、一つはモール市街より鐵道線路に沿ひ、行くこと八里、更に轉じて東南に出ること二里半、ブキット・モール山の周圍就中その西面一帯の地。もう一つはパンカーといふところで、モール河口より陸地一直十七里、水路三十余里、同河南岸の一地だとある（同上）。齋藤は前者を以て第一移民地、後者を第二移民地とした。／齋藤のこの報告の概要が、『殖民協會報告』（榎本子の殖民協會機關雜誌）に掲げられると、これを見て起ち上つたものがある。齋藤にこの調査を許可した榎本子は、その年（二十五年）の八月に外相を辞した。名古屋人、石原哲之助なるものが、この榎本子を訪ねて曰く、是非馬來半島に移住したい。馬來半島の一角に、日本人のための模範的移住地を建設して見たい。さうして從來邦人の、同地方發展に貢献したい。就いては齋藤領事の候補地といふのを見て来たいと思ふから、然るべく御尽力を乞ふ――。／榎本子曰く、これは經驗のないものが一人で行つても駄目である。よく現地を調査し、諸般の交渉、準備を整へるためには、經驗者を同行しなければならぬ。その經驗者を御世話しやう。青柳郁太郎といふものがゐる。これに同行して貰ふがいふと。青柳は既にアメリカで活躍し、また邦人の南米移住の道を開かうとして、独力ペルー探検までして来た熱心家だ。然らば頼むといふことで、石原、青柳は勇躍して壮途に就いた。神戸を發つたのが二十八年十一月三日である。⁽¹⁾」

2 マライ半島移民候補地調査・開拓・失敗

「十二月二十二日新嘉坡に着き、斎藤幹の後任領事藤田敏郎の紹介をもつて、ジョホール國首相及び内相に会ひ、更に内相の紹介状を携へてモール地方政庁の所在地バンダ・マハラニー市に向つた。長官ダトー・モハメットは非常な好意と熱心をもつて兩名を迎へた。兩名はこの長官の斡旋で、同月三十一日ブリット・クボンの官有地を視察したのを初めとして、連日各地を実査した。結局バンダ・マハラニー市を遡ること（モール河）六十五里クボン市付近に移住候補地を定め、万端の手続を了して一先づ引返した。／翌二十九年四月二十三日、石原は三十人の同郷者を連れて神戸を發つた。五月八日新嘉坡に着き、十日バンダ・マハラニー市に到着、直ちに政庁に長官ダトー・モハメットを訪問した。長官は非常な喜び方だ。一同はこのバンダ・マハラニー市から、長官モハメット、裁判長、地理課長、會計課長、測量官、技手、郡長、その他十名の役人と共に移住地に着いた。長官以下の役人は移民の行を壮んにするためと、もう一つは移住地到着後の移民一同の世話をしやうといふのであつた。石原の意氣は大いに揚つた。彼れはこの時の抱負を記して左の如く言つてゐる。／『将来馬來半島の諸國中に多数の日本部落を作り、半島の遺利を蒐集して之を利用するの時機に達せしむるの目的を以て、始めに最も便宜多き一部の地に独立植民の模範を形らんことを欲し、郷民を率ゐて再びこの地に来る』（植民協會報告第六十一号）。／モハメット長官以下は、移民のための当面の世話を焼いて、すぐに引返した。しかし長官はその後幾回となくこの移住地を訪ね、至れり尽せりの好意を示した。移住地の中央に馬來人の既墾地があつた。そんなものがあつては都合が悪からうとあつて、長官は政庁の費用で之を買上げ、石原等の使用に委した。その他道路を開き、水牛四頭、栽培物の苗、種などを下付した。／一同は宿舍の設備が了ると、すぐに耕作に取りかゝつた。水田を開き、野菜を作り、珈琲樹も二万本から植付けた。そして将来は果樹、煙草などの栽培もやり、養豚、養鶏は無論のこと、木材移出まで手を伸す計画であつた。さうなれば三十人や五十人ではどうもならぬ。百人でも二百人でも郷民を入れて、強力な移住地にするといふのだ。石原は名古屋付近の村吏であつたといふが、村吏にしては出来過ぎてゐた。／しかし折角こゝまで運んで來たこの計画も、幾何ならずして大きな災害に見舞はれ、雄圖空し

検して僅かに認許せらるゝなり。／更に奇怪なるは、否、耶蘇教国として恕すべからざるは、クインスランド州の法律が、現に木曜島に於て邦人の夫婦同棲を認可せざることはなり。夫婦は一体なりと少くとも耶蘇教の認むる所に非ずや。／然るに左の統計を見よ。／木曜島在留邦人 男六五七 女 三九／ブリスベーン 男一七 女——／北部クインスランド各地 男八五三 女 一七／其他クインスランド各地 男三七〇 女 ——／其の男女数の余りに懸隔の甚しきに一驚せずや。而して一千八百人の男子に対する五十六人の女子は、儘かに禁止法以前の渡航に係るものなり。善良なる在留民が其の妻を在留地に呼びて同棲することの、人間自然の權利を否認するクインスランド州の有色人種に対する規定と同一のものは、果して世界の何処に行はるゝや、吾人は切に之を聞かんことを欲す。／此の不法極まる法律は、一九〇一年制定の『移民制限法』なり。吾人は之を名付けて『有色人種鎖国法』と称すべし。木曜島在留邦人八百余名の過半数は、同法律の下に渡航し来りたる契約移民に過ぎざるが故に、彼等は実に海上にありてのみ労働するを認められて苟くも上陸を許されず、人類の陸上労働を否認する法律は、是れ亦世界に多く類を見ざるの法律にあらずや。⁽¹³⁾」

VI マライ半島移民

1 マライ半島移民候補地

Malay 半島は、英語読みでマレー半島となる。東南アジア、インドシナ半島の先端部をさす半島である。今日では、ビルマ・タイ・マレーシアの領域に分かれている。この地域は、大部分が密林で、古くからゴム園が多く、銑鉞・スズの産も多いことで知られている。

以下の資料において、「新嘉坡」||シンガポール、「馬來半島」||マライ半島のことであることを付記しておく。

「新嘉坡駐在二等領事齊藤幹の馬來半島南部西海岸一帯に亘る大調査は、(明治…引用者補記。以下、元号なしの年代は明治)二十六年十月から初つて、翌年二月に及んだ。而してその調査地域は左の如く広汎なものであつた。／＼ジヨホール国、英領マラツカ、ネグリ・セムピラン国、サンギー・ウジヨン国、ジェレブ国、セラン・ゴール国、ペラー国、英領ペナン、シャム保護ゲター。／＼この調査が、以上の地に邦人の移住候補地を見つけるためのものであつた。」「さてその調査の結果、矢張りジヨホール国が最も適當だといふことになり齋藤は同国内に二つの移

者は此の限りにあらず。／チ、大臣又は本法に依り連邦内又は其の外に於て任命せられたる官吏の署名せる当時効力ある付属的書式の免状証明書を所持する者。／リ、皇帝陛下の陸軍海軍の正員。／ヌ、各国政府官有船舶の船長及乗組員。／ル、其の他船舶の船長又は乗組員にして該船舶連邦内に碇泊中上陸する者但し船長は官吏より請求あるとき及拔錨又は出港を許可せらるゝ前に於て官吏目前に於て該乗組員を召集すべし。／ヲ、帝國政府又は他の政府より連邦政府へ転派せられたる者若くは何國の政府より何等の特命を帯びて派遣せられたる者。／ワ、禁止移住民にあらざる夫に随行する妻禁止移住民にあらざる父又は母に随行する小児にして現に十八未満の者但し本号の除外は布告を以て停止したるときは之に適用せず、右停止は一般に適用せられ又は何等の場合若くは場合の某種に限ることを得。／カ、連邦内若くは州となりたる植民地に於て住居したることを証明して官吏を満足せしむる者。／官吏の面前で、その指定せる欧州語を五十語も書き列ねられる移民はありやしない。かりにこれに合格したところで、契約移民はいけな⁽¹³⁾いとあるのだ。豪州への邦人の渡航はこれで事実上終焉である。しかし豪州政府は自己の利益のために一つの例外を設けた。次に記した通りである。」

9 移民制限法実施後の日系オーストラリア移民

「豪州政府は移住民制限法の実施の結果、木曜島真珠貝業の不振に陥るな^{おそ}きかを惧れた。日本人が行かなければ、白人当業者に日本人雇入れの特許を与へることにした。これで日本人は全く禁止されることなしに、命脈を保つて行けることになった。即ち右の特許ある毎に、帝國領事は我が外務省に対し、雇主の氏名、特許員数を電報で通知し、これによつて各地方庁が、移民の渡航を許すといふのである。／けれどもこれも三十七年十二月に至つて、極めて少数に制限されてしまった。木曜島に於て日本人が解雇された場合に、その代りとして雇はるゝもの

と、もう一つは新に増加した採貝船に雇はるゝもの、この二つの場合の外、新渡航者を禁止するといふことになつた。ことこゝに至れば木曜島渡航の如き、もう問題にならなくなる。移住民制限法実施の三十五年一月から、三十七年十二月に至る間、各移民会社が取扱つた木曜島渡航者数は左の通りだ。／厚生移民会社三十人、東洋移民会社二百十一人、大陸殖民会社四十五人、森島寿雄五十五人、合計三百四十一人。／満三ヶ年に三百四十一人しか行つてゐないのである。しかも前記の如く三十七年十二月よりは、更にこれを極限したのである。豪州はかくの如くして日本人を捨て、亜細亜人を捨てた。／移住民制限法第三条によれば、学生、商人、旅行者も官吏の面前で欧州語の試験を受けなければならぬことになつてゐるが、これは我政府との協定の結果、三十七年十月より移住民法の適用を受けることなく、限時（十二ヶ月）入国を許可されることになつた。／明治四十一年八月、南洋各地の視察旅行に出かけた大庭柯公が、木曜島に寄港し、實際移民官の取扱を受け、且つその在留同胞の事情を見て、白人の暴状を憤り、『木曜島在留邦人の窮境』と題する一文を旅先から外交時報に寄書した。移住民制限法実施後、在留同胞が如何なる境遇に落込んでゐたかを知るためには、捨て難い記述である。／予（大庭柯公…引用者補記）は『白人豪州』の声に今更驚きたるに非るも、而も日本よりする移民の門戸たる木曜島に來りて、所謂『白人豪州』の实情に接して多大の驚きを喫したり。予等の船の埠頭に着するに先ちて、船中の日本人、支那人は水夫と云はず、クツク、ボーイ及び乗客に至る迄、甲板に整列して同島官憲の点呼に應ずるなり。而して抜錨前数分更に同様の点呼を再びして始めて出帆を為し得たり。／日本船舶の出入に際して、斯くも点検の嚴重なる所以のものは、即ち有色人種（特に日本人を主とす）の入国を嚴重に予防せんとするものなり。試みに同島より帰国せんとする日本人に対するクインスランド州官憲の所置の無法なる一例を聞け。爰に日本人の同島を去らんとするものありとせよ。先づ帰国の届出と共に当人の正面及側面の二葉の写真を差出すと同時に、官吏の面前に於て手の形を鮮明に紙上に印し、尚身体各部の検査を受けて特徴の記入に備へしめ、臍側の一黒子だも特徴として記入を免れず。斯くて其の本人の再び同島に渡航して上陸在仕せんとするや、其の写真に照らし、特徴を

けて蝸集^{わしふ}し来り、一八五四年一月二千人以上を算へたのも束の間、同年末には一万五千人に達してしまつた。傲慢にして臆病な白人がこれに驚かぬ筈はない。／同年十月ボーラーラット市付近の金山に白人労働者の暴動事件が起り、これが実地視察に赴いた州知事は、途上付近の金鉱地を巡視して、ヴィクトリア州に支那人を移入せしむることは思はしくないと思惟する旨、英本国政府に報告してゐる。これは右ボーラーラットの暴動なるものが、支那人の混入によつて白人労働者の賃銀、生活費等に異常な変化を来したに原因する事件であるのみでなく、暴動とまでは行かずとも同様の現象は各金鉱地に於て、これを見ることが出来たからであらう。即ち州議會は、同年内に支那人移住制限法案（入国の際所持金提示、鉱山に於ける或る種労働の禁止）を通過してしまつた。これいふ迄もなく、すさまじい支那人の前進に狼狽^{わうばい}し、それを正直に表現したものである。／然し乍ら、この制限ありしに拘らず、支那人は続々同州に入り込み、一八五九年には在留支那人約四万二千人に達し、ヴィクトリア州總人口の約一割を占むるに至つた。これより支那人問題は、全豪州の世論となり、一八六一年には、ニュー・サウス・ウェールズ州にまた暴動事件が起きた。場所は同州ヤング区付近のランピング河谷の砂金坑だ。この暴動に於て多数の支那人は白人労働者のために惨殺され、シドニーから二百余の軍隊がやつて来たが後の祭り、一般の同情は支那人に集らずして、却つて加害者の方に集まるといふ始末だ。同年十一月、ニュー・サウス・ウェールズ州議會は、『州鉱山局の特別な認許状を有せざる限り、支那人は鉱山労働者に従事するを得ず』といふ規定を主文とする、支那人労働者制限法を通過した。／次で、一八八八年六月、支那人問題解決のために、州際連合會議がシドニーに於て開かれ、各州代表が悉く参列して左の如き決議をなした。／一、本會議は現行規定以上なる支那移民制限規定を全豪州国民の利福の爲めに必要なりと認む。／二、本會議は所求の移民制限の保障せらるゝは、帝国政府の外交活動及び全豪州の統一立法に拠を以て最良の方法なりと認む。／三、本會議は所求の外交活動を行はしむる目的達成の爲に、帝国政府に派遣すべき合同的代表者を證衡すべきことを決議す。／四、本會議は所求の全豪統一立法は、以下の事項を包含せざるべからざることを決議す。／イ、移民制限法は、特定

の制限規定を含み、全支那人に適用せらるべきものなること。／ロ、制限法は豪州港灣着支那人搭乗船舶の積載噸數五百噸に付て一人の割を以て入国支那人を制限すること。／ハ、転入州当局の許可なくして、一州より他州への支那人転航は、転罪犯なるを以て罰すること。／各州はこの決議に基いて、新法を制定し、愈々嚴重に支那人の渡來を取締つた。新法を制定しない州は、從來の支那人制限法を修正して目的を達した。ニュー・サウス・ウェールズ州は、同年支那人に対し、一百弗の人頭税を課することにした。支那人は所詮忍従の民だ。彼等はかういふ嵐の中を、黙々として行くのである。／各州はまたカナカ人を排斥の組上に乗せた。カナカ人は一八七〇年頃からクインスランド州に次いでニュー・サウス・ウェールズ州に誘致され、主として甘蔗耕地の労働に服したのであるが、その数の増加するに伴れ、漸く白人労働者の反感を買い、世論もまたこれに動かされて、叩き出しに掛つたのである。カナカ人はよくその地方の氣候に慣れ、州の生産力に貢献した。雇主も歡迎した。しかも狹量にして無反省な世論をどうしやうぞ。／このカナカ人排斥の真最中に、移民会社取扱による日本移民のクインスランドの渡航が開始されたのだから、クインスランドの白人共は、また一つの排斥の目標が生れたとばかりに、日本人に飛びついて來たのである。かくして連邦成立の翌年一月公布された『移住民制限法』は、左の如き横暴なる条項を掲げた。／第三条 左の各項に掲ぐる者（以下禁止移住民と稱す）は連邦内に移住することを禁ず。／イ、官吏の要求ありたる時其の面前に於て其の指定せる豪州語を以て語數五十個の章句を書取且署名する能はざる者。／ロ、大臣又は官吏の意見に於ては公共又は或種公共若くは慈善機關の負担となるべき虞あるもの。／ハ、白痴又は瘋癲。／ニ、悪性又は危險性の流行病若くは伝染病に罹れるもの。／ホ、三年以内に国事犯にあらざる犯罪につき有罪の宣言を受け之に対し一年以上の禁固に処せられ赦免を受けざる者。／ヘ、醜業及他人の醜業に依り生計を営む者。／ト、連邦内に於て筋肉労働に従事するの契約若くは合意ある者。／但し本項は豪州に於て必要とする特殊の熟技に対し大臣の免除せる工手又は豪州沿岸貿易に従事する船舶の乗組員となる契約若くは合意あるものにして其の特定せる賃銀の割合連邦内普通賃銀の割合を下らざる者に適用せず。／左に掲ぐる

者一同承認あるにあらざれば金銭を消費することを得ず、故に已むを得ざる費用たりとも乙者一同申合せの決定に依るべし。／第八条 乙者墺国在留中疾病又は不幸にして死亡により欠勤あるも、其の益金の分配は他の乙者と同等に当人又は其家族へ分配すべし、故に疾病死亡等の諸費は其乙者又は乙者遺族の負担とし、分配金にて引去るべし、其費用分配に超過するときは其超過額は当組合より支出すべし。但し疾病により帰国するものとあるときは帰国費用は当組合にて支出し、損益分配は出稼地出発の日より除名す、尤も計算は乙者一同帰国の後にあらざれば清算せず。／第九条 甲者は乙某を以て代理人と定め、乙者を監督せしむ。故に乙者は総て監督人の指揮に従ふべし、但し監督人の給料は第二条甲者収益金の内二歩（即ち一千一百円に付二十円なり——原文のまま——）を給与すべし、若し監督増員するときは該二歩の内を以て示談取極むべし。／第十条 乙者中勤労拔群にして収益非常なるものは、甲乙協議の上相当賞与金を為すべし。／第十一条 乙者墺国出稼中金錢曖昧或は故無くして欠勤三十日以上に及び、我日本帝国並在留国の法律に違反し、此契約に違背する者は分配金の全額又は幾分を没収することあるべし。但し没収すべき金額は甲乙評定の上取極むべし。／右の条々取極めたる証拠として二通を作り、甲乙各一通を保管すべし、左に署名捺印するものなり。／明治二十五年十二月十三日／甲者 ……
／乙者 ……
／右親族 ……⁽⁸⁾
」

8 白豪主義と移民制限法

明治三〇（一八九七）年、日本政府はクインスランドおよび木曜島への渡航を禁止し、翌三一年には木曜島日系人の真珠貝海鼠漁業船を所有または借船して、独立経営に従事することも禁止された。⁽⁹⁾

日本人の真珠貝採取の進出の道は、完全に閉ざされてしまった。渡航禁止は、クインスランドと木曜島に限定

されたもので、他のオーストラリアへの渡航は許されてはいた。だが、「シドニーとか、メルボルンとかいふ都会地は、素より純然たる労働移民の元地ではない⁽¹⁰⁾」のである。

「〔明治〕引用者補記三十三年十月に至つて、クインスランド政府と我が政府との協商が成立し、一定数の人員を限り、クインスランドに邦人を渡航せしむるを得ることになつたのであるが、これも実は有資格再渡航者の制限付許可であつて、その再渡航者が一定数に達しない場合に限り、その一定数を超へざる限度に於て新渡航者を加へ得るといふに過ぎないものであつた。即ち三十四年二月二十日付我が外務大臣の各地方長官に対する通牒に／クインスランド行移民は自今左の者に限り渡航許可差支なし。／1、自由労働者にして一旦同州に赴き該州税関より交付した帰来免状を有するもの。／2、在タウスヴィル帝国領事の交付したる在留証明書を有するもの。／是等再渡航者を通じて毎船二十五名以内（三十四年八月に至り五十名以内と改む）に限り移民の新渡航を許可す。／而して此毎船二十五人の制限はクインスランド政府の許可を受けて耕主が雇入るゝ契約移民を通じての意なりと解釈すべきものとす（外務省通省局『移民取扱人に依る移民の沿革』）。／再渡航者を含めて、毎船二十五名では何とも心細い話であり、三十年八月から五十名に改められたにしても、もうクインスランドも木曜島も、邦人活動の現役舞台ではあり得ない。僅かに既得の地盤を維持するといふ程度だ⁽¹¹⁾。」

「然るに三十四年七月豪州連邦成り、その立法議會が『移住民制限法』を議決し、翌年一月一日より之を実施するに及んで、日本人はもう完全に閉め出されてしまつたのである。支那人と共に、否世界の有色人種と共にである。／豪州白人は、有色人種排斥を天職の如く心得てゐた。彼等はこの天職を完うするが如き自負に於て、豪州連邦を組織した。先づ豪州に於ける長い支那人圧迫、迫害の歴史を見るがいゝ。多数支那人が渡来するようになつたのは、一八四八年以後のことである。即ち同年ニュー・サウス・ウエールズ州に鉱山労働者として、またクインスランド州に牧羊労働者として、相当多数の支那人が流入してゐるのであるが、これらの労働者は年々増加し、一八五一年ヴィクトリア州に金鉱が発見されると、各州在留支那人は勿論のこと、新渡来者もこの金鉱目が

め態々日本にやつて来たのであるが成らず。小嶺はその年十一月田口滝蔵と共同して二隻の船を建造し、独立経営の第一歩を踏み出した。／辻謙之助なるものあり、二十七年単身豪州探險に出かけ、十一月十五日採貝船に乗込んで、木曜島付近一帯の島々から、ニューギニアの方まで遠征し、なかなか痛快な行動を演じてゐる。その辻が乗込んだ採貝船といふのが小嶺の船だ。つまり辻は小嶺と同船して活動したのである。辻の『トレス海峡探險記』といった記事が、当時の雑誌に出てゐるが、痛快無双、血鳴り肉躍るの概がある。辻が殖民協会の榎本子に当てた手紙に、『小生の乗り込み居る採貝船シシー号の持主は長崎の人にして、潜水師中屈指の人物、小嶺磯吉と申す人なり。此の人は国家的思想ある人物にして、海産及び農業にも心を委ね、将来望みある人物に之有候』といつてゐる。／小嶺と辻は意気投合した。共に大いにやらうといふことになつた。辻は二十八年十二月、ニューギニアのポートモレスベというところに、殖民事務大臣(?)ギンイヨム・マダレゴルを訪ねて会谈半日、土地私下に関する諸般の事情を打診した。話は有望に展開し、小嶺と共に日豪貿易、ニューギニア移民及び水産業に関する有力な会社を設立しやうといふことになつた。共に手を携へて帰朝したのが二十九年八月のことである。このことに就いてはまた後に記すべき機会があるので、詳述するをやめておくが、とにかく小嶺は当時木曜島邦人中の、否豪州在留邦人中の出色の人物であつた。／木曜島に於て採貝に従事した邦人労働者の出身地は、勿論各県に亘つてゐるが、群を抜いて最も多数を占めたのは、和歌山県人である。明治三十年木曜島在留邦人九百余人の内、和歌山県人は約八割を占めてゐる。和歌山県人は移民会社が豪州移民の取扱を開始する以前、即ち明治二十一、二年頃から続々同島に渡航し、海中に妙技を發揮してゐたのである。而して同地方には出稼人の組合渡航といふのは、十数人のものが組合を設けて金融者より金を借り、これを渡航費及び衣食住費として木曜島に渡るのであるが、この場合金融者は予め現金に対する利子などを定めず、出稼人渡航の収入の幾割かを取るといふのだ。つまり或る意味での共同事業だが、出資者の元金回収の確実な点に於て、普通の共同事業とは違つてゐる。』

7 木曜島移民と金融者との契約書

「契約書／今般和歌山県西牟婁郡本村某外三名を甲者とし、同県同郡同村某外十三名を乙者とし、・・・組と称へ共算組合を以て左の条々を契約す／第一条 甲者金一千四百五十円を乙者に貸与し、乙者は該金を以て渡航費並衣食費とし、堺太利^{イーストリヤ}へ出稼するものとす。／第二条 乙者労働賃金は往復の渡航費を引去りたる残額の十分の四を、甲者出金の利子及監督員の給料として甲者へ收入す、尤も乙者は該十分の六を各平等に分配し、甲者は該十分の四の中監督員給料及諸費を引去りたる残額を各出金に應じて分割す、尤も第一条外の出資と雖も此組合に係る出金は算入するものとす。／但し甲者支出の元金は引去りたる渡航費の内を以て返却するものとす。／第三条 乙者出稼中都合に依り水産事業其他商業を為すときは、其の損益を折半し、甲者と乙者、監督員と各負担收入すべし、甲者は其負担收入額を各其出資額に應じて分配し、監督員の給料を要せず、乙者、監督員は其負担收入高の内、実業地に於て乙者一同と協議を以て分配の歩合を定むべし。但し出稼地に於て起す事業に対する資本は、其地に於て乙者の収入金を以て是に充つるものなれば、甲者は第一条出資の他更に出金を為さず。／第四条 乙者は身体の生命保険を受くべし、該掛金は第一条の支出金の内を以て甲者より年期中支出すべし、若し不幸にして年期中死亡する者あるときは、乙者よりの通知に依り甲者はその保険金を受取り、計算の節労働収入金に差加へ第二条により分配す。但し保険契約年期中と雖も都合を以て掛金を停止することあるべし。／第五条 送金は可成り至急を以て甲者へ送金すべし、仮令小額の金と雖も自家或は其他へ私に送金することを得ず、但し甲者は其送金領収せば郵便貯金又は其他の法を以て利殖を計るべし。／第六条 乙者は毎月月表を製し、乙者労働の収入金及商業其他の景況を記入し、甲者へ送付すべし。／第七条 乙者は出稼中自費なると社費なるとを問はず、乙

賃銀なり。左れば移住民の多くは、出稼中百円を郷里に送り、百円を会社に預け、五十円は雇主に預け、百円を懐中して家に還れりといふ。是三年間三十六ヶ月にて空手三百五十円を儲け得たるものといふべく、五百人の得たるものを合算せば十七万五千円、即ち日本帝国は十七万五千円をクインスランドより収めたるなり。移住民の功^{あにまた}豈亦大ならずや。」

5 木曜島移民

木曜島とは、今日のサーズディ島である。オーストラリア北東端、ヨーク岬半島の沖合に位置し、その面積は三・二平方キロメートルである。

「西豪州及び木曜島に於ける邦人の採^{せう}貝技^ぎ倆^{りやう}は、断然他を圧した。殊に木曜島に於ける邦人の活躍は目覚しく、前記の如く明治三十年には、同地に於て採貝労働に従事するもの九百人に達したのであるが、この数は当時同島採貝全従業者一千五百人の六割に相当した。而して単なる労働者ばかりでなく、独立経営に従事するものも十指を屈するに至り、三十一年六月頃には、邦人の所有船三十二隻^{かぞ}を算へた。この年木曜島採貝船総数二百二十一隻であつたといふから、既にその一割五分に達した訳だ。／＼而して採貝労働者の収入は、既記の通りであるが、これに比べると独立業者の収益は遙かに大きかつた。船は大抵十一噸^{とん}船で、一年の採貝高は八噸といふのが標準であつた。当時一噸の代価は英貨九十磅^{ぽん}であつたから、八噸で七百二十磅。この内潜水師（船長）の給料毎月三磅、外に採貝高一噸につき二十五磅の利益配当（即ち八噸で二百磅）計三百三十磅。縄持人一人四十八磅、水夫百四十四磅（一人三十六磅）。食費七十二磅、船中雑費、船修繕費三十磅、合計五百二十磅の支出である。差引二百十磅が純益であるが、経営者は大抵潜水師を兼ねるから、その収入は五百三十六磅といふ勘定である。これが当

時邦人経営による独立採貝の経済だ。勿論経営者が二隻以上の採貝船を所有する場合には、自己乗込以外の船には他の潜水師を雇はなければならぬ。が、いづれにしても相当な収益である。従つてこの独立経営は採貝業者一般の理想であつたのである。／＼しかし乍ら、日本人はこの望ましき独立経営に於て、爾後益々振ふといふ訳にはゐなかつた。クインスランド政府が邦人の新にこれに従事するを禁止してしまつたからだ。明治三十年、我が政府はクインスランドの排日運動に鑑みて、クインスランド及び木曜島渡航者を禁止したことは前に記したが、我が国がそこまでクインスランドの世論に従順であつたのに、同州の排日運動はその後益々深刻になり、三十一年十二月州政府は、『真珠及び海風漁業法』を修正実施し、英国臣民に非らざればクインスランド州内に於て、真珠貝、海風漁業船を所有し、又は借船して独立營業に従事することを禁止してしまつた。従つて日本人は三十一以前に於て免許を得たものゝ外、新艇を以てこの營業を始めることは不可能になつた。この法律は勿論一般的东西であるが、しかしその実施の目的は明かに日本人にあつた。英国人にあらざるものにして、木曜島漁業に氣を吐いてゐたものは日本人だけだからである。」

6 木曜島移民の先駆者たち

「和歌山の人、佐藤虎次郎など、その独立營業者として最も現はれた一人であるが、毛色の変つたものには、小嶺磯吉がゐた。小嶺は欧州大戰の時、豪州の海軍を率ゐて独乙の軍艦を分捕つたので有名だが、しかし彼の開拓者としての本領はそういふところにあるのではない。彼れは明治二十三年九月香港から木曜島に渡り、英人に雇はれて採貝船に乗込んだ。海上活躍二年、孤舟を操つてニューギニアの北部まで遠征し、成績頗る上つた。二十五年松岡好一、岡村百槌と謀り、水産会社を起す計画で日本の有意者に呼びかけた。松岡、岡村の兩名はそのた

その大変な日本人の渡航が激増した。在留者の活動も活発だ。排日家は愈々声を大にして騒がなければならぬ。初めの中は、心ある有力者は、起つてこの排斥論を反撃した。しかも遂に異人種排斥運動は、白人社会に於ける限り、大抵の場合成功する。一部排斥家の運動は、忽ち世論として普及する。クインスランドの排斥は、遂に日本人の豪州渡航を中絶せしむるに成功した。即ち、我が外務省は、三十年六月、クインスランド州に於ける排日運動に鑑み、先づ同州に属する木曜島渡航者を差止め、次で八月、クインスランド渡航者をも差止めてしまつたのである。／移民会社によつて輸送されたものは、大部分契約移民であつた。特にクインスランドの砂糖耕地に入つたものは、殆んどそれであつた。しかし西豪州及木曜島への渡航者は契約に依らざる自由渡航者も少くなく、殊に木曜島には和歌山方面から、多数の自由渡航者が出て行つた。それだけにまたその活動も活発であつた訳だが、先づその契約移民に就いて見やう。／契約移民の見極めは、砂糖耕地労働に従事するものと、採貝に従事するものと、勿論その条件を異にするのみならず、同種の労働にあつても取扱移民会社により、雇主により、またその就業の当初と熟練後とにより、いづれも多少の相違はあつた。しかし砂糖耕地の労働にあつては、明治二十五年吉佐移民会社が初めて送つた五十人の移民の条件——契約年限三ヶ年、一日十時間労働で日曜祭日休業、賃金一ヶ月三十志、衣食住及び病薬費雇主負担、往復旅費雇主負担——が大体標準的なものであつたやうだ。賃金一ヶ月三十志とあるのは、勿論労働に熟練して来てからのことであつて、初めの中は二十志（約十円）程であつた。而してこの賃銀支払に関する条件は左の通りだ。／給料は一ヶ月一人先づ十円とす。而してその給料の四分の一は、三ヶ月纏めて日本の家族に払ひ渡し、四分の一は吉佐移民会社に於て確実なる銀行に預け入れ、本人帰朝の上これを払ひ渡すべし、その二分の一は毎月クインスランドに於て払ひ渡すものとす。但し渡航後十八ヶ月間はクインスランド渡しの半額給料の五割は雇主に於て預り置くものとす。而してこの十八ヶ月間に於て、誰にても真実の農夫にあらざることを発見するか、或は極めて性質の悪いものたることを知るか、或はクインスランドに発せざる疾病のため悩むことあるときは、その預り金より復航の賃金を弁せしむるものとす。／尤も斯くの

如き場合は必ず雇主と移民と監督と協議の上決定せざるべからず、若し移民にしてその業を執り得る際に負傷したる時は、給料全額を受取り得べく、若し他の疾病若くは休業を為せる場合には、毫も支払はざるものとす、但し食事は無代にて給与すべし（日本吉佐移民会社『クインスランド行移民心得』）。

「また採員移民のそれは、左の条件が一般に行なはれた標準と見ていゝやうだ。これは厚生移民会社取扱移民に關するものである。／契約年限三ヶ年、労働時間日出より日没迄を限度とす、日曜祭日又は天候危険の日は休業、賃金一ヶ月初年三十一志、二年三十九志、三年四十志、仕度料三十円貸与（但一ヶ年内に賃銀中より返付のこと）、病氣の際は入院無料（但毎月一志の病院費を払うこと）、往復船賃及び就業地迄の旅費雇主負担、満期帰国旅費また同じ、移民は契約年限中、郷里の家族のために二百円より少なからざる金額を会社（厚生移民会社）の手を経て送るべし。／採員労働は海の人でなければならぬ。海上活動の訓練が第一であつた。砂糖耕地の労働は、さういふ特別な資格を必要としなかつたのであるが、しかもこれは初めから厳格に『真実の農夫』たることを条件とした。吉佐移民会社ばかりでなく、他の移民会社取扱にかゝるものも、概ねこれに倣つた。思ふに吉佐移民会社が最初より厳格にこれを実施したのは、その労働に伴ふ当然の約束であるばかりでなく、深く官約布哇移民の初期に於ける苦い事例に鑑みてのことであらう。前出『移民心得』に『極めて性質の悪いもの』を排しているのも、またこれに鑑みるところなしとせない。さういふ注意が行なはれたため、この移民は最初から順調であつた。一つは雇主もよかつたのであらう。明治二十六年吉佐移民会社が、砂糖耕地移民五百名を送つたことは前に記したが、その結果に就き報ぜられたところは左の通りだ。／今より三年以前、吉佐移民会社の手を経て、五百人の移住民クインスランドに赴けり。僅か十人ばかり死亡せるを見るのみにて、今度契約期限満ちて三百二十人芽出度く帰国しにけり。而して尚百七十人は契約を續けてクインスランドに残れりといふ。是実に予想外の好成績なり。——日本に於ては仮令農家に雇るゝも、概ね一年の賃金十五円、二十円に出づるは稀なり。然るにクインスランドに至れば衣食を引去り、一ヶ月に二ポンドより三ポンドに出づ、彼等移民に取りては実に巨額の

する人）来る。桑畑氏は予等の為にジャクソン町ペンガルハウスの二室を借受けたり。因て一先上陸、先づ其宿所に至り、手荷物を置き夫より市内を散策し、ジョージ町にて土入写真十二枚（十志）を買入れ、一旦帰宿し、夜に入り又々散歩す。此宿には高等商業学校卒業生松崎氏あり、二年前より此地に滞在する由につき、就きて当地の事情を探り、大に利便を得たり。／十一日、九時頃桑畑氏来訪、当地の事情につき種々雑談あり、十一時頃帰る——此日日本郵船会社汽船三池丸入港せり——。／十二日、依岡氏と共に九時頃三池丸に至り、今回便船し来りし横内桂山、中沢高義、志摩友雄の三氏に面す。折柄当地兼松支配人北村寅之助氏来り合せ、雑談数時——夜に及び日本商店奥村氏を訪ひ、十時帰る。／十五日、十時頃帰り来れば横山氏あり、氏の話に依れば今朝三池丸はメルボルンに出帆せり。而して氏と工藤義助氏とは当地に止まりて曩に英国船にて来りし山口兼六、末松七二氏とビッチー町に同居せりと云ふ。横内氏（銅版職）を除き、三氏とも文身を業とす。／十六日、午前九時頃、横内氏の居所を訪ひ、工藤、山口氏等に面す。四人新世帯を持ち文身又は銅版職を以て生計を立て、将来大に共同の事業を起さんと画せり。／同地邦人の黎明期の状況が窺はれて、なつかしいやうに思ふ。ところがここにまた一人の快男児が加はつた。同じく比叡便乗者の一人、松岡好一が雄心やみ難く一行から離れてシドニーに止つたのである。即ち、／十九日、——松岡氏シドニー府に滞留すとの事ゆへ、餞別として世界百傑伝八冊、白単衣一枚を贈れり。／（それから十日経つて）／二十九日、——午後二時出帆す。此際松岡氏来らず、依つて当直士官まで其旨届出たり。——夜に入り艦長は依岡氏を呼び松岡氏の上陸に付き全く乗られざりしか、又は故意にて居残りしか、其意見を問はれたれども、判然せざる旨答へたる由なり。／便乗一同は松岡がシドニーに残るといふことを承知してゐたのであらう。だからこそこの日記の筆者富山駒吉も、十日も前に餞別をやつて置いたのであらう。しかし松岡は非常手段で居残つたのだ。依岡の艦長に対する答へは、この場合さういふより仕方がなかつたのであらう。依岡は便乗者一同の取締りである。／居残つた松岡は信州松本の人、しばらくシドニーで活動し、二十五年四月木曜島に渡り、採員に従事して頭角を現はす。」

4 クインスランド行き契約移民

「明治二十五年、日本吉佐移民会社が豪州移民の取扱を開始すると、これを契機として邦人の豪州渡航は相当賑やかに展開した。吉佐移民会社は二十五年十一月、先づ五十人の移民をクインスランドのインガム地方ウード、ブラザース会社の砂糖耕地へ送った。次で翌二十六年中、同じくクインスランドのコロニヤル・シユーガー・リファイニング・コンパニー外九社の要求により五百二十人を、二十七年矢張り同地方の砂糖耕地へ四百二十五人を送った。／これと前後して、横浜移民・神戸渡航・海外渡航・海外渡航・厚生移民の各移民会社も豪州移民の取扱を開始し、少数ではあるが木曜島方面に送つてゐる。またこれら移民会社によらざる自由渡航者も少なくないといふ風で、三十年には全豪在留邦人数は二千人を突破するに至つた。二十六年在留邦人一千余人の約二倍である。／これら渡航者の活動舞台は、前記クインスランドの砂糖耕地と、西豪州及び木曜島の採貝事業である。メルボルンとかシドニーとかいつた都会で、商業、家僕、その他の職業に従事するものも漸次増加し、三十年在留邦人数二千余人の中、約二百八十人がこれに属するものであるが、同年クインスランドに於て砂糖耕地労働に従事するものは九百人、木曜島の採貝業及びその付随事業に従事するものまた九百余人に達してゐた。／邦人の渡航が賑かになり、それが活発な活動を開始すると、すぐに猛烈な日本人排斥運動が起つた。クインスランドに於ては、吉佐移民会社が初めて五十人の移民を送つたその翌年（二十六年）春からこの運動が始つた。議員は州の議會に於て、新聞は煽動家の御先棒を昇いで、思い思ひの議論をやつた。二十六年春といへば、吉佐移民会社の第二回移民五百二十人の輸送前だ。即ち在留邦人は全豪のそれを合算しても精々四五百程度であつたらう。しかし彼等は在留邦人の多少をいふのでなく、日本人が今後続々渡航して来ては大変だといふのである。／ところが

からず。然れば今に於て豪州と直接貿易を開始し、我國より米其他の物品を輸出し、彼よりは羊毛を始め、彼地に於ける特産品を輸入することゝせば、国家の利益少なからざるべし。幸にして大阪商船会社の事業も略緒に就きたり。我は是より進んで一身を豪州貿易に委ぬべし。」

「これが兼松決起の次第である。彼れはシドニー及びメルボルン付近の商業の殷振を目撃して愈々その志を堅くし、一先づ帰朝して知己友人に謀つた。時に我が財界は不況のドン底にあり、既設会社にして破綻するもの続出するの現状で、予じめ出資を約したのも、ただ兼松の志を翻すことに努めた。曰く『君は今相當の位置にあつて、年々の収入も少くない上に、日本に於ても君の着手すべき事業は少くないであらう。されば君の如きは坐にして前途洋々だ。何を苦しんで今そのやうな冒険を敢てする必要があらう』と。／兼松は頑として容れず、そんなことなら一人でやらうとあつて、二十二年八月、神戸に『兼松商店』の看板を掲げた。小なりと雖も万端の準備を了へた。二十三年一月再び渡豪、即ち妻女に五千金を与へて曰く、『我今、知己友人の忠言を斥けて彼地向ふ。其成否、予め知るところにあらずと雖も、然れども生だにあらば、其成功決して期せられざるにあらず、今汝に別るゝに臨んで此金を与ふ。固より充分なりと云ふべからざるも、贅沢さへ為さずんば、幾年かを支へんこと敢て難きにあらず。兎も角もして我が帰朝せん日を待つべし』と。兼松は無論出稼移民の如く、無一物で出てゆくのではない。三万円余の資本を以てこれに着手したのである。けれどもこの決心には胸を打たれる。普通の事業家の及び得ないものがあり、海外に出づるものゝ取つて以て学ぶべきものがあらう。彼れにして退いて内地にあれば、知己友人がいふ如く、坐にして前途の洋々たるものがあつたのである。／彼れは再度の渡航の際、北村寅之助なる青年を伴れて行つた。この青年は彼れが前回の渡航の時、初めて香港で会つたのだが、忽ち旧知の如く相許し、共に大いにやらうということになつたのである。彼れは船中この青年に向つて曰く『予も縁ありて汝と事を共にすることゝなれり。而して其の成否は一に予と汝との決心如何に在つて存す。就て予は今左の条件を提出せんとす。／一、彼地に渡りて三年間は茶を飲むべからず（水を以て之に当つるの意）。／二、食事は

三度とも洋食一品たるべし。／三、乗車するを許さず（総て徒歩するの意）。／四、衣服は事務所に於ては仕事着に着換ふべし。／五、仲仕同様の働きを甘んじ、己を得ざる場合の外、仲仕を傭ふべからず。／此の五箇条を三箇年実行し得るや否や。予は疾く決心せり。然れども難きを人に強ふるのは、予の欲せざる所なり、熟考して其諾否を答ふべし。』

「兼松には北村のみこれを実行させるといふのではない。自分はこれを実行するが、君は出来るかといふのだ。北村はその如くすべしと答へた。二人はシドニー上陸後、堅くこれを守り、凡ゆる困苦欠乏に堪へて奮闘し、『兼松商店』の名を揚げた。恐慌に会ひ、白人同業者の圧迫に会った。しかも屈せず、敢然として戦った。兼松のこの奮闘と悲壮なる決心とは、実に邦人豪州の発展に於ける一幕だと思ふ。さう思つて書きつけた訳である。』

3 明治二〇年代のシドニーの日系移民

シドニーは「渡航者が少なかつた丈けに、微々として影の如きものであつたらしい。三宅雪嶺などが海軍練習船比叟に便乗を許されて、このシドニーに入港したのが二十四年十二月のことだ。一行中の富山駒吉の日記に、その在留同胞の姿が微かに記入されてゐる。故国の軍艦を迎へての在留者の動きだけに、微かであつても即ちその全貌であらう。／九日（十二月）、今朝ジャクソン港にて汽笛を鳴せば、幾何ならずして水先案内来る。――更に進んでフハームコーヴという処の浮標に繫泊す。時に午前九時半なりし。午後三時日本人三名来る。其内桑畑某に面し、市の様子一般を聞取る。此夜亜弗利加探險を以て世人を驚かしたる彼のスタンレー氏の演説ある由なれども、余等上陸能はずして聴くこと得ざりし。独り三宅氏は士官と共に上陸して其の実地を詳にせり。／十日、十一時頃川越余代氏（昨年金剛艦に便乗し、サモア島に上陸せし人）及び桑畑秀雄（六年前より当州に滞居

これを引受けると同時に、移民雇用に関する契約案を神奈川県令に差出し、神奈川県令はその可否如何を外務省公信局長に伺ひ出た。そこで外務省は、雇主の義務を負担すべき確実な保証人があるならば、これを許すまいといふことにしたのである。ミラーからその許可方を申出たのが十六年五月、移民の渡航したのが同十月であつた。／＼越へて二十一年には、クインスランドのムリヤン製糖会社の代理人、ダブリュー・ジェー・エス・シヤンドなるものが、外務省の許可を得て日本農民百名を雇入れ、砂糖耕地に就働させた。面白いことに外務省はこの移民を許可するに際し、移民の帰国費に充てるため、雇主をして移民一人につき、英貨九磅宛を神奈川県庁に積立てさせてゐる。／＼豪州事業家がこのやうに早くから、日本移民の誘致にとめたのは、明治初年以來いろいろの交渉があり、自然邦人に接触する機会が多く、日本人の勤勉にして勇敢なるを熟知してゐたからである。維新後間もなく、アレキサンダー・マークルスなるものが、日豪間の貿易に従事したことは隠れもない事実であるが、その後秋山某が豪州貿易に従事したといはれ、十二、三年頃になると、横浜のワトソン商会が我が大蔵省の依託を受けて米穀輸出を開始した。次でデアス商会、ルカス商会、ブラオン商会といったものが、夫々横浜に根拠を置いて盛に對豪貿易に活躍した。／＼一方邦人の渡豪も明治十一年頃から初まり、細々乍ら木曜島の一角に於て、真珠貝採取に従事してゐた。即ち島根県人野波小次郎が、水夫として外国船に乘込み、同島に上陸したのが明治十一年の頃だといはれ、次で十四年には兵庫県人中川民治、十五年には和歌山県人中山奇流、広島県人渡辺俊之助が渡航した。これらの連中は徹力なりと雖も邦人木曜島発展の先驅といつてよからう。／＼かくの如くして、豪州事業家は早くから邦人に接触し、これに対する関心を深めた訳だ。而して彼等が少数ではあつたが、前後三回に亘つて前記移民を豪州に誘致したことは、木曜島の採貝事業家、クインスランドの製糖業者一般の注意を刺激した。即ちこれら移民の誘導が一つの序幕となつて、邦人の豪州渡航は二十五年以後勃然として起るのである。」

2 兼松房次郎の活躍——日豪貿易の先駆者

明治一一年ごろから日本人の木曜島への渡航者がみられ、同一六年、一九年、二一年の三回にわたり、合計一七七名の日本人契約移民がオーストラリアへ渡った。明治二五年、「日本吉佐移民会社が豪州移民の取扱を開始し、邦人の豪州発展はこれより愈々盛んになる。」「これより先き、この移民会社の輸送開始を待たずして、和歌山方面から木曜島に回つてする渡航者もあり、シドニー又はメルボルン方面に渡航して細々ながら商業その他に従事するものがあつた。シドニーとかメルボルンとかいう都会地は、日本よりする少数の渡航者の外に、木曜島、クインスランド方面から転入するものもあつたやうだ。」ジョン・ウイリヤードに誘致された四〇名のシドニー移民は、「見せ物」にされたが（一に示した）、「雇主から離れて直ぐ帰国したといふ記録はないから、やはりシドニーとかメルボルンとかいふ都会地に落着いたものと思ふ。／當時、この方面への渡航者中、最も大きなものは兼松房次郎であつた。兼松が初めてシドニーに渡つたのは、二十年十一月のことである。日豪貿易開業のための準備旅行だ。兼松は明治六年三井組に入り、十四年退職し、爾後しばらく大阪に於いて薪炭事業に従事、やがてこれを廃して大阪商船会社の創立に参画し、その重役となり、傍ら大阪日報の経営に當つた。偶々日本米の豪州輸出のことあるを聞き、豪州を研究してみると、同地は鉱物・畜産に富むのみならず、羊毛産額の世界第一であることを知つた。そこで思へらく／我が商工業は幼稚の域に在り、紡績会社の如き一二其の設けなきにあらざるも、其生産額云ふに足らず、内地に於て需要綿糸の殆んど全部は、之が供給を外国に仰ぐの状態なり。然れど綿糸の需要は日に多きを加へつつあれば、早晚紡績業の勃興すべき敢て疑ふべきにあらず。而して其の紡績に次いで我国に起らざるべからざるは毛織業なるべく、果して毛織業にして起らんか、差当り其原料たる羊毛なかるべ

「いざ明日の奉仕へ 報国勤労隊益々本領發揮／ダバオ旧市内在留邦人をもつて組織せられてゐる『報国勤労隊』は、その後高度の勞務供出によつて著しく出役人員の減少を見たので、殘留防護団員の夜間勤務等を考慮し、去る日曜日の勤勞出役は中止されたのであるが時局いよいよ重大の秋、出役人員の益々必要なことは當然のことで、この際万難を排して続行することになり明十六日（水曜日）の勤勞日には從來通り一切の業務を停止し、軍緊急工事設営に洩れなく参加を要望されてゐる、なお集合場所のダバオ河向ふ道路上は從來通りであるが集合時刻は正七時に變更され、中食不要但し食器のみを持参すればよい。」

「陸軍最高指揮官 同胞に要望す／絶對国防圏の拠点を同胞と共に死守せん／陸軍最高指揮官は廿一日在留同胞に告ぐと題し、皇國の隆替を決する未曾有の非常時に処する覚悟を促しもつて總力の發揮に遺憾なきを期せよとの力強い要望をなした／在留同胞に告ぐ 中南部太平洋に於ける我が防衛線の一角を突破せる□敵米軍は不□にも我が国防絶對圏域に對し最後の大攻勢を開始せんとしこの秋になり軍は必勝の信念の下將兵の意氣將に軒昂たるものあり、在留同胞諸君亦既に決するところありと確信して疑はざるも玆に要望するところは獻身殉皇の大和魂を振起し決死もつて兵団戦力の一翼たるの決意を固むることはなり／勇奮身を挺して國難に殉ずるは□に武人たるのみならず我が大和民族が古來繼承せる大和魂の精華なり 今や皇國の隆替を決すべき□古未曾有の秋に際し諸君は既に老幼男女を問はず決死もつて殉皇の大義に徹し一切の自我を捨て万物を挙げて軍の戦力強化に寄与せんことを決心しあるべし、況や当地は皇國絶對国防圏の拠点たるのみならず諸君が万里の波濤を拓開し粒々辛苦して築き上げたる第二の故郷諸君墳墓の地なるに於てをや／これを要するに軍は敵の反撃を撃砕してその繼戰意志を粉碎すべき一切の準備を完成し必勝の確信満々たり、願くは軍に全幅の信頼を致し一切を挙げて國に殉ずるの決意と準備とに遺憾なきを期せんことを望む／陸軍最高指揮官。」

V オーストラリア移民

1 明治初期の日本人移民の誘致

「明治九年、南オーストラリアから我が農民を要求し来り、政府がこれを拒絶した。」次で同十四年になると、布哇国王が欧米巡遊の途次、我が国に立寄り、日本移民誘致に関する壮大な案件を置いて行つた。更に十六年には英人ジョン・ミラーなるものが、三十七人の邦人を豪州に誘致し、これが機縁となつて同十九年には英人ジョン・ウイリヤードなるものが男女子供合して凡そ四十人、二十一年にはクインズランドの砂糖耕地に百人の農民が誘致された。ジョン・ウイリヤードなる者は悪い奴で、シドニー上陸後、工業に従事させる筈であつた四十人の邦人を、事もあらうに観せ物にした。／十六年、ジョン・ミラーに雇はれて渡豪した三十七人は、トレス海峡に於て真珠貝の採取に従事した。この三十七人は公然外務省の許可を得て誘導された我が国最初の移民である。もうこの頃になると、政府の移民（即ち出稼人）に対する考へ方も余程變つて来て、条件さへ確實ならば、少し位は認めてもいいといふ風であつた。ミラーは初め在横浜英国領事を経て神奈川県令に、その許可方を申出で、一方横浜居住の増田万吉なるものに、採貝に従事すべき潜水夫及その手伝人の周旋を依頼した。増田万吉は

動員、増産両部には既に教職員を転用する非常手段をも講じ、きのうの国民学校校長会議において決定任命してある、かくのごとく日本人会の機能を最大に發揮するため、なお適時適切な非常手段を講ずるはずである／国民学校教育の態様について／従来の教育方針の大転換を断行した、即ち現在も、教場で机に向つて行ふ習学を全然廃し、専ら増産に労務に従事させ、戦力増強の一途に邁進させてゐるが、この形態は九月、十月にならうが變化されない、しかしこれをもつて教育の不必要とは断じて解すべきに非ず只戦力増強に如何に戦ふかが今後の教育の対象となつたに過ぎないのである、従つて教室で読み書き音楽などといふ特定時間は今後の教育の対象でなくなつたのであつて、指導に当る教職員もまた児童も、父兄もこの觀念に改めなければならぬ時節であることを知らねばならない、この心の踏み切りが行はれない限り、増産にも労務にも隘路は消へないのである、よろしくこの隘路を破碎し防衛の完璧を期して戦はねばならない／疎開について／これについては○参謀長談も発表されてゐるが軍の方針も明確に示してゐることであらうこれに従つてその迅速化をはからねばならない、市内の疎開はいざの場合に人的物的損耗を最小限度に止めるため果さねばならぬ重要な事柄である、一家の移動は今日輸送その他の点を考慮する時容易な仕事でないが、いざ敵と相見へて戦う時にこの疎開が行はれてゐなければいかなる結果を生ずるか、過去に例を求めるまでもない、爆撃を受けて血みどろになりダバオ河を渡渉して市内を撤退する時の悲惨事を想像して見よ、よろしく旧市内の婦女子は万策を講じて疎開を断行すべきである、かつて麻山に働き或ひは麻山と縁故が濃いのだからマニラ市などに比較したら極めて容易である、各人の積極的行動を要望すると共に日会も各支所と連繫しこれが援助に奔走することになつてゐる／農民道場について／これは初め日本人会において経営した方が効果があると思つたが、その後色々研究しました情勢の推移もあり、取りやめることに決定し、その旨経営者の栽培協会に伝へておいた、諸限協会長もダバオに帰る迄日本人会への移管を差控へて欲しいといふ電報を寄越してあるせうだが、協会長さへせういふ考へなのだからあれを日本人会へ押しつける手もあるまい、軍当局が直接活用することが一番の近道と思ふ」。

「疎開は必勝防空の途／今ダバオで問題になつてゐることは旧ダバオ市内に住む婦女子の麻山への疎開である、過般北九州に敵機が来襲した当時疎開が行はれてゐたため防空の活動がいかに促進されたかは想像以上のものがある、しかも疎開には直ちに生命にも繋つてゐるのだ。疎開を逸早く行つてゐたため生命を救はれた反面に、疎開の計画だけして実行未了のため生命を失つた人がある、疎開は決して卑怯な敗退でない、ダバオ旧市内のごとく軍関係の労務者の多い所では家族を疎開させておくことがいざの場合何の不安もなく職場を守ることが出来るわけである。かくて戦力の低下を防ぎ、かつ目下麻山の食糧増産に必要な人手を補ひ大きな戦力増強に資することが出来る。これただ必勝防空の途であり生産戦に勝ち抜く用意である、また一方疎開者を受入れる麻山においても同胞相助け合ふ抱擁力と生産戦必勝に徹し、これが疎開完遂へ温い手を差し伸べなければならぬ。」⁽¹⁵⁾

「緊急工事の促進に 同胞の総力を結集／家庭防護を更に強化し 灯火は常に非常管制に／過般ダバオ上空に敵機の来襲して以来、同胞の軍緊急工事完成を期する熱意は最高度に達して来た、作業場に働く者は□夜にはつきり認めた敵機の姿に歯嚙みをしながら今度こそ仇を討たんと鉄を、鎚を振上げて休憩時間もそこ／に夜を日に継いで敢闘又敢闘である、一方生産陣でも同じ心で一粒のマイスも、一茎の野菜も多く供出せんと老若婦女子とを問はず土と取組んで敢闘を続け、同胞の総力は挙げて緊急工事と増産戦の二点に結集され、他はあらゆるものを犠牲にせんと悲壮なる決意の下に邁進を続けてゐる／只この時必要なことは暫時の防空訓練に際し造つた待避壕の強化の点である、人手の少い折柄ではあるが、敵機の銃爆は殊更に人家に集中し婦女子を傷け戦意の喪失をねらつてゐることを考慮する時、このままの待避壕をもつてしては著しく危険を予想されるので、寸時を利用してこれが強化の必要なことが叫ばれるわけである、なお目下準備管制時に入つてをり灯火管制は警戒警報時のまゝに行はれてゐるが、敵機の来襲の度が濃く、従つて燈火に關しては空襲下の非常管制に準じて行ふことを十日軍当局より伝達され、日比両国民は灯火管制を一層厳重にして一点の明りも外部に洩れないやうに注意を要すべきである。」⁽¹⁶⁾

オ島へ来攻するは想像に難くありません、この秋に辺り現地陸海軍当局は在留同胞に対しその老若男女を問はず働き得る者の全員に八月一日を期して「軍属」の身分を与へ、軍の一員として軍と一体となり、この超非常時局の突破に邁進せしめることに決したのであります、諸氏は従来労務供出においても、将又生産部面においても、軍に協力するといふ形でなされてゐたのであるが、今後は軍籍に身を投じて行はれるのであります、假令働く量は同じであつても軍の一員となつて国家に御奉公する体制に入ることには大いに意味を異にするのであります／想ふに敵が来攻した場合に十分の備へあれば聊かも不安がないのであるが、もしそれが完全になされてゐないとすればいかに頑張つても苦戦は免れず、こゝにおいて現地陸海軍は全力をもつて急速に対策の必要が生じて来るのであります、軍においてはこの地を断じて敵の蹂躪に委すことを相許さぬ必勝の信念に燃えて着々整備しつゝあります、故に諸氏はよろしく軍の一員として緊急施設に或ひは食糧の確保に総べて軍と渾然一体となり新たな決意の下にその命じられたる任務に邁進しなければならぬのであります／抑々諸氏の労務は八月一日交替の予定でありましたが、以上の理由によりそのまゝ軍のなかに入り御奉公を願ふことになりました、これは婦女子に至る迄幾年たりともこのミンダナオの防衛を期すべく起上つた情勢のしからしめるところであり当然至極のことです。而して今日一日の働きは八月中旬以降の一週間或ひは十日分以上にも相当するであります、要は戦に負けぬ準備に全力を尽くさねばならぬ秋であります、もしこゝが敗れては大東亜共栄圏の扇の要は崩れることになり悔を千載に残すことになります、かくなつては何の麻といへるであります、こゝを守り抜いてこそ麻であり、必勝の体制を占めてこそその麻増産への大転換も行へるのであります、諸氏は予定の交替がなく家庭的にも何かと障碍を予想されるであります、軍は責任をもつてこれが障碍を突破すべく鋭意努力しつゝあります、治安上のことも、主食物の収穫期も、次に来る植付期に際しても日本人会ならびに各支所に密に連繫をとり不可能を可能とすべく過般来あらゆる対策を講じつゝあるのであります／また近く入営する者には十分その間に合ふように家事の処理に当らしめるため適時交替に帰宅させ、或ひは家族の病氣に対しても適當の処置を講ずる

はずであります、従つて諸氏はこの緊急事態のため後事を顧みる暇もなく赤紙を受ける心意気となり、現在のままで入営と同一視すべきであります、情勢刻一刻身近に迫り、諸氏の身上にもかゝる大変革を来したことは当然過ぎる事柄であることを深く認識し、もつて諸氏が心魂を碎ひて伐り開いたこの土地を断じて敵の蹂躪より守り、よろしく軍と一体となり皇国の危急を転回すべくあらゆる努力を傾注されんことを心から切望してやまないのであります／施設当事者側に一言することは今迄の労務管理と異り軍の一員として入隊せるものなれば恰も初年兵が入隊せる如く真に隊長として古参者としての愛情をもつて一身上の面倒を見後顧の憂なく任務に邁進し得る如く指導されん事を望むものである。⁽¹³⁾」

「勝つ為の非常手段 同胞の総力發揮について 加藤総領事 日会長 決意を語る／けふ一日からダバオ在留同胞全員が軍属として軍に包含されたについて、在ダバオ帝国総領事館ならびにミンダナオ日本人会の性格ならびに機構に如何なる変革を来すか種々論議されてゐることに對して、加藤総領事兼日本人会長は一日つぎのやうに述べて、これを明確にした／日本人会の強化について／時局はダバオの防衛設備を強化し、敵の来攻にもびくともしない態勢につくことがわれわれに課せられた最大最高の使命である、総領事館は軍と系統を異にした存在のやうに思い軍の企図する防衛対策の埒外にあつて行動をとりあるひは無用論を説へることは不穩當極まるもので、よろしく軍と一体となつて只管その目的達成に邁進することに何ら變りない、直接銃こそ握らないが軍属になつた在留同胞の發揮する成果を更に強化するため、軍の手足になつて益々積極的に行動すべき位置にある、従つて日本人会のごときも軍の企図する方針を実行するに當り在留同胞の参加に円滑化をはかり、かつ徹底させるため軍の実行機関として益々機能を發揮する必要がある、総領事館も日本人会も名こそ二つになつてゐるが、これこそ文字通り一心一体となつて行動すべき性質のものである、故にけふからの体制に即応するため日本人会の強化策を議し既に従来の労務係を労務動員部に昇格拡充し必要なる調査の整備を急いでゐる／また増産部も速急に強化をはかり軍の作戦上、糧秣の補給ならびに同胞の食糧に不安なきやう最大の努力を払ふべきである、右の労務

14 全日系ダバオ移民「軍属」となる

一九四四（昭和一九）年八月一日をもって、すべての日系ダバオ移民は「軍属」となった。つまり、日本軍の管轄下におかれたのである。敗戦への末期的症状を示すものといえよう。『ダバオ新聞』は、こうした状況の変化を、つぎのように報道し、日系ダバオ移民へ戦意高揚を訴えているが、ここには、「悲劇」が読みとれるのである。

「全同胞軍属となり 八月一日より軍に包含／全ダバオ支所長会議に公表／軍当局談内容はつぎの通り／我ら現地に在る者軍官民一丸となり敵を断じて撃破の決意で当るべき秋が来た、そこに聯かの間隙もあつてはならず、情勢の変化に伴ふ必勝態勢確立のため現地日本人は婦女子に至る迄一人も洩れなく軍属たる身分を賦与し、総て軍の指揮の下に行動させることになった、在留同胞が治安の障碍を排除し労務供出にあらゆる生産に邁進しつゝあることに對しては常に感謝しあるところである、軍は更に同胞全員の協力を百歩前進せしめて軍のなかに入つて余すところなく総力を發揮させる超非常措置を講ずるに至つた理由は一に戦局の推移にあることを知悉しなければならぬのである。／問題は労務、食糧増産の二つに尽きる、即ち八月一日の要員交替も敢然中止し、更に大幅の労務を要請する上に、なおも收穫期に際しての増産に邁進しなければならぬのである、しかしてこれが達成には幾多の困難に遭遇することは当然であるが、老人も、学童も婦女子もこの一途に邁進しなければならぬ。労務も増産も完全なる戦闘行為の一つとし同胞は身も心もその戦闘要員となり戦ひ抜いて貰はねばならぬ、かくする上には或ひは個人の不便不利益の伴ふことは覚悟すべきであり、今にしてこの無理を突破して戦局回倒の大事をはからねば悔を千載に残すことになるのである、時に応じ大の虫を生かすために小の虫を殺さねばなら

ぬことは当然で、敢てこの無理を要請しなければならぬ悲痛さを感じずる次第である。／しかし現地軍官民が文字通り渾然一体火の玉となつて驀進するならば必ずや果し得るのである、帝国の存亡をわれらの双肩に受けて石に嚙りついても果さねばならぬ、われらは国家の運命と共に鉢巻と褌を締め直して突進すべき秋が来たことを一人も洩れなく実行をもつて示さねばならない、元寇の役に婦女子と雖も竹槍を取つて起つたわれらの祖先の血は必ずや沸ることと信ずる次第である。⁽¹²⁾」

「けふ在留同胞軍属となり軍に包含さる／愈よけふ一日からダバオ同胞は晴の軍属として軍と一体となりあらゆる職域を通じて御奉公に専念することになつた、ダバオの歴史に一新紀元を画したものであるとして永久に忘れ得ぬ日である、我らはこの榮譽を胸にし飽迄未曾有の非常時を克服する戦意に燃へその与へられた任務に邁進あるのみである／声涙下る訓示に 感激ただ誓へり／既報八月一日を期してミンダナオ在留同胞全員が軍属の身分を与へられ軍と一体となり軍の緊急工事に従事する長期労務者も八月一日の交替を一時中止することになつたため、現地軍参謀長は三十日午後各施設場においてそれぞれ全労務者にこれが趣旨を明確に示し、声涙共に下る大要左のごとき訓示を行つた、かくて労務者一同は今更ながらに戦局の推移を知ると共に、協力といふがごとき生優しい態度より百歩前進して軍と渾然一体となつて御奉公出来る榮譽を得たことに感激し、新たな覚悟を抱き軍命のまにまに粉骨碎身もつて非常時局の転回を固く誓つたのであった／現地軍参謀長訓示要示／在留同胞諸氏は皇軍進駐以来、全力を振つて軍に協力し、殊に最近にあつては軍の緊急工事に一家の私事を顧みずして挺身され、短時日をもつてかくのごとき見事な施設が出来た事は□に感謝に堪へない次第であります／さて既に御承知のごとく皇国領土たるサイパンにおいては軍民玉碎の痛恨事あり、剩へ□敵米兵はテニヤン、大宮島にも上陸し来り、その尨大なる損害にも物量にものをいはせて来襲し日夜激戦が展開されてゐます、一輩帯水のパラオにおいても有力なる敵機動部隊の攻撃を受けつゝあり、ニューギニアまた然りであります、かくのごとく優勢なる航空兵力をもつて強引に來攻する敵に対し各地の同胞は皇軍と共に克く戦ひ続けてゐるが、次はわが本土へまたミンダナ

が必要である。尚又報国隊員の熱意を更に有効に作業に反映して成果を収めるためには、本部役員の絶へざる頭指揮と有効適切なる臨機応変の措置が肝要であることはいふ迄もない。」

12 日系ダバオ移民への鼓舞

「ダバオ新聞」の社説は、日系ダバオ移民に、檄をとばす。こうした檄がいかにも無意味なものであったかは、過去になって鮮明に知れる。当時、移民たちは、この檄を心の支柱にしたのかも知れない。

戦局は悪化の一途を辿っていた。

「社説／戦局の要求するもの／戦局は新たな相貌を呈しつつある。本年をもつて決戦の年とする敵の呼号は文字通りであつた。欧州において勝負をつけに出た敵は、太平洋においてもまた大侵攻に出た。欧州作戦のために敵の太平洋作戦が妨げられるものではないことは、われらの指摘して置いたところであるが、果せるかな敵は敢然両面作戦に乗り出した。／敵が長期戦をもつて勝手悪しとすることは、今ではすでに世界的常識になつてゐる。従つてこゝでその点を説く必要はないが、要するに、米も英もともに長期戦に堪へないのである。ここで、北仏への上陸作戦の如き即戦即決の大冒険に出でざるを得なかつたのである。太平洋においても同断であつて、敵は明かにわが鼎の軽重を問ひに出たのである。もとより敵が如何なる行動に出やうが、われわれはそれを意外とはしない。また戦局が如何に凄愴に彩られやうがわれわれはそれがために動ずるものではない。しかしながら、今現にわが内南洋に展開されてゐる戦局の重大性は、日本国民として飽くまでもそれを把握しなくてはならない。そしてその上に立つていよいよ決意を固めてこの難局を戦ひ抜くべく行動しなくてはならない。／戦ひ抜くべく行動とは何か。遠きにそれを求める必要はない。国民各自がその持場／＼正しく強く立てばよいのである。一奇な

しといへどもそれは決して容易ではなく、さうすることが出来ればそれで事は十分に足るのである。大戦争が世相を跋行的にすることは敵味方を通じての現象である。しかしながら各人が正しく強く各持場に立つことによつて、現在の状況を改善せしめ得る範圍は非常に広い。この戦争が容易ならぬであることはいふまでもない。従つて国民に要求されてゐることが絶大であることこれまたいふまでもない。しかも刻下の戦局は国民に対して全幅の力を今出すことを求めて止まないのである。

どうあつても国民はその要求に応じなければならない。国民が一人の如くに奮ひ立たねばならぬときが来たのである。⁽¹⁰⁾」

13 日系ダバオ二世の学童疎開

「学童疎開へ 夏休み繰上げ あす、ダバオ国民学校／ダバオ国民学校では例年七月二十日から始まる夏休みを今年は疎開のため特に繰上げて九日から休業に入る、敵機動部隊の出没と航空機の行動半径を考へ、東隣りのサイパン島の激闘状況或ひは九州西部及び北部に対する侵攻等を思ひ併せるならばダバオ旧市内の如き爆撃目標となる市街地に多数の学童を集めて置くことの可否は論ずるまでもない、ダバオ、ダリアオン両校を初めデゴス或ひはミントル、ラサン等の諸校でも真剣に児童の疎開を考慮すべきであらう、出来れば遠隔の地に於ける分教場の設置も促進されて然るべきである、八月三十一日までのこの休暇は従来の夏季鍛錬期に止まらず、疎開転校のための準備期間でもあることを父兄が十分認識して両手を差し延べて迎へる山地の学校に帰るなり親戚知人の伝手を求めて適当な所へ転校するなり万一の際に悔いすることのない体制を整へねばならない。⁽¹¹⁾」

10 古川義三の「九死に一生」の奇遇

古川拓殖株式会社の古川義三は、一九四四（昭和一九）年当時を回顧して、つぎのように語っている。古川の時代のよみの深さと、洞察力の鋭さがうかがえ知れる。

一九四三年に「漸く産業戦士派遣のため大洋丸が用意されたので、古川拓殖では早速著者を筆頭に合計八名の乗船を申し込んだ。出発準備のため芦屋の自邸に帰っていたところ、板倉恪郎常務は政府との折衝に東京滞在が必要だったので、著者の乗船を取り消した。著者は不本意ながら他の七名を五月五日宇品港に見送ったが、大洋丸は八日夕刻五島沖で敵の潜水艦に撃沈され、板倉氏以下五名が戦死し二名が救助された。古川拓殖の姉妹会社大同貿易からは一七名乗船したが、中村直三郎氏以下一三名が戦死し、救われたのは僅か四名であった。若し著者が東京に住んでいたら乗船を取消すことはなかったであろうが、芦屋に住み支度に戻ったばかりに危い所で一命をとりとめた。また著者は一九四四（昭和一九）年ダバオからマニラに飛来し、二月一日から同市に滞在していたが、大本営情報部の発表は何時も勝った朗報であったに拘らず、事實は連敗で、段々追い込まれて九月一日には遂にダバオを爆撃せられ、マニラの爆撃に近いことが明かであった。翌二日松本勝司副社長は古川拓殖マニラ支店詰社員を代表して、著者に対してそのうちマニラと日本とは音信不通となることは必定であるが、かくては社長のマニラ滞在は何の役にも立たぬ、フィリピンの事は我々が引き受けるから、日本内地には関係者の家族も多いことであるし、この際早く日本に帰ってその相談相手になって欲しいと、三日、四日にかけて切に勧告するので遂にこれに動かされ、偶々ダバオが爆撃されたためスラバヤに行けないで、マニラから日本に引きかえす海軍水上機があったので、五日朝キャビテからこれに便乗して帰朝した。戦争中フィリピン在留日本人の受

けた惨害を思えば、著者は真に九死に一生を得た訳である。⁽⁸⁾

11 「勤労報国隊」

「勤労報国隊と改称 総進軍を開始／国防勤労・態勢を大強化／米の総反攻途上比国のもつ重大性は昨紙掲載の海軍最高指揮官の海軍記念日講演においても明らか⁽⁹⁾の如く、今や全同胞の総力をこの一点に集中してダバオ基地の大強化に邁進すべき時、日本人会では廿九日夜勤労隊関係者並に商社代表の参集を求め、これが一大強化策に關して真剣な討議を行つた。／欠席者も六時半集合／席上加藤日会長より事態まことに容易ならざるに鑑み、さきに同胞の勤労奉仕を日曜及び水曜の週二回としたのであるが更に勤労隊を再編成して全員洩れなく参加し得るやう対策を講じて行きたいと述べ、先ず各商社代表より各社の奉仕出勤状況を聴取して今後の対策を研究した結果、各社でも従来とも出来る限り奉仕せしめてゐるが、今後とも緊急止むを得ざる場合を除いて水曜日も日曜同様一切の事務を停止して全員出勤する熱意を見せ、更に当直その他のため出勤不可能なものと雖も当日は午前六時半必ず国民学校に集合し、欠席理由を係員に告げ奉仕隊を見送つて後散会するよう決定した。／出席人員を前日報告／又出席者の事前報告も行はしめることになり、各隣組長は出勤人員を調査して之を防護団⁽¹⁰⁾分団長に報告、分団長は各分団内の出勤数を取纏めて奉仕日前日午後四時迄に日本人会に報告することになり、又出欠点呼も復活することになった、尚勤労隊の再出発に当りその名称も『勤労報国隊』と改称、加藤会長を総司令に推戴副司令以下各役員も決定、今後日曜水曜の両日は市内全員出勤するは勿論、各旅館止宿者その他の一時的市内滞在者も原則として必ず出勤せしむるやう申合せた。／かくて熾烈の決戦に対応する同胞の勤労態勢は茲に一段と強化されるに至つたが、鎌、砥石等用具の整備についても対策講究が必要であり、更に食糧問題についても顧慮

心を偲ぶ大臣の臉はうるんでゐた。腰まで達する草を分けて麻畑に入り牧田軍政支部囑託の説明を熱心に聴いてゐる葉を、茎を手にとつて『織物ならんのか、出来たらよいのだがな』などと語つてはいつまでも引返そうとしない、多年同胞の心魂を打込んだ開拓のいかに困難であつたかを感慨深げに思ひ耽つてゐるのであらう、夕日は早くもアポの峯に隠れやうとしてゐる、促されて漸くみこしを上げ夕宵迫る宿舎に引返した大臣青木さんは疲れもいとはず静かに次のように語つた。／麻山を見せて貰つてとても嬉しかった、麻といふものはどんなものか初めてわかつた、百聞は一見に如かずである、麻を挽く工場も見せて貰ひたかつたがけふは日曜でだめだといふことで残念だつた、とに角ダバオの麻は南方の重要産業の一つであるが、裸一貫で来た同胞がよくもこれまで築き上げたものとその労苦に対して敬意を表したい、／一寸あれだけ眺めただけでもいかに苦心が多かつたか十分に察することが出来るのである、全□先覚者の苦心経営に頭が下る、けふダバオに着く前飛行機から麻山を見やうと思つたが予備知識がないのでよく分らなかつた、けふ□□教へて貰つたからあすはよくわかるだらう、その□りで上空から同胞の苦心の結晶である麻の波を見せて□□□□と思つてゐる、比島小学校ならびに教員訓練所を見て彼らがなんとかして日本を理解することに努めてゐるのを十分に□□□□ことが出来た、なに□□日本を正しく理解させることが大東亜共栄圏建設に最も大切である、軍政当局があれ程熱心に指導してゐるのだからよく行くと思ふ、ジャワでもセレベスでも日本語教育は進んでゐて、むづかしい漢字まで教へてゐる、ダバオでは片仮名一本槍でやつてゐるが、本当はこの方がよい、南方原住民にむづかしい漢字を教へるのは考へものだ、内地だつて、日本語の充分わかる児童にさへ初めは片仮名を教へるぢやないか、むづかしい漢字を教へる代りに片仮名を徹底的に教へこむことが日本語教育上一番大切なことと思ふ。／ダバオは英領や蘭領と違つてよい家が少いね、ジャカルタでもマカッサルでもオランダ人は大きな邸宅を構へて威張つてゐた、日本人の腰かけ主義もどうかと思ふが、蘭人や英人のやうなやり方では原住民はついては来ない、又ダバオの椰子は蘭領各地に比べて皆若くて元気よく伸び／＼してゐる、椰子産業の将来性も大したものだが、何といふか、新生比島といふに相應しい若々し

さが溢れるを、これからは麻のほかにもどし／＼重要産業を起さねばならないのだが在留同胞が今迄の経営を土台にして一層の努力を望んでやまないのである。⁽⁶⁾」

9 “教育報国”の幻想

「ダバオ教育界に画期的強化期待／現在ダバオにおける学童総数三千名に対し教員総数は七十六名であつて、教師一名に対し生徒四十名に当り、教育上決して榮な数字ではないのであるが、更にこれが十一校の多くに分れてゐることは教育上の困難を倍加し教員不足は深刻な悩みとなつてゐたものである。今回十九名に上る教師を内地より迎へ、退職者八名を差し引いても総数八十七名の陣容を整備したことは、ダバオにとつては正に旱天の慈雨ともいふべきものである。かくて従来の複式教授は殆ど一掃され、又懸案の青年学校問題も解決の端緒を得たことになり、ダバオ教育界は正に画期的な強化を來したものと云へやう。しかし従来校長代理として繁忙な事務に悩まされてゐた各職員は、今回正式に有為の校長五氏を迎へて、子弟教育に専念出来るやうになつたことにも吾人の期待は大きい。／何れにせよ皇軍上陸以來約一年半、戦後桑滄の際にも拘らず教材の不足その他あらゆる不便を克服して教育報国に涙ぐましい精進を続けて來た教職員の努力によつて、今やダバオ教育界は面目を一新して將に一大飛躍を遂げんとしてゐるとき、新進有為の教育家十九名を加へたことは、決戦下三千を数ふるダバオ第二国民にとつてこよなき喜びであるとともに、従来⁽⁷⁾の教職員は更に更に體驗を生かし新任者は母国出發に際して抱いた決意をそのままダバオ教育界に注入して、ともに教育報国に挺身すべく同胞の期待はまことに大きいである。」

音と爆風を感じた、ざーッ！と云ふ物凄ひ音をたてゝ友軍機が收容所の間上を通過した、アカシヤの葉はバラ／＼と飛び散つた。／＼この惨虐／＼此の時血に狂つた監視兵らは收容所に向つて乱射し初めた、一瞬階下の邦人五、六名が鮮血にまみれてぶつ倒れた、地底に引き込まれるやうな苦しい呻き声『しつかりせよ』と励ましてゐる同胞の悲痛な叫び！／＼吾々は張りさけるやうな激情の中に身をさらし、精神の混乱のため、其の後に於ける時間的感覺は頭からふつ飛んでしまつたが、其の後も友軍機は共同墓地付近を襲撃してゐた。飛行機の爆音を身近かに感じたと思つた瞬間には、外の監視兵らは所かまはず收容所に向つて兇弾を浴びせた、階上にうづくまつてゐた記者は何時頃であつたか、ふと階下を覗くと、おゝ非道、何たる惨状ぞ、階下收容邦人は血の毛布にくるまり、其の中に数十名の重傷者がのたうち廻つてゐるではないか、断末魔の水を求むるもの、妻を子を、友を呼ぶたへだへの声、皇軍の来着近し、今暫しの辛棒だ、苦しくとも頑張つて呉れと、血涙をしぼる激励の声、身の毛もよだつ凄惨な地獄図だ！／＼おゝ皇軍来れり感激の邦人救出／＼かくて皇軍の来着を待たずして全滅の悲運に陥るのではないかと思はれた、壁を押し破つて難を逃れんにも、外は雲集し来れる米比軍の重囲下であり、身に寸鉄を帯びざるわれ等、如何とも施す術もなく、唯ひれ伏して敵の兇弾を避け、皇軍の来るを待つ外はない、もう暫くだ、銃声は次第に近まつて来たぞ、氣をおとすな、最後の頑張りだ……苦痛を訴へて水を求むる傷つきし友をかかへて、無念の涙を呑んだ、苦しき息の中から妻子の身の上を頼んで次々と息を引きとる者あり／＼『天皇陛下万歳』と最後の声をふるつて息絶へた健気な日本男子あり、そばで聞く者ひとしく腸をえぐられる思ひだ。／＼とかくするうちに、外の混乱は一入激しさを加へたと見ると監視兵らは收容所目がけて一斉射撃の様子が窺はれた、危機一髪、此処に全邦人枕を並べるかと思はれた此の時、天なるかなサンペドロとクラウジオ街の交叉点の方向に當つて、けたゝましい機銃の音が聞へた。と同時に監視兵らは銃を棄てゝ一散に逃げ出した、皇軍が来たのではないかと息をこらしてゐる所へ／＼『日本人はゐないか！』／＼『日本人はゐないか！』／＼といふ声が聞へ戦闘姿も凜々しき皇軍の姿が目前に現はれた。／＼『ウワーツ』とあがる喊声場内の邦人は壁を押し破つて外に雪崩れ出

で、狂喜の如く手を打ちふつて万歳を絶叫した、あゝわれ等は今待望の皇軍に救はれたり。／註リバンキーロ闘鶏場に於る収容人の犠牲者は現場廿三名、重傷のため後病院にて死亡せるもの五名、計廿八名、其他重軽傷者廿四名、死傷者合計五十二名の多数に上る。⁽⁵⁾」

8 東条内閣の青木大東亜大臣のダバオ訪問

一九四三（昭和一八）年、現職の大臣がダバオを訪問している。きわめて無責任な談話を残して、大臣は去る。だが、日系ダバオ移民は、大臣の「ことば」を信じる以外になかったのであろう。

戦局は、心ある者には「みえていた」のであるが。

「大臣初のダバオ入り／開拓者の苦心を偲んで 青木大東亜相の瞭るるむ／東条首相がマニラへ飛来し東亜共栄圏建設に更に前進を促して帰朝するのと相前後して、かねて南方視察の途にあつた青木大東亜大臣は九日ダバオを訪問、現地諸機関を視察して比島民衆に多大の感激を与へ、殊にわが同胞の多年にわたる麻山開拓の辛苦を偲び先覚者の功績を讃へたことはわがダバオの地にとり意義深いものがあつた。／○日、青木大東亜大臣は○飛行場に下り立つや出迎への現地陸海軍部隊長、森本軍政監部支部長、沢田憲兵分隊長、小川日本人会副会長、州知事代理モヒカ検事、オボサ市長らにバナマ帽をとつて叮嚀に会釈をなし休憩場にて出迎への人たちの挨拶を受ける、随行の大東亜省参事官今井武夫少将は一年前のバタン戦に重要職を務めた人、久しぶりの比島入りに思ひ出深さふである。／（中略）／麻山経営を土台にして更に重要産業へ邁進を 青木さん、同胞へ要望す／この視察はこの日の予定になかつたのであるが、ダバオに来て麻山を見ないではとの大臣のたつての望みでラバンダイ耕地に向つた、ダバオ河を一望に見下ろす高地に立つて沿岸一帯に波打つアバカのうねりを眺めながら開拓者の苦

に身を処する在留同胞は、一面戦争に対する盤石不動の心構へをもつと共に、一面建設部門に力を致し、戦争遂行に万遺憾なからしむる国民的自覚がなくてはならぬ／開戦一年にして確保せる大南洋圏は、之を戦略的に見た場合、絶対不敗の堅陣を布くものであらうが、其の反面に此の広域を死守して敵に寸隙を許さざる皇軍の労苦は、蓋し言語に絶するものがあり、更に暴虐なる敵の惨禍を蒙つた之等占領地域の再建は戦争と併行して進められねばならぬ、世界の宝庫を以て任ずる大南洋の資源も、開拓して初めて宝庫たり得るのであつて、総べては之からだ、而も戦は今漸く第二段階に入つたばかりである。日本は武力、生産、建設共に長期持久戦に備へ、完全に大東亜戦争に勝ち抜かなくてはならぬが、それには一億国民挙げて戦場に臨むの覚悟と、烈々愛国の至誠を以て一億の総力を傾け尽くさなくてはならぬ。／茲に思ひ出深き皇軍ダバオ上陸一周年記念日を迎へ謹みて護国の英霊に感謝の誠を捧げ、日夜力戦敢闘しつゝある皇軍将兵の武運長久を祈ると共に、吾等殉国の決意を誓ふものである。⁴⁾」

7 アメリカ軍への罵声

「宛がらの生地獄―／天人共に許さざる米比軍の惨虐行為／バンキョロ闘鶏場に於ける邦人掃射事件／皇軍ダバオ上陸の十二月廿日、バンキョロ闘鶏場に於ける監禁邦人に対する敵米比軍の残虐行為は、大阪貿易住宅に於いて行はれた大虐殺事件と共に、当時二万在留同胞の血を逆流せしめた二大不祥事件であり、人道の仮面を被る暴虐米の正体を白日の下に暴露せるものである。／けふ一周年記念日を迎ふるに当り、記者は同闘鶏場に監禁の憂目を見、此の日身を以て此の凄惨極まる地獄の相貌を体験した一人として、静かに瞑目当時を追想すると共に、米比軍の兇弾に斃れ逝きし同胞の霊に熱涙をふるつて敬弔の誠を捧げ、衷心冥福を祈る次第である。／監禁状況

／バンキーロ闘鶏場に於ける收容邦人は、マンピシン、タグナナンを初め其他の東海岸に留邦人が大部分を占め、それにバンカス方面の人々が多少收容され、總計三百名であつた、われ／＼は周囲をバナマの壁でかこつた闘鶏場の階上階下に文字通り鮪詰に押しこまれ、恐らく市内に於ける收容所として最悪の場所であつた。／其の前夜／十九日の夜はいつになく收容所の周囲には煌々と電燈をともし、十三、四名の監視の比兵が号外やうのものを広げて読んでゐたが、彼等の様子がなんとなく変であり、明らかに狼狽の色が看取されたので、或は皇軍が間近に迫つてゐるのではないか、或は又何か不吉な事が起こるのではないかと、一同不安の氣持をいだきながら、いともなく寝苦しい床についた。／快報至る／明くれば廿日、早朝五時半頃、毎日のならはして洗面、用便のために大勢の邦人が屋外に出やうとすると監視の比島兵は銃剣を擬し血眼になつて之を制止したとかくするうちに六時頃、赤十字の腕章をつけた衛生兵が、あはたゞしく表に自動車で乗りつけ、真つ青な顔して、『日本軍が上陸した！』と叫んだ、瞬間われ／＼は救はれると云ふ喜びと息詰る興奮とを覺へた。／皇軍上陸の飛報一たび至るや、比島兵らは一斉に呼子を鳴らしてどよめき立ち壁の周囲から銃剣をつきつけて威嚇『日本軍が上陸した、お前等はこの中より一步も出ることはならぬ』と命令し、外側より嚴重に釘付けした。／自働車、トラツクは急スピードを以て右往左往し、周囲は忽ち叫喚の巷と化した。バンキーロ十字路あたりで『日本軍がササに上陸し、今兵舍付近まで進撃してゐる』と誰かのわめく声が聞える、吾々は身震ひしてじつと外の様子を窺つた、比島兵は監視隊長（少尉）の命令で全員收容所を包囲の態勢をとつた。／友軍機襲来／六時半頃やゝ静かになつたので、敵米比軍は我が軍に降伏したのではないかと話し合つてゐたら、『話をし、又は頭を上げる奴は容赦なく撃つぞ』と外から監視兵が呶鳴つた、そこへ飛行機の爆音が聞へて来たと思ふ間もなく、地軸を揺がすやうな爆弾の音を間近に感じた、頭を少しあげて外を見ると、監視兵らはアカシヤの根下に蟬の如くへばりついてゐるのが目撃された、友軍機は元オートバス会社の付近に急降下爆撃を加へてゐる、大胆にも友軍機は屋根もすれ／＼と思はれる程の低空飛行をなし、逃走の敵に機銃掃射を浴びせてゐるらしい、吾々は無我夢中の裡にも、耳をつんざく爆

隊は、果敢敵中を突破して午後五時遂にダバオ市内に突入、まず末広町（元病院通り）支那人小学校に監禁中の邦人婦女子を救出、次で比人小学校、ハイスクール、日本人小学校に監禁中の邦人約一万五千名を無事救出、主力部隊の到着と共に直ちに市内掃蕩戦が各所に開始された。／皇軍救出の感激はよく筆紙に尽し得る所に非ず、聖なる哉皇国、偉なる哉皇軍の感激と感謝に同胞等しく涙の万歳を唱へ涙の君ヶ代を奉唱した、午後五時半日の丸も鮮かに皇軍の戦車見ゆとの報に、全邦人一斉に狂喜総立ちとなり、速製の日章旗を打ち振つて皇軍を迎へ、又棍棒を手にして監禁所より躍り出で、軍を誘導案内して敗残兵掃蕩に協力し、或ひは市内より車輛を集積修理して兵力輸送を援助する等涙ぐましき協力をなした。しかし監禁所前面に逃場を失つてなほ頑強に抵抗し、邦人収容所に向つて非道にも機銃の斉射を浴びせて多数の同胞を殺傷した敵兵を殲滅すべく、身を挺して敵中に躍り込み遂に名譽の戦死を遂げた上野校長以下の武勲は、遂に敵機銃二基を分捕つて我が同胞の危機を寸前に救つた南方挺身隊の勇士の奮戦と共に皇軍上陸戦の蔭に咲く武勇伝として後世に語り伝へらるべきものであつた。／更に吾人の憤激の涙を注がせたのは、大阪貿易に於ける河野君以下のも悲惨な虐殺事件であり、ヌバンケロ闘鶏場に於ける五十数名の大量殺傷事件であつた。去年のけふ、皇軍入城の涙の感激をよそに、鬼畜に劣る暴虐なる米比軍に手足を縛られて煮湯をかけられ、滅多切りに切りさいなまされて、若き生命を絶つた十青年を想起する毎に、米英撃滅の新たな決意をわき立たせるものである。かくて皇軍上陸を前に空しく散つたもの、合せて五十余名に上つた、けふ皇軍上陸一周年に際し、軍戦死者並に同胞犠牲者の慰霊祭執行せらる、吾人は救出当時の感激を新にし、その霊前に深き感謝を捧げるものである。／市内掃蕩戦は夜に入つても尚続けられ、敗走する敵兵の放火によつて一面火の海となつたサンターナ方面の空は紅蓮の焰天□沖して紅に映へ、又銃声頻りにして凄惨を極めた。我ら同胞は十数日に亘る監禁の苦難も今は全く忘れて、警備に使役に夜を徹して軍に協力した。／嗚呼同胞がこの地に足跡を印してより四十年、待望の日章旗はダバオの空高く飄つたのだ。事毎に米比政府の圧迫に抑へられて伸びんとして伸び得なかつた苦闘の開拓史を心静かに顧み空高くひるがへる大日章旗を、又眼前

を靴音高らかに進みゆく皇軍勇士の姿を拝する時、誰かあのこみ上げて来る感激の涙を抑へ得るものがあつたらう、来るべき日は遂に來たのだ、けふ再び巡り來つた記念日に、同胞の一人びとりが男泣きに泣いたあの日の感激を喚び起し喚び覺まして、日本人としての聖戰協力に果して欠くる所なきやを静かに反省し、以て更生せる皇国臣民としての御奉公に邁進する事を茲に固く誓はうではないか。」

6 勝利を信じる日系ダバオ移民

「社説／皇軍上陸一周年を迎ふ／けふ十二月廿日は、われ等二万在ダ同胞にとり、終生忘れ得ざる感激の日だ、米英撃滅の大詔渙発せられてより、二週間、南海の波を蹴つて我が無敵皇軍は此の朝堂々ダバオに敵前上陸を敢行し、輝く大日章旗を打樹てたのであつた、あゝ想ひ起す一年前の今日南比の敵拠点ダバオの攻略を目指した我軍は至妙周致なる作戦の下、一団は北方バナカン海岸に晝闇を衝いて上陸し、一団は西南方タロモ沿岸に精兵を進めて一挙ダバオ挾撃の態勢をとり群敵を蹴散らして怒濤の進撃を続け、同日午後五時早くもダバオ市内に突入、領事館員以下敵監禁の同胞官民を無事救出すると共に一日にして市内掃蕩戦を完了するの大戦果を挙げた、われ等は一年前の此の日を追憶する時、感胸に迫り感激亦新なるものがある。／かくて過去四十年に亘り東洋を蝕みし星条旗はダバオの空から姿を歿し、一変して旭日旗はためく御代とはなつたが、其の後続いて行はれたミランダナオ○定作戦に、齟敵は幾許もなくして我が軍門に降り、治安日に進み、万民賭に安んじて軍政下各般の施策は着々として進捗し、逞しき比島再建の相貌を顕現しつゝあることは、大東亜共榮圈確立の爲め洵に喜ばしき次第である。／然しながら纏つて大東亜戦争の現段階及び其の将来に思ひを馳すれば、皇国の前途容易ならざるものありわれ等一億国民は愈々必勝の決意を固くし、征戰完遂に邁進すべきを痛感するのであるが、□□第一線

4 日本軍の奇襲上陸

一九四二（昭和一七）年、日本軍はダバオへ上陸する。当時の「ダバオ新聞」は、その様子をつぎのように報道している。

「払曉奇襲上陸成功／頑敵粉碎一挙市内突入／皇軍ダバオ上陸一周年！ 去る八月大詔奉戴満一ケ年を迎へ、米英撃滅の新たなる決意に燃へて聖戦第二年を戦ひ抜き勝ち抜かんとする在ダ二万同胞にとつて、生涯忘れ得ざる感激の日けふ十二月廿日、吾人はけふいみじくも『ダバオに日章旗飄へるの日』を迎へてあの日あの時の胸迫る感激を新たにすると共に、心静かに皇軍勇士の奮戦を偲び、護国の英霊と、待望の皇軍上陸の砲声を身近くに聞きつゝ、米比軍の暴虐に斃れた同胞犠牲者の霊に、無限の感謝と深き哀悼の誠を捧げやう。／非道暴虐極まりなき米比軍に無念の齒ざしり十三日、二万の監禁邦人に遂に待望の救出の日は来た。開戦以来僅か一旬、ハワイにマライに比島に、瞬く間に赫々緒戦の大戦果を拡大しつゝあつた皇軍は、西太平洋の敵重要拠点、南部比島の要衝ダバオを占領すべく、早くも〇〇？ 〇〇隻より成る堂々の大船団を連ねて基地を發進、針路を西に南海を圧して航進を続け途中蠢動の敵潜水艦を撃沈戦陣の血祭にあげ、ダバオに於ける監禁邦人の待遇愈々最悪の状態に直面せる十九日既にミンダナオ島東岸に肉薄、同夜目指〇〇〇オ湾口に肅々として突入してゐたのであつた。／幸ひなる哉同夜海面鏡の如く、アポ山麓一帯の陸影は恰かも眠れる巨象に似て黒く静かに横はり、敵の油断かダバオの町には煌々たる燈火点在し、我が陸海將兵早くも上陸成功を確信、戦はずして敵を呑むの慨あり、一団はタロモ正面へ、主力はサマル島を迂廻してテブニコ沖へ、午前二時威風堂々泊地へ進入した。／戦鬨準備全く完了せる皇軍の第一回上陸は、二十日午前四時、ダバオ北方パナカン、南方タロモ両海岸に於て陸海軍の水も洩ら

さぬ緊密協同の下に開始され、敵の虚を衝いて南北とも見事に成功、茲に皇軍はミンダナオ島に輝く第一歩を印し、日章旗は燦として椰子林の中に打ち立てられたのである。／＼緑三星の上陸成功の信号と共に『ダバオ湾岸に奇襲上陸』の第一報は、電波に乗つて漆黒の太平洋上を遙か北に向つて飛んだ。第一回上陸部隊の上陸地点確保に続いて、後統部隊も続々到着、南北相呼応してダバオ挾撃の態勢全く完了し、午前六時海軍艦艇の一斉砲撃と海鷲部隊の猛爆撃開始と共に、未だ明けやらぬダバオの空に向つて黎明攻撃の火蓋は切つて落された。／＼虚を衝かれて周章狼狽、敵陣は早くも大混乱に陥り首脳部は逸早く山越へに逃亡したが、一千五百と推定さるゝ敵の大多数は我が挾撃に逃場を失ひ、指揮統制全く紊乱しつゝも尚ほ多数を待んで死にもの狂ひの抵抗を開始し、北はサ、方面南はマテナ高台を最後の防衛線として頑強に抗戦して我が進撃を阻まんとした。／＼我が主力部隊は黎明と共に先づサ、飛行場を急襲七時廿分之多を完全占領、続いて兵舎付近の陣地に拠る敵主力と激烈なる戦鬪の後之を撃滅、錯綜せる密林、断続する湿地等困難なる地形を克服して午後四時兵営台上を奪取してダバオ市突入の態勢を完了した。一方タロモ上陸の我精銳はダバオよりタロモ街道沿ひに逃亡せんとする敵をマテナ付近に待ちぶせて之を潰滅せしめ、ダバオは全く孤立の状態に立ち到つた。⁽²⁾」

5 日系ダバオ移民の犠牲者

侵略の戦いのなかで、日系ダバオ移民もまた犠牲者となつた。犠牲者は、*“天皇の赤子”*であつた。無意味な叫びを、当時の新聞は綴る。空々しい記事である。だが、精一杯の叫びでもあつた。戦争の悲劇が、逆映しにみえてとれるのである。「皇国民としての御奉公」を信じてやまなかつたのであろうか。幻想の叫びでもある。

「吾ら救はれたり！／＼あゝ同胞の犠牲五十余名／兵営付近の敵動揺するや北方上陸部隊の自転車隊及び装甲車

市、第三位がダバオ市を除くダバオ州である。／比律賓の邦人を語るには、先づ最初にダバオ邦人に眼を止めなければならぬ。而してそのダバオの邦人に就いて、語るべきは麻の栽培事業である。この麻栽培事業を基礎づけたのは明治三十七年太田恭三郎に率ゐられてダバオに上陸した一団である。現在ダバオ日本人の八十パーセントは麻栽培に係り、ダバオの最も有力なる麻会社はこの太田氏創立の太田興業会社と、その後設立された古川拓殖会社がある。ダバオ州生産の麻は比律賓全生産量の三十五％に当り、四十四万俵であるが、此の内約三十五万俵は邦人の手に成るものである。又其の輸出に関してはダバオ港から積出される麻の七割五分は邦商に取扱はれてゐる。其の他栽培業としては麻に代るものとしてラミーや棉花の試作がなされ、古川拓殖では従来麻、コブラの栽培が主であつたのを改めて、最近ではデシケイテッド・コナツトを作り菓子原料として米国へ輸出しつゝある。ダバオ市の北部地方には三井系統のタゴン商事と古川拓殖系統のテブンコ木材の両林業会社がある。／水産業もマニラ同様日本人の独壇場で、鮪、鯖、鳥賊等の漁獲高は年二十五万比をあげてゐる。ダバオ工業は一般に幼稚であるが、邦人経営のものとして古川会社のデシケート工場及製氷、ダバオ商事の清涼飲料水工場製氷、鉄工業があり、これも日本人の独り舞台である。ダバオに於ける邦人小売商の数は圧倒的で、比島人と殆ど同数の三百余の小売商店がある。又支那人商店は数に於ては其の倍を有するが、個々の資本金及売上高の点に於て邦人は遙かに優り、一九三六年に於ては販売高の六割三分を邦商が占めた。之に對する華僑の日貨排斥運動は従来比較的穩便で種々の裏面的策動はあるが、表面的には取立てて問題とする程の事もなかつた。／マニラ在留邦人四千人中、最も多いのは会社員、商店員の千五百人、次で漁業従事の千二百人である。此の商業方面に於ける日本の代表的商社は大同貿易、大阪貿易、三井物産、三菱商事。金融機関としては正金銀行、台灣銀行の支店がある。／市中にはマニラ銀座と言はれるエスコルタ街のニッポン・バザー、イデアル・バザー等の二百百貨店をはじめ三十余軒の日本人商店があつて何れも日本製品を取扱つてゐる。／マニラの邦人漁業者は主に広島県人と沖縄県人である。その年漁獲高は三百万比と云はれたのであるが、一九三二年制定公布された漁業法により外

国人の漁業は禁止方針を採つてゐるので、折角の邦人漁業も最近は余り振はない。／マニラ付近の山嶽都市バギオはマニラの避暑地であり、其の近傍所在の十数の大金山会社に働く労働者を相手とする商業都市である。これを中心として千三百人の邦人が居るが、その内四百人程はトリニダット村に玉菜を主とする野菜栽培を行つて年産四十万円以上を挙げてゐると云はれる。比律賓人、支那人の農業者も多いが、此の方面では日本人が群を抜き総産額の約七割は日本人農業者に依つて供給されてゐる。市場は大部分マニラ市である。又大工、機械工で付近の金山会社に働いてゐる者許りでも二百余名に及んでゐる。／その他多数の在留邦人を擁するものにセブ及びイロイロがある。セブの日本人四四〇人の活動分野は土地柄多くは商業方面で、輸出入商社も数軒あるが、小売商、日本人バザーが集団的に栄えてゐる点では比島随一と云はれる。其他は林産業、鋳業に従事してゐる。／比島の邦人に就て、特記しなければならぬのは従来貧弱であつた製造工業方面の發展が、最近急速に伸展しつつあることである。其の主要なる製品は、菓子、メリヤス加工、織布、ゴム靴、自転車製造等で、此等は相当大資本を以て、数千の比律賓人労働者を使い、近代的な經營法が行はれてゐる。その代表的のものにマニラにオーラツカ製菓会社、金貨莫大小会社がある。／比律賓の各地日本人会は極力第二世のための小学校經營に腐心してゐる。一九三八年現在に於ける比島の邦人小学校（高等小学校を含む）の数はダバオに十二校、マニラ、バギオ、イロイロ、セブおよびビコールに夫々一校、合計十七校となつてゐるが、右十七校に於ける生徒数合計二千七百名、訓導数合計百名、所要経費は年額約三十万円に達してゐる。最近ダバオ日本人会に於ては在留邦人第二世に高等教育を施す一方法として中等学校建設を準備中であるといふ。⁽¹⁾

ス近くでバナナを焼いて食べているとき、知人が私を見つけ、第二人が比軍に殺され、母はそのショックで死んだことを詳しく話してくれました。しかしあと三人の弟妹がいますので心配でした。だが知人は「君の命も危いので、早く身を隠すように」と強くすすめましたので、海辺にあった小舟で逃げるようになりました。暗くなるまで草の中に隠れていました。小舟にはカイと水がつんであるので心配はなかった。

夜には私はその小舟で海に出て、母や弟妹のことを思い出していました。やがてデゴス沖を離れ、翌日サマール島近くにつき、私はどこに住んだらいいかと心配しました。サマール島に上陸し、私は砂浜でたき木を集め、火をたきバナナを焼きはじめたとき、モロ族の一人が近づいてきました。年輩のモロ族は私を家にさそい、そこで一緒に住むことになりました。

私も朝早く起き、空いた畑の草を取り、そこにイモとバナナを何本かうえ、それから海へ出て魚釣りをし、生活をしました。

五年間して、私はサマール島の娘と結婚しました。私は三人の弟妹のことを一日も忘れることはありませんでした。私は妻にデゴスまで行かせ弟妹を探すことにした。妻が帰ってきて弟妹が無事なことがわかりました。そのときは天にのぼるよううれしさでした。

しかし日本軍となり戦った私たちへのフィリピン人の反感は強く、弟妹に会うことはむづかしく、八年間辛抱し、やっと再会しました。

今から十数年前、日本より元ダバオ邦人や陸海軍の兵士が、戦没者の遺骨を収集しに来られ、戦後の日本の実情を知らされました。

日本移民やその子どもは日本に送られましたが、フィリピンの島々にはフィリピン人の妻や日系人が数千人が残されていました。一番多いのがミンダナオ島のダバオです。一九八〇年、大勢の協力で、フィリピン政府の認可を得て、フィリピン日系人会が正式に組織されました。

フィリピン日系人会は、日系人の相互扶助、社会的地位の向上、子弟教育援助等の目的です。

フィリピンの日系二、三世は、戦争で父を失い、幸い生き残った父も戦後、強制送還され、一家の柱を失い、その上、反日の嵐の中で、教育を満足に受けることもできませんでした。そんな二、三世を父にもつ子供たちも苦勞の連続です。

一九八〇年、そんな子弟二十三人に日系人会の手で奨学金を出されました。その翌年は十五人でした。しかし、運営費もままなりません。が一九八一年からつぎの活動をすることを決めました。／一、慰霊祭／一、子弟への奨学金／一、簡単な日本語教育

戦後すでに四十年を経ようとしています。その史実を伝えることが出来る人も少なくなりつつあります。日本との交流を求める若い世代に、今日の平和の蔭には、先人の血が多く流れ、苦勞のあったことを知ってもらいたいと思います。また日本はその移民が血を流し、親子が別れ別れになったことを忘れないでほしいと願います。われわれフィリピンにいる残留日系人は、残された人生を両国の友好、発展に寄与する覚悟でいます。」

3 開戦前夜の寸描

一九四一（昭和一六）年、太平洋戦争が始まった当時、ダバオには約九万人の日系移民が生活していた。戦乱は日増しにすすみ、移民者数もその増加率が鈍化した。

一九四一年に刊行された『大南洋圏』によれば、当時のフィリピンにおける日系移民の状況は、つぎのようにしるされている。開戦前夜の状況なのである。

「比律賓邦人二万五千七百七十六人の分布状況は、ダバオ市一万三千九百四十九人が圧倒的である。次がマニラ

昭和十八年、ラサン陸軍飛行場の設営隊に入り、それから海軍へ移りました。海軍軍需部の幼年工です。米軍は、日本軍が作った飛行場を爆撃しました。爆撃は次第に激しくなり、ついに米軍はタロモに上陸しました。私たち海軍は、デゴスの山を越え、谷川を渡り、とうとうアポ山まできました。その時は、食糧も少なくなっていました。また、そこからマッキンレに移動。それからエデンまで食糧を探しにでかけました。

エデンは日本人がはたらかしていたイモなどが残っていましたので、私たちはエデンの谷間に小さなキャンプを作り、過ごしました。

三人の戦友は病氣にかかりました。私たち八人は、分隊長の命令で、下の方にある米軍キャンプを攻撃することになりました。二人はキャンプに残り、私たち六人が四個ずつの手榴弾を腰に下げ、小銃をかついで、無言で谷川を渡りました。

米軍キャンプに近づき、麻山のなかで陽が落ち暗くなるのを待ちました。キャンプの外にトラックが一台、四人の米兵がいたので、それを撃つよう急に命令が下りました。私は手榴弾四個をつぎつぎに投げましたが、一つも爆発しませんでした。幸い米軍は私たちがいる方向と反対側へ反撃を加えていました。そこをそっと離れ、逃げました。

その攻撃は無意味でした。私たちは三発式の小銃、米軍は自動小銃。声を出すわけにはいかず、われわれはバラバラになり、まっくらな麻山なのでどこに道があるのかわかりません。やっと道を見つけ、一人夜道を歩きつづけ、東の空が明るくなる頃、やっとキャンプにたどりつきました。

分隊長が大声で『誰か！』と聞きましたので『萩尾です』と答え、報告しました。その後四人の兵士が帰ってきましたが、一人がとうとう帰ってきませんでした。

その翌日、私たちはマッキンレに上り、マッキンレとアポ山の間の林に隠れました。そこで私たちは手榴弾を調べました。爆発しないのは火薬が濡れているからということがわかりました。分隊長の命令で、私たちはたき

木を集め、たき火をし、服や下着をあたたため、手榴弾を台の上のせ、かんそうさせていました。

イモを焼きながらかわくのを待っていると六メートルほど離れている分隊長のたき火の方で爆発が起こりました。強い爆風のため、私の雷管が火に落ちました。あわてて拾うとそれが爆発しました。その瞬間、気を失いました。身体に痛みを感じ、目を覚してみると、血だらけでした。私の左ゆびが二本が切れていました。横を見ると三人の死体がありました。爆発で人間の形は失われました。分隊長も死んでいました。私は手足に深い傷を受け、はれて何もできませんでした。

食糧のイモもなくなり、傷がくさくなりました。死体もくさり悪臭をはなちますのでたまりませんでした。

不自由な身体で、イモを探しているとき黒人の米兵につかまり、トラックに乗せられ、トリール方面に向いました。トリールの米軍キャンプに運ばれたのです。

トラックをおりととキャンブの外に三人の赤十字のマークをつけた人が立っていました。『建物へ入れ』というので入ると六人の人がいましたが、私が来るとつぎつぎに出て行きました。私の傷がくさったからか、と思いました。

赤十字の人が薬を持ってきて、アルコールを身体に吹きつけながら、いろいろ質問をしました。一人は食べものを持ってきて日本語で『どうぞ食べなさい』といました。赤十字のマークをつけた三人は日系米人だということがわかりました。三人はとても親切にしてくれました。

間もなくして私は、母や弟たちのことが心配になり、日本人の収容所へ行き見つけましたが見つかりませんでした。そこで米軍の許可を取り、母や弟たちがいたトンカラスへ行ってみました。いませんでした。私はまたトリールに下り、翌日デゴスに行くことになり、米軍トラックでサンタクロスまで行き、そこからデゴスまで歩くことにしました。

その頃、フィリピンの反日感情も強く、人目をさけて私は道路を使わず海辺を用心して歩きました。が、デゴ

それを改造して、その家で親子四人が住みました。兄はマラリアで毎日、ガタガタ震うのです。私は三十八度ぐらいの高熱が続き、父は毎日のように医者に薬もらいに通いました。

食物がなく、親せきの家からさつまいもを一俵ずつ持って来ていただいたのです。そのときのうれしさは今でも忘れることが出来ません。

兄も私も元氣になりましたので口べらしでしょう。父は私を父のいとこの家に預けたのです。それから父は安心したかのようにこの世を去りました。

戦争のため私は学校に行くことが出来なかったので、当時の高等小学校一年までしか行ってませんので、あの一年は父のいとこが学校を出してくれる（＝就学させてくれる…引用者補記）という条件だったのですが、いざその家に行って働き出したところが、学校のことは一言も口に出さないので。

私は学校へ行きたくて、なん度、学校を見て泣いたかわかりませんでした。一度、世話になっているおばさんに『学校に行きたい』と私の胸の中を話したところが『日常会話が出来て不自由がない程度に字が読めるなら、学校には行く必要がない』といわれたので私もあきらめました。

その家は店と農業の両方していたので、私は見たこともない日本の農業をそれから習いはじめたのです。麦刈りのとき、私は他の人の半分ぐらいいしかなけないのです。それで『よし、同じ人間だ。腕を二本、指を十本持っていて出来ないことがあるものか』と思い、何でも出来るようになりました。

その家で約十年世話になり、私は兄の家に身を寄せましたが、裕富でない兄のところに身を置くのがつらくて、呉服屋の社長の家のお手伝いさんの仕事を見つけ、住み込みました。

そこで九二年働き、結婚しました。落ち着けば落ち着くほどダバオで過した日々が思い出されます。ダバオで机を並べた友だちの中にはそのまま残留している人がいることも知りました。」

2 ダバオ移民二世の証言(2)——萩尾行利・昭和元年生まれ・ダバオ在住

「私は昭和元年に生まれ、父は萩尾三平、熊本県鹿本郡菊鹿町出身であります。

昭和七年、私はデイゴース日本人小学校に入學し、昭和十三年に卒業しました。卒業する前に父から『お前は、日本におじさんや親類がいるから、日本でもっともつと勉強してほしい』と、いわれましたが、残念なことに、その父が亡くなってしまいました。それで私は母と相談してパダダの隣村のミタライさんの養鶏場に勤めました。勤めは楽しいものでした。ところが昭和十六年十二月八日、午前六時頃、南ダバオ州のマララグ港を日本軍が爆撃しました。

私たち日本人は、比軍の命令でパダダの太田ラミー工場に集められました。ここでフィリピン人に見張られました。二日たつて、私たち日本人は、トラックに乗せられ、ダバオのフィリピン人小学校へ運ばれました。そこは日本人の強制収容所になっていました。比軍の兵士がそこへ入るよう命令しました。

十二月二十日午前四時頃でした。東の空が明るくなっていました。大砲と小銃の音が聞えてきました。私たちは「何か」と思って壁穴からのぞいて見ると、一台の戦車が日の丸の旗をふり進んできました。私たちは『日本軍だ!』と、校庭にとび出し、『バンザイ』と叫びました。日本軍がダバオに上陸してきたのです。間もなくすると、ダバオ市は落ち着き、私たちは自分自分の地区へ帰ることになりました。

私はデイゴースに帰りました。デイゴースのフィリピン人小学校は日本軍の兵舎になりました。私はそこで日本軍の兵士たちと橋の警備などに当りました。ときには比軍の敗残兵と戦ったこともあります。日本人の父をもち、母はフィリピン人の私の気持は複雑なものでした。

御飯はおかゆであつても、探しに出て行かなくても食べさせてもらえるので、そのうれしさは今でも忘れることは出来ません。収容所では病人が続々出るのですが、ちゃんとテントを張って病人を見てくれるだけの病院がありました。

そのとき「姉が今まで持ちこたえていたら助かったのに」と一人で思いました。

トラックに乗せられて、次々ジャングルから出てくる人をまわりましたが、二番目の兄はとうとう出て来ませんでした。悪性マラリアで一晩で死ぬ人もいました。満十四歳ぐらいから下のみなしごはアメリカに連れて行くとのことで、別のテントでした。私の一級下の男の子が妹と二人生き残って、そのテントの中にいたので、私は会いに行きました。そのとき「私も弟と二人ならこのテントに入り、アメリカに行きたいな」と、そのとき思いました。

ひと月ぐらいたったでしょうが、日本に帰るようになり、次々に乗船命令が出ました。私と第二人にも乗船命令が出ました。兄が親子四人と一緒に帰れるようにとだいたい頼んだのですが、男と若い人は収容所のあとかたづけをしなくてはいけないのでダメだということで、弟と私と二人で船に乗ることになったのです。

内地（日本）をぜんぜん知らないのにどうなることかと思いましたが、どうすることも出来ないのです。

十月二十日、ミンダナオ島に別れを告げ、みんな甲板で『さらばダバオ島よ、また来るまでは』と、島が見えなくなるまで手を振りました。船はアメリカの貨物船で、船の中は何もなく、人間が乗れるだけ乗っていました。夜は船の中は電灯もなく真っ暗でした。朝起きると病気で弱っていた人が、あっちこっちで死んでいました。船の中で死んだら船尾から海の中に捨てられると話に聞きました。船の中での食べ物は一食に缶詰が一人、二個ずつ配給があるのです。

海が荒れて船のゆれが激しく、みんなうんうんうなり何も食べられません。私と弟も船に酔い、ぜんぜん食欲がなくなり、配給の缶詰を日本に土産に持って帰ろうと弟と話し、二ダースためました。

十月三十日頃でした。宇品の港につきました。宇品港についたときも、船の中で亡くなった人の棺おけが港に並べられました。上陸したら寒くて寒くて、ガタガタふるえました。熱帯で育った私たちには寒さが骨身にしみるのです。内地の男の人たちが、身体を温めるようにとたき火をしてくれました。兵隊さんの宿舎だったところで、毛布を貸してもらい一夜を過しました。

私は気が気ではありませんでした。夜が明けるのを待って、私たちより一日早く出港したが宇品港に同じ日に着いた人たちの宿舎へ行くことにしました。その船に姉と同県同郡の人が乗っていたからです。

私は、その人が宇品をたないうちに、その人を探さなくては西も東も、汽車に乗ることも知らないのです。朝早く起きて弟と二人で、その人の泊っている宿舎をたずね、やっと探し出したのです。そこで『私と弟を熊本まで連れて帰って下さい』とたのみました。

その夫婦はジャングルで男の子と女の子を二人を亡くしておられました。ところが近所にすんでいて一人生き残った六歳ぐらいの女の子を連れておられました。『ああ、間にあってよかった』と、思いました。それから汽車に乗り、門司港まで乗って、そこでまた汽車を乗りかえなくてはいけないとのこと、駅でわずかな荷物をホームに置いていたら米兵が銃をつきつけ『この缶詰はどうしたのだ』といわれ、通訳の人が『これは船の中でもらったものだ』と話しましたが『これはアメリカの軍隊の食糧であって、こんなにやるはずがない』といって、せつかつめた缶詰も、一人にたった二個ずつの配給となり、弟と二人で手元に残ったのはたった四個になってしまったのです。

それからまた汽車に乗り熊本駅に着くと、かわいそうなことに連れていた女の子が駅で息が絶えたのです。死んだ人は汽車に乗せることは出来ないとのこと、警察に行き、いろいろな手続をし、その死んだ子供を奥さんは背負い、その子供の親の里に届けたのです。私たちも父の里に着いたのですが家もなく、食糧もなく、父の遠い親せきの家で、父と兄の帰るのを待ちました。十日ぐらい遅れて父と兄が帰って来ました。農家の納屋を借り、

出ました。築井さんの姉で加来さんという人で、七歳か八歳の男の子を頭に三、四人の子供がおられました。加来さんの主人は食糧探しに出かけ、米兵につかまり、避難所へは帰って来ませんでした。

生き残っている兵隊さんたちも食糧が無くジャングルを出ました。兵隊さんたちと一緒にしたのでわずかな米をとられないよう夜は姉妹で必死に抱いていました。自分たちが住んでいた村まで出れば熱帯なので、何か食物があるので村の方へ向って歩きはじめました。が、道もないジャングルを歩くので夜は大木の下で野宿をしました。

一度、小さな小屋に泊ることになったのです。その小屋には亡くなったばかりの兵隊さんの死体があったので、私が『ここはいやだ』といったら『生きている兵隊さんなら食糧をとるけど死んでいる兵隊さんは悪いことをしないからね』といって、死体の横に寝ました。

かわいそうに『お母さん、お母さん』と泣きじゃくっている子供がいるのですが、声をかけられないのです。もし声をかけて、ついて来られたら、自分たちが死ななくてはならなくなるかも知れません。自分たちが生きのびるのにやっとだからです。ただ『かわいそうに』といってなだめるだけです。

十六日間かかってやっと自分たちが住んでいた村に出ました。持っていたわずかな米も食べつくし、おかゆもすすねなくなりました。そのころから姉は胃腸が弱り、下痢をしなければいけなかったのですが、薬もなく、どうすることも出来ないのです。姉が病気になったので私と弟は交互に食物探しに毎日出て行きました。一人は姉の看病、一人は食物探しの毎日がつづき探してくる物はトウモロコシ、さつまいもの芽、カボチャの茎、食べられるものは何でも探して来ました。そのとき一緒に出た人が米兵の鉄砲で撃たれて亡くなったので、おそろしく何も探さず逃げ帰ったこともあります。

八月十八日、姉の子供がとうとう息が絶えました。それまでの詳しい日々の記憶はありませんが、この日だけは不思議にはつきり覚えていのです。それから後を追うようにして姉が二十三日に亡くなりました。残ったのは十三歳の私と十歳の弟の二人になりました。それでも生きて行かなくてはならないので二人で交互に食物探し

に毎日出て行きました。そのとき、家におられた少尉さんにひょっこり会ったのです。

少尉さんに姉とその子の病死したことを話しますと少尉さんは『かわいそうに、ぼくのところにおいで』といわれたので、私と弟は少尉さんが住んでいる家に越して行きました。少尉さんは私たちを子供のようにな、かわいがってくれ、私たちも親のように慕い、一緒に生活しました。このころ終戦を知らされました。

日本が負けたことを知りますと、兵隊さんたちは『日本が負けるはずがない』といって、みな『わあわあ』泣きました。この頃、何月か、はっきり覚えていませんが、たぶん九月頃だったと思います。

日本は負けたから兵隊も地方人もみな米兵がトラックで迎えに来るから収容所へ行くようにと部隊長さんからいわれ、私たち日本人はみな収容所へ行くようになりました。

兵隊さんと地方人は別の収容所にとのこと、少尉さんが私に『自分は兵隊だから別れなくてはいけなから』といわれ、別れました。やっとすがる人にめぐり会ったと思ったら、また私と弟二人になったのです。

私は姉がしていた同県に住吉さんという人のところに『私と弟を収容所に一緒に連れて行って下さい』と、たのみ収容所へ行きました。

収容所に行ったら驚いたのです。食糧探しに行つて捕虜になった人が元気でいるんです。私たちは捕虜になったら殺されるものだとばかり思っていたからです。収容所で私たちの担任だった女の先生に『私たちはばからしかったです。早く捕虜になるならよかったです』とはなしたところが『そういうことは考えてはいけません。アメリカの方がそれだけのことをしたら、日本の国がそれだけのことを返さなくてはいけないから』といわれ、そのときはそういうものかと思いました。父と兄も元気でいたので収容所で会いましたがテントは別でした。一つのテントに二十人ぐらいつ入れられ、容器を持って炊事場へ御飯の配給を貰いに行くと、日本人の男の人たちが大きなひしゃくでテントに何人といえは容器に入れてくれるのでそれをテントに持ち帰り、テントの中で公平に分けて食べるのです。

と音とどう時に破片がヒュン／＼と飛んで行くのです。当時弟は十歳でしたけど男の子なので度胸がありました。弾の中をくぐって探しに出ると何か持つて帰って来るのです。私も必死で探しに出ました。だんだん奥へ奥へと逃げるので一晩では避難場所迄行き着く事が出来ず途中で一泊した夜それはそれは砲弾がひどく飛んで来て近所のおちさんに『女の子のくせにだいたんな』とこっぴどく叱られた事がありました。だけど男の居ない私達姉妹には男の居る家庭がうらやましくてたまりませんでしたけどどうにも仕方がない事なのです。近所の坂井さんと言う人が現地入隊で兵隊に取られたのですがやせかけて隊から脱出して来たと言って顔は青ざめて家族の所へ逃げてこられたので、私もその時義理の兄が隊から逃げて来ないかな、逃げて来て呉れたら私と弟は砲弾の中をくぐって食糧探しに行かなくても良いのになあーと思いました。夜同じ小屋に居てその夜その家族の人達は砲弾でやられてしまいました。私達は動かずに居たので手前に居て助かったのです。その翌日私達はその小屋を出て又奥へ逃げたのです。その時川岸で母親はくの字になって乳飲み子をしっかりと抱いて背中に砲弾が当たり母親は亡くなって居るのですが赤ちゃんだけが『ギャア／＼』泣いて居ましたがどうする事も出来ないのです。

人を助ければ自分が死ぬので人所ではありません。ジャングルの中は昼でも薄暗く日がぜんぜん通らないのでまるで沼地の様です。

ずぶりと沼地のようなところを逃げて行く私の目の前で一人の兵隊さんがバターンと倒れたのです。

その兵隊さんは倒れた、と同時に息が絶えました。そのとき雑のうの中から二、三個の小さな缶詰がころころところがったのです。ところが一緒に近くを歩いていた兵隊さんたちが走って来て、その缶詰をわれ先にと取って息絶えた兵隊さんはそのままほったらかしです。

皆んな、ただ生きることと精一杯で強い者勝ちです。私たちが逃げて行くとき、動けなくなっちゃがみ込んでいた兵隊さんたちが『おばさん水下さい、水下さい』といったり『おばさん、短刀貸して下さい。ぼくは切腹しますから』といいます。『かわいそうに内地（日本）に帰れば一人息子もおろに』と私たち地方人（移民）は、

見て通るだけでした。

昼間は毎日、飛行機が飛んで来て一日中、バラ、バラ、ドカン、ドカンと爆弾を落して夕方は、ピラをバラバラ撒いて帰るのです。昼間は煙を出すことが出来ないで飛行機が帰ったらすぐ一日分の御飯を炊くのです。御飯といってもひと握りの米をおかゆに炊いて、それを姉と私と弟三人で塩をかけて食べるのです。わずかな塩しかないで塩もほんの少しです。塩味がつくぐらいしか使わないのです。飯ごとに三本の線が入っているので一番上の線が一食分です。

それを三人で分け合って食べなくてはならないので弟はいつも「かたい御飯が食べたい」といって泣くのです。が、食べさせたいけど、どうにもならないことを言い聞かせ、こらえさせました。姉の子供はやせて、まるで猿の子のようになってしまいました。

ほとんど乳のみ児はジャングルの中で亡くなってしまいました。つぎつぎに病人が出て一家が絶えてしまったところがなん軒もありました。

兵隊さんも砲弾で亡くなる人、食物がなく餓死する人。死体がゴロゴロ、誰もそれを穴掘ってうめてくれる人はいません。それどころか生きている兵隊さんは、われわれ地方人に銃をつきつけて『食糧を出せ！ 食糧を出さないと命をとるぞ！ 食糧と命のどちらが惜しいか』といわれ、取られた人もいました。

私たちも夜、寝ているとき、食糧を取りに来ましたが幸いなことに一緒にいた男の人が猟銃を持っておったので『誰か！ 他人の食糧を盗るのは！ 銃をぶっぱなすぞ！』と叫んだので逃げました。

いつまで続くかわからない戦争に、わずかな食糧も底をついてきました。それまでは団体で行動していたのですが、団体は解散になり、これ以上は食糧もないしジャングルを出て自分たちが住んでいた村に帰るようになるといわれ、私たちは出ることを決めました。

姉の家の近くに独身の方で築井さんという人が猟銃を持っておられたので、その人をお願いしてジャングルを

それにふたをかぶせてした事を記憶して居ります。食事と言ったら御飯の中にポロポロした大豆が入って居り、お米は煮えているけど大豆がポロポロで食べられなくてひもじくてひもじくてたまらなかった事も覚えております。炊事は日本人がするので、その御飯の中に毒を入れる様にとフィリピンの兵隊が言ったそうですが、炊事をする人達が入れなかったので片耳をちぎられたり無残な殺され方をしたと話に聞きました。

十二月二十日の夜明でした。ドカンドカンと地ひびきがする音があるので私は恐ろしくて部屋の隅にちぢこまっておりました。その時近所のおばさんが『これはきつと敵前上陸だよ、敵前上陸は朝方すると言うからねえ』と言われました。本当にその通りだったのです。日の丸の旗を手持って走って行く日本の兵隊さんの姿を見た時は皆泣きました。

一步も外に出る事も出来ず缶詰の様に押込まれて居て外に出て見るとフィリピンの兵隊は逃げてしまつて一人も居ませんでした。それ迄は銃を手持って家の廻りをうろろして居ましたが、一人も姿は見えませんでした。監禁されて居た人達は皆手を取り合つて万才々と泣叫びました。日本人が監禁されて居た家の下には地雷が仕掛けて有り、もう一日日本の兵隊さんの上陸がおそかったらミンダナオ島の日本人は全滅して居たと話に聞きました。

それぞれ家に帰りました所が土人達（現地人の人）が家の中の道具は皆持出し何一つ残って居ないので。有る物は只家だけでした。男の人達が山の中をあっちこっち探して皆んなで色々持ち寄り、どうにか生活が出来る様になりました。

それから間もなく姉は結婚、一番上の兄は海軍の経理部に入り次の兄は海軍に志願し、父は海軍の施設部に入り私と弟は施設部の社宅に入りそこから学校に通いました。

戦争がだんだん厳しく成りダバオの上空にもアメリカのB 29が昼も夜も飛んで来る様に成り学校も田舎の方に疎開しなくてはいけない様に成り、私と弟は姉の家に身を寄せました。姉の家に行ったら姉の家も昨日姉婿、義

理の兄は現地入隊で兵隊に取られたといつて目のあいたばかりの乳飲み子と二人でした。

私と弟は姉に世話に成り又そこから学校に通つたのです。学校も昼迄授業、昼からは防空ごう掘り、学校の食糧増産の毎日のくり返しでした。

私達の村に陸軍の片桐部隊と言う兵隊さんが一個部隊入つて来たので学校は兵隊さんの宿に取られ授業は分散教育に成りあっちこちに散らばつてしまいました。その時私の担任だった先生が姉の家の近くに疎開して来られたので又その先生に習いました。その頃は田舎の方にもアメリカの飛行機が飛んで来る様になりおちおち勉強も出来なく成りました。その頃片桐部隊の上西次郎（当時少尉）と言う人と他に伍長を始め十人陣地構築の為に、姉の家が宿になり賑やかになりました。

少尉さんがやさしくて親切で私達姉妹は兄の様にしました。日曜日は兵隊さんを使って麻の木を切り倒して畠にして頂いたのです。麻の木を片付けるとすぐ畠になるのですが重たくて男でなければ出来ないので。男の居ない姉妹は大へんお世話に成りました。その頃パラオ島の人達が私達の村に引揚げて来ました。

アメリカ軍がミンダナオ島に上陸したのでジャングルに避難する様にと軍から命令が出たので家に居られた兵隊さんは、部隊の方に帰つて行かれました。

姉と私は背中にしよゝい来るだけの食糧と着がえを持って村の人達と家を出ました。昼は飛行機が飛ぶので夜ジャングルに向かって毎日く歩き続けました。夜お産して翌日は逃げなければならぬのです。人並に歩けない人はそのまま置いてきぼりにされるのです。逃げてもし飛行機は飛んで来て機銃掃射と爆弾、夜は砲弾で生きた心地はしないのです。砲弾の飛んで来る中を夜は食糧探しに出て行かなくては何時迄続くか分からない戦争、持つて逃げただけの食糧ではわずかな物です。

姉は乳飲み子が居る為に私と弟が一晩交替で砲弾の中をくぐつて食糧探しに出るのです。頭の上を砲弾が飛んで行く時は『ヒーユンドカン』と言って飛んで行くのですがそこら近くに落ちる時は『シュウシュューッ』どかん

充の問題が教育上由々敷き問題たるは言ふ迄もなく、この問題に就てはダバオ諸邦字新聞に於て種々具体案の提唱があつたが、未だ實際化の域に達してゐない。昨年当地一邦字新聞はこの問題を採り上げて論じたが、その要旨を摘録すれば／＼イ 日本人会に於て在留民子弟の教育希望者を原籍地の師範学校に依託生として私費を以て入学せしめ費用を補助する事／＼ロ 特にダバオ小学校の爲めに小学校令中の教員の検定に依る資格付与の令文を活用する事／＼ハ 第二世の教員希望者を台湾師範に送りその養成を依頼する事等である。」

「教員待遇問題がある。待遇を問題にする事それ自体が冷遇の傾向に由来せる事は言ふ迄もない。最近麻市況の昇騰に依り多少之が尖鋭的に教員の胸奥を乱してゐる事は事実である。麻を生命とせるダバオはその好悪市況の影響より極端な変化が生ずるのである。十年に近い麻不況時代は教育費財源に著しい困窮を生じ、一定年限を経ても昇給所か自発的寄付もせざるを得ない有様であつた。然るに此の方面に事情疎き一般在留民はそれは当然過ぎる事として顧る所ではなかつた。而して一度好況来り麻市況の暴騰に麻栽培の一般邦人は一年乃至二年にして十年間の利益を一時に収め、尚余裕ある状態に恵まれ、之に付随して世は狂奔的な物価の騰貴となつた。」「『教員を優遇せよ』之は最近に於けるダバオ諸邦字新聞の等しく共通せる論調である。而して之が財源等は殊にダバオの如きは好不況の著しい所であるから、地方の財源にまたず国家直属になる事を希望するものである。」⁽³⁸⁾

IV フィリピン移民（Ⅲ）——太平洋戦争と移民

1 ダバオ移民二世の証言(1)——西村テル子・昭和六年生まれ・現在熊本在住

ダバオに生を受け、ダバオで成長した人びとの生の声^{なま}を聴いてみよう。なお、この証言は、編著者のひとり藤崎康夫が取材したものである。西村テル子の証言は、本人の綴ったものである。

「四十年前の十二月八日大東亜戦争の勃発の日、私はフィリピンのミンダナオ島のダバオに居りました。当時小学校の三年生でした。

何も知らず何時もの様に学校に行きました所が、学校に行つて先生が全校生徒を集め『日本とアメリカの戦争が始まったからすぐ家に帰る様に』と言われ授業もぜんぜんせず家に帰り、帰ったらすぐ在留日本人は皆一応近くの会社を集まりそれから男、女子供は別々の所に監禁されたのです。

当時私の家族は父と姉兄二人それに私、第六人（母は十五年死亡）の家族でしたが、皆ばらばらで私と弟が一緒でした。

私が監禁された所は一軒の家にぎゅうぎゅう詰め込まれトイレに行く事も出来ず、部屋の中にバケツを置いて

のである。故に日本内地の稲栽培業者に於ける聚落とは非常に趣を異にして人家が密集しないのが常である。この事情から学校区域或は通学距離が著しく広範囲に亘り、七八歳の幼児も五斗乃至六斗それ以上の過重な負担を負はしめなければならず、或は自動車通学とか交通不便な所では馬上に依る通学など、全く内地では想像し得ない特殊な例が生じて来るのである。殊に通学不能の場所に居る者は学校に付属せる寄宿舎に入舎し、幼児より父母の膝下を離れて団体生活をしなければならぬ。小学校に寄宿舎を付設する事は日本では例のない事で、随つて小学校令にも何等の規定がない。之は母国に於て義務教育の普及に依つて如何なる山間僻地にも各市町村がその管内に於て就学児を收容するに足るだけの小学校を設立すべき義務を有し、その区域は徒歩通学を許す範囲内で特別の場所には分校が設立されてゐる。けれどもダバオは従来非常に広範囲に於て学校数が二校しかない状態であつたから、寄宿舎なしでは初めから児童は就学し得なかつたのである。／現在地方に小学校が出来て之等の事情は余程緩和されたのはあるが、今後は別の意味に於て存続意義が充分にあるのである。此の寄宿舎の問題に就いても父兄間或は社会一般から、屢々議論的となり、ダバオに於ける重要な特殊性があるのである。最近では寄宿舎の必要論をなすと決つてそれは幼児教育の理想に合致しないといふやうな駁論が出て、結局家庭教育の重要に落着くのである。」「ダバオは極く少数を除く外の一般麻栽培地の家庭は教育的には形態からして不健全な状態である。此のダバオの家庭の欠陥からも寄宿舎の教育的な存在価値は光つて来た事になる。」「試みに現在（昭和十三年時…引用者補記）入舎児の入舎理由を調べてみると概ね次の如くである。／イ 家庭では母方が比人なる故、入舎して日本語並に日本の生活を得せしめる為め／ロ 家庭が土人部落に孤立して四圍の影響が不良なもの／ハ 距離その他の支障の為に通学し得ざるもの／ニ 家庭に於ける躰上の欠陥を矯正すべく特に希望するもの／之に依つてみてもその存在意義は明かである。尚参考迄に寄宿舎の長所及短所と思はれる点を二三挙げてみると次の如くなると思ふ。／寄宿舎の長所とすべき点／イ 外部の極悪環境に影響せしめずしてその教養をすすめ得る事／ロ ダバオには子供の生活の少い大人びた家庭生活が非常に多いが、之を救つて子供の生活をなさ

しめ得る／ハ 毎日規律正しい学習生活に依つて学科成績をすゝめる／ニ 混血児の指導に特殊の効果をあげ得ること、例へば言葉の指導、日本の生活の指導／ホ 其の他子供の団体生活に依る諸種の徳目の涵養等である。

／寄宿舎の短所とすべき点／イ 両親が子供の教養状態を知り得ない点／ロ 多くの経済的負担を生ずること／ハ 虚弱児或は病児の取扱ひに万全を期し難い事／ニ 教育担当者や関係者の人選の円滑を欠く場合／ホ 一般邦人社会が教育抽象論に依つて家庭教育の盲信より寄宿舎教育の価値を認めない場合等である。」

「教師の補充難問題がある。今日は麻の好況と其の他の関係で多少緩和されたやうに見へるが、その実決して解消されてはゐないのである。最近に於けるダバオは一時に十数校の小学校を設立し、在留邦人は其の完成に熱中してゐる。けれ共最も肝要なる教師は如何にしても得られない状態であつた。之には種々な原因がある。従来ダバオの学校は單に地方の私立学校として未だ母国要路の関知する所とならず、麻不況にて財政貧弱の爲め優遇は出来ず、又恩給手段にも与り得ない有様では内地から有資格者の教員を招聘する等及びもつかぬ事であつた。従つて止むを得ず在留民中から之に該当する人を物色しなければならなかつた。然し麻栽培の事業を目的として遠大の志に燃えてゐる事業家肌の邦人移民には有資格者経験者は勿論教員希望者さへ極めて少かつたのである。そこで仕方なくかくと覺しき人あれば事情を述べて折角の事業を中止せしめ、或は商店会社方面の人を依頼して強ひて教育方面にまわつて貰ふと言ふやうな事であつた。故に依頼を受けた人達は資格こそなかつたけれども、前後の事情を諒とし当路の人達の熱誠に義憤さへ感じ、自己の総べてを投じてもとの感慨もて子弟教育に尽瘁せん事を決意したのである。今日に於てもかういふ無資格の良教師が多くの私立校に真摯なる努力を続けてゐるのである。土地問題を契機としてダバオは浮き上つた。世に知られた爲めに諸般の事情は好都合を得る点もできて来た。殊に学校は在外指定の正式認可を得るものもできて教員招聘の難問題も漸く緩和されて来た。それは最近内地より新進教員の来航希望者を見るに至つたからである。然し之とて實際案としては迂遠にして論ずる余地が無い。十数校の多数教員の異動事故に処し後任者の日本内地より赴任するを待つ如きは解決方法ではない。教員補

ぎない。比島は決して非文化的な国ではない。然し邦人の居住するダバオ一帯の數種族は全く未開低級である。かやうな種族と雜居せる邦人が溺れゆく我が子の頹廢的傾向を放任するといふ事は出来ない。⁽³⁷⁾」

以上に引用した見解は、昭和一三（一九三八）年のものである。いかにも当時の知識人の思想を反映している。全民族の頂点に、日本人が位置づけられていたのである。

18 日系ダバオ二世の教育問題(4)——早熟・混血・教師

「ダバオ邦人二世は早熟である。その理由は色々の方面から種々の觀察をなす事が出来るが、何と言つても氣候に影響される所が最大であらうと思ふ。」例へば十六七歳位になると決定的に第一世よりも優れた体軀の持主となる。殊に身長には格段の差が出来る。身長伸びる事は内地にもその傾向があるが、ダバオは特に著しい。これは氣候のみでなく生活様式に依る影響もあるであらう。」特殊の事情の下に尋常科卒業後直ちに結婚せる者もあり、三四年内に結婚せる者も相当にある。」「ダバオ在留邦人にして比島婦人と雜婚せる者約三百人、その子弟が一千人あると言はれてゐる。その中日本人小学校に就学せる者は約二百名に近く、ダバオ邦人小学校の何れの学校にもかゝる兒童の在学せざるものはない。その歩合は普通一割乃至二割多きに至つては五割以上に及ぶものすらある。こゝに於て小学校教育の實際も此の問題を等閑視しては到底その効果を期する事は出来ない事情にあるのである。／同じ雜婚混血といつても比人の種族に依つて事情は自ら異つてゐる。雜婚の対象はダバオに於てはビサヤ、バゴボ族は前者に比して文化程度低く未開人種ではあるが、その慣習が邦人に近い為め此の種族との雜婚が一番多い。従つて混血児は此の種族との間に出来たものが一番多く、混血児の問題も殆んどこの範圍に限

定しても大差はないのである。離婚が流行したのは言ふ迄もなく母国から婦人の来航する者稀なりし開拓当初のことであるが、邦人が離婚して家庭生活を営む為には、如何に努力しても或程度その生活レベルを低下せしめなくてはならなかつた。其の生活を甘受し得ない者は家庭を構成する資格のない者であつた。／＼然し離婚の機会を得たものゝ生活の第一歩は事実恵まれてゐた。何故なら女の少い世界で愛のホームは営めるし、妻女の所有する土地もあつて経済的にも浮べたのである。其の中に子供は生れる。賑かな家庭の団欒が得られた。然し好事魔多しの例に洩れず、次第に母国との交渉が頻繁になり、日本婦人が続々と来航し日本人二世は増加してくるにつれて、離婚者の脳裡は次第にかき乱され憂鬱になつて来たのである。殊にその子弟の教育問題に至つては邦人たる父は日本人生活のレベルを目標とし、子弟の教育は是非共日本人の一般レベルに達せしめたい悲壮な決心をなしたのである。然しこれには非常に大きなハンデキャップが付せられてゐた。日常生活の低きは未だしも、その子弟の教育の根本をなす両親たる父と母の理想の差異である。父としては日本人の血を受けた子弟が日本人の教育を完全に受容し得ぬ道理はない。『所が母になると其の見解が異なるのである。母は『我が子として将来を頼みとするには日本教育を受けしむる事は自らの孤立を招く所以である』と。よしんば仮に之を諒として邦人小学校に入学せしめても、日常の勉学の状態は父親が常に積極的に之を奨励するに反し、母親は之を遮らんとする傾向にある。』「混血児は就学を後れさせてゐるが、同一の扱ひをなす事は時の経過と共に不可能なる事は必然であつて、早晚問題を招来せしめる事は明かである。』「混血児の第二世こそダバオ邦人の權益擁護の第一線に立つべく帰化権の獲得をなし得る者である。而も現在の獲得者四名は全部この混血児である事を銘記すべきである。』

「ダバオでは麻耕地を麻山といひ麻栽培業者を自営者といふ習慣になつてゐる。自営者の所有する麻山は普通一万株位が単位で、一万株の麻山は十ヘクタール即ち約十町歩位の面積に植へられる。これが為めに人家は普通十町歩に一軒といふやうな具合に散在する事になる。中には一万以上二万三万、多いのになると十万にも及ぶものもあつて、之に比例して人家の間隔は遠くなる訳である。ダバオの麻山では隣が一軒乃至二軒離れるのが普通な

「ダバオの児は恰も一世が母国の山河を愛し夢にも忘れ得ないと同様に、ダバオに生れてダバオの大地を離れまいとする。彼等はアバカの波を椰子の並木を愛する。雄大にして端麗な山姿や丘陵の緑波、そのダバオの自然を、ミンダナオの自然更に大きく比律賓の大自然こそ何よりも彼等の魅力となるのである。彼等は肉体的にもあるが殊に精神的にダバオの自然界人為界に順応していく。そこで一世は其の果ない融合性を却つて恐れて成るべく、ダバオ化させないやうに力めてゐるのである……之は長短双方の意味にはとれるが……彼等はダバオに住む雑多な人種の言語風俗習慣を最もよく理解する人間である。そして又ダバオを遠く離れ氣候風土の異なる地に送られる事は最も苦痛とする処である。成長の度が熟すれば熟する程異境に於て例へば日本内地等に於て活動するに具備すべき色々の条件を持ち合せない事になる。之のダバオの児を強ひて親の懷郷の心理によつて母国へうつし去ると言ふ事は子を愛する親の情ではない。」「ダバオに如何なる名外交家ありと雖も手腕家ありと雖も、一農夫の小悴こそ此のダバオには貴重なる仕事をなし得る者なのである。」「如何に此の二世が邦人移植民發展上重大なる使命を果して呉れるか、昨年(昭和十三年…引用者補記)一新聞紙上に於ける／『二世よアメリカに帰れ』と熱叫する八十翁! 寂れゆく在米日本人植民地……の見出しは著しく吾人を感じさせたものであつた。在米日本人会長塚本松之助翁が八十歳の老軀を提げて帰朝し丸の内会館で開催された在米日本人保護社会施設援助団太平洋会で、父祖開拓の地を離れゆく二世達にパイオニアとして血を吐く様な警告をなして会衆を感動せしめた。松之助翁は千葉県香取郡の出身、明治十八年北米農業開拓を志して渡米し、後進移住者のために安住の地を闢ひ取り、在米日本人のために碎身努力を續けて來た。然るに滿州事變を契機として東洋の一角に巨軀を振ひ起した祖国の姿に憧れて、布哇を含み二十五万の移住民は陸統として帰国し、又米国市民権を有する二世達も祖国の優れた教育施設等を慕ふて來朝し、開拓地を放棄したまふ歸らない。この状態を憂慮し後に残つてゐる移民の要望を担ふて三月八日母島の親戚に落付き、各方面を廻つて米國に開拓の權利を持つ二世達にアメリカへ歸れと説き廻つてゐるのであると。之は最近母國社会に現れた婦米運動の一端であるが、一体我々に何を教へるか。³⁶」

「台湾の或る新聞社の記者某氏はダバオへ来遊して言つた。／『ダバオは外国ではない。台湾から来て見て外国よりも全く内地に帰つたやうな感じがする。こゝはダバオと言ふ日本村だ。台湾はこのダバオ日本村よりはるかに異国情緒を感じる。それ程にダバオの邦人は日本的にそつくり進出してゐる』／と。これは来遊視察客の等しく受ける共通の驚きであるらしい。まさか日本人がこれほどに日本の生活社会を築いてゐると思わぬからである。ダバオは外地であり乍ら普通の日常生活には外語を要せぬ。日本語で決して不自由をしないのである。道を行けば会ふ人三人に一人は日本人と言ふ割合、耕地の家は勿論町の目貫の場所の少し大きな店舗は日本人である。外国であり乍ら日本人が我が物顔に大道に闊歩できるのがダバオである。』「我がダバオの二世は日本人第二世として高く日本の誇りと自覚を有してゐるのは事実である。日本人が日本人たるを誇りとする点から言つても、或は日本村の社会生活の実際から言つても、殊に二世そのものの自覚心からしてダバオ邦人二世に日本教育を施すこと位自然にして妥当なことはないと思ふ。その結果が又決して邦人移植民の發展上は勿論、将来彼等が比島市民権を獲得して帰化しやうとも決して不利な方法ではなく、却つて最善の道と信ずるからである。唯教育方法上にはダバオ的特殊事情が加味される事は論ずる迄もない。／『日本人は同化性を欠く』といふ様な言葉はよく排日屋の口から漏れる常套語である。それだから日本人の移民を制限し、日本教育を否定しやうといふ考へであらう。これは数年前アメリカの捏造的排日理由を受け入れた内容的に響^{ひび}のない形式語である。何に同化すればよいのか。人種的に皮膚の色が異なるからともいへまい。彼等の比島は慘澹たる民族史に或時はスペイン化し、或る時は米国化し、雑多な民族の混成により混血児が幅を利かす国なのである。この国民性に対し三千年の光輝ある伝統を有する日本民族が同化する必要程矛盾した事はない。同化性より見る日本教育否定の理由は成立しない。』「ダバオに生を受けた邦人第二世は生れ乍ら日本語に依つて育てられ、一方には比島の社会に溶けて之を知り、其の仲媒としては最も適当な使命的存在をなしてゐる。若しも彼等が日本語を解せざる教育に依つて比島人化し、ダバオ近郊の未開人社会に放任されるならば、雑多な比島の混成種族に又新しき無価値な種族が加へられるにす

を寄附し、或は教員の日常校務の間接的援助等すべて献身的奉仕をなし、何くれと学校整備に最善を尽したのである。学校のためには家業の渋滞を顧ず、一路唯学校の完成に尽瘁する事が一生の聖なる念願として自らの総べてを忘れたるが如くであつた。／＼これ丈の熱誠に依つてこそはじめて邦人子弟教育機関たる小学校が近々四、五年にして十幾校も雨後の筍の如く、簇出したのである。最近四、五年間に新設されたダバオ邦人の小学校は左記に示す通りである。

在 外 指 定	カリナン日本人尋常小学校	昭和十年一月	一日開校
在 外 指 定	マナンブラン日本人尋常小学校	昭和八年二月	一日開校
在 外 指 定	ラサ	昭和八年一月二十六日開校	
	ス日本人尋常小学校	昭和九年三月	十五日開校
	ス日本人尋常小学校	昭和九年二月	五日開校
	ス日本人尋常小学校	昭和十一年五月三十一日開校	
	ス日本人尋常小学校	昭和八年四月	二日開校
	ス日本人尋常小学校	昭和八年三月	十三日開校
	ス日本人尋常小学校	昭和十二年一月	十日開校
	ス日本人尋常小学校	昭和十一年一月	十五日開校
	ス日本人尋常小学校	昭和十二年度中開校の見込 ³³	

「ダバオに於ける邦人社会が全般的に二世教育に見覚めたのは最近数年間の事である。これも不況と就学児童の激増のために之を収容すべき学校なく、学校の設立問題に行詰つて始めて二世教育の問題が重大化したのである。ダバオの二世教育問題は現在の所小学校の設立、設備の完成及び学校の経営問題である。昨年六月一日現在に依れば、学校数十、在籍児童数一一五名、職員数四一名であるが、本年は之に三校増加し各校共児童数職員数共

相当に増加してゐるのである。この学校問題も慥かに二世教育問題に違ひない。けれども突きつめればそれは教育の一部分の問題であり全部ではない。何故ならば教育作用の行はれる空間的見地からして家庭或は学校の施設が不備であるし時間的に小学校に於ける六年乃至八年の教育を了へたる子弟のその後の教育が放任せられてゐるからである。人生の危機として教育上最も重要視さるべき青少年の教育施設なく、小学校卒業の邦人子弟百数十名は母国に遊学せる少数を除くの外は字義通り人生の危機にさらされてゐるのである。／＼教育施設としての小学校と言ふ間口は十幾校と拡張されて来たけれども、人格的に或は職業的に完成を目指す奥行は依然として進捗の跡を見ない。況んや邦人子弟のダバオ特殊事情に基く本質的教育の考察に依る教育水準の向上は尚前途遼遠と言ふべきである。⁽³⁴⁾」

17 日系ダバオ二世の教育問題(3)——二世教育への情熱

植民政策の權威者としても知られる矢内原忠雄(一八九三—一九六一)は、その著『植民及植民政策』において、つぎのように指摘している。

「蓋し人類社会は種族民族国民等の社会群若くは社会的集団の交錯及び並列より成る。各社会群は各々一定の地域に占居するが、必ずしも之に束縛せられず必要に応じて地域的に移動する。其の新なる居住地域は無住地たることあり、或は既に他に社会群の占居せる地域たることあり。いづれにしても新なる自然及び社会的環境を供することによつて之に移住する社会群の集団生活に特殊の趣を生ずる。私はこの、社会群が新なる地域に移住して社会的経済的に活動する現象をば植民と解する。⁽³⁵⁾それは社会的たるを要するが故に一時移住又は個人的移住は植民ではなく、一の新なる社会の発生及び生長に関するものでなければならないとしている。

同	十年	七三・一	二七・五	六七・〇	%
同	十一年	八五・〇	三五・八	六九・九	%
同	十二年	五一・四	四三・一	七〇・〇	% ⁽³²⁾

〔註〕昭和十二年度出生数は六月迄の分。〕

16 日系ダバオ二世の教育問題(2)——一九三〇年代と小学校の設立

「ダバオ在留邦人は一九三〇年来世界的不況のあほりを受けて麻値は釣瓶落しに暴落し、麻を生命とする単一農業であるだけに其の苦境は寔に深刻であつた。この不況時代は麻値の下落しはじめの頃を加算すれば十年に垂んとする長期間であつた。これがために好況時代自由の鳳翼を伸して内地比律賓間を往来していた邦人は、止むなくダバオの一定場所に膠着状態におかれ、不如意な経済生活とは別に天意に恵まれた子宝を増していつた。／子供はずんずん成長して学齢期に達して来た。然し就学するには月謝を要し、自宅通学不能の場合は寄宿舎又は下宿等に入つて通学する事になり、相当に経済的負担を要するのである。殊に地理的關係上入舎或は下宿を必要とする者は決して少くなかつた。所が深刻な不況に禍されて就学所か其の日の糧にも齟齬しなければならぬ羽目になつた者もあつた。之がため学齢に達せる児童を擁し乍らも事情は母国内地とは異なるため、子弟の就学不能に陥る者が地方によつては少からざる数に達したのである。希望を失つた父兄は勿論、暗澹たる子弟の将来前途を思ひやる時誰か単なる個人的同情のみを以て看過出来やうか。遂に一般邦人社会の重大関心事となつて教育的自覚を喚起したのである。／広範囲に亘る耕地からの前記二校へ通学の不可能なると家庭的躰の重大さに就ての見解も加はつて各耕地に自宅通学出来得る位置に小学校を設け度き意向もあり、地方小学校設立の氣運が生じて来

たのである。所が愈々地方小学校を設立する段取になつて、之に端を発した留邦人間に内訌的物議を醸し、一時収拾すべからざる事態を招来したのは事実である。／邦人の組織せるダバオ日本人会は全在留邦人を包含して七千の会員を擁する大世帯であるだけに、其の波紋は邦人社会の全体に及び漸次党派的色彩を濃厚ならしめ各所に対立抗争の暗流を生じた。一度感情に依つて隔てられた渠溝は到底一朝一夕には解消すべくもなく、乾天に慈雨を望む思ひに学校の設立を待望してゐた父兄は不況にもまして苦境に陥つて了つた。即ち学校の設立は徒らに遷延され、そればかりでなく精神的に迄教育的効果を侵害さるべき有様になつて、而も何時解消されるとも見へず時の波をまつ外ない事になつた。然し学齢に達せる子供をかゝえた父兄にとつて既に議論の時ではなかつた。一般社会にたよらんとする希望は絶へて進退極まり、始めて日本人会の支部を単位とする地方小団体の自力に依つて私立小学校を設ける事になつたのである。しかし乱立を防止する為に協定して各学校間の距離を八軒以上と決めた。そこで各地方別に新設学校区域を定め、之に属する耕地の父兄有志は屢々会合して評議を重ね、学校の位置を定め建設活動に必要な団体を新に組織し経費の分担をなした。就中少人数で多額の経費捻出をなすには想像も及ばぬ苦悩が続いた。校舎の建築資金も一切能う限りの寄附行為によつてなしたのである。／ダバオに於ける邦人の団体をはじめ殆んど全部親善団体である。故に如何なる団体事業をなすにも一般人の徳義心に懇へる以外に何等の強制力をも有しない。之がために其の目的方法が如何に理想的で効果的であらうとも、自覚なき人達には個人的に必要欠くべからざるもの以外には仲々成立しないのが従来例であつた。従来の教育問題がそれである。幸に今度は一般の教育自覚の氣運が向ひてゐたのと、父兄や有志のその衝に当るや燃へるやうな熱誠があつたために動かされて学校設立は着々実現の域に達した。／この学校設立は邦人のダバオに於ける開拓史上特筆大書すべき事である。地方学校設立の実現には崇高なる奉仕の精神が漲つた。校庭をつくるためには幾日間も出夫奉仕をして土木作業に従事した。校舎の建築にも出夫し又児童の通学路の新設や、その架橋工事にも自己を忘れて奔走し、工事の進捗完成を心から満足した。父兄有志は又日常生活の冗費を省ひて校具や備品を購ひ之

15 日系ダバオ二世の教育問題(1)——開拓当初の状況

「開拓当初の移民は千古の原始林に斧鉞を振る最も男性的な開墾事業であつて、婦女子の邦人移民は殆んど皆無に近かつた。其の後開墾を終つても麻栽培事業は単一農業である上に多分の投機的性質を帯びるが故に、黄金の渦巻く好況の反面には悲惨なる不況のどん底生活もあり、興亡浮沈の生活差異は余りにも極端であつた。幸にして金運に恵まれたものは錦衣帰郷を喜ぶ事が出来たが、幸福に漏れて残留を余儀なくせられた者は妻子の扶養能力にも乏しい状態に置かれたのであつた。婦人なく家庭のない所に子供はなく、従つて子供なき社会に二世教育問題はあり得ない。然しかゝる中にも極く少数乍ら故国より妻子を呼び寄せる者、或は家族を伴つて来航する者も見へ、健実な営みの下に著々とその効果をおさめる者が現れて来た。健実な邦人移植民に光がさし始めたのである。／一九二四年所謂第二次好況時代の最も顯著なる事項として特記すべきは、呼寄せに依る女子邦人移民が激増した事である。女子邦人移民の激増は健実な植民地建設に一新紀元を画したるは勿論、³⁰⁾それに依つて日本人小学校設立という二世教育問題が始めて台頭し表面化して来たのも当然と言はなければならぬ。」

「一九二四年一月ダバオ日本人会総会に於て、同年挙行せらるべき今上陛下（当時皇太子殿下）の御成婚奉祝記念事業として小学校設立の議起り、協議の結果ダバオ市に日本人小学校を設立し、同年四月一日より開校する事に決した。然るにダバオ市を隔る西方約十五料の地点ミントルを中心とする地方は、邦人移植民発祥の地として古くより在留する者多く従つて学齢に達したる児童数多き為め、この方面にも学校の設立を要望したが遂に容れられなかつた。ために該地方の父兄有志相計り醵金によつて一九二四年四月私立小学校を設立し、同年四月二十一日より開校するに至つた。間もなく両校共在外指定小学校の認可を得たのである。ここに於てダバオ在留邦人

社会は連続的に子弟教育機関たる小学校を二校を擁し、本格的に二世教育問題に直面したのである⁽³¹⁾。

「前記二校の涙ぐましい児童教育の努力も精進も未だ一般邦人社会の切実なる教育的関心を繋ぐには至らなかつたのである。然し之ありしがために来るべきダバオ邦人の難関を打開すべき唯一の血路たる二世の民族的教育を継続する事を得たのである。／（中略・引用者）所が最近数年来出世児の激増に伴ひ就学児童の著しい増加を来した。ために前記二校のみにては到底収容しきれない事になつたのみならず、新しく分校程度のもを増設すとも容易に解決し得ないこととなつたのである。／之は次表の年度別出生並びに就学児童数に照しても明らかである。

(年度)		(出生数)	(入学数)	(入学率)
大正	十一年	七四	—	—
同	十二年	七七	—	—
同	十三年	九五	—	—
同	十四年	一二八	—	—
同	十五年	二〇七	—	—
昭和	二年	二九四	—	—
同	三年	四一〇	—	—
同	四年	五二二	五三	七一・六%
同	五年	六一六	六二	八〇・五%
同	六年	七三〇	七五	七八・九%
同	七年	七一〇	七九	六一・七%
同	八年	七二四	一一五	五五・五%
同	九年	六八五	一六七	五六・八%

った。ケソン大統領はフィリピン共和国建設の大功労者であると共に、臨機応変の才に富む稀に見る大政治家で、早く先を見透しその影響をよく考える人であった。大統領は開戦後オスメニヤ副大統領と共に、初めコレヒドールに逃れ、後アメリカに転じたが、一九四四年八月一日ニューヨーク州に於て持病の肺患のためはかなくも逝去した。時に母国はなお日本軍に占領されていたが、気短かで勝気で思ふ事成らざるなき大統領としては、憂国の至情禁じ難きものがあつただろう。大統領の生前その嚆矢に接する機会の多かつた著者は、その計を聞いてあの聰明、叡知な面影が眼前に髣髴すると共に、誠に感慨無量であつた。²⁸」

14 ダバオ土地問題の要約

すでに知られるように、第一次ダバオ土地問題は、太田恭三郎のマニラ麻園の購入経営によって起生した。しかし、太田興業会社の設立により解決した。

第二次ダバオ土地問題は、古川拓殖株式会社のダバオ進出と、それに追隨する形で多数の日本人経営の会社の設立により、急激に日本人移民のダバオ流入が引き金となった。つまり、こうした動向が、フィリピン要人を刺激し、日系ダバオ移民の発展を防止するために、土地法が改正されたのであつた。

だが、マニラ麻の暴落によって日系移民の発展は足踏みしたのであるが、総領事をはじめとする日本人の肩入れによって、既得の權益が確保され、日本人農業会社の基礎づくりがなされた。

第三次ダバオ土地問題は、太田興業と古川拓殖のフィリピン法の違法に原因して起こつた。つまり両社は、公有農業地を一、〇二四ヘクタールをはるかに越える万単位の用地を所有ないしは支配し、それを「自営者」と称する日本農業移民へ貸し与えの形式で開拓させていたことが明かされた。換言すれば、両社がいかに隆盛

にみえたことが、フィリピン人に危機感を招き、日系ダバオ移民社会に圧迫を加えようとする気運が起つたのである。

第三次ダバオ土地問題が表面沙汰になったとき、フィリピン施政の大方針について、フィリピン要人はウッド総督と基本的に意見を異にし、激烈な交渉がなされていた。このために、フィリピン側はダバオ土地問題について、日本人移民の経営する土地および農業会社の存在を合法的であると認めざるをえなかった。具体的には、とぎのフィリピン土地局次長ホセ・ダンスの報告書——ダバオから日系移民が撤退すれば、たちまちにしてマニラ麻園は荒廃するという主旨——として示されたのである。

第四次ダバオ土地問題は、ダバオにおける日系移民の自営者の急増によって浮上した。第二次ダバオ土地問題の起生した際に、土地法の改正がなされた。同法によれば、新たな公有農地獲得は日本人農業会社にとって不可能であった。つまり日本移民の自営者の入り込む余地はなかったのである。しかし、日系移民の発明した動力機械とマニラ麻市況の好転によって、日系移民はフィリピン人とアメリカ人の土地に入り込んだ。日本人自営者の採用は、耕主側には有利であった。とくにフィリピンの有力者間の公有地租借争奪戦は、激しいものであった。

こうした状況を背景として、日本人自営者耕作を土地法違反として、フィリピン政府は関係アメリカ人およびフィリピン人との公有土地租借契約を取り消しとした。没収した耕地は、国立農業会社に経営移転し、これらの土地にいる日本人自営者の既得権益は保存され、以後の自営者の耕作を阻止することを目ざした。だが、当時の国際状況の悪化は、第四次ダバオ土地問題を未解決にしまった。

第四次土地問題は、排日の表面化でもあった。日系移民の技能と手腕は、フィリピン人の驚嘆の的であり、大きな不安材料と映っていたのであろう。⁽²⁹⁾

イリピンは平穩で、ダバオ視察は依然として衰えず、一九三八年三月にはアルナン農商務長官一行が来訪した。同年七月五日阪神地方に大洪水があったが、休養のため日本を訪問中の大統領は、事前に神戸のオリエンタル・ホテルから京都の都ホテルに移り幸いに難を逃れ、後上京して陛下に拝謁した。大統領は一九三九年六月二七日コタバトから陸路ダバオ訪問の途、古川拓殖のピエダッド古川荘に宿泊の希望があったので、著者は事前にダバオに飛行したが、大統領は予定を変更してダバオ市内に宿泊し、翌二八日ダバオ市海岸ピアピの労働者住宅地区の定礎式に臨み、その演説の中で日本人はダバオの經濟開發に尽くして呉れるが、これはフィリピン人は大いに見習うべきことで、また日本人が最近フィリピンに新しい農産物ラミの栽培を始めたことは、大いに徳とすべきであると、その栽培を特に勧めたことは、今なお著者の耳底に残っている。その夜乗用船でダバオを去り、その後また一〇月五日ドン・インドロ号で訪問したが、図らずもこれが大統領最後のダバオ訪問となった。²⁶」

「土地問題の接衝は段々長びき、この間松本氏は一九三八年(昭和二三)年春から社用を帯びて海外旅行に出掛け、村上氏は同年春から特に健康を害し、その耕地パンガシナンに於て静養中一月二八日急逝し、また同年春岩永啓領事が柴田領事と代わるなど、実情は大分變化した。ダバオ土地問題は上述の通りこれを抑え得たが、根本的解決に至らず且つ日本人会社の租借第一二五ヶ年の満了による第二五ヶ年の書換え期限が次のように迫っていた。／一九四〇年に三會社　一九四一年に三會社　一九四二年に一會社　一九四三年に一會社　一九四四年に一會社　一九四五年に二會社　一九四六年に一七會社　一九四七年に一會社／即ち合計二九會社で總面積一五、〇〇〇ヘクタール、この他七會社は當時なお公有地租借契約に至らず、その總面積は三、五〇〇ヘクタールで、当該會社としては重大な懸案であつた。かくて日本人会としては新たに諸隈弥策氏と著者に土地問題の全權を委ねたので、熟考の上先ずラウレル博士の長男にダバオ土地問題を依頼したが、遂に大統領の意見を交えることは出来なかつた。即ち日本人会社の第一期租借期間二五年が満了すれば、第二期二五年の租借切換えは問題なく認めようが、要するに米比人耕主の違反者に対しては、政府との契約を取消し、その没収した土地を

一纏めにして国策農事経営が出来るようにしたいとの、大統領の最後案は動かし得ず、吾々にとっては実行上最も困難な問題として残った。²⁷⁾」

「時代の推移によつてフィリピン政府は特にミンダナオ島に注意を払い、何とかフィリピン人の手によつてその開発を考えるものの、一新聞紙は今日の速度でフィリピン人だけの力で同島を開発するには二七五年かかると報じたが、この年数が如何なる計算に基くかは別として、フィリピン人の独力を以てはミンダナオ島は大きいので、長年月を要することは確かである。大統領はフィリピン領土内に、開拓に適する大面積の土地を残しては、隣国人に野心を起させる危険があると、自国民の覚醒を促した経緯から、一九三八年頃の議会でコタバト州のコロナダール、ダバオ州のコンポステラ、アグサン州の内部等に各々数万ヘクタールの大きなリザーベーションを作り、これにフィリピン移民を導入することを決議し、差当りコロナダールが最も手をつけ易いので、ダバオのペナル・コロニーの開発に成功した当時少将のサントスをこれに当らしめ、よし巨額の国費を注ぎ込むともミンダナオ島の開発を期する意気込みであつた。ところが一九四一（昭和一六）年六月独ソ戦争が突発し、米国は七月二六日に日本人に対し資産凍結令を実施したので日米関係は愈々悪化し、万一平和が破られた場合は、土地問題の解決も無意味に帰するところから、著者は諸隈氏と計つて大統領に対し、この問題も当分その儘にして置くように提議したところこれを容れたので、第四次土地問題は所謂未解決の解決となつた。／＼願みれば一九四一年一〇月一二日に諸隈氏は日本へ、翌一三日に著者は仏印視察のため夫々マニラ出発の予定だったので、その直前八日にケソン大統領夫妻は吾々兩人を主賓とし、日本人側はマニラの民間人主腦者正金マニラ支店長山本恒男氏、台湾銀行支店長満田忠生氏、三井物産支店長北島真恒氏、三菱商事支店長石田祐吉氏、大同貿易支店長森長英氏を、フィリピン人側は同じく民間人主腦者マドリガル及びフェルナンデスを配して、マラカニヤンで送別午餐会を催して呉れたが、その席上大統領は日米間の雲行きは暗い、よし最悪の場合が来てもフィリピン政府としては、在留日本人の生命財産は全力を以て保護するから、この旨を彼等に伝えて安心せしむるやうにとの話であ

を全部無償で、地主に提供する条件のものが多く、その頃既に年限が迫り耕主によっては、習慣的に契約更新に応ぜず、而かもこれは直接利害関係の無い日本人自営者にも影響する所が大きいので、ダバオ日本人にとっては誠に重大な問題であった。一九三六（昭和一一）年になって大統領はホセ・ラウレル博士を大審院判事に任命したので、ダバオ日本人会はその代りとして下院々内総務のペドロ・サビドを土地問題の顧問弁護士に依頼した。この間一九三六年一月下旬に諸限代表は本原副領事と共にマニラからダバオを来訪して新任の柴田領事と打合せをなし、二月中旬には松本代表がサビドをダバオに案内して実情を調査せしめ、一方著者は二月二八日に日本からダバオに帰着し、日本及びマニラの事情を報告した。

ケンソ大統領は同年四月一〇日、各省長官その他サビドを含む一行二〇名を引き連れ就任後初めてダバオを訪問したが、在留日本人は四〇隻のランチを飾り立て大いにその一行を歓迎した。予めマニラから来着していた内山総領事は柴田領事と共に、乗船アラヤット号に大統領を公式訪問したところ、大統領は『ダバオの米比人が日本人に公有地の又貸しをしているのは明らかに土地法違反である、然し日本人は土地法を解せず只従来の習慣に従ったまでであるから、善意の投資者で罰すべきではないが、かかる不都合な米比人の租借地は全部没収すべきである。』とは言えこれらの土地に這入っている日本人とは追って政府と直接契約を結び既得の權益を尊重したいと思うが如何』と突然重大な提案をしたので、日本人会主脳部は総領事と領事を迎えて熟議した。その結果この提案ではどう見ても実行上旨く行かない、やはり自営者耕作法を認めて貰うよう、従来通りの方針で進むより外に適當な解決方法はないということに意見が一致した。この日午後大統領一行はバゴ太田興業農事試験場を見てから、古川拓殖のダリアオン本社を訪ねたので、ガーデンで歓迎したところ、大統領は流石に臨機応変の才にたけたもので、著者を誘い出して池を一周し、二人だけで話し得るチャンスを作り、日本人がダバオのみに集団することは、フィリピン側としては実に困っている、何とか分散する良い方法は無いか、また現在のダバオ土地問題について何とか良い解決法を考えつかぬかと、だしぬけに質問した。何分突然で考える余裕がないので著者は

とり敢えず、日本人を急速に分散せしむることは実行不可能である、また土地問題は時間を藉せばその内無理の無い解決方法が見出せようと返答して置いた。大統領は一日ペナル・コロニーを視察し一二日前ダバオを出帆し、法律顧問上院議員ヘネロソを残した。同顧問は一週間滞在してダバオ土地問題を研究した。⁽²⁵⁾」

「その後帝國議會が始まり、同年五月七日笠井重治代議士はダバオ日本人の權益擁護を論じ、同一日貴族院では事前にダバオを訪問した大塚惟精氏が、ダバオ土地問題に就いて政府の態度を質した。これに対して時の外相有田八郎氏は夫々適当に答弁し、それが内地の新聞に報道され、更にマニラの新聞にも転載されたので、フィリピン言論界に強く響き、大統領は諸限代表に土地問題は穩便に解決するから、余り喧ましく言ってくれるなど漏らした。この直後四代表は東京で落ち合い、此処まで漕ぎ付けたから、今後は土地問題についてはあまり刺激しない手段を採ることに話し合った。／大統領は同年六月九日、一行七五名の大団体を連れてダバオを来訪し、昼間太田、古川の両社やペナル・コロニーを視察して同夜出帆帰途に就いた。結果から見れば遊覧視察に終わったが、大統領はダバオ上陸前乗船ネグロス号甲板で同行の議員に対し、内外新聞はダバオ日本人土地問題を喧ましく言っているが、所謂ダバオ日本人土地問題は存在しない。ダバオ州の面積は二〇〇万ヘクタールに上り、その内日本人の支配しているのは五七、〇〇〇ヘクタールで問題にならない。ダバオ在留の日本人は良く法律を守り、フィリピンの經濟開發を妨げている事實は少しもない。法律上、行政上日本人の租借權に影響する問題があつても、單に法規のみを以て律すべきではない。正義の觀念に基いて慎重に研究すべきであると論じた。これはマニラの言論界では、不可解の聲明として大なる反響を呼んだが、大統領は既に解決の具体案を考え出していたに違いない。この直後同年六月一六日通常議會開會式に臨んで、その教書の中に同様なことを述べた。即ち大統領は『日本人会社はダバオで既に相当長年に亘り耕地を經營しているので、それを自營者の形式にしようとうとうと今更問題にすべきでなく、また問題の面積も僅か二九、〇〇〇ヘクタールに過ぎない』と大きく出て、その賢明な所を示した。／翌一九三七（昭和一二）年七月七日には蘆溝橋事件が突発し、日支事變に發展したが、フ

取消された者は大部分フィリピン人で米人も混じり、日本人会社は除かれていたが、取消耕地内に這入っていたのは皆日本人自営者であったから、明らかな排日行為で、ダバオ日本人の重大問題として日本人会が中心となり、その対策を講ぜざるを得なかった。同年七月一七日の日本人会では、時の会長古川拓殖常務取締役田熊虎太郎氏をその委員長に選び、九月初めには新任の内山清総領事が対策打合せのためダバオに到着した。日本人会は同月一二日緊急評議員会を開いて諸隈弥策氏、松本勝司氏、村上忠二氏と著者の四名を代表に選び、マニラの中央政府との接衝及び母国政府への陳情請願を決議した。翌一三日午前十時からダバオ小学校の運動場で在留民大会が催されたが、遠きを物ともせず多数の日本人が集まり、その数五、〇〇〇（実数より余程多い）と言われ、決議文や声明書の朗読その他で邦人の血を躍らせた。この張り切った大会はフィリピン人側に大なる反響を呼び起し、翌一四日のマニラ新聞ヘラルドやブレチンは特電として、ダバオ日本人の大デモンストレーションという題目でこれを報じ、更にワシントンにも伝えられ、ホロ巡警隊は治安維持のため同月二三日一個中隊をダバオに派遣したが、邦人側は極めて平穩な状態であった。フィリピン側では今は独立前の大事な時であるから、内輪の問題を荒ら立ててアメリカにまで知らせないで、何とか穏便に治め度い気分に変わった。この期に著者は単独帰朝し先ず大阪毎日、朝日の両新聞社に迎えられて、ダバオ土地問題の真相を説明し、日本の世論の背景を得、次いで外務省や拓務省その他を訪問して善処を乞うた。他の三代表は大会後マニラに出て、同月二十九日夜マニラ日本人会主催ダバオ土地問題大講演会に出席し、何れも思いきり熱弁を振って同問題の重大性を説明し、大きな反響を呼び起こした。この土地問題当面の関係者はフィリピン人の耕主が大部分で、アメリカ人は少数混じりバゴボ族も多数だったが、差当り取消土地再審査請願のため、代表を出すことに衆議一決し、弁護士ファン・サレナスとバゴボの酋長二名、それにアメリカ人ウィリアム・ゴーンが加わり、一〇月初めマニラに行くことになった。その結果サレナスはロドリゲス農商務長官に会ってよく実情を説明し、二名のバゴボは同長官に彼等の窮状を訴え、ゴーンはマニラ総督に会って、米人側から見たダバオ土地問題をよく説明した。然し同長官の頭を変えるこ

とは出来ず、取消命令は一月上旬まで増加する一方だったので、三代表はフィリピン政界で有力なホセ・ラウル博士にこの問題を相談して善処方を依頼したところ、博士は近く一月一日フィリピン・コンモンウェルスが生まれ、ケソンは初代大統領に就任し、マーフィー総督は高等弁務官に変わるので、この機会を捉えケソン大統領に直接交渉することに運んだ。ところがこの重大時にダバオ日本人間の統制が乱れたので、著者は何を措いても先ず日本人側の結束と指導の必要を外務省に力説し、ダバオ在勤金子副領事転勤後の空席補充を願ったところ、柴田市太郎領事がその後任し、一月二日から開かれた特別議会で、多数のダバオ日本人が公有地又借りる形式で耕作しているのは明らかに違法であるが、彼等は長年平和的に開拓に従事しているので、これを合法化したいとの、予期しない発言をしたので、土地問題解決の吉兆が見え、二月一六日大統領官房から『ロドリゲス長官は全ダバオ州問題を一切大統領に委せた結果、ケソン大統領は本問題を法律的に考査する必要があるので、同長官の租借取消命令を中止せしめた』と発表せられ、第四次土地問題は差当り抑えることが出来た。／この土地問題によってダバオは有名になり、その最中一九三五（昭和一〇）年下半期には日本からの来訪者が多く、一九三六年には更に多くなった。その際日本の政治家はマニラに立寄り大抵はマーフィー総督、ケソン大統領その他フィリピンの要人に会い、内地に帰った後、ダバオ土地問題について献策し、問題の解決に大いに尽した。⁽²⁴⁾「取消命令を受けた耕地は合計一九四件で、その申告面積は一六、四一五ヘクタールであったが、日本人が入耕しているのはその内一五五件で、取消内訳は租借地二五件、払下げ五二件、ホームステッド七三件、フリーパテント四四件であった。入耕日本人自営者は六七三名（外に家族三八四名）、フィリピン人二、〇八九（外に家族一、〇八九名）、日比人合計三、四〇六名（外に家族二、八七八名）で日本人合計三、一〇六名となり、またその投資額は当時七〇〇万比程度と見積られた。／第四次ダバオ土地問題によって、米比人耕主は日本人自営者を嫌い、早く日本人との関係を絶とうとするので、日本人は自営者として新たに入ることが困難となり、また既契約のものは期限が多くは一〇年、長くて一五年で、借地代は生産物売上げ高の一〇%とし、契約満了後は地上物

べし、フィリピン将来の爲成るべく日本との經濟關係を断つて置くに如かずとの意見が世論となり、土地問題に強く響いた。⁽²²⁾」

「この機に乗じて一九三二年一月フィリピン雜誌界で最も有力なフリー・プレスは、上下兩院議員に対して次のような質問を出した。／一、ダバオに於ける日本人はフィリピンの脅威なりと信ずるや。／二、日本政府が自国民權益擁護のため、フィリピンに軍隊を派遣すること有りと思うや。／三、ダバオに於ける日本人を如何に処理せんと思うや。／その回答は兎も角として、一、排日雜誌の記事とは言え時局柄マニラの政界に強く響き、同年四月三〇日代議上フアビアン・デ・ラ・パスを委員長として下院議員十名からなる土地問題調査委員団が、議會開会前ダバオを訪問し九日間滞在して調査した。ダバオ土地問題として報告書に現われた要点は／一、日本人会社は土地法に違反して公有地を租借し、一、〇二四ヘクタール以上持っている会社もある。／二、ダバオ州の官公吏全部がホームステッドその他の形式で公有地を獲得し、時としては蕃人の無智に乗じて横領し其処に日本人を入れている。／三、バゴボ族は法律の知識なく、フィリピン人の乗ずる所となつて、土地を横領される恐れあり、それを保護すべきである。／その結果／一、土地局の組織改正。／二、日本人の進出阻止のためダバオ州北半は、ペナル・コロニーとする以外絶対に譲渡せぬこと。／三、外人会社の法律違反行為を調査すること。／などであったが、その年の議會では議論倒れに終わった。⁽²³⁾」

「一九三三年四月二八日に内務長官テオフィオ・シソンは、上下兩院議員その他政界有力者五十名余りを連れてダバオを訪問したが、僅か一日の滞在でお祭り騒ぎに終わった。時にワシントン議會を通つたタイディング・マクダフィー独立法案を、一九三四年五月一日フィリピン議會が承認し、いよいよフィリピンは一九三五年一月一日に、アメリカ支配下で独立してコンモンウェルス政府となり、それから十年後に完全な独立フィリピン共和國となることになった。その結果として同年七月三〇日、全群島から選ばれた二〇二名の代表がマニラに集まり、コンモンウェルス憲法審議會が開かれ、一〇月初めのこの會議でダバオ州代表バンタレオン・ペラヨ委員が

排日演説を行なった。その言う所は、ダバオ日本人会社は新土地法を潜つて勢力を増大し、フィリピン官公吏は公有地を獲得して日本人に又貸しし、土地法に違反して私利を計っているから、宜しく取締るべきで、同時にダバオ港を閉鎖すべきだといふのであった。この演説は時節柄全代表に大なるショックを与え、ペラヨは一躍名士となると共に、新憲法にも影響し、遺産相続の場合を除き私有農業地はフィリピン公有地獲得又は所有資格を有せざる個人、法人又は組合に譲渡することを得ずとの条文が入れられた。議会でもまた公有地調査特別委員会が出来てアントニオ・マルゴシノが委員長となり、土地局官吏一四名を引き連れ一九三四（昭和九）年一月一九日から一週間ダバオに滞在して調査した。続いて一九三五年一月二三日元土地局ダバオ出張所主任アルフレッド・ファハルドが六名の調査員を連れダバオに来て、同じ問題を調査した。かくの如く土地問題はダバオの年中行事となり、うるさいこと甚だしかったので、著者等が折角の日本人の投資を只とりではひどい、フィリピン政府が適当な価格で全部買い取つて呉れては如何といったことが、その頃になつて本氣に考えられ一時議會の問題にまでなつた。著者等としてはそんなことは複雑で、実行の可能性がないことは充分知つていたが、その狙いは幾分でも圧迫を緩めんとする窮余の策であつた。當時のマニラ総領事木村淳氏は新聞紙上に釈明書を出した程、この問題は發展した。時の農商務長官ユーロヒオ・ロドリゲスは租借公有地には外国人の労働を禁ずとの案も考え出したが、それでは國際問題になる可能性が多いとの理由で葬られた。フィリピン側としては独立する前に、この問題を解決して置かねばとの空氣であつたから、この機を捉えようと同長官は一九三五年二月七日、一二名の団体でダバオに着き、三日間滞在して調査した。この時ダバオ滞在中の調査員から受けた報告では、現在ダバオ州で日本人の支配している土地は五七、三五〇ヘクタールで、内二九、二五一ヘクタールが又借り問題で、土地法に違反しているといふことであつた。同長官はマニラに帰り司法長官ホセ・ユーロとも謀り、ヘーデン総督代理とも接衝し、勿論ケソン、オスメニヤ等フィリピン政界巨頭の意見をも徴して結論に達し、六月二〇日付で不法公有地獲得者として三二件の第一回取消しを發表し、それから小刻みに連続的に總計一九四件の取消命令を出した。

任した。ウッドは占領初期の軍政時代に司令官としてサンボアングに在勤したこともあり、アメリカ人としては稀に見るフィリピン通で、見識も高く偉大なる政治家で、フィリピン総督の地位では力が余り、独裁的でフィリピン政治家と妥協し得ず、自分の意見を思う存分政策に現わし、前任総督ハリソンの寛容政策とは正反對で、フィリピン人には未だ自治の能力は無い、これから教育を進め産業を開発して行くべきで、独立などまだ早いと断じた。そこでフィリピンの要人達は総督の政策に大反對で、各省長官たるフィリピン人は全部その職を退いたことすらあったが、総督には何らこたえなかったので、フィリピン要人間にはこんな重大問題がある際、ダバオ土地問題などを論議している時ではないという空気が漲っていた。確かにダンスは此の意を体していたのであろう、その報告によって幸い問題は割合簡単に解決した。要するに第三次土地問題は、ダバオの代表会社太田興業、古川拓殖を槍玉に上げて日本人の勢力を抑え、その発展を妨げんとする排日手段であった。⁽²¹⁾」

13 第四次ダバオ土地問題

「遠因は日本人の発明による動力ハゴタンが、ダバオに普及してマニラ麻園の経営を合理化し、実質上麻園経営に革命を来たし、ダバオ独特の自営者耕作法が、急速に拡がって行く気運となった所にあった。ところが新土地法によって日本人会社の支配する開墾地は、最早拡張が出来ないので、日本農民は米人やフィリピン人や、蕃族バゴボの耕地に入り込んだ。他方マニラ麻の市価は一九二四（大正一三）年から恢復し、その翌年に黄金時代が来たので、日本農民は自営者として入り得る土地を求めた結果、フィリピン人を刺激し、時には必要資金まで融通して公有地獲得熱を煽ったため、フィリピン人間にその争奪戦を起こさしめた。このことが中央に響いて第四次ダバオ土地問題となり、完全に政治問題化したのが、フィリピン政府としては、国際間の摩擦を避くるという名

目で、米比人の不法公有地獲得者を牽制する政策を取ったものである。察するに若しフィリピン人が自営者に適し、大発展したとすれば、政府当局は問題とするどころか、大いにこの方法を奨励したであろうが、あいにくフィリピン人にはこの耕作法を生かすだけの素質を欠いている。」第四次土地問題の「直接の原因は一九二九（昭和四）年四月二九日、下院々内総務マヌエル・ブリオネスが下院議員その他一行二八名のミンダナオ及びスルー研究委員を連れ、ダバオを視察して種子を蒔いたのが初まりである。更に五月二六日には土地局長イラドを団長に一行一五名が、四日間ダバオに滞在してマニラの新聞雑誌に意見を出し、同年の議会の問題となったが、根拠なき問題として大した事にならずに済んだ。翌一九三〇年四月には農商務長官ラファエル・アルナンがダバオを視察して、ダバオ開港場閉鎖論を新聞に発表した。その言う所はダバオ開港場は日本人のみが利用し、フィリピン人は何等利得する所がないから、これを閉鎖するにしかずとしたが、責任ある高官の言として問題となった。次いで同年五月一〇日上院議員アキノがミンダナオ調査団長となり、政界有力者数名を連れてダバオに來たり四日間滞在した。その報告書はダバオの日本人会社や個人の既得農業地は約一六、〇〇〇ヘクタールで大したこととはなく、また自営者耕作法も違法でないから、公有地租借契約は尊重すべきであると、至極穩当な趣旨のものであったが、なお問題は解消するに至らず、時の総督デーヴィスはダバオ土地問題がやかましいので、その後米人ジョン・アレソ顧問を秘かにダバオに派して研究せしめた。滞在一月余りでその真相を掴んでいると思われたが、何等発表されなかった。この頃になってダバオ日本人の發展を阻止するため、その發展している地帯の周囲にレザーバーションを設けることを考えつき、その現われとしてダバオ州のラサンとタゴンとの間の奥地に、ダバオ・ペナル・コロニーを設定することに決定し、一九三一年四月二八日司法長官ホセ・サントスが団長となり、各方面の有力者一〇名余りを従えダバオに來て実地調査をした。この結果調査団員の一人で当時大佐のパウリノ・サントスが、一九三四年からこの地区にコロニーを設定して實際に開発を始めた。これより先一九三一年九月一八日に満州事變が突発し、マニラの新聞雑誌は日本の侵略主義を書き立て、フィリピン人間には日本恐る

不斷の努力と接衝とを見逃してはならない。かくして幸いに既得の權益を取り止め得たのである。」⁽²⁰⁾

12 第三次ダバオ土地問題

「第一次世界戦争の影響で一九二三（大正一二）年は不況のどん底に落ち、ダバオ在留民は二、六九三名に減じたが、一九二四年頃から経済界は漸次恢復し、一九二五年にはマニラの黄金時代が再現して、日本人の渡来が多くなり、開墾も盛んになった。当時マセカンボがダバオ市長であったが、教養高からずまた大衆善導の誠意があるとも思われず、一九二六年二月公務を帯びてマニラに出で、太田興業、古川拓殖の日本人会社は所謂ダミー即ち名義借りで新会社を作つてフィリピン土地法をくぐり、制限面積の一、〇二四ヘクタール以上の土地を所有経営している旨を、エル・デバテなるスペイン語新聞によって宣伝したので、又もや世人の注意を引いた。この思想から後日アンチ・ダミー・ロウ（名義貸禁止法）が作られたことに鑑み、戦後の今日日本人のフィリピン国に於ける、合併事業投資には特に注意を要する。その後四月二二日行政局長ビセンテ・デル・ロサリオを団長とする、ルソン島方面の知事その他知名人士一行二三名を以て成る、ミンダナオ島視察団がダバオに来て二日間滞在し、日本人耕地その他を視察してマニラに帰つたが、一行中のマニラ市検事ゲバラの談として、五月五日ラ・ヴァンガルディアなるスペイン語のマニラ最有名新聞に、ダバオの日本有力会社は経営会社を拵らえて土地法をくぐり、幾千幾万ヘクタールの土地を経営支配し、日本人の勢力大にしてダバオはさながら横浜の如しなどと大見出しをつけた記事を出した。何分地位ある検事の視察談であるから、フィリピン人の注意を引くこと強く、その他のマニラの新聞も遅れて同様の記事を出し、正に先のマセカンボ市長の言を裏書きすることになったが、恰もダバオ日本人の發展を嫉視するフィリピン人が多くなっている際とて、遂にフィリピン議會の問題となり、

第三次ダバオ土地問題となった。当局としては捨て置き難く、時の総督ウッドはダバオ州知事にその実情取調べを命じた。幸いかかる事実なしとの報告を得たが、一方当時の土地局長ホルヘ・ヴァルガスは調査団をつくり、土地局次長ホセ・ダンスに団長を命じ、土地局法務部長イヒノ・デ・ギアとミンダナオ及びスルー監督官エリ阿斯・イバネスを付けて調査せしめた。一行は同年六月二九日豪州航路船丹後丸でダバオに到着の上調査を始めたが、その調査の要点は次の通りであった。／一、日本人農事会社が他の農事会社を事実経営監視しつつありや。／二、公有地を租借せる日本人農事会社が、その土地を日本人に又貸し居らざるや。／三、日本人の農事会社相互間の関係。／四、公有地租借地を日本人農事会社が抵当として、融資を受け居らざるや。／以上は何れも土地法の禁止する所で、先ず最初に問題の種子を播いたマセカンポ市長を尋問し、順次日本人農事会社の帳簿まで調べ、ダバオ滞在三七日間に及びサンボアングに向けて出発した。著者は彼等の出発を待つて予定の計画通り第一次蘭領東印度諸島及び英領馬來視察に出発した。ダンスの報告書は翌一九二七年一月二七日に公にされ、大部のものであったが、ダバオ州その他に於ける日本人の農事会社が、フィリピン土地法に違反せりとの説は事実無根で、日本人は勤勉にしてダバオの経済的開発に尽くす所大なりと賞讃し、日本人会社は公有地を最長五〇年間租借し、満期に至れば地上物と共にフィリピン政府に返還するから、政府としては何等損する所なく、若し日本人がダバオから撤退すれば、その耕地は数年にして荒廃に帰すべく、また日本人が数年にして為し得る所を、フィリピン農民は一〇年以上掛つても為し得ざるべしと、フィリピン人の農地開発能力の低きことを指摘し、官公吏などの軽率無責任な暴言取締りを進言して公平な判断を示したことは、時のフィリピン要人の意を体したものであっただろう。」「時の総督ウッドは一九二〇年の大統領選挙に於ける共和党シカゴ大会で大統領候補者に挙げられたが、時は平和時代で軍人出身だったため決定的の投票を得ず、惜しくもダークホースのワレーン・ハーディングに候補を奪われた。ハーディングがウイルソンを継ぎ大統領となるや、ウッド、フォーブス二名をフィリピン調査員に任命して充分調査せしめ、次いでウッドは総督に任命され一九二一年（大正一〇）年一月マニラに着

哉伯爵宛に土地問題に関する請願書を提出し、ダバオ土地問題の解決方を要請し、相原副領事からも此の問題の経緯に就いて報告し、ダバオは此の頃になって漸く外務省から注意を払われるようになった。これより前一九一八年七月一九日付ダバオ日本人会々長大城孝蔵の名を以て、時の外務大臣後藤新平男爵宛に領事館分館設置請願書を提出していたが、幸い聞き入れられ翌年五月にマニラ領事館は総領事館に昇格し、ダバオにはその分館が新設され、初代総領事として来栖三郎氏が一九一九年一〇月一八日マニラに着任した。氏はシカゴの領事を離任し帰朝中であつたが、幣原喜重郎外務次官が特にダバオ土地問題解決のためにマニラへ任命したのである。ダバオ領事館分館には翌年三月六日、芝崎弥額爾書記生が主任として着任した。その後一九三二(昭和七)年二月六日にこの分館は領事館に昇格した。来栖総領事は特に土地問題の解決に熱心で、ケソン及びオスメニヤその他フィリピン人の巨頭とよく接衝し、ハリソン総督を始めとしてマニラで有力な米国人を動かし、土地問題の解決のために尽くしたが、夫人が米国人であつたからその内助の功も大いに与つたと思われる。一方ダバオの主産物マニラ麻の市況は、一九一七(大正六)年が絶頂でそれから下り坂となり、渡来する日本人移民もダバオの前途を見限り、一九一八年一〇月の島内船イスラス・フィリピナス号の如きは、一〇〇名に余る日本人をダバオから運び去つた。その後一九二〇年三月には日本内地で戦後のパニックが起こり、九月からはアメリカ経済界も悪化し始め、マニラ麻市価は暴落し、一九二一年、一九二二年の如きはダバオ自営者の手取り一ピクル九ペソ見当に下がつたので、その栽培に望みを捨てて者多く、一九二三年ダバオに留まる日本人は僅かに二、六九三名に減じた。これを眺めたフィリピン指導者は、ダバオに於ける日本人の発展は大して根のあるものでなく、金儲けに来てゐる一時的の渡り鳥と安心し、その発展を恐れないようになった。一方ダバオに於ては日本人栽培協会及びダバオ日本人会から大森四郎、土屋増次郎、児島宇一、渋谷信三郎の四氏をマニラに派遣することになり、一九二〇年一月ダバオを出帆して、約一ヶ月間滞在し、当時マニラに居た著者及び井上直太郎、諸隈弥策、松本勝司の諸氏と懇談を遂げ、来栖総領事を動かしフィリピン政府要人に妥協案を認めしめた。その要点は／＼、公有地の私下

げは、日本人会社には原則として許可せざること。／二、新土地法には所謂公有地払下げに依る私有地は、外国市民のみのフィリピン法人には獲得を禁じているが、新土地法の実施以前の売買はこれを有効と看做すこと／三、最初土地法の改正案の通過した一九一八年二月八日以前に、土地局若しくはダバオ土地局出張所に、日本人会社が公有地の租借を請願せるものは、これを有効と看做すこと。／四、一九一八年二月八日以前に租借を請願せるも、払下げ出願の為に取消したもの、最初の租借出願に復活許可を与うべきこと。／五、一九一九年二月八日以後の租借出願は、原則として却下するも、新土地法実施以前に既に開墾を為したるものには、その開墾面積だけ租借を許可するか、相当の期間例えは椰子樹には二〇年、マニラ麻には一〇年というように公有地の利用を許可すること。／以上の提案によって来栖総領事は上院議員ケソン、下院議長オスメニヤ両氏と協議して賛成を得、続いてハリソン総督に交渉しこれ亦賛成を得、同総督は一九二〇（大正九）年二月四日付で土地問題に関する教書をフィリピン議会に送った。この教書によって許可を推薦された日本人会社は四四社で、その翌日フィリピンの上院を一六対二の大多数で通ったが、さて実施となると四四社の内完全に権利を付与されたものは一七社で、他は農商務長官の審査を受けることになった。結局一九一九年一月二九日付で、以前の出願は租借を許可し、払下げ出願は租借に変更することにして許可するとの修正案が通り、既得の權益を大して損ぜらるゝことなく、二年余り掛って解決した。四四社の内サンボアンガ・デベロップメントとラミタン・プランテーションは、サンボアンガ州バンラン島の租借を申請した会社で、ダバオ州の分は四二社となり、その内一五社はその後の不況で消滅し、二七社だけが残った。古川拓殖は私有地の購入、太田興業は古い公有地の払下げ、その他の古い会社は公有地の租借契約が出来ていたから、第二次土地問題には直接巻き込まれなかったが、これら以外の関係会社は大影響を受けた。／既述の如く第二次土地問題は古川拓殖のダバオ進出が遠因をなして起り、その解決はマニラ麻の市況悪化で日本人の発展が鈍ったのと、他方利害関係者の奮闘と来栖総領事の努力とによるが、この他に永年三井物産マニラ支店長としてフィリピンの実情に通じ、多数の有力フィリピン人を友人に持つ三神敬長氏の

ろうといふので、一九一六年レイテ州パロンボンの耕地経営者サーレスを知事に任命してカウシングに代え、その下の事務官に長官の下に居たファン・ポサダを据えた。このポサダはイロカノで、一八八四年一月に生まれ、古川拓殖の社員ロレンソ・マヌエルと親交があり、仲々の勉強家で、独学で身を立てただけあって、頭腦明晰、思慮深く公平で、稀に見る手腕家であった。ダバオの勤務は短かくサンボアンガ州庁に帰り、後一九二四年大蔵省の収税局長に進み、一〇年間勤めて最長のレコードを作った。一九三四年マニラ総督に推されてマニラ市長となり、新庁舎の落成する前年の一九四〇年一月不幸急逝した。氏は日本人をよく理解し、決して悪くはなく、誠に得難い立派な人で、著者は最後まで特に懇意にしていた。サーレス知事はフィリピンの巨頭オスメニヤと別懇の間柄であつたが、当時マニラではダバオ日本人の発展は何とかなければという空気が醸成せられ、ポサダは現地にいて日本人の行動を良く注意していた。彼が一日著者をダリアオン耕地に訪問した際、耕地その他の写真求めたが、その目的は大体推察が出来た。その前後各所で日本人のダバオに於ける仕事振りを現わす写真などを集め、真に国家を思う熱情から、マニラの要人間にダバオ日本人の発展振りは、これを捨てて置けば将来フィリピンの禍根になる恐れありと説明これに努めた。こんな行動が導火線となつて、これら要人間に出来たのが第二次ダバオ土地問題で、結果としては一九一八年二月八日フィピン議会の最後の日に、時間が切れたので時計を止め、土地法改正案を別に討論を加えず満場一致で通した。時の下院議長オスメニヤはその閉会式に当り、今次の議会に於て土地法の改正案が通過し、吾々の子孫の為にフィリピンの天然資源を保留し得たことを喜ぶ旨を述べたのに照らし、土地法改正の真意の程が窺われた。この改正案に依るとフィリピン法人法に依つて出来た農事会社と雖も、米比人の持株が六一%以上でなければ、土地の租借若しくは払下げを許されず、第三国人は公有地の払下げに依る私有地を買い取り得ないことになった。要するに第三国人には農事会社の株を、三九%以上は持たせないといふ制限であつた。この改正案はフィリピン人の間でも予め云い触れさず、議会通過後も初めの間は日本人には知れなかつた。一九一六年にはフィリピン独立の準備としてジョーンス法がワシントン議会を通過

し、当時フィリピンはアメリカと良好な関係で、フィリピン人は国事に張り切っていた。この時ダバオでは日本人会社が六五社も組織せられ、その大部分は従来の慣例に従い租借申請地の開墾を進め、大資金を投じていたが、公有地の租借は申請した儘で、正式に許可を得ているものは少なかったので、ダバオ日本人の打撃と心配は大きかった。時の総督ハリソンはその抱くフィリピン人のフィリピンなるモットーの下に、当時フィリピン官庁の大部分を占めていたアメリカ人官吏をフィリピン人に代え、広範囲に自治を許してフィリピン人を喜ばした。時にマニラ駐在副領事相原庫五郎氏が四月下旬ダバオを訪問し、重大事件として打ちあかされ、ダバオ日本人は初めて土地法改正案の議会通過を知って大いに驚き、副領事と対策を熟議した。幸いその直前に在留民の親善、相互の利益、統制団結の機関として、ダバオ日本人会が出来ていたが、これによってダバオ日本人栽培協会の設立も促され、直ちにこれを組織した。

土地法改正案の通過直後、森林局はメジナを団長とする森林調査隊を突然ダバオ日本人開墾地に派遣し調査の結果、多数の日本人会社は有用林木伐採の件で、木材代金と不法伐採金を合わせて約一五万ペソの納入を要求され、土地問題と共に一部の日本人農事会社経営者は大いに苦しむ所となった。種々折衝の結果その後罰金は免ぜられるとしても、無警告の賦課実行は納得出来なかった。／＼フィリピンの土地法改正案の通過した時は、恰も第一次世界大戦中で、日本も米国と共に連合国側としても、独逸に対して戦かっていたので、この際日米間に多少でも紛争を起こす可きに非ずとする世論は、時の米国大統領ウィルソンをしてこの土地法改正案を却下せしめたが、フィリピンでは翌年の議会で同様の改正案を通過せしめた。この第二回目の土地法改正案は既に世界戦争は終わっている時で、ウィルソンも已む無く一九一九年一月一九日これを裁可し、改正新土地法は同日から有効となった。／＼何れにしてもダバオ土地問題は、日本人の発展を阻止するのが目的で、在留日本人の力だけでは解決することが出来ないので、一九一九年五月二五日ダバオ日本人会々長柳原隆人氏の名を以て時の外務大臣内田康

のと考えられた。これが第一次ダバオ土地問題で、太田氏の賢明よく禍を転じて福としたものである。／その後ダバオからサンタクルスまでの、海岸寄り一哩以上の奥地で、外国人が商業を営むことを禁ずる所謂外人商業禁止令が出された。その起りはダバオに新しい日本人が三〇余りも店を開いて、盛んにバゴボ族に商品を売り込み、大いに発展したので、当時有力であったアメリカ人、スペイン人のプランターは、何れも自分達の持っている耕地内の店が日本人商店に押されるので、知事を動かしてこの禁止令を出させたものらしい。表面の理由は日本人商店がいろんな物珍らしい商品を店頭に並べ、蕃族の好奇心をそそのめるので、彼等は高価で買えない時は資金調達のため殺人罪まで犯す虞があるから、不祥事件を未然に防ぐ為であると、至極尤もらしいものであった。ところが日本人商店は既に付近のバゴボとの貸借関係が複雑になり、命令の儘に引き揚ぐることを得ず困り果て、先ず最初一ヶ月、次いで必要なだけ数回の猶予期間を政庁に願ひ出た。ダバオで古い藤原義雄氏は当時各所に販売店を持ち、太田商店と対抗していたが、著者が藤原氏自身から聞いた話によれば、氏などが中心となり関係全日本人が協議の結果、先ずマニラの帝国領事と相談することにし、岡田幸太郎氏と橋本音治ドクトルとを代表者としてマニラに派遣し、時の領事岩谷讓吉氏とよく相談せしめたところ、太田興業と同様フィリピン法人法によって農事会社を組織し、公有地を獲得すれば商業を合理的に継続し得るということであった。そこでマニラ政庁に対しては有力者田川森太郎氏に、サンボアンのモロ州政庁に対しては顔の利く中村清次氏に夫々交渉を依頼し、直ちに会社組織に取り掛り、柳原隆人氏にその手続きを依頼して、一九一一年岡田幸太郎氏はイラムに、上田亥之吉氏はカタルナンに、赤嶺三郎氏はドウワンに夫々農事会社を設立して地盤を守ることが出来た。この事件は他人の土地を借りているのでは、蕃地行政上商業を許さぬと云うのが表面の理由であったが、裏面は日本人の発展を阻害しようとする、一種の日本人排斥の土地問題で、第一次ダバオ土地問題の一部と見るべきである。

第一次ダバオ土地問題は何分日本人の關係者が少なかつたので、実質的影響も少く、こんな問題があつたことさえ知らない人が多かつたが、その解決如何はその後の日本人の発展に關係する所多く、幸い太田氏が合法的に

旨く解決されたことは、他日ダバオが急速に開発され、日本人が大発展をした基盤をなすもので、氏の手腕と功績は大いに称えらる可きである。⁽¹⁹⁾」

11 第二次ダバオ土地問題

「他州は兎も角もダバオ州に於ける日本人の急速且つ偉大な発展は、フィリピン識者に恐れと嫉妬心を懷かしめ、日本人の経済的發展を阻止する方法が探られた。これはフィリピンの将来を思う民族思想に胚胎するもので、ダバオ日本人は急速な発展は、古川拓殖会社が一九一五年四月からダリアオンに本拠を構え、その活動と発展は日本企業家を刺激して、一時に多数の農事会社の設立を招来し、第一次土地問題が太田興業に原因し、第二次土地問題が古川拓殖の進出に原因することは、ダバオに於ける二大勢力の対照を示す興味ある事実といふべく、以下の説明はその経緯である。／第一次世界大戦の影響で、一九一六（大正五）年からマニラ麻の値段が良くなって、一九一七年には最高潮に達し、古きも新しきもフィリピンで有望な事業は、ダバオに於けるマニラ麻栽培に限ると考え、農事目的の日本人会社を新設して公有地の大半を展開したが、短時日の間にダバオ州に設立された日本人農事会社は総数六五に達し、日本からの投資金一、〇〇〇万比に上った。そこに従来からの太田興業会社の募集と、新たに古川拓殖会社の誘導した農業移民が、毎船マニラからダバオに流れ込んだので、日本人は実数以上に推算せられ、フィリピン人の感情を刺激した。一九一五年著者が二度目に来た時は、ダバオ州は米国人知事からフィリピン人初代知事のカウシングに変わっていた。カウシング知事は著者の親友レオポルド・アギナルドの友人の法律専門家で、後年判事に任命された。当時のミンダナオ及びスルー地区長官は米国人カーペンターでサンボアンガに駐在していたが、その支配下のダバオ州の如き開拓を要する土地には、農事に通じた知事が良か

其の任期は四年である。監事は株主總會に於て選任し、其の任期は二年である。」「会社は商法上の一般能力を有するは勿論、更に次の如き特權を賦与せられて居る。／一 資本増加に際し株金全額の払込を要せざること（南拓令第四条）／二 払込資本金額の三倍を限り南洋拓殖債券を発行し得ること（南拓令第十二条）／而して政府は会社の性質に鑑み特別な監督を為すこととし、即ち政府は会社に対し監督上必要なる命令を發し、又会社をして重要事項に付認可、許可等を受けしむる等の外、南洋拓殖株式會社監理官を置いて常時会社の業務を監視せしめて居る。他面政府は会社の事業の円満なる發達を期せしむる為適宜助成の途を講ずることとせる外、毎營業年度に於ける配当し得べき利益金額が、政府以外の者の所有する株式の払込みたる株金額に対し、年六分の割合に達する迄、政府の所有する株式に対し利益の配当を為すことを要せざることとしてある。⁽¹⁷⁾」

会社の營業種目は、広範におよぶ。「南洋群島」のすべての資源を収奪すべき性質が、ここに明白に示されてゐる。

「一 拓殖の爲必要な農業、水産業、鋳業及海運業／二 拓殖の爲必要な移民事業／三 拓殖の爲必要な土地（借地權其の他の土地に関する權利を含む）の取得、經營及処分／四 委託に依る土地の經營及管理／五 農業者、漁業者若しくは移民に対し拓殖上必要な物品の供給又は其の生産品の買取、加工若しくは販売／六 拓殖の爲必要な資金の供給／七 前各号の事業に附帶する業務／八 前各号の外拓殖の爲必要な事業／而して現在經營中の事業及將來經營せんとする事業は、大体次の如きものである。／一 燐鉍採掘事業 政府の現物出資に係るアンガウル島及ファイイス島に於ける燐鉍の採掘を為すものにして、現在アンガウル島に於て採掘して居る。二 水産業 内外南洋に亘つて漁撈を行ひ節、缶詰等の製造を為すの外、製氷、冷凍事業をも併せ営むものである。三 海運事業 南洋群島を起点として外南洋諸島を連絡する航路を經營するものである。／四 金融事業 内外南洋に於て貸付又は株式引受等、拓殖資金の供給に當るものである。⁽¹⁸⁾」

10 第一次ダバオ土地問題

アバカ（マニラ麻）の栽培用地をめぐる土地問題は、大きく四つの時期に起こっている。いわゆる「ダバオ土地問題」は、単に土地をめぐる問題ではなく、世界経済の動向、アメリカ政治の影響、それに排日運動との関連などが複雑にからみ合っている。以下、古川義三の証言を中心に「ダバオ土地問題」を復元しておこう。

引用文中、「著者」とあるのは、古川義三自身を指す。

「故太田恭三郎氏は一九〇六（明治三九）年一月、蕃族バゴボの所有している麻園を買い受けて耕地経営を始めた。時の部長アタシオの了解を取り付け、知事ボルトンから開墾許可を得て、バゴボ相手の商店を開いた。ところがボルトン知事はこの年ダバオ西海岸で蕃人に殺害され、七月にアレン・ウォーカーが新たに知事に任命された。バゴボ族が所有を続けるならば、麻園と同時に土地の所有権は何等問題にならないが、さて日本人がこれを買収すると、彼等の土地を譲り受ける法律の根拠が無く、自然公有地ということになる。ウォーカー知事は外国人は公有地の使用権を有せず、外国人の開墾はフィリピンの土地法に違反するとの理由で、日本人に退去命令を発した。当時太田氏の他に数名の日本人が、同様に蕃族から麻園を買い受けて開墾を始めていたが、流石の太田氏もこの退去命令には大いに弱り、種々研究の結果フィピンには法人法があって、農業目的の会社を組織すれば外国人でも、米比人同様公有地の利用が出来ることを知り、翌年五月太田興業会社を作って、バゴ及びミントルにかけ先ず一・〇一五ヘクタールの租借願を出して正当に許可を得、後年これを払下げに変えて買い取った。この問題は太田氏が初めそこまで深くは考え及ばず、且つフィピンの法律にも通じなかった所から起ったものである。当時米国カリフォルニア州では排日が盛んであったから、ウォーカー知事もその思想的影響を受けたも

けれども、外国人に対する官有地払下は、爾今これを停止する。比律賓の法律による会社でも、その株主中比島人又は米国人が六割以上を占むるものでなければ官有地の租借又は払下を受けることを得ぬといふ法案を通過した。しかし当時はまだ大戦中だ。日米両国提携して戦つてゐるのに、米国政府がこんな法案の通過を黙認してゐることは外交上面白くないといふので、比島総督の注意により、大統領ウィルソンがこれを握り潰した。けれども翌年また同じ法案が議會を通過したので、大統領もやむを得ず、八年十一月これを裁可した。いふところの比島公有土地法の改正がこれである。⁽¹⁵⁾

9 「南洋拓殖株式会社」

昭和に入つて、いわゆる「南進」政策は、積極的にすすめられた。「南洋拓殖株式会社」の設立は、「官民一致協力」して「南洋群島」の「資源」を利用しようとする具現化である。

「昭和十年十月、拓務省に於て開催せられたる南洋群島開発調査委員会」にあつて、「南洋拓殖株式会社設立の計画」がすすめられた。

この会社の設立の経過は、大要、つぎのようである。「政府は昭和十一年五月、第六十九回帝國議會に会社設立に関する予算を提出して其の協賛を経、次いで昭和十一年七月二十七日勅令第二百二十八号を以て南洋拓殖株式会社令の公布施行を見るに至つた。／本会社の資本金は二千万円にして、政府は会社の基礎を強化ならしむる為、アンガウル及ファイス両島に於ける燐鉱の採掘に関する権利及之に附屬する財産を現物出資することとなり、而して右現物出資財産の評価は能う限り公正、妥当を期する為、政府の諮問機關として昭和十一年七月二十七日勅令第二百二十九号を以て、南洋群島官財産評価委員会官制の公布を見るに至つた。仍て会長及委員の任命を終

り、同委員会は前後三回に亘つて會議を開催し、政府出資財産の価額を一千五十四万六千円に評價するを適當とし、之を拓務大臣に答申したので、政府は之に基き右を以て出資財産の価額と決定した。／次いで昭和十一年七月二十七日、会社令第二十八条の規定に基き設立委員長及二十八名の設立委員を任命して設立委員會を構成せしめ、更に委員會の事務を処理せしむ為、東京に設立事務所を開設した。而して設立委員等は前後二回に亘つて設立委員會を開催し、定款其の他を審議決定し、定款は八月三十一日拓務大臣の認可を得るに至つた。／斯くて設立準備は着々進捗し、愈々株式の募集に着手したのであるが、本会社の株式は總數四十万株にして、前記政府の現物出資財産に対し割當つる二十一万九百二十株を控除せる殘余の十八万九千八十株に就ては、其の中十三万九千八十株は南洋群島に於ける拓殖事業關係者其の他に所謂賛成人として之を割當て、他の五万株を一般に公募することとした。而して右公募株は九月十日より十二日に至る三日間の予定を以て一般募集を開始したが、第一日に於て既に公募株數の十五倍を超過する申込があつたので、即日之を締切つた。仍て引續き株式の割當を行ひ、更に十月十六日を期限として第一回の払込を完了し、次いで十一月二十六日第一回設立委員會を終へ、翌二十七日東京市に於て創立總會を開催し、茲に南洋拓殖株式會社の設立を見るに至つたのである。⁽¹⁶⁾」

「官民一致協力」の姿が如実にうかがえる。會社の職制および政府の監督・保護にも、この点は反映されている。「本會社は南洋群島及南洋方面に於ける拓殖事業の經營及拓殖資金の供給を目的とし、資本金二千万円、内払込濟額一千二百九十万九千五百円にして、其の本店を南洋群島パラオ諸島コロール島に置き、支店を東京市に置いてゐる。會社は其の業務執行機關として社長一人、理事三人を、又業務監査機關として監事三人を置いてある。社長は會社を代表し其の業務を總理する。社長事故あるときは定款の定むる所に從つて理事中の一人が其の職務を代理し、社長欠員のときは其の職務を行ふのである。理事は社長を補佐し、定款の定むる所に從つて會社の業務を分掌し又は之に参与する。監事は會社の業務を監査する。／而して社長は拓務大臣の奏請に依り内閣に於て之を任命し、其の任期は五年である。理事は株主總會に於て選舉したる二倍の候補者中より拓務大臣之を任命し、

る。／ところが、大正五年になると、これが一千二十九人、翌六年には三千百七十人、七年三千〇四十六人となつた。これは数の上からいつて大変な躍進だ。」「大正五年、比島を旅行した土屋大夢は、帰来『比律賓拔渉』なる一書を著し、中に最近の調査だとして、比島在留邦人六千二百人、その地方別／マニラ地方 一九五〇人／ダバオ地方 一四三〇人／サンボアンガ地方 三七〇人／バギオ地方 二九〇人／カランバ及びロスバニヨス地方 二七〇人／ホロ 二六〇人／ミンドロ地方 二〇〇人／イロイロ地方 一七〇人／オロソング地方 一五〇人／アルバイ地方 一五〇人／ストツチエンブルグ地方 九〇人／セプー地方 八〇人／南クスレー地方 七〇人／バラン地方 七〇人／マスパテ地方 七〇人／バタンガス地方 七〇人／ダターバン地方 六〇人／アルロイ地方 五〇人／其他 四五〇人／

として、その職業別／商人 五〇〇人／農業 一七〇〇人／漁業 五〇〇人／工業 一六五〇人／家内労働者 四五〇人／雑業 九五〇人／其他 四〇〇人／となしてゐる。しかしこれは六年、七年の旺盛なる渡航者を含んでゐないのみでなく、五年中の渡航者も、その一部分しか勘定に入れてゐないであらう。大正六、七、八年頃はダバオ在留邦人だけでも八千人を越へてゐたのである。しかし、暫らく土屋の記述するところを見やう。『資本家の農業その他に従事するもの二十数会社あつて、其の資本は恐らく百五十万円に達してゐる。此等在留民は何れも温良なる人々で、就中大工は到る処評判がよく、比律賓に於ける最も健全な職業となつたばかりか、比律賓人にその感化を及ぼし、又技術をも伝へて自他共に利するの有利に立至つてゐる。漁業の如きも又比律賓に欠くべからざる食用魚類を供給するものであつて、彼等の海上に於ける勇敢なる動作は、内外人ともに称讃する所である。農業の諸会社は多くダバオ地方にあつて、何れも健全なる発展を為しつゝあるが、その中にも太田興業会社の如きは、資本といひ、人物といひ、実に立派なものであつて、其の事業も文明的に秩序整然と経営せられ、多数の比律賓人をも使用し、成功顯著なるものである。本年（大正五年）六月二十二日、サンボアング及びスルの長官カーペンター氏は特に会社宛てゝ一書を裁し、先般長官がタロモ地方を巡視したる際、会

社農園を視察し、其の發達の健全なるを認め、ミンダナオ開發事業の大なる賛助者として、其の成功を祝する旨を告げた。而して長官は又その書中に於て、太田会社が巨額の資本を投じたるは、一時的の營利事業にあらずして、永久なる農園經營の目的を有するものなるを認むべし、同時にまたその事業に従事する農業労働者等が柔順にして克く法を守り、善良なる農民の模範たることを地方の官憲が承認したることを喜ぶ旨をも告げたのである』(前出・「比律賓拔涉」)。／當時、太田興業会社は資本金五十万円、そのタロモ付近に所有する土地の面積は一千二百五十町歩、租借地二千八百五十七町歩、その内会社直營の麻耕地二百町歩、椰子の植付段別百五十町歩、小作法による麻の植付七百町歩、別にサンボンガには二万五千本以上の椰子を植ゑ、百五十頭の牛を放つてゐた。而してその社に使用する日本人百五十人、モロ八十人小作の獨立農夫は悉く日本人で、その数凡そ四百五十名であつた(大正五年四月現在)。／さうしてその太田興業会社の社長にして、ダバオ邦人發展の先驅者太田恭三郎は、大正四年歸朝の際、大いに故國朝野に向つて、比島進出の有利なることを説いた。しかし何して資本が足りない。日本の資本家はよろしくこの比島に向つて放資をなすべし。比島の富源は無尽蔵だ。土人は怠惰だ。衛生状態は差支へない。日本の資本家は真面目にこの比島を調査し、研究せよ。比島同胞の故國送金は、一人一ヶ年百円に相当する。これを在外同胞三十六万人の送金額五千万円と計上する大藏省の計算に見ると、非常な好成績といはねばならぬ。太田恭三郎はかくの如く力説した(日本移民協會報告)。／しかし実はその呼びかけも無用な程、邦人企業家のこれに向ふものが続出し、大正七年中、ダバオに於ける邦人麻栽培会社は四十有余を数ふるに至つた。大戦によるマニラ麻の市価奔騰の結果である。その所有及租借地面積三万二千余町歩といふのだ。これらの会社は比島の会社法によつて法人を組織し、その名義を以て比島官有地の租借又は払下を受けたものである。比島政府は官有地の一部を選定して、租借又は払下を願出づるものに対しては、国籍の如何を問はず、その会社法によつて、会社には一千二十四町歩迄、個人經營には三百町歩迄を限度として、これを許可したのである。／邦人の右の如き大飛躍は、直ちに米國の関心を刺激し、大正七年マニラの議會は、特に日本人とはいはなかつた

ン農事をも関係会社とし、今川唯一氏は南洋殖産を代表してダバオに來たり、パンガシナン・サーザン・クロス
拓殖を買い取り、デイゴスのミンダナオ拓殖を関係会社として大いにダバオ開發を図り、女婿今見昇氏を招き野
口主衛門（後の木本主衛門）氏に付けこれが経営に當らしめた。以上の熱帯産業、松岡興業、大宝組、南洋拓殖、
藤田組、南洋殖産、太田興業及び古川拓殖の八社が、その後ダバオに於ける事実上の主導会社であった。ダバオ
以外では長野県人北島正平がコタバト州パラニに、私有耕地約三〇〇ヘクタールを買い取り、大いに栽培事業に
進まんとしたが、土着人の反対で思うように行かないで、結局手を付け得ず、後マニラで金貨メリヤスを設立し
てその経営に転向し、大阪の脇坂良麿氏はサンボアング興業を設立して、バシラン島のバラクタサン及びマロー
ンで椰子樹を栽培し、東京の山村棟次郎氏も同じくバシラン島のアトンアトンに、椰子園を購入して経営し、こ
の外松岡政雄氏は別にフィリピン拓殖を設立してタヤバス州の南部ボントックに耕地を買い取った。ダバオ州に
は太田興業、古川拓殖の外に、（中略・引用者）古い邦人農事会社が一二社もあって、外来の商社に負けまいと、
何れも新しく農事目的の關係会社を組織し、公有地獲得の大競争となった。先ず太田興業は新たに關係会社ビヤ
オ拓殖及びノース・タロモ拓殖を設立してミントル奥地に構え、マグナガにあった米人の会社ライ・リバー拓殖
を關係会社に取り入れた。古川拓殖は關係会社リパダス興業をバヤバス上部に、マヌエル興業及びサウス・ミン
ダナオ農事をギャンガに、柳原隆人氏はサーザン・ダバオ興業をラサン川北方に、ムリッグ農商は關係会社タグ
ラノ・リバー拓殖をバンカス上部に、ミンダナオ農商は關係会社ツウイン・リバー拓殖をギャンガに、その他邦
人のドウマン拓殖、イホ拓殖は夫タイホに農地租借の請願をなし、以上一一社は何れも土地法の改正までに測量
を終えていた。／以上の外太田興業の關係会社ダリアオ拓殖はバンカス上部に、ギャンガ拓殖はミントル奥地に、
ギヒン拓殖、板倉拓殖、パダダ拓殖の三社はパダダに、タロモ・リバー拓殖はミントル奥地に、サウス・ミンダ
ナオ興業の關係会社ミンダナオ・レクラメーションはバト拓殖の上部に、南洋殖産の關係会社加藤拓殖はバナカ
ン海岸に、松岡興業の關係会社バナボ拓殖はラサン海岸に、土居久藏のタゴン拓殖はタゴン川に沿い東側に、東

京の高木氏の高木農事はテブニコ奥地に、パンギット拓殖はマダウンの奥地に、ツガナイ拓殖はラサン北方イン及びツガナイ兩川の間に、夫々公有地租借の請願をした。以上一三社は測量未済で、これに上述の主導八社、古い一二社、測量済一一社を加えると四四社となる。この外に約二〇社設立されてダバオ州各地に公有地租借の請願書を出し、最盛時にはダバオの邦人の農事会社は約六五社に及び、当時島内船で日本移民が多数渡来したので、かくてはダバオ州、延いてはミンダナオ島は、事実上日本人に占有されるものと、フィリピン識者に恐れを抱かしめ、その結果一九一八年二月八日に土地法の改正案が議會を通過して土地問題が起り、ダバオ日本人は大いに苦しんだが、開拓は勢いよく進行した。然しダバオ邦人の發展も時勢の変化には抗し得ず、日本内地の好景氣で一九一九（大正八）年から日本新移民の渡来は減じ始め、一九二〇年のパニックで麻の市価は暴落し、ダバオの日本人は減じ、乱立と思われた日本人農事会社は、經營意の如くならないため上述の四四社に減じ、結局に於てダバオは内外人を通じ、太田興業と古川拓殖の兩社だけが、対立する代表会社となり、これに對抗し得る事業会社は終戦まで遂に出現しなかつた。¹⁴⁾」

8 日系ダバオ移民の伸長とアメリカの警戒

「拓務省の統計によると、明治三十六年、三十七年のベンゲット道路工事時代の渡航者は別として、三十八年以後、大正四年に至る迄一ヶ年間の比島渡航者一千人に達したことは絶無だつた。最も多いのが、大正二年の九百三十人、次が、大正三年の七百八十三人、四十五年の六百八十九人、四十四年の五百九十六人、大正四年の四百六十八人といふ風であつた。最も少ないのになると三十九年の七十一人といふのがある。右はいづれもグアム島渡航者を含むのであるが、グアム島渡航者の数などは、殆んど数ふるに足らない。殆んど全部が比島渡航者であ

た。ロムアルド・キンポ知事の時代、一九三七年三月一日から市制を布かれ、ケソン大統領はダバオ市が特に土木工事を必要とすることに鑑み、多年マニラ市の土木技師を勤めていたサンチャゴ・アルチャガを初代市長に任命した。ノダバオ市はダバオ郡四、五〇〇ヘクタール、ギャンガ郡一三七、六〇〇ヘクタールを合わせ、総面積一八二、六〇〇ヘクタールとなったが、その大部分は人跡未踏のジャングルなるがため、一九三七年七月三十一日現在の全人口は四五、五七九人の少数であった。¹⁾

6 古川拓殖会社の創立と事業

古川義三は、一九一四年（大正三年）十一月、伊藤孝太良、芳竹良造両氏を同伴し、前回と同じ船（東洋汽船の春洋丸）で、一日遅れ二七日マニラ市に着いた。伊藤マニラ支店の顧問弁護士米国人ライトに依頼して、フィリピン法人法により先ず Funtakawa Plantation Co. Inc.（古川拓殖株式会社）を組織して十二月二八日定款を登記し、その細則は翌年初めに作製して、著者（古川義三）引用者補記は社長に、伊藤孝太良、芳竹良造、大橋藤造、小島政一氏等は取締役、レオポルド・アギナルドは法律の要求するフィリピン市民の秘書役に就任した。一月二〇日島内船ロムルス号で伊藤、芳竹両氏の外に、伊藤マニラ支店社宅に使っていた福島県人横山賢雄氏を連れ、マニラを出帆し二月一日ダバオに着き、リサール街マクフィー所有の借家に落ちつき、此処を生活の本拠としてダバオ各地に出掛け耕地を物色した。公有地を租借して耕地経営に入るとは、慣れないので見込が立たず、他方耕地の売物は各所にあつたので見て回ったが、ジェームス・バーチフィールド大尉のケンタキー耕地は、ダリアオンの海岸にあつてその面積一〇〇ヘクタールであつたので、これならばマニラ麻園も椰子園もあつて、経営を引き継げばその道に入り易いと思った。大尉は露人ソボロフを支配人に使っていたが、利益も上げ得ず売りを

がっていたので交渉したところ話が纏まり、四月一日から経営を引き受けることにした。代金は二万比で、半額は即時、残額は二年間の分割払いとした。後に地券下付手続の件について多少の問題を起したが、丁度幸い松本勝司が伊藤マニラ支店の商用でサンボアング港まで来たのを、ダバオまで延長して接衝して貰い事無きを得た。著者がこの耕地を最初に得たのは、先を見透してのことでは無く全くの僥倖で、後日古川拓殖の本拠として誠に適当な位置で、思うように事業を經營することが出来た。⁽¹²⁾」

7 日本人経営の農業会社の乱立

古川拓殖株式会社は、すでにみたように一九一五年四月に設立された。世界は第一次大戦の渦中にあり、日本の海外保有資金も増大の一途をたどっていた。勢い、海外発展熱も高まっていたといつてよい。古川拓殖につづけとばかり、日本人の経営による農業会社の乱立をみたのである。

古川義三は、一九一七（大正六）年に「バーチフィールド大尉所有の全財産を購入して、ピソ農牧を引き継ぎ、新たにダバオ・コマーション⁽¹³⁾を設立」した。以下、農業会社の乱立の状況を示しておこう。

「台湾の松岡正雄氏は早く熊本県人日隈智敏氏をフィリピンに派遣し、初めコタバト州に入らんとして入り得ず、後ダバオに転航し松岡興業を設立してラサンに本拠を据え、名古屋の大宝組は最所及び千本両氏を派遣し、ピンダサン拓殖を買い取って本拠とし、初め岡田亥八氏、後渋谷信三郎氏を経営に当らせ、土屋増次郎氏は初めバシラン島に入らんとして入り得ず、ダバオに來たり南洋拓殖の本拠をラサンに設け、大阪の藤田組はマレイ半島でゴム園経営の体験があったので、ダバオでもマニラ麻、椰子園経営を志し、米人経営のダバオ東海岸のラウニオン、ビトーガン、タリサイの耕地を購入してダバオ農商を組織し、児島宇一氏を派遣して經營せしめ、カタルナ

したいがため、その手段として農事会社を経営したのであった。⁽⁹⁾」

ダバオ市には、「太田恭三郎記念碑」がある。記念碑の正面には、「K. S. OHTA/WHO BELIEVED IN DAVAO/AND/HELPED IT TO GROW/(1876-1917)」と記され、碑文は⁽⁹⁾のようである。太田恭三郎の人物像が浮上する。(口絵参照)

「(太田恭三郎) 記念碑碑文／太田恭三郎氏ハ明治九年二月ヲ以ツテ兵庫県竹田町ニ生ル長ジテ東京高等商業学校ニ学ビ後校ヲ辞シテ豪州ニ遊ブ途次比島ヲ過ギ親シク其風物ニ接シ囑望スル所アリ 三十三年麻尼刺ニ航シ商業ヲ営ミシガ偶々南比ニ抵リ地ヲ『ダバオ』ニ相スルヤ其地味膏艘ニシテ林檎相連リ天与ノ資源甚ダ裕ナルニ拘ハラズ人煙稀疎空シク荒蕪ニ委スルヲ看テ大ニ之ヲ慨シ比島ノ繁栄ト人類ノ福祉ノタメ自ラ其開発ノ衝ニ当ランコトヲ期シ同志相謀リ挺身蛮地ニ入り險ヲ冒シ難シ瘴癘ト戦ヒテ荆棘ヲ拓キ以ツテ麻蔗ヲ栽シ道路ヲ開キ水利ヲ通ジ医院ヲ起シ棧橋ヲ造リ麻事業ノ基礎漸ク緒ニ就キ四隣風ヲ望テ蜩集スル者多ク航運為メニ頻繁ヲ加ヘ産業頓ニ賑ヒ日比人相携テ耕鋤ニ従ヒ今ヤ飲洽各其生ヲ樂シムニ至レリ／而ルニ君尚以テ足レリトセズ益々公益ヲ弘メント欲シ画策大ニ力ムル所アリシガ不幸病ヲ獲テ帰朝シ大正六年十月三十一日ヲ以テ遂ニ京都ニ没ス享年纔カニ四十有ニ嗚呼男子志ヲ立テ、遠ク異域ニ遊ビ其業未ダ成ラズ中途ニシテ逝ク洵ニ悲シム可シ然レドモ君ノ遺業ハ亡ビズ事功漸ク顯ハレ『ダバオ麻』ノ名今ヤ天下ニ噴々タルニ至レリ君以テ瞑スベキ也。／同志ノ士碑ヲ建テ之ヲ不朽ニ伝ヘント欲ス乃チ其請ニ応ジ其事歴ノ概要ヲ録ス／南洋協会々頭男爵 田 健次郎撰⁽¹⁰⁾」

5 ダバオの景観(第二次世界大戦終結前)

「ダバオ部落はダバオ川の左岸に、漁夫の溜りとして出来たもので、その辺は熱帯特有の湿地が多い。ダバオの

地名はスペイン人が来るまで、住民はドウオアオと呼んでいた。これはダーク・ブラウンという意味で、ダバオ川の水の色が午後になれば堤防の反射によって、黒褐色に見える所から来たものといわれる。一九〇五年太田恭三郎氏が初めて来た当時のダバオは僅か三〇軒位の部落で、道路の真中にカラバオ（水牛）の穴が幾つもあったといわれる。著者（古川義三…引用者補記）が初めて来た一九一四年三月頃のサンペドロ街は、街路の形は出来ていたが、その両側には大きなマンゴー樹が沢山立ち、全部落で家数は恐らく一五〇軒前後で、目貫きのサンペドロ街でも、所々にニッパ家があった位の淋しさで、トタン屋根の家は極く少く、サンターナには木造棧橋が漸く出来上がり、島内船は横付けが出来たが、それ以前は沖がかりで、小舟でダバオ川口に上陸したということである。その当時はサンターナにトタン屋根倉庫が三棟あって住家はなく、今の州庁舎東方の路を隔てた地点に、大きなニッパ家があったが、それが当時の州庁舎で、米人リッチモンドが知事、マクフィーが事務官であった。一九二四年下半期に至り漸く今の州庁舎が新築され、それに州庁と郡役所が同居していたが、一九三七年に市制が布かれ、道路を隔てて西方に鉄筋コンクリート・ビルディングの市庁舎が建設されて州庁と別となった。／一九一六年ダバオは第一次好況に見舞われ、日本人農事会社が簇立（後述…引用者）し、日本人農民が多数入り込んだため俄かに活気づき、サンペドロ街は商店の中心となり、クラベリア街はこれに次いで繁栄した。ダバオ市の発展は実に日本人のマニラ麻栽培を中心とする開拓に拠る所大なることは、何人も否定し得ない事実である。ダバオ川はタロモ及びダリヤオン奥地の最も拓けた部分と、ダバオの街との交通を断つので、一九一五年木橋を架設したが、一夜の出水によって流失し、その後はフェリー、ボートやポンツン・ブリッジで自転車、トラックを通した。然しこれでは時間がかかる上に、故障が多くて不便なため、ヘネロソ知事時代の一九三〇年に、ヘネロソ橋という鉄橋が開通して大いに便利になり、ダバオ市は急速にその繁栄を加えた。更に一九三五年にはササに飛行場を建設しマニラから航空路が開かれ、また一九三八年頃ダバオ・コタバト州道が開通し、陸路でミンダナオ北部からラナオ州コタバト州を経て、ダバオ市に至る交通路が開け、多数のバスも運転されて街の繁栄は顯著に躍進し

かつた。⁽⁸⁾」

4 太田恭三郎と初期日本人農業会社

「太田恭三郎氏は一九〇五年マニラを引き払ってダバオに移り、太田商店を開いたが、氏は慧眼はダバオではマニラ麻の栽培に関係しなければならぬことを看破し、一九〇六（明治三九）年一月バゴでマニラ麻園の経営を始むると同時に、バゴボ相手に商店を開いた。然るに当時のボルトン知事はダバオ西海岸で殺害せられ、同年七月アーレン・ウォーカーが知事に任命さるゝや、日本人にはフィリピン公有地使用の権利無きを盾にして、麻園からの退去命令を出した。このため太田氏に倣って麻園の経営を始めていた数名の日本人も、同様に大いに困惑した。氏はサンボアンガ市の米国人モーター弁護士に就いて研究した結果、フィリピン法人法に依り農業目的の法人を設立すれば、外国市民でも米比人と同様に、公有地を租借若しくは払下げを受け得ることを発見し、一九〇七年五月太田恭三郎氏、平本斧太郎氏、大城孝藏氏、諸隈弥策氏、瀬戸清次郎氏その他を創立發起人とし、太田興業会社を設立して自ら社長となり、モーターを法律の認めるセクレタリー（秘書役）として、バゴからミントルにかけて一・〇一五ヘクタールの公有地を先ず租借し、後払下げの手續きをした。太田興業の創立については時のマニラ領事赤塚正助氏その他邦人有力者がダバオに来て、ウォーカー知事と会見しその了解を深めて尽力した。この方法によって邦人の土地問題を解決すると共に、公有地利用の途を見出し、過去三年間外人耕地で働き慣れている邦人を収容して開発を進めた。当時バゴ、ミントル方面へは未だフィリピン人であり込んだ者は殆んど無く、バゴボ族だけが住んでいたもので、彼等に物を売り、その生産する麻を買収することは、非常に有利であったから、邦人は好んでこの方面に店を出した。／藤原義雄氏は明治三（一八七〇）年六月東京に生まれ、一九

〇二（明治三五）年にフィリピンに渡来し、一九〇六年からダバオに来て開き、一時五支店を持ち太田興業に對抗する勢力であったが、当時邦人は全部で約三〇店を開いていた。ところがウォーカー知事は一九〇九年突然ダバオ、サンタクルス間の海岸線から、一哩以上の奥地にある邦人商店の閉鎖を命じた。その主旨は、バゴボ族の好奇心をそそり治安を害すると、至極尤もらしい言分であったが、既に付近のバゴボ族との貸借関係が複雑になり、簡単に引き揚げも出来ず困り果て、岡田幸太郎氏と橋本音次ドクトルをマニラに派遣し、当時の帝国領事岩谷讓吉氏と相談した結果、太田興業に倣ってフィリピン法人法により農事会社を設立することになり、柳原隆人氏に依頼して一九一一年に三会社を創立した。即ちイラムの岡田幸太郎及び上井久蔵両氏のミンダナオ農商会社、ドウヤンの赤峰三郎及び平田福太郎両氏のサウス・ミンダナオ興業会社、カタルナンの上田亥之吉氏のカタルナン農事会社がこれである。これに続いて只限与三郎及樺島長太郎両氏がバトにバト拓殖会社、吉田円蔵氏がバヤバスにバヤバス拓殖会社、繁沢清助氏がバンカスにムリッグ農商会社、向井居太郎及び川島峰吉両氏がマナンプランにマナンプラン興業会社、伊豆味公正氏がシラワンにシラワン拓殖会社、神山鴻吉及び真栄平房仁両氏がラサンにラサン拓殖会社、中野及び藤井両氏がブナワンにブナワン拓殖会社、ウラにミントル拓殖会社及びリバーサイド拓殖会社の合計一二社が、古川拓殖のダバオ進出以前に設立されていた。古い邦人農事会社は何れも土着人相手の商売が当初の第一目的であったが、その後ダバオ麻が重要視され、その栽培に主力を注ぐようになった。初期ダバオに於ける土地獲得は頗る呑気で、スペイン人などは自国の政府であり、土着人から買い取ったと云って土地を所有し、米人は湾内で良きような土地を見付け、勝手に開拓にかかり、後から会社を作って租借若しくは払下げの手續きをなし、邦人もバゴボ族から麻園を買い取り、その付近を自分の耕地と予定して先ず開墾にかかり、その後ゆっくり会社を設立して正式に租借願を出していた。もし会社の創立は遅れても占有の事実を示せば、当時ダバオには土地局も森林局も無く、州の役所にも役人は少かったので問題は起らず、まさに体験者にして初めてその間の事情がよくわかる呑気さであった。上述のようにダバオの初めは邦人がバゴボ族相手の商売を

3 初期ダバオ移民の渡航と分布状態

「ダバオの耕主シリア人・アワドは、日本人労働者をマニラで募集し、これに応じて鹿児島県人須田良輔氏が、当時マニラに来ていた日本人移民三〇名を引き連れ、アロヨス号という古い島内船で、二〇日もかかって一九〇三（明治三六）年四月ダバオに着き、ラバンダイの氏の耕地に入った。これがダバオ邦人の最初であって、更に須田氏は太田恭三郎氏と協力して、ダバオに移民を入れることを図ったが、その後帰朝して間もなく死去したということである。然しこれら移民は耕地内の待遇は悪く、衛生設備も無いので、不平不満であったところに、當時既に始まっていたベンゲット道路工事の方が良いということで、一年の契約が満了するや全部マニラに戻った。太田氏はその翌一九〇四年九月、第一回日本人ダバオ移民一八〇名、一九〇五年一月、第二回移民一〇〇名を送り、同年七月第三回移民七〇名を連れて自らダバオに乗り込み、翌年一月初めてバゴに入り麻園の経営を始めた。初期邦人のダバオに於ける分布は、アワドのラバンダイ耕地に約五〇名、スペイン人マスエル・サンチエスのダロン耕地に約四〇名、サンタクルス、パダダ方面に約二〇名、その他アストルガ、ダリアオン、ドウムイ、リビノなどの外人耕地に少数づつであったが、何れも施設貧弱で大勢の収容力を持たず、太田氏が一九〇七年正式に太田興業を創立して、バゴ及びミンタルに耕地を持ち、これを経営するに及んで散在した邦人は集まり、一九一一年イラムに岡田幸太郎氏、ドウヤンに赤峰三郎氏、カタルナンに上田亥之吉が太田興業に倣い、所謂日本人三会社を設立して耕地を持つに至り、これらの耕地にも邦人が流れ込み、日本人の勢力範囲が広がった。著者は一九一四（大正三）年三月、初めてダバオを訪問したが、以上の外バトに只隈与三郎氏、バヤバスに吉田田蔵氏、バンカスに繁沢清助氏、マナンブランに向井居太郎氏、シラワンに伊豆味公正氏、ブナワンに藤井、中野両氏、

ラサンに神山鴻吉氏の諸会社、その他ミントル拓殖、リバーサイド拓殖などが設立または設立中で、何れも日本人労働者を望んでいた。当時マニラとダバオの交通は、月二回位の不定期航路で、老朽船が一五乃至二〇日もかかって通っていた。また日本人労働者に支払われる日給は、一般的に一ペソ二五セントボスで、麻の挽き分けは幾分収入が良かったが重労働で長続きせず、このため邦人間にダバオはひどいという評判が立ったので、ベンゲット道路工事が終わった後これに就労した労働者も、船賃のある者は日本に帰り、無い者はマニラ付近で職を求めて、ダバオへ来る者はなかった。従つてダバオへは上述の如く三五〇名が来ただけで、その後は殆んど新たに来る者がなく、反つて去る者や、病死する者や殺される者もあつて、幾人踏み止まったかを知る記録はなく、後日調査は出来ないで、誰もはっきり判らぬ事柄となつてしまつた。著者はその当時の事情、各耕地の収容力などから判断して、一九一三年末に於ける日本人労働者の数は四〇〇名を超えず、三〇〇名位が事実に近いものと信ずる。⁽³⁾

「来航した邦人移民は始めは第一次移民の縁故でラパンダイのアワド、パコンド等の麻山へ行く者が多かつた。しかしラパンダイの耕地とても全部合して二十四五万株の麻山しかなく、次々に押し寄せる移民の群を収容することは不可能である。そこでアワド氏は他の労働者不足の麻山に邦人を分けてやる事にした。遠からずして太田氏がダバオに居を移すや氏之に代つて労働者の就職の斡旋一切を引受けるやうになり、従来とはより円滑に労働者の補充移動が行われるに至つた。／＼分布状態と言つても常に移動してゐたので之を明記する事は困難であるが、比較的邦人労働者の多く入り込んでゐた耕地は先づ前記ラパンダイで常に五十人位の邦人が働いてゐた。次にダロンのマヌエル・サンチエス氏の麻山は約十万株内外であつたが地質最も良く麻の産出も多かつたので、従つて邦人労働者も三十人乃至四十人の多きに達した。サンタクルースの支那人ホセ・バダダ、パヤの麻山は株数は多かつたが地質悪く産出も少かつたので二十人近くの邦人が常傭されてゐた。その他多かつたのはリビー、アストルガ、ダリアオン、ドムイ、マグナガ等の外人麻耕地であつた。又ギヤンガ方面の蛮人の麻山に入耕する者も多

た彼等は一人残らずマニラを指して引きあげて了つたのである。／斯くの如く第一回の移民は上述の如き理由を以て失敗に終り、何等植民的功績こそ残さなかつたが、彼等のダバオ乗込みに依つて後に太田恭三郎氏及その友人の手によりベンゲット移民の跡始末としてダバオ送り込みの計画成り、それが実を結んで今日の大ダバオを築ひた事を思ふとき須田氏及その一党の功績はダバオのある限り不朽のものであり、又最初に邦人を誘致した故ホワン・アワド氏の名はダバオ邦人の発展と共に永久に記憶せらるべきであらう。⁽⁴⁾」

2 ダバオ移民の労働実態

「草分時代に於ける邦人労働状態はどうであつたか、仕事は麻挽が主であつた。除草、パライちぎり等もあつたが、それは極く僅かで大部分は麻挽に従事した。彼等移民はベンゲットを下つてマニラで遊んでゐる時にダバオへ送られたのであつたが、彼等は周旋業者から『ダバオに於ける仕事は麻挽であるが、それもちゃんと機械が作られてゐてさして骨の折れる仕事ではない』と聞かされてゐた。所が来て見れば聞くと見るとは大違ひで、機械とは名ばかりの手挽であつた。それはベンゲットに於ける労働同様の苦行であつた。而も要領を修得するに至る迄は矢鱈に力のみを消耗し夜は身体綿のやうに疲れ体の節々が二日も三日も痛かつた。／労働条件もベンゲットに比して尚悪かつた。麻挽には日給と挽分との二方法があつたが、牛馬の如く酷使される事を嫌つた邦人は主として挽分を望んだ。それでも一ヶ月精一杯に働いても二十比そこそこにしかならなかつた。一人一ヶ月の麻挽能力を二ピクルと見、当時麻価は二十比内外であつたから挽分なら取前が二十六、七比で、之から六比程の食費を払へば二十比の純益となる。勿論日曜日など憂晴らしに酒でも飲んでゐたら残る所はないのであるが、しかし月に二十比の純益を得ることは、明治末期の日本ではちよつと出来ないことであつたので、之等移民連は唯金を儲

けたい一心で凡ゆる苦難とも戦い通したのであつた。労働者に酒は付き物であるが、ダバオでも草分時代から色酒類は充分にあつて、凡ゆる欠乏の中にも左利きの連中は之ばかりは不自由をしなかつた。／此の草分当時に於ける邦人の労働状態に関して面白い文献があるから左に摘録する。之は一九〇六年五月当時組織されてゐた米西比人栽培協会総会の日本人労働者に関する一報告であるが、当時の邦人労働者の成績はあまり香しいものではなかつたらしい。その一節に曰く『過去二ケ年間に即ち日本人労働者を使用して見たが、結果は不成績であつた。日本人労働者は高い給料を要求して単に麻挽のみを望み、その上定住性がなく頼りにならない云々』と。それから邦人移民の誘致者であり邦人をよく理解し比較的好意をもつてゐたと思はれるホワン・アワド氏の如きも邦人労働者に関して次の如く新聞記者に語つてゐる所を見ると、左程外人プランター連の信頼を得てゐたとも思はれない。氏は曰く『日本人は麻挽のみを好みずるくて定住性がない』と。⁽⁵⁾

ダバオ移民の食糧事情は劣悪なものであつた。文献は、つぎのように語る。「ベンゲットに於ては如何にまづくとも食料は政府より支給されたので、その欠乏を憂ふるの要はなかつたが、ダバオでは斯うした僻地ではありその欠乏も移民達を苦しめた。米は西貢米の極悪で副食物としては比律賓の塩汁、甘藷やパパヤ等の塩煮が普通で、時たまサルモンやサルデナス或は塩鰯等を食膳に供することが出来た。野菜などは邦人が入り込んで数年後の産物なのである。かくて食料の粗悪及欠乏は著しく邦人の健康を害し病人続出の有様であつた。こゝに着目した太田氏が再びベンゲットに於けると同様にその緩和策として日本商品を輸入するに至り自ら店舗を開いたのが抑々太田会社の前身である。即ち氏はマニラに於ける田川商店或は支那人店より白米、味噌、醬油、沢庵、蓮根、又は大根の干切等を仕入れて邦人に供給し又自らサンペドロ街に太田商店を構へたのであつた。」

に学んだ。後志を海軍に抱ひて卒業後海軍兵学校に受験したが、悔しくも痔病の爲めに失敗したので、再度方向を変へ南方雄飛の壮志を抱ひてマニラに渡つた。而して語学の最も必要なるを痛感した氏は直ちに西班牙語を修得したが、年余にして早くも通訳を業とするに至る程頭脳明晰であつた。又当時としては稀な高等教育を受けた人だけあつて、教養あるは勿論、事理に明るく普通の移民とは全然趣を異にしてゐた訳である。風貌又貴公子然たる所あり威あつて猛からず、鼻下に美髯を貯へ、『仁丹須田』の愛称があつた。蓋し仁丹髯に類似してゐたらであらう。而も氏は一面に於て薩摩隼人の名にはぢざる烈々たる意氣を蔵し、国士的風格ある一個の熱血勇士で、人常に畏敬し、自ら頭領たるの材を具へてゐた。氏は太田恭三郎、柳原隆人、大城孝蔵の諸氏とは同僚の間柄にあり、寧ろ自ら兄貴株を以て任じてゐたが、又極めて謙讓な人でもあつた。即ち太田氏とは互に『太田君』と呼び『須田君』と呼び合つてゐたにも拘らず、影にあつては決して君呼びにせず、太田さんと敬称を用ひたと言ふ洵に奥しい人であつた。／氏は其の後太田氏等と協力し、數回に亘つて移民をダバオに引率して来たが、その間ホロ、サンボアンガ等へ渡り事業を画する所あり、數年後母国へ歸つて或る事業を起し、幸運に恵れたが大成せんとするに先立ち不幸病を得て中途にして歿した。」

「蛮境ダバオに於て始めて白人が足跡を印したのは随分古く十六世紀の古へにさかのほるが、開發の緒に就いたのは漸くにして十九世紀の末期で、一八九八年米国の領有となるに及び稍々急速に開發の歩が進められた。而して二十世紀に入るや、さきに入耕せるアワド氏や故キャピテン・パチフィルド氏にならつて米人或は西班牙人の入耕する者次第に多く、各々小規模乍らも麻栽培をなしダバオに於ける麻産業の發展を助成した。その植付株數も米国の比島領有直後にあつては僅々三、四十万だつたものが急激に殖え、五六年の後には此の十倍近くにも達したのである。然るに當時麻生産に従事してゐたものは蛮人の労働者にして、急激に増加した麻山は從來の如く無智怠惰面も當てにならぬ彼等のみを以てしては到底生産間に合はず、諸方に労働者不足の状態が現出したのである。麻と言ふ植物は成熟した儘之を放任すればその幹は自然に腐蝕して麻株は倒れて了ひ、最早再起する事は

不可能に近い。労働者の不足は麻山の潰滅なのである。／そこで外人プランター達は各自その対策を練つたが、当時プランターのリーダー格としてラバンダイ耕地に十数万株の麻山を有してゐたホワン・アワード氏は日本人移民の誘致を思ひ立ち、その商取引先たるマニラのハシム・コンパニーに邦人労働者の誘致斡旋を依頼したのであつた。そして三十名の移民がダバオへ向け送られたのであつたが、その引率者が前記の通り須田氏であつた。即ち同氏はハシム・コンパニーのダバオ行移民の募集あるを知るや直ちに之を引受け、一九〇三年三月所謂小葉佐組と称する一団の比島出稼移民の来マセるを捉へてダバオ転航をすゝめ、同年四月一行三十名を率ひてダバオに來航したのであつた。その移民の中には組長格の小葉佐衛門、先年物故せる山田米吉氏、後ベンゲットに於て商業を営んだ管野長楠氏、その渡辺某、林田某、山下某、塩垣某等があつた。須田氏の三十代を除ひては他は何れも血氣旺んな二十前後の若者だつた。³⁾」

「彼等移民はマニラ到着當時既に一仙の所持金もなかつたので、ハシム・コンパニーを経てアワード氏より小遣ひを前借し、旅費もアワード氏が立替へ沿岸船のアヨロス号と言ふボロ汽船で二十日近くもかかつてダバオに來たのである。彼等は一ケ年の契約移民であつた。ダバオに上陸するや當時ダバオにあつたアワード氏の商店に二泊し、翌日ラバンダイの耕地に送られたのであるが、今でこそ邦人の氾濫に馴れつこの比律賓人も當時に於ては見馴れぬ日本人の格好に奇異の目を見はつた事であらう。かくて彼等はその職場たる麻山へ乗込んだのであつたが、之こそ今日一万の同胞が従事する麻栽培への輝かしき第一歩だつたのである。／仕事は主として麻挽と除草であつた。麻挽には日給と挽分の二方法があつたがどつちにしても新米だけに能率は上らず予期したやうに金儲けは出来なかつた。而して麻の手挽と言ふ仕事は新渡来者にとつては確かに予期しない苛酷な労働である。加ふるに馴れぬ熱帯の氣候、粗悪なる食料品の爲めに病人相次ぎ、風土病にかかつて一命を殞^ぬず者もあつた。然し一方傭主の方では何等の対策をも講ずる事なく、島流しの生活を續くること一年にして契約期間が満了するや、當時既にかのベンゲットの工事が初まりその条件等も可成り過大に伝へられてゐたので、ダバオに於ける辛苦に堪へかね

るに帰られず、こゝに背水の陣を余儀なくされてダバオに腰を下し、パイオニーヤとしての使命に邁進したのであつた。」

Ⅲ フィリピン移民（Ⅱ）

1 ダバオ移民の起こり

今日、ダバオ市には約七〇万の人びとが住む。マニラ、セブ両市に次ぐフィリピン第三の都市だが、その面積でいえばおよそ五万平方キロで、疑いもなく世界最大の都市となる。ダバオ市は、ピサヤ人、タガログ人、中国人、インド人、アメリカおよびスペイン系のメステイーゾ（混血）、バゴボ・アタ・カラガン・マンダヤ・モロ族等々の先住諸民族、そしてアバカ（マニラ麻）栽培移民の子孫である日系人が混然と同居している。⁽¹⁾

アバカ栽培移民の起源を復元しておこう。

「ダバオに於ける邦人移民は一九〇三（明治三十六）年故ホワン・アワド氏に依つて誘致された鹿児島県人須田良輔氏引率の農業移民三十名を以て嚆矢とする。その以前に於ても邦人のダバオに足跡を印した者は二三あるらしく、現在ラナオ州に居住する栗山利直氏の如きも一九〇二年一度来航してゐるが、唯文字通り足跡を印したるに止まり、何等邦人の植民的発展に寄与する所がなかつたので、ダバオに於ける移民の先駆者は須田氏とするが妥当であらう。／須田良輔氏は鹿児島市の土族に生まれ、中学を卒へ、はじめ第七高等学校の前身鹿児島造士館

16 ベンゲットからダバオへ

ダバオ開拓の父は太田恭三郎であつた。太田のプロフィールは、つぎのようである。

「兵庫県竹田町の産、一橋高商を中途にして退学、始め豪州に渡つたが後マニラに転じた。時に一九〇一年、氏は二十六歳の若冠であつた。夙に日比貿易の将来に着眼し、先づ神戸の長兄作太郎氏と相計り小規模なる日本雜貨の輸入並に販売業を開始した。然るに氣宇雄大當時既に国土の風格を具備してゐた氏は一商業方面にのみ齷齪たるを潔しとせず、堪能なる語学の力と烈々たる義侠心とを以て一般在留邦人の信望をあつめ、自らその指導者を以て任じ一般世話業を兼業してゐた。かのベンゲット移民に対しても常に直接間接の接觸を保ち、或は移民の就職の斡旋に、或は移民同志間又は移民対政府間の諸問題の解決仲裁に、後には食料品の粗悪に悩む移民の爲めに政府に日本食供給をすゝむる等、大局的国家的見地に立つて邦人移民の指導誘掖と福利増進に力を致してゐた。」⁽³³⁾

「然るに一九〇四年、比島政府はベンゲット道路の工事竣成時期を著しく短縮する方針に急変した。而もその事実を發表しては労働者逸散し工事進捗に支障を来すを恐れ極秘に付してゐたのである。然るに機を見るに敏なる太田氏は早くも之を察知し、日ならずして失業者の続出すべきを憂へ、僚友柳原隆人、大城孝蔵、井上直太郎、諸隅弥策の諸氏と共に秘かにその対策を講究したのであるが、此の時氏の胸裡に画かれたるものはベンゲット移民今後の活動に徴すべきの地、豊饒なる南方ダバオの新天地であつた。一方ダバオに於ては成育麻の増加と共に益々労働者の不足を来し、初期移民のマニラ引上げと共に外人プランター連は再び邦人労働者の誘致交渉をした。然るにマニラに駐在する帝国政府の代表者は前回の移民の失敗に鑑み余り之を喜ばなかつた。そして距離の

余りに遠隔なること、氣候風土の不健康的なること、衛生設備の皆無なる点等を指摘して邦人移民のダバオ転航に反対した。又ダバオの事情を聞き知る邦人もその危険を恐れてダバオ行を好まぬ状態であつた。そこで太田氏はダバオに於ける外国人プランターに対して衛生不備の点を指摘しその改善を求めたが何等手応へなく徒らに月日を過すのみであつた。／＼然るに事態は益々逼迫して来た。ベンゲット工事は予定通り次々に進捗しあと數ヶ月を以て竣工することが明白となつた。又移民会社の無責任な口車に乗ぜられて該道路の竣工近きをも知らず来航する者マニラ埠頭に溢れ、さればとてマニラ駐在領事に何等實際的具体案なく、遂に意を決した太田氏及その僚友は近く襲ひ来るべき邦人の失業を目撃するに忍びずとし、工事完成に先立つ事四ヶ月、即ち一九〇四年九月先づ百八十名の移民を先発隊としてダバオへ送り込んだのである。

背水の陣を布いてダバオ開拓へ、次いで一九〇五年一月氏は更に邦人百名をダバオへ移送した。此の時はダバオ邦人の衛生的不備の欠陥を緩和する為めに福島県人ドクター橋本音治氏が太田氏の勸説によりダバオに來り、邦人衛生の爲めに尽力することになつた。又同船では沖繩移民の総監督として大城孝藏等が來たし、吉田円蔵氏も一介の労働者として同行した。／＼一月末かの世界最難工事の一言はれたベンゲット工事も愈々竣工を告げ、數百の邦人労働者は俄に職を失ひ群をなしてマニラに流れ込んだのである。そして太田氏が予期していた恐慌は遂に襲つて來たのである。幸にして旅費のあるものは早速帰国したが多數は歸るにも船賃さえなく空しくマニラの邦人宿に滞留し、爲めに主客ともに進退こゝに極まると云ふあはれなる状態となつた。こゝに於て太田氏は自ら南下することに決し本格的にダバオ植民の指導誘掖に當ることになつたのである。そして次々とベンゲット移民をダバオに誘致し、旅費なきものには之を貸し与え太田氏はマニラ、ダバオ間を往來して移民就職の斡旋につとめたが、その間太田氏とても多額の資金があつた訳ではなく、相当無理もしたらしく其の爲めに多くの移民からの怨嗟の声も高かつた。しかしダバオに地を卜して遠大なる抱負をいだく太田氏としては、当時の環境及資力より推して後日大成を期する爲めには多少の批難も許さるべきであらう。かくてダバオに流れ込んだ移民群は帰

は悪ブローカーの為に一の名物となり、マニラは大工とは即ち素人大工の事なりといはれるに至つた。實際當時に於ては巻尺と金鏈さへ持つて居れば大工で御座いで通つたといふから呑気なものではあつた。其後引き続き斯業で身を立てた者も相当にあつたが、多年の経験を積んで立派な大工となり金山、製材所其他各方面の建築、土木、指物界に於て断然他国人を圧し、優秀なる成績を示すに至つたのは洵に奇しき因縁と謂ふべきである。

(3) 商人 商人といつても別に今日の如く堂々たる店舗を構へて本格的に商業を営んでゐた訳ではない。日用必需品を極く僅かと、簡単な飲食店を兼営してゐたものが多い。ベンゲット道路工事の終末期に於てはさうした小店が三十五、六軒にも達してゐたが、一番の顧客たる労働者が経済的に裕福でなかつたので、一般商品の売行は知れたものであつたが、飲食店、バー等は相當の繁昌を見た。ダバオでお馴染の古谷爺さんなど此頃から手打の饅飴屋をやつてゐたさうだ。前にも述べたやうに食ふことゝ飲むこと以外に何等楽しみが無かつた為に、之等の店は毎晩ぐでんぐでんになつた労働者で賑ひ、二階で昼夜の別もなく賭博が開帳されてゐた。⁽²⁹⁾」

15 ベンゲット道路の完成と日系移民

四年の歳月と、総工費六〇〇万ペソを費したベンゲット道路は、一九〇五（明三八）年一月に竣工した。

「ベンゲット道路の完成！ それは我が邦人移民にとつて喜びと悲しみとの交錯した感慨無量のものであつたに違ひない。邦人労働者約一千五百名の中、その半数に初する七百の尊き人命は或は工事の犠牲となり、或は病魔に襲はれて不帰の客となつた。一日に二人平均、五十間に一人づつの尊き我が同胞の人柱の上に此の大道路は完成されたのである。過ぎにし苦難の生活を顧み、七百の不憫なる人柱を想ふ時、時を得顔に此の大道をのし歩く傲慢無礼な白人の姿が、純情な同胞青年の眼に如何に映じた事であらう。／工事完成と共に献身的年余の努力も

酬ひられず、帰国せんとするも旅費さへなく、落着く所なき邦人移民達は、友人の魂慟哭するペンゲットの山々に無限の思ひを残し、すご／＼とマニラを指して下るのであった。⁽³⁰⁾

日本人移民の前途は暗澹たるものであった。マニラも「労働者の洪水」を受容できる筈がなく、「ましてや渡比尚日浅き彼等は言語不通の爲め、就職口を見つけることは非常に困難」であった。「旅費のあるものは日本に帰つ」て行ったが、「貯へのないものは日本人の旅館に泊る事が出来ず比人の廃屋に入つて自炊生活」をしたり、「米人の家庭にボーイ」となり、あるいは「煎餅売り」をして生きていた。⁽³¹⁾

「其のうちにリサール州マラバト・ナバト村のウキリアム・マツキンレー兵舎の建築工事に日本人大工が募集されたので、我も／＼と即製大工になつてマラバトに行き、一時は三百人にも達したが給料はまるでお話にならなかつた。それからキヤビテ軍港の石炭揚げ人夫として百人程行つたが、給料は最もひどく日給八十仙から一日の食費三十五仙を取られるので、病氣などになつたらそれこそ食ふことすら出来なかつた。それでもマニラで食に飢へるよりましだと云ふ状態であつた。／＼命が欲しくなけりや／＼ペンゲットへ行け／＼金が欲しくなけりや／＼マラバトへ行け／＼の流行歌が流行つたのであるが、之を以てしても同時に於ける邦人の窮状が偲ばれ、彼等移民の群が汚れた服装なりをして異国の街々村々を彷徨さまよひ歩いた哀れな姿が目につぶ。／＼之より、既に今日あるを知り且つダバオの将来に着目した太田恭三郎氏及氏の友人等に依つて失業群のダバオ送り込み計画成り、一九〇四年（明治三十七年）九月、邦人移民百八十名を先発隊としてダバオに転住せしめ、其後も船賃のない者には太田氏が之を立替へて送つた。⁽³²⁾」

もころがつてゐたとの事である。又斯うした悲話もある。年取つた母と病妻とを郷里に残してはるばる出稼ぎに來た父と子の二人連れがあつた。やがて父は不幸病魔の爲めに命を殞した。人々が心ばかりの香を手向けて將に穴に埋めようとしてゐる処へ突然その子も死んだと報せて來た。この父子の不幸に同僚達は手放しで泣いた。そして父子を一緒に一つ穴に葬つてやつた。正に実話以上の悲しい話だ。こんな話はまだ沢山ある。ベンゲット移民の一人である吉田円蔵氏は當時のことを追想し面を曇らせて次の様に筆者に語つた。／『死人は大抵瘦せ衰へて見るも無慘な有様でした。之を埋める時など全く可哀相で目をつむつて土をかむせたものです。又急坂などに埋めた後に大雨が降ると表土が流れて死体が露出し、山鳥が集つて來て之をつつき散らす等、思ひ出すだに身の毛もよだつような残酷なものでした。』

(8) 大暴風雨起る、バギオとは西班牙語で暴風の意だ。その暴風雨が一九〇四年十月、工事最中の邦人を襲つたのである。殆んど全部の邦人労働者は各工区の天幕の中に寝起きしてゐたが、その天幕はゴーツと吹く風で一たまりもなく崖下に吹き飛ばされ、頭からびしょ濡れになりながら友の安否を氣遣ひ真闇の中に互に名前を呼び合つたと言ふ。夜が明けて見れば自分等の寝具、衣類等散乱し天幕は総倒れで、怪我人や死人や病人が増へた事は言ふ迄もない。折角築いた山道は崩れ、橋は流失し、新道は到る所崩潰し、数日間食糧も交通も絶たれて随分閉口した。⁽²⁸⁾」

14 日本人移民の苦悩 (3)

つぎの資料は、ベンゲットにおける職業が収入状況を物語る。

「ベンゲット道路工事に従事した日本人の九分通り迄は一般労働者と見て差支へない。一般労働者の外には監督

と大工、それに小商店或は飲食店を営む極く少数の者がゐたに過ぎなかつた。

(1) 一、般労働者、 従業者の大多数を占むる一般労働者の給料は最初一比廿仙宛支給された。実は政府は一比五十仙宛支払つてゐたのであるが、移民会社が一人に付三十仙宛頭をはねてゐたのである。所が此の事がいつの間にか暴かれたので大変、移民会社は怪しからぬ、給料は政府より直接貰はねばならぬとストライキを決行した。その時は日本人の監督が先頭に立ち大多數の日本人労働者が之に参加し、日を重ねるにつれて益々拡大して行くので、当時マニラに居られた太田恭三郎氏の中にはいつて話をつける事になり、パラガンという臨時政庁のあつた所に労働者側の代表を呼び出し、官憲及太田氏の仲介で交渉した結果、その代表が会社側に買収されてゐた為に労働者側の負けとなり、政府の方では一比廿仙でも高過ぎる、一比で沢山だといふ事になり這々の態でストライキは解散してしまつた。其後日本人は致し方なく働いてゐたが、太田氏等有力者の努力に依つて実力に依つては二比迄は昇給する事を得といふことになり、之が又大なる刺激となつて仲々熱心に働くやうになり、給料も従前よりは多額に貰へるやうになつた。

(2) 大工、 日本人大工は一般労働者と違つて仲々優遇されたものである。今日に於てもさうであるが、比人及外人大工は其の技術に於て遠く日本人大工に及ばなかつた。初め大工の数は約五十人であつた。之は何れも本職の大工で、ベンゲットは架橋、その他の大工の仕事が多く、各地より引つぱりだこの有様であつたので、日給は洋食付で五比といふ豪勢振りであつた。そのうちに中間請負者や周旋業者が日本人は洋食より日本食が良いとの口実で、一般労働者同様粗悪な日本食を供与するやう政府に建議し、日本食と洋食の差より生ずる一人一日一比内外の金を中間搾取するやうになつたので、大工連中が騒ぎ出し遂にストライキを決行等のゴタゴタを惹き起した。其間に五比の周旋料稼ぎを目的とする悪ブローカーの輩は諸方に於ける日本人大工の需要増加に伴ひ、失業邦人を欺いて即製大工に仕立て方々に追ひやる社が殖へた。必然の結果として大工の素質が低下したので、政府に於ても大工に等級をつけて給料を支払ふ事とし、最低二比乃至一比五十仙となつた。／斯くの如くマニラ大工

と思ふ。一ツニハ―光り輝く日本国、日本の光り増さんぞと、万里荒波ね、厭ひなくマニラ国にと赴むいた。サノサ。／二ツニハ―再び他国に渡航は致さんぞ、一度出稼ぎした上は、雨の降る日もね、照らす日も、道路にのたれて苦勞する。(以下サノサの難は略す)／三ツニハ―身を改めて東を眺め、何うぞ災難のがるよに、両手合せてね、神頼み、頼めば土人が真似をする。／四ツニハ―夜は皆さん遅くまで、博奕すいた人あ博奕する。酒をすいた人はね、酒を飲む、歌をすいた人は歌ひます。／五ツニハ―何時かマニラで大金儲けて、日本に送らんせ、思へば軽きね、身の難儀、如何なる辛苦も苦にならぬ。／六ツニハ―無事で皆さん働いた月の、合計勘定が、二万余円ぢあないかいな、日本に光りが増すぢやないかいな。／七ツニハ―七つ難儀のその数は、朝〇〇〇に〇〇〇のよこれやら、糞を垂れるにはね、野雪蔭、三度の食事は塩煮菜。(以下略)

(4) 通信機関、海外に在るものの誰しもが殊に新渡航當時に於て最も待望するのは母国近況のニュースと肉親よりの音信である。当時彼等は如何にしてそれを知り得たか。通信機関の未だ発達しない其の頃に於ては実に頼りないものであつた。日本新聞は勿論、報道機関は皆無であつた。時折日本人の監督がマニラに下つた時領事館等で聞いて来た話に尾鱗をつけて報告する有様で、そのために時には飛んでもないセンセーションを捲き起し、流言蜚語乱れ飛ぶ等の現象を惹起したりした。肉親や友人知己との音信に至つてはもつと心もとない状態で、邦人移民千数百名の中、誰彼は何処に居るのかさつぱり分らず、そのうちに悪戯者の手に依つて開封され、折角の便りも本人の手に渡らずに途中で遺棄されてしまうやうな事が多かつた。

(5) 氣候、バギオの四季清涼なるは前述の通りであるが、ベンゲットは高原地帯の常として昼は炎熱焼くが如く夜は急激に冷下し、降雨の際など殊に甚しく恰も大陸的な氣候に酷似してゐた。而もベンゲットは人跡未踏の原始林のことゝて一種の山氣漂ひ之が為に発熱して死に至るものも少くなかつた。比島は元來降雨量の多きを以て有名であるが、該工事の起工された當時は特に雨が多く、五月より九月迄五ヶ月間の雨期を通じて殆んど毎日降りづくめの有様で、一週間全く太陽を見ない時さへあつた。百度の酷暑と夜間の急冷と数ヶ月間の降雨続き、

かくの如き地に悪疫の流行するのは当然であり、不健康な地帯であつたことは言を俟たない。

(6) 衛生施設 衛生施設の不完全であつたことも今更贅言を要しないであらう。政府設立の急造の病院が一ヶ所あるにはあつたが、病院など言ふと癩にさはる位のもので不衛生極まる存在であつた。医療法の如きも固よりなつてゐなかつた。病人には其の病名の如何を問はずに塩酸キニーネを服用させてすましてゐたものだ。或る人は赤痢に罹つて入院したところ型の如く塩酸キニーネを呉れたので、こんなものを服んでは危いと病院を逃げ出したものもあつた。／當時の医者の遣方は全く言語に絶したもので、病人に食べさせる粥の中には米虫の死骸が漂ふてゐたこともあつた。又病勢が昂じて来ると厄介者とばかり変な匙加減をしたのではないかと疑はれるやうな事も珍しくはなかつた。一事が万事他は推して知るべしで、病院に行くことは地獄の一丁目へ行く事だと病人が病院行きを嫌つたのも無理はない。

(7) 無慈悲な葬送 ベンゲットに於ける死人の葬ひは戦時のそれよりも尚は残忍であつた。遺骸は毛布或は莫座を以て之を包み穴に投げ込んだものである。中には仕事着のまゝ葬られた者もあつた。死人続出の頃は数名の日本人が穴掘りにかゝり切つてゐたと言ふ。穴の深さは約三米、之に二人乃至多い時は四人も五人も一緒に葬つた。そして宣教師の読経も線香一本も手向けて貰はなかつた。唯穴を掘る邦人達によつて黙祈が捧げられ、小石を目標に立てゝ貰へれば上等の方だつた。當時の憐れな有様に就いて一層読者の認識に資するために二、三の実話を紹介する。或る二人の邦人は病氣になつたが、病院では前記の始末なので温泉に行くことになり、二人相助け合ひつゝ温泉へと出かけて行つた。友人等は其の後の安否が氣遣はれてならなかつたが、籠の鳥同様の身なので数日後隙を見て温泉に二人を訪へば、アツと思わず驚愕の声を挙げずには居られなかつた。それもその筈、可哀相に二人とも温泉のわきに倒れ、屍体には青蝇が一ぱいにたかつて到底二目とは見られない惨状を呈してゐたと言ふことである。／又或る者は温泉へ行く途中に病が重くなり、或は飢え、或は力尽き救いを求めんとしても人里離れた山奥、溪谷で遂に非業の最後を遂げた者も相当数に上つたらしく、付近の竹藪には邦人の遺骸が幾個

住宅は政府より建てられてあつたが、住宅とは名ばかりで人間の住家としては余りにも粗末な草葺の小屋であつた。床は大部分丸竹そのまま横に並べたのが多く、勿論、寝台のやうな気の利いた物はなく、恰度日本の蚕棚のやうに二尺おき位に三段も四段も棚を造つて之に寝るのであつた。蒲団の無いのは勿論のことで、過激な昼間の労働で綿のやうにくたくたになつた体の疲れが癒されやう筈はなかつた。それでも住宅のある所はまだまだよかつたが、一寸遠い所は往復に大変だつたので天幕生活であつた。深山の夜気にうたれ其の為に熱を出したり或は得体の知れぬ病の為に一命を殞す者が続出した。然らば食料品はどうであつたか、身を碎にして働く純労働者にとつて最上の楽しみはうまい物を腹一杯食ふ事とぐつすり寝る事である。安眠を求めて疲れた足をひきずつて家に帰れば、殺風景といふもおろかな丸竹の床が待つて居り、空腹を癒すべき食膳には半煮への比律賓米に小鰯が二、三匹並べられてゐるに過ぎなかつた。ペンゲットには初めの間は飯を炊く釜さへなかつたのである。彼等は石油罐で飯を炊くのだつたが、底の方は焦げつき、中はじゆくじゆくした飯となり、上の方はまるで米同様だ。之を公平？に混ぜて食膳に運ぶのである。副食物としては第一に塩タンバン、それに豪州肉の而も肉の方は兵隊が食べた残りの骨の方しか廻らなかつた。好物の野菜物は殆んど顔を見る事が出来なかつた。又飲料水の少い時は汚れた河水を飲むこともあつた。こんな工合だつたから病人の出るのは当然である。そこで皆協議の上当局に交渉して釜を買つて貰ひ、又食料品の粗悪なるに着眼した太田恭三郎氏が当局に交渉して、梅干、沢庵を給与する事をすすめて呉れたので、幾らか食料品の粗悪を緩和することが出来た。

(2) 労働状態 筆者はその労働状態の真相を記述するにしのびない。それは世界の人類が曾て経験した最も痛ましい労働苦の標本であり犠牲の連続であつた。彼等は降らうが照らうがそんな事に頓着なく仕事場に追ひたてられた。降雨の後の仕事はさなきだに危険な工事に、山崩れ地汙り等の危険はいや増すばかり、然し彼等は其の危険を知りつゝも追ひつめられた羊の群の如く死の工事へとかり立てられるのであつた。朝の六時より夕方の六時迄、その間昼休みの二時間を除いては息つくまもない位に酷使された。唯一本のロープに身をたくして命を的

の爆破作業、五体を粉碎されて岩塊と共に谷底に飛散するもの、足を滑らして千仞の谷に吞まれるもの、山崩れの為に埋没するもの等々日々相次ぐ有様であつた。同胞移民達は朝仕事場に向ふ前に、まづ命やすかれと神に祈るのであつた。そして幸ひ犠牲者の出なかつた日には何物にか縋りつきたいやうな涙ぐましい嬉しさを感ずるのであつた。

(3) 娯楽機関と頹廢的思想、ベンゲットの如き新開の而も労働者を奴隸視する所に娯楽機関の如きものゝあらう筈はない。米人側にして見れば日本人労働者は要するに昼間うんと働ひてさへ呉れゝば、又一日も早く工事が完成すればそれでよかつたのである。悲しい哉當時に於ける日本は、日清の役に大捷したりとはいへ尚世界二等国の末席を汚していたに過ぎなかつた。而して労働者の大半が義務教育も完全に受けなかつた者多く、又比島に於ける日本人移民に対する白人の考へは、彼の娘子軍より受けし印象等も加味されて少くとも日本人は文化的國民なりとは思つてゐなかつたのである。かゝる考へよりすれば、日本人の爲めの娯楽機関など凡そ縁遠い存在であつたに違ひない。乍然、『人はパンのみにて生くるものに非ず』而も肝腎のパンをさへ充分に与へられぬ日本人移民は如何なる方面に向つて精神的慰安を求めんとしたか、曰く飲酒、賭博、自暴自棄、反抗、逃走。焼けつくが如き炎天百度の下に於ける苛酷なる労働の強制、食料品の粗悪、或はかゝる仕打に対する極度の不満、異郷にあるものゝ等しく懷くであらう限りなき旅愁、苦しみを慇懃する肉親さへもなき孤独の生活、日々目撃する友人の惨死体、かくして彼等の気分は益々殺伐になり、現実の苦痛を強烈な南国の酒に依つてまぎらさんとした其の心情は、洵に涙なくしては聞かれぬ光明を失つた人間の生活苦ではないか。然し又一面に於て、かゝる人間生活のどん底を味はつて来た彼等であつたればこそ、ダバオの如き蕃界におし渡り、凡ゆる艱苦欠乏に堪へて邦人発展の素地を作り得たのである。惟へばベンゲットに於ける邦人移民の悲惨なる生活は、痛ましくも尊い体験であつたと謂ふべきである。

尚ほ次に掲ぐる歌はよく當時邦人移民間に流行したもので、これに依つて彼等の氣持の一端を知つて頂きたい

みつゝパンを嚙つて空腹を満すのであつた。そしてカルトンに積んで来たパンは蟻軍の占領する所となり遂に食う事の出来ないと言ふ事もあつた。こうした流浪の旅にも似た二日間の汗と埃りの徒步行軍が、外国だといふので相当あこがれて来た、夢を描き勝ちの若者達にとつて何と感ぜられた事であらう。物珍らしい南国の風景も、彼等の目には何と映じた事であらう。抱いて来た南進の雄志も目的地に入らざる前に既に半ばうちくだかれた事であらう。かくて翌日は愈々ベンゲットへ辿りつき、之から世界道路開鑿史上未だ曾てなき大難工事が彼等青年の手に依つて始められるのである。⁽²⁶⁾」

12 日本人移民の苦悩 (1)

ベンゲットの道路工事は、「言語に絶する未曾有⁽²⁷⁾」のものであつた。ここでの日本移民日本人労働者の実態をみてみよう。資料は、その凄惨さを記録にとどめている。

「邦人労働者が到着する迄は世界に誇る米国の優秀なる技術と、『金に絲目はつけぬ』と大見栄を切つて投出した百五十万比の巨費と、米比支人千余の労働者とが、即ち技術、資本、労力の三拍子を揃へて事に当ること前後三ヶ年、而も尚竣工の見透しさへつかなくなつた此の工事に、最後の切札として日本人労働者は投出されたのだ。見よ！ 巍々として聳り立つ巨巖、突兀たる山嶽、或は利器を以て切断せられたる如き断崖絶壁は一種の妖気をさへ漂へて十数哩遙か彼方に連り、邦人労働者の前に立ち塞つてゐるではないか。乍然、邦人労働者はケノン少佐が折紙をつけた如く何物をも恐れざる勇敢無類の民族であつた。幾多の難関も物かは日本人の名譽にかけて突進又突進、友の屍を乗り越へて大自然を征服して行つた。アツと言つたのが此の世の別れ、目をやれば間近かに仕事をしてゐた友は、哀れ妖雲立罩むる谷底深く姿を没してゐた。腰に綱をゆはへて——それは文字通りの命の

綱だ——絶壁にダイナマイトの穴を穿つもの、『オーイ、やるぞーッ!』火縄に点火した友は猿ましろの如く綱をたぐつて岩壁を駆け攀のぼつた。グワーン! と一声轟き渡る大音響、瞬間無意識の裡に目を蓋つた手をのけて彼方を見やうとした。うまく逃げおほせて彼方の岩角に汗を拭く友の姿を眺めてはホツとするのであつた。幾人とも数知れぬ同胞の命が此の危険極まる爆破作業の爲めに犠牲に供せられた。山崩れの爲めに十数名のものが一度に生埋めにされた事もあつた。かくて毎日何名かの日本人が姿を消して行つたのである。／然るに政府当局の遣り方はどうであつたか、苛酷なる労働、危険作業の強制、砂を噛むやうな非栄養的貧弱な食料、衛生設備の不完全等々、心身共に虐げられ、自然殺伐と頹廢の氣分を醸成し、ただ現実的剝削的の享楽に走り、何等慰安なき日本人労働者達は賭博と飲酒によつて、僅かにやるせない旅の憂さを慰めるのであつた。斯くの如くベンゲット工事は未曾有の難工事であり、近世日本植民史上の一大悲慘事であり、国民的汚辱の歴史であつたのだ。然し又日本人移民の此の犠牲と受難の体験が、ダバオを始め比島内各地に存在する日本人植民地建設の因をなした事を思ふ時、該工事に従事した人々の功績は我々在比日本人にとつて永劫忘るべからざるものであり、又彼の難工事に命を殞した七百の同胞の英霊も以て瞑すべきであらう。後輩の我々も是等先輩の苦心と慘憺たる生活様式を認識しておくことは強ち徒爾ではあるまいと信じ、當時の実情を左に列記することゝした。」

13 日本人移民の苦惱(2)

「(1) 住宅及食料品 由来人間に最も必要なものは衣食住の三つである。吾がベンゲット移民は四季熱帯の而も山奥に労働するのであるから、衣類に就ては頗る恵まれてゐた訳である。破れシャツに破れズボン、足には唐米袋をほだいて造つた草鞋わらじをはけばそれで充分であつたが、食住の二点に就ては全く悲慘の極みであつた。一般の

して此の奇怪なる噂を打消し、第二回第三回の移民を慫慂した。／＼続いて同年十月廿五日、シヨーマツ号にて第二回移民百六十六名が来着し、其後第三回第四回と次々に春日丸、熊野丸、ロセツタ号、サイベリヤ丸、トレモンド号等で来島、その他前記岩田・河田兩人共同でマニラ及近接諸州より労働者を募集して送り込むなど、ベンゲットに於ける邦人労働者は漸次増加し、遂には契約人員を遙かに突破するに至つた。その為め後にはベンゲットに行かずにマニラ鐵道工夫、マツキンレー丘舎工事の工夫、バタアン⁽²⁴⁾の炭山の鉱夫等に従事したのもも相当数に上つた。ベンゲット移民中最も多数を占めてゐたのは沖繩県人であつた。」

10 移民争奪戦の様相

移民会社は、フィリピンへの日本人移民の争奪戦を展開した。その様相の一端は、つぎのようである。

「移民会社は移民を募集するに当り一人に付拾円宛の手数料を比島政府より支給されてゐたので争奪戦が起つたのであるが、其のために酷いになると故意に他の移民会社を悪口し、或は事実以上の誇張を以て移民を釣り、又は移民の質など全然度外視して唯頭数を一人でも多く送り込むことのみ汲々として何等後の責任を持たず、最も悪辣なものになると明治三十七年末工事竣工の目前に迫つてゐるのを知りながらも、尚工事は後一年は継続さるべしと虚言を構へて移民を送るなど、随分無茶なことをやつたものである。かくの如く移民争奪戦が余りに激しかったので当局の斡旋に依りて各移民会社の割当数を規定する等の醜態を演じた。

而して一九〇四年には次の如く移民輸送数が決められた。／＼海外渡航会社 四六六名／帝國植民会社 四五五名／森島商会 一四三名／広島移民会社 五三名／其の他此の時代に移民輸送に當つたものは三丸、山陽、中国、東京、防長、関西、森岡の各商会、それに岩田・河田共同商会等であつた。」⁽²⁵⁾

11 ベンゲット日系移民の道路労働の実態

「募集せられた第一回移民百二十五名は、一九〇三年十月十六日マニラ入港の香港丸で、渡南の鵬翼の羽ばたきも勇ましく、若き血を躍らせつゝ乗りこんで来た。これに先立つて常該移民でなく、厚生移民会社と森島商會とが送つた和歌山県人より成る移民三十二名をのせた春日丸は同年二月十七日神戸を出帆したが、途中香港に於て、先発の仕事に就けなかつたマニラ移民達から『マニラに行つたとて駄目だ』と聞かされ、内二十余名は新嘉坡方面へ鞍替へし、マニラに來たものは僅かに九名であつた。／さて、マニラに到着した移民は先づ『千人小屋』と通称される政府の移民收容所に入れられた。千人小屋といふだけあつて一所に数百人を追込む不潔極まる所で、汚い比律賓女が葉煙草、ボンガ等を噛んで赤い唾を所かまはずペツペツと吐きながら、大きな支那茶碗に手摺みで飯を盛つたり、汚れた手で料理をしたり、日本から來たばかりの青年達にとつては此の千人小屋に於ける一日乃至二日の生活はかなり苦痛だつたに違ひない。食料品の劣悪なことは勿論想像外であつた。此の千人小屋に收容されてゐる間に一切の入国手続を済ますのであるが、それが済むと代理人や宿屋の番頭等が迎へに來て呉れて日本人の宿屋に落着き、そこで一日か二日休んだ上でベンゲットへ送られるのである。／前記第一回の移民百二十五名は十月十九日、政府の費用を以つて汽車にてマニラを發し、九時間後タグバンに着いた。(今日では三時間の行程である)そして其処で下車して一泊するのであつたが、勿論ホテル等氣の利いた設備なく、古寺の軒や倉庫の土間に、何も敷くものとしてなく夜もすがら猛烈な蚊軍に襲はれ乍ら夜を明かした。翌日は愈々徒步行軍だ。しかし飯を炊くべき鍋釜もないことゝて数台の牛車カルシを雇つてパンを積み込み、自分等の荷物は各自背負ひ、股引に黒の脚絆草鞋がけの異様な姿で、百二十五名の移民等は夜となく昼となく疲るれば路傍に眠り、飢れば水を飲

8 日本人移民の募集要項

一九〇三年、フィリピン政府代表のケノンと神戸渡航合資会社代理人稲葉卯三郎との間に移民募集に関する契約がとり交わされた。契約条項は、大要、つぎの通りである。

「(1)雇用人員 合計一千二十二名／内 訳／◎道路改築労働者 九〇〇人／日給米賃六十二仙半(二比廿五仙)

／◎石壁築造職工 一〇〇人／日給一弗(二比)／◎邦人労働者監督 二〇人／日給一弗廿五仙(二比五十仙)

／◎英語通訳主任 一人／月給九十弗(百八十比)／同助手 一人／月給五十弗(百比)

(2)一般労働者、監督、通訳の食事、宿舎並に医薬は総べて官費を以て支弁の事。

(3)人夫は百人まで妻を帯同する事を許し宿舎に同居する事を得、但し妻の食費は支給せず。

(4)第一回移民は一九〇三年九月三十日迄にマニラに來航する事、第二回以降の移民は人数のまつまり次第多少に拘らず毎月別々に移入する事。

(5)日曜及比島政府の公休日には仕事するとせざると随意なり、其の場合には時間に応じ其の割を以て日給を給与す、但し疾病その他の事故を以て休む時は給料を支給せず。尚毎日就業せざる時間に対しては其の時間だけ給料を差引くものとす。

(6)労働時間は毎日十時間とす、午前六時より十一時迄、午後は一時より六時迄。

(7)人夫、監督及通訳の給料は毎月末移民代理人稲葉卯三郎に手交すべし。

(8)移民の給料はマニラ上陸の日より支給すべし、移民は上陸後政府の費用を以てベンゲットに送付すべし。

(9)前記移民はルソン島ベンゲット州に於ける道路改築工事に従事するものにして、十五哩の道路を日本人、支

邦人及比律賓人労働者の三者に各五哩づゝ分担割当改築せしむ、而して工事の竣工迄には一ケ年を要する見込にして、此間引続き雇用使用すべし。⁽²²⁾」

9 ベンゲットへの日本人移民

「タグバンに居住していた岩田芳人及河田某」は、「邦人労働者五百名の契約をなし、同年（一九〇三）引用者補記 七月マニラ市内より邦人労働者三十五名を募集して工事現場に送り込んだが、之がベンゲット道路工事に日本人の従事した最初であつた。又近隣諸州在留の邦人は労働条件の良好なるを聞ひて続々集り来り同月末には一百名を数へた。当時比律賓人労働者は一日五十仙であつたが、日本人はその仕事で成績良好なため一日一比廿五仙も給せられてゐた状態で、之を以てしても日本人労働者が如何に重宝がられてゐたかが分るであらう。⁽²³⁾」

「然るに一方当初の契約者たる神戸渡航合資会社では一時に大量の移民募集は頗る困難であり、又当時海外の事情にうかつた日本内地の青年を引張つて来ることは相当に大事業でもあつたので、遂に海外渡航、帝国植民の両移民会社に協力を求め、鳴物入りが大々的に移民募集に取りかかつたのである。其間募集の条件その他に就て幾分誇張された点もあつたが、成績極めて良好で一九〇三年十月十六日、マニラ入港の東洋汽船会社の香港丸で第一回移民百廿五名が賑々しく来航し、直にマニラに上陸、数日間をマニラに滞在の上、各移民会社マニラ駐在代理人の手に依つて諸般の手続を了し、愈々ベンゲットに上つた。／第一回日本移民が大挙してマニラに上陸するや、一部の白人及比人等の間に日本人誹謗の声起り、種々な口実を設けて日本人移民の排斥を企図するものあり、又外字新聞、比島労働組合は米本国の東洋移民排斥運動と相呼応して悪宣伝をなし、流言蜚語乱れ飛んで物情騒然たるものあり、邦人移民の前途に暗影を投じたが、自己の信念に向つて飽迄邁進するケノン少佐は断乎と

マニラ市	七二一	三八五	三三六
オクシデンタル・ネグロス	一	一	一
オリエンタル・ネグロス	四	二	二
パンバンガ	二一	一三	八
パンガシナン	一四	七	七
パラグア	二	二	一
リサール	二	一	一
シアツシ	二	一	一
タウイタウイ	五	一	五
サンバレス	一〇	八	八
サンボアング	二五	二	二
◎合計	九二二名 ⁽¹⁹⁾	七二	一八

7 ベンゲットへの日本人移民の誘致の過程

一九〇三年六月、ベンゲット道路工事の責任者として着任したケノン少佐は、アメリカにおける日系移民の労働の質と量に注目した。ケノンは、「北米加州に於て広漠たる荒野を開拓して花園と化せしめたる日本人が凡ゆる仕事の分野に於て他国人より優秀なる点、特にその如何なる困難をも恐れざる勇氣と撓ゆまざる忍耐力に着眼し、未曾有の難工事ベンゲット道路の開鑿は日本人を措いては成就し難しとの結論を下し、日本人移民の大量誘

致の具体案を作成して比律賓行政委員会——米大統領の任命にかゝる委員を以て組織され、委員長には総督（當時は未だ総督とは云はず民政長官と云つてゐた）が當つてゐた——に提出した。⁽²⁰⁾」

ケノンの日本人移民の誘致計画は、数々の圧力に出喰わす。それというのもアメリカ本土において、日本移民排斥の気運が活発になつてゐた時期であつたからである。

「然るに委員の大半はそれより四ヶ年前即ち一八九九年六月、米本国カリフォルニア州に於ける日本人移民の排斥を目的とする移民条例の決議された直後の事ではあり、又同法が比島に於ても適用されてゐる事として日本人の来島するを喜ばず、極力之に反対したがケノン少佐は飽迄自説を枉げず、日本人の優秀なる技術と勇気を称讃強調し、故なくして日本人を排斥するの非を難じ、此の難工事の将来を説ひて遂に全委員を説服し、日本人労働者雇用の件を決議したのである。／＼そこで同少佐は同年六月十八日、マニラの日本帝国領事館に時の領事々務代理岩谷讓吉氏を訪問し、日本人移民の誘致斡旋方を申込んだ。岩谷氏は大いに喜び早速當時マニラに出張してゐた神戸渡航合資会社の業務代理人稲葉卯三郎氏に紹介したので、稲葉代理人は通訳長尾虎之助氏を同伴して政庁に赴きケノン少佐と面会の上、移民募集に関する諸条件に就て詳細なる契約を結んだ。其の結果各移民会社は日本内地に於て一斉に移民募集を開始し、第一回、第二回と次々に日本移民は比島を指して流れ出る事となつた。実に日本人ベンゲット移民を最初に提唱誘致したのはケノン少佐であり、其後も日本人移民を能く理解し、日本人の立場を考慮して呉れたのであるが、其の深き理解と同情が日本人発展の一因をなした事を思ふ時、ケノン少佐の名こそ彼のケノン道路（ベンゲット道路）の名と共に、日本人の発展史上に不朽の輝きを残すであらう。／＼（當時日本人は此のケノン少佐の事をベンゲット道路の難工事に因んでケノン少佐と愛称してゐた。）」

るや、底知れぬ魔の谷、或は登攀も困難なる峻坂を縫つて道路を開鑿するのであり、加ふるに雨季に遭遇せし爲め連日連夜の降雨で山崩れ地沁り等随所に起り、一命を殞すもの数知れず或は悪疫流行して病に斃るゝもの続出の有様で如何ともする能はず、工事は一頓挫を来して全く竣工の見透しもつかず、其の前途に大なる不安を抱かしむるに至つた。その工事の如何に困難なりしかはホームズ技師長が一九〇二年七月一日に委員会に報告した一節にもある如く『……山麓間は頗る急傾斜にして巨巖蟠居し大樹繁茂し、其の錯綜せる間を時には数百碼の処まで下降して基礎地点の発見に努めねばならない。斯くの如き場所にては一ヶ所鶴嘴を入れれば、必ず上部が地沁りを惹き起し、次第に地裂を生じて他の部分迄影響し何千呎の処までこれが及ぶのである』云々。／かくて工事は進歩せざるに、一方経費は徒らに嵩むばかりで起工以來二年足らずの間に百五十万比を消費して、米國議會では之が問題とされるに至つた。茲に於てマニラではタフト總督、ウースター内務長官以下政府首腦者は計畫線の変更か道路建設計画の中止か、即ち変更か中止かに就き鳩首協議対策を練つた結果、委員会の意見は飽く迄も計畫通りに工事を遂行することに一致したので、一九〇二年九月J・W・バードスレイ氏を技術顧問として迎へ再度の測量をなさしめ、設計を変更して米國議會より二百万比の追加予算を得て、翌一九〇三年六月二日には工事主任にケノン少佐を任命し、極力工事進歩の途を講じたのであるが、同少佐の建言に依る日本人移民の招致がさしもの難工事を竣工せしむるに至つたのである。且つ之に依つて募集された邦人移民の来航が、本格的比律賓移民の嚆矢である」(傍点…引用者)。

6 ベンゲット移民前の日本人の数

「一八八八年(明治二十一年)西班牙領時代のマニラに、帝國領事館が創設された折には在留邦人数は官民を合

せて三十五名に過ぎなかつた。其後漸次減少し一八九三年には僅に六人といふ貧弱な状態となつた為め、同年領事館は一時閉鎖されてしまつた。越へて一八九七年日清の役に大捷した日本は台湾を其の版図に加ふるに至り、地理的に益々比島と近接し種々關係を持つやうになつたので、再びマニラに領事館を開設したが、当時も在留邦人は約十四、五名に止り、翌年比島が米領に歸した時も二、三十名の少数であつた（但しマニラ以外のホロ、サンボアンが其他の在住者を加へると全島を通じて百余名ゐた）、それより急激に増加しベンゲット移民が来航する頃には全島に九百廿一名を数ふるに至つた。之は主として娘子軍を中心とする余り香しからぬ移民が多かつたが、其他多くは日本人移民の最も得意とした大工、建築労働、野菜栽培或は小規模の商業等に携つてゐた。／＼一九〇三年即ちベンゲット移民来航の直前に於ける全群島各地に於ける在留邦人数を示せば次の通りである（一九〇三年米國領有後第一回比島國勢調査に拠る）。

(州名)		(在留邦人数)		内訳(男)		(女)	
アルバイ	一	八	四	一	一	一	一
パタンガス	八	八	四	一	一	一	一
ブラカン	一	八	七	一	一	一	一
カピス	一	一	一	一	一	一	一
キヤビテ	四	四	二	一	一	一	一
セーブ	三	三	三	一	一	一	一
コタバト	一	一	一	一	一	一	一
イロイロ	一	一	一	一	一	一	一
ホロ	二	二	一	一	一	一	一
ラ・ウニオン	三	三	二	一	一	一	一

海路ラ・ウニオン州のサンフェルナンデスに至り、此処よりナギリアン道を進み約三昼夜を要してトリニダツドに仙り着いたのである。一行がバギオに到着して見ると、八年前サンチエス氏が折紙をつけたが如く、聞きしに勝る風光明媚、気温熱帯とは思へぬ常春の別世界、予想以上の好適地であつた。而もこうした人里離れた別天地にたつた一人の白人が仙人的生活をなしてゐたが、これぞオット・セーラー氏であつた。一人は四月間この地に滞在し、セーラー氏の案内でバギオ付近を巡廻し、愈々こゝに避暑地を設けることに決定したのである。⁽¹⁶⁾

一九〇〇（明治三三）年六月、ウースターが会つたドイツ人オット・セーラー氏については、つぎのような文献がみられる。

「セラー（この文献では「セラー」と記述されている…引用者補記・説明）博士は一八五八年ドイツのハンブルグに生まれ、何事かを為さんと一八八〇年頃単身マニラに來たり、初め或ドイツ商会に傭われ、後ラ・ミネルバと云う葉巻煙草工場を興したが、都合によりこれを売却した。その後病氣のため香港に出で、アミーバ赤痢とのことで、ドイツに帰るよう勧められたがマニラに帰り、或医師からバギオに行き療養すれば治ると勧められ、一八九六年から同地に登って住んでいたのである。ウースターはセラー博士の案内で四ヶ月に亘り実地調査を為し、愈々バギオを避暑地にすることに決定した。蓋しバギオの発見はセラー博士ではなく、蕃族イゴットで当時彼等の家が七軒あつた。博士は大東亜戦争前のバインス・ホテルを中心とする広い区域をスペイン政府から譲り受け、白人として最も早くバギオに住まっていたが、アメリカ政府の要求に應じこの土地を讓つた。博士は初めフィリピン婦人と結婚したが死別し、一九〇〇年には日本に來て東京外国語学校、陸軍大学、学習院、最後に長崎高等商業学校等の独逸語教授となり、この間に日本婦人と結婚した。一九〇八年マニラに帰り、一九〇九年から滿三年間パタネス州の知事を勤め、その間土語の研究に努めた。博士は語学の天才でラテン及びグreekを研究し、独逸語、英語、フランス語、スペイン語に通じ、フィリピン土語をも研究して、語学者として一九一二年から一九三三年隠退するまで、フィリピン大学で教職について居た。博士の次男が古川拓殖に勤めていた關係から、博士の

ことはよく知っていた訳であるが、バギオの開祖として忘れ難い人で、一九三八年三月マニラ市に於て八十歳の高齡で死去した。⁽¹⁷⁾」

5 ベンゲット移民前史 (2) — ベンゲット道路

ベンゲット道路の起工は、一九〇〇年になされた。工事は、つぎの資料にみられるように、予想をはるかに上廻る難航をきわめた。しかし、以下のような難工事を打開するために、日本人移民が起生したのである。

「マニラよりタグパン迄百十五哩余、其の間は平原或は丘陵地帯で既に当時小規模の鉄道があつたが、タグパンよりホソロビオ、トキンビーク、バギオ間四十五哩の間は峨々たる山嶽起伏し、殊にトキンビーク、バギオ間の二十一哩三十五は白人未踏の断崖絶壁で非常なる困難が予想されたが、米国政府としては比島領有直後の事ではあり、比人を心服させる意味に於て何か比人のアツと言ふやうな大袈裟な事業を目論んでゐた際にはあつたし、又一つにはマニラ、タグパン間の比島唯一の鉄道の補強工作の意味もあつて、遂に此の大工事開始の決意をなし、一九〇〇年工事着手に乗出したのである。始め該工事に當つたのはマニラ市の技師米國陸軍大尉チャールス・W・ミード氏で、氏は測量の結果経費六万五千弗を要求し、工事に當つてみたが、之は大きな測量違いで数十万弗を消費して了つた。そして一九〇一年八月廿日氏は遂に免職された。次に工事に當つたのが米人ノーマン・W・ホームズ技師であるが、彼は同工事の極めて難事業たるを認め、彼の監督の下に日々一千人の比人労働者をかり集めて使役したが一向進歩の跡がなかつた。そこで今度は支那人労働者を募集し、比人を五百名に減じて支那人五百名と入替へ、更に白人（主に米人、西班牙人、露西亞人）二百名を配し、合計一千二百名を動員して工事に当らせ其の進歩を計つた。／＼工事難関に遭遇、然るに一九〇二年（明治三十五年）工事一度山嶽地帯に差ししか

4 ベンゲット移民前史 (1)

「マニラを去る北方約百六十哩の高原地帯に」、「熱帯には珍らしい常春の天国と言はれるバギオ市がある」。「此の」⁽¹⁾「バギオに通ずる道路こそ有名なベンゲット道路である」。

「ベンゲットとは元来山の名で該道路は本工事の殊勲者工事主任ケノン少佐の名をとつて『ケノン道路』と言ふのが妥当であるが、茲では通称通りベンゲットと呼んで置く」。

米西戦争（アメリカ・スペインの間で争われた戦争）は、一八九八年キューバでの利害をめぐつて起こつた。アメリカが勝つて、フィリピン・グアム島などをえたのである。

「米国政府は比島領有と共に政庁をマニラに置き、兵舎を新築し其他諸般の施設改善に取りかゝつたが、温帯の生活に馴れた白人にとりマニラの如き熱帯に於て事務を執り作業を続ける事は、やがては精神肉体ともに弛緩を来し、しいては事務能率の低下を招く惧れあるに鑑み、好適の健康地物色して之を避暑地とすることになり、一九〇〇年（明治三十三年）⁽¹³⁾地をマニラの北方百六十哩の高原バギオに定め、愈々避暑地建設に着手することになった」。

「バギオの地はもと／＼イゴロット族の本拠である。海拔五千呎、断崖絶壁の天下の險に拠つてイゴロット族が此の地を長い間独占し、文明とは凡そかけ離れた生活が続けて来たことであらうが、一八九六年独逸人の学者オット・セーラー氏に依つて初めて此の秘境は発見され白人の知る所となつた。セーラー氏は何の目的があつて此処に単身侵入したかは知る由もないが、聞く所に依ると病を得てゐたと云ふから幾らか厭世的な気持からマニラの奥深く山を越へ谷を渡り、イゴロット族の巢窟ふバギオの森の中に身を隠し、蕃人を友とし自らも土人になり

切つて仙人の生活をしたと伝へられてゐる。セーラー氏の探險はバギオの發展、ベンゲット道路の開通には直接貢獻はないが、今日の文化都市バギオに最初に足跡を印した白人として記憶さるべきであらう。⁽¹⁴⁾

「次にバギオの清涼無比なるを世に紹介したのは米人 D・C・ウースター氏である。／氏はミシガン大学出の動物学者で、一八八七年及一八九二年の兩度動物標本採集の爲め比島に來航し、疑ひ深き西班牙官憲の妨害や其の他幾多の危険を冒して各島を跋渉し、多くの標本を本国に持ち歸つた。／ウースター氏が始めてバギオの存在を知つたのは一八九二年六月で、氏がミンドロ島のナウハン湖畔で動物標本採集中、西班牙官憲の一行に出逢ひ、その一行に加はつてゐた山林局員サンチェス氏より『北ルソンには霜さへ降る清涼な高地があり、そして屢々烈しい暴風雨が襲つて来るので、人呼んでバギオと称して居る云々』と聞かされた。バギオとは即ちスペイン語で台風とか暴風とかの意である。そこでウースター氏は深く興味をそゝられ、此の地域を探索せんとしたが不幸病に冒され歸国の已むなきに至つた。⁽¹⁵⁾」

C・ウースターは、その後も、つぎのような活躍を重ねている。

「米国の比島領有の初期大統領マツキンレー氏の請により一八九九年氏は第一回比律賓行政委員会（所謂 Philippine Commission）の委員の一人となり、先づ国情調査の上一旦歸国し更に一九〇〇年第二回の委員となり、タフト氏同伴にて四度比島に來り、後選ばれて内務長官となり、初代總督タフト氏の下にあつて種々行政手腕を發揮した。就中氏は蛮人の懷柔教化に最も力を注ぎ、自ら蛮地に入つて蛮人に接觸し、学校を設けて文明の光に浴せしめ、警察制度を布いてその蛮行を取締る等幾多の危険を冒して此の事業に當つた。バギオが開発の運びに至つた端緒はウースター氏が第二回目の比島委員となつた時、西班牙政府の記録中に、バギオ迄車道を開き、之を避暑地となすべき計画事項を見出したのに初まるもので、氏はさきにサンチェス氏の言もあることゝて、避暑地はバギオに限るとし時の國務卿ルート氏に避暑地建設を提案しその同意を得た。／そこで氏は実地探查を思ひ立ち、一九〇〇年六月、マニラ鐵道会社々長ライト將軍、マウス少佐、軍医ボーンズ氏等と共にマニラを出発、

ものである。⁽⁸⁾

南島商会設立の目的理由は、つぎのようであった。

「南洋通商の利あること世間之を説くもの多し。然れども其の説能く信ずるに足るものなし。南島商会の起る実に先輩の南洋通商を主張するに因る。然れども、単に商業に止まるにあらず、東京府士族の有志者をして、南洋に移住せしめ、一は以て其独立を助け、一は以て国威を伸べんと欲するにあり。⁽⁹⁾」

「卯吉は南島商会を設立するとすぐに天祐丸といふ船を買入れ、これに各種の商品を積込んで、征南の途に就いた。時に二十三年五月十四日である。乗込むもの卯吉以下十六名、(途中小笠原島で更に二名を加ふ)、一行は東京灣を出帆して一路小笠原に至り、それから貿易を試みつゝグアム、ヤップ、パラオ、ポネビ等の諸島を巡航したのであるが、いふまでもなく当時この辺り一帯はスペインの領有するところであつて、各島駐留スペイン官憲に対する土民の反感は極度に達してゐた。これが為めその衝突は随所に起り、スペイン官憲によつて虐殺される土民の数も少なくなかつた。一行はそういふ動揺の中に身を托して活動したのであるがその成績は極めて良行で、特にポネビ島には支店を設置するといふ盛況であつた。かくて貿易巡航約七ヶ月、同年十二月四日無事東京に歸つた。／＼ところが卯吉等一行が東京に歸るや否や、高崎の後を受けて東京府知事となつてゐた蜂須賀茂昭は、卯吉に向つてその資金を返せといふ話である。卯吉曰く『余輩好んで此資金を受けしにあらず、前知事の余輩に依頼せらる、是れ余輩の不得止之に任せし所以なり』と。しかし結局東京府士族の總代会を起し、これにその資金を交付することゝなり、卯吉等は全くこれより手を引くことになつた。土族總代会はすぐに天祐丸もポネビ支店も売却してしまつた。かくて卯吉等の理想と計画は、実を結ばずして終つたのであるが、しかしその試みにより、南洋貿易の有望なることが実証せられ、これに従事するものが相次で起つた。⁽¹⁰⁾」

3 「実践商船隊学校」の設立建議

田口卯吉は、海外貿易の計画を放棄しなかった。明治二六（一八九三）年四月、かれは榎本武揚の「殖民協会評議會」の席上において、貿易振興を目的とした「実践商船隊学校の設立建議」を行なっている。建議書は、つぎのようである。

「謹て白す。方今我邦人民をして海外通商の志を発せしむるの方法たる、之をして廉価に航海するの便を得せしむるより急なるはなし、之をして廉価に航海せしむるの方法たる、風帆船をして常に世界を周航せしむるより便なるはなきなり。／我国開港の初、汽船の便先づ開け、風帆船の廉価にして且安全なること未だ世に知られざるは不幸といふべし、蓋し風帆船は、風に随つて進行するものなるを以て、汽船の如く快走するを得ずと雖も、その安全と愉快と廉価とに至りては、汽船の遠く及ばざる所なるは諸君の熟知せる所なり、且つ夫れ我邦の将来自ら進みて貿易を営むべきの地は蓋しメキシコ、南米、亞弗利加、南洋諸島是なり。抑も此貿易は風帆船に適するものにして、汽船に適するものにあらず、且つ其貿易たる、非常の利益あるものたりと雖も、世の財主は実例を示すにあらざれば、決して振起して之に従事するものにあらず、故に余は本会が率先して此の挙に着手せらんとを希望す。其の方法たる実践商船隊学校を起すにあり、何をか実践商船隊学校といふ。一風帆船を以て商船学校となし、之に商人若しくは商業学校卒業生を乗せ、航海の際航海術を教ゆるものなり」。

この建議は実現されなかった。しかし、田口の提唱は、空論ではなかった。かれは、実現の可能性を力説していたのである。

る執念は、壮大であるとともに想像を絶するほどのものであった。福本日南は、貞風の著『大日本商業史』の序文において、つぎのようにしるしている。

「既にして君は真韭に達し、客館に寓する凡そ五閏月、昼は則ち出で、地理を視、夜は即ち筆を抽きて之を記し或は風俗を察し、或は土宜を究め、其間未だ曾て一日も怠ることあらず、漸くにして探求其概を得、依て將に帰朝して大いに画図するあらんとす。発程日あり、何ぞ図らん葬身埋骨の句惡識を為し、一夜俄かに劇疾を得て終に起たず、夫の鬱積磅礴の深慨を齎らして空しく南洋千里の客館に没せんとは、実に是れ七月六日にして享年僅かに二十有五歳なり。」⁽³⁾

福本日南は、さらにつづける。

「計音一たび本邦に達するや、朋友共に哭して骨肉を喪するが如し、後相謀りて碑を其地に建つ、呂宋の島、真韭の灣、府の西南を距る約そ一里許、四辺空豁にして極目なきの原野の中、一丘の隆然として起るあり、之を真楨岡となす。岡上柏樹深々として綠葉影暗く、其下一片大理石に菅沼貞風墓と題するもの、即ち是れ君が埋骨の処なり。」⁽⁴⁾

大正五（一九一六）年に、大阪新聞界の元老格であった土屋大夢は、フィリピン視察旅行をし、その際、菅沼貞風に関する記録を求めた。だが「領事谷田部梅吉の、貞風の病状に関する記録があるのみで、他にこれといふものがなかつた」という。「当時マニラに在留した日本人は、領事の外、書記生鈴木成章と福本日南のみであつたといふから、その葬式も随分淋しいものであつたらう」と想像される。⁽⁵⁾

土屋大夢は、菅沼の墓地を訪れ、つぎの長歌を詠んだという。

「真勝（マカチ）の岡にて唱へたる俚語／仇浪の汀に寄せて。大八洲。すめらぎの世も。刈薦と。乱れし頃に。火の國の。平戸の里の。菅沼に。生れませる君は。空蟬の。身こそ小けれ。むら肝の。心は広く。大海原。四方に渡りて。外国を。結びの道を。尋ねんと。遠き神世の。あとかけて。心の限り。千万の。書の証を。書き集め。

編み果て見れば今の世も。尚国引きに。引寄せん。国も多なる。其中に。南の海の。三千島の。ひりぶの島は。言さへぐ。かすてら人の。三百あまり。昔の代より。へすうすの。教を伝へ。島人を救ふと言へど。島人は。むかしに優る。苦しみの。海に沈むと。聞くからに。いでや一度。其様を。眼のあたり見て。日の本の秋津島根に。うち続く。八重の潮路の。明けく。明まる御代の。時つ風。吹くとし知らば。民草の。喜び引かん。大舟の。真菰の網を。彼岸に。繋ぎて見んと。一筋に。思ひ立ちては。梓弓。春を見棄てゝ。常夏の。緑の海を。打ち渡り。ばしぐの川の。川口に。暫し仮寝の。旅衣。ぬぎ換へもせで。幾月を。起きふしの間に。竹の節の。すぐなる人は。まがつみの。憎に逢ふか。何時しかも。悪しき病に。襲はれて。椰子の枯葉の。木末より。落つるが如く。あへなくも。消えにし魂の。界敢なさよ。真勝の岡の墓所の花。我訪ひ来れば。白雪の。消え残るごと。咲き出でゝ。夏を忘るゝ。奥つきは。高く聳ゆる。まんご樹の。繁る葉蔭に。炎てる日を。避けて涼しき。貞風の。其名は朽ちず。残し置く。文こそ世々の。実なりけれ。」

入江寅次は、菅沼貞風を、つぎのように評価している。「貞風はかくの如くして倒れたりと雖も、その雄大な思想と、卓抜なる見識とは、邦人南洋発展の初頭を飾つて、光彩の陸離たるものがあるのである。而してその死は、それ自身、邦人の行くべき道を告知する巨大なる暁鐘であつた。」

2 田口卯吉の活動

「田口卯吉の南島商會は、明治二十三年東京府士族授産金を資金として組織された。士族授産金は文字通り、東京府内の士族授産のための資金であるが、今にしてこれを有意義に使はなければ、近く政府に取上げられ、東京府士族がこの授産金の恩恵に浴する機会を失ふので時の東京府知事高崎五六が卯吉をしてこれを保管活用させた

II フィリピン移民 (I)

1 菅沼貞風とマニラ

「菅沼貞風がマニラに渡つたのは、明治二十二年二月である。『詳しく同地の事情を究め、自ら貿易植民の事業を興して、同胞を覚醒せんとする』に出でた。時に彼れは二十五歳。既に『大日本商業史』、『平戸貿易史』を書き上げてゐたのである。⁽¹⁾」

かれは、出発に際し、別れを友人たちに、つぎのように詠んだ。

「北極之南南極北 地勢雄濶多島国／久抱遠交近攻謀 欲向何処展我力／太閤雄図徒劳民 七郎寄計空

頼人／功名別有必成術 当途何為事逡巡／冲繩遙望豪州路 青螺点綴山無數／葬身元分鰐魚腹 埋骨豈

期旧墳墓／君不見天下虎騰又竜蟠 小者常危大者安／又不見天公委我好版藉 多嶋海辺皆可略／不知孰能

植我民 視機察變取溟漠／西土密雲近雨期 恰是蛟竜飛躍時／苟熊變攻守勢 真、菲、之、麻、足、以、繫、日、本、之、旗、⁽²⁾

(傍点：引用者)。

「真菲」とは、マニラのことである。「貞風は、再び故国の土を踏むことがなかつた」が、かれのマニラにかけ

パンではヘンな唄が流行^{はや}つてゐた『専務良く聴け、お前の末は、サイパン辺りで野たれ死に』——小学校の子供達まで歌つてゐる。やがては来るであらう暗黒な場面を想像し、みんながヤケになつてゐたのである。松江が数万円を提供しても、それだけでは、一同の志気を回復する訳にゆかぬ。第一、諸支払いが円滑でないのである。／松江はしかし、あらゆる悪罵を耐へ忍んだ。彼れにはまだ抜くべからざる信念があつた。敵は箴象虫ただ一つだ。これさへ撃破すればあとに難はないのである。彼れは全力を上げてこれが徹底的撲滅に努めた。甘蔗はみなこれを焼却した。しかし火は甘蔗の中によく通らぬ。そのため箴象虫は後に残る心配があつた。箴象虫を食つて生きるものに、タキニツト・フライ（蠅の一種）がある。これを耕地に放つて置けば、虫は食はれてしまふ理屈だ。タキニツト・フライは布哇^{はわい}にある。松江は、優良甘蔗輸入かたがた人を派してこれを求めた。台湾にも人をやつて、優良甘蔗を輸入した。／布哇から持つて来たタキニツト・フライは、みな途中で死んでしまつたが、しかし箴象虫の撲滅は徐々に功を奏した。輸入した優良甘蔗はよく伸びた。第二回の製糖（十三年）は、旧甘蔗でやつた。無論成績のいい筈がない。前年よりは三倍の増収だが、しかしとても問題にはならなかつた。『専務よく聴け』の歌はまだ続いてゐた。三千の労働者の心は、依然として暗かつた。しかしこの第二回の製糖成績を見て、専務松江の心は躍つた。次年度の成績を見ろ、甘蔗更新の第一年、全農場は蘇^{よすがへ}るぞと確信した。十四年、第三回製糖が始まつた。松江の確信は外れなかつた。産糖一躍十五万担、優先株式に八分の配当をすることが出来た。南洋の製糖はここに全く確立した。全島は挙げてこの歓喜に酔つた。／翌十五年十月、三十万円を投じてテニアンに於ける喜多合名の権利を買収した。喜多合名は、大正五年、椰子栽培の目的をもつてテニアン島に一千町歩の土地貸下を受け、十一月、先づ邦人四名、島民約二十名をもつて、これが経営に着手した。七年の初め、移民百名を山形県から入れ、サイパン・ロタ両島民六十戸約三百名をこれに加へ、全力を挙げて密林の伐採開墾を実施、同年九月迄に七百六十町歩の畑を作つて、十二月迄に椰子苗六万七八千顆^{つば}の植付を了した。ところが八年、旱魃^{かんばつ}と虫害のために、幼弱な椰子は殆んど枯死してしまつた。しかも害虫（貝殼虫）駆除のためには全部こ

れを焼払つてしまはなければならぬ。だが焼払つても虫は他の植物に移つて益々蔓延し、何を植へても周囲からまた襲はれる危険があり、到底成功の見込みがなかつたので、事業を放棄して暫らく傍観することに決めた。山形から行つた移民は惨々な目にあつて郷里に帰つた。十年五月から、棉花栽培を始めて見た。棉花の芽吹きはよかつたが、人夫賃に追はれて一年に三万円以上の損をしてしまつた。人夫はサイパンの島民である。十二年からこれを小作制度に改め、どうにか収入を償うことが出来たのであるが、しかし棉花採集期に於ける労力（平常の三四倍）の問題を解決するを得ず、折角よく出来た棉花も大半これを腐らしてしまふといふ風で、今度は小作者の方がやり切れなくなつた。喜多は結局、累積する負債を背負つて持て余してゐたのである。／松江は大正十年第一回の視察の際、テナアンに展開する担々たる沃野を見て、当然これも事業地の一つと決めてゐた。前の西村拓殖、南洋殖産も、喜多と前後してここに事業を計画し、西村は北部チューロに牧場用地を、殖産は甘蔗栽培の目的をもつて、四千町歩からの土地を、夫々貸下を受けたのであるが、西村は全然これに手をつけず、殖産が大正七年十二月から甘蔗試作を開始した。けれども矢張りうまくゆかず、南洋興発の成立と共に、両社の権利は挙げて興発に歸した。興発はサイパンに事業を着手して以来、このテナアンについても種々調査研究を続けて見た。／サイパンに於ける苦難時代を克服して、基礎漸く安固たるを得た興発が、氣息奄々たる喜多の事業を併せ呑むは、また自然の勢ひであつた。喜多は五十万円と称し、興発は十五万円と頑張り、南洋庁が間に入つて三十万円で手を打つたとある。即ち十五年十月を期してテナアン全島もまた興発の手中に歸した次第である。⁽⁴³⁾」

鉄道五十哩、工場能力一千噸の計画であつた。鉄道は耕地の甘蔗を集積して、工場に運搬するために、欠くべからざるものである。在島一千の移民では間に合はない。至急これを増加しなければならぬ。よつて十一年六月、先づ五百四十名の新移民を入れたのを初めとして、同年中二千人の移民を入れた。みな沖縄県からである。旧移民を合せて三千人、素晴らしいことである。／これら新旧移民中、二百二十戸の小作者を決定、この小作者を中心として多数労働者を配属させた。会社直営農場は、従来経験上思はしくないもので、経営の中心を小作制度に置いた訳だ。移民達は旧会社引継耕地一千町歩の手入を行ひつつ、一方チャランカの奥及びラウラウ湾に面する地を中心として、開墾を進めて行つた。／十二年三月、工場が完成した。一千噸能力の製糖機その他、みな独逸製の最新式だ。この頃、鉄道も三十哩程完成した。三月十日には、盛大な工場落成式が挙行された。官民の讃辭が雨のやうに降り注いだ。同年暮までには、鉄道工事も一段落、延長四十二哩に達した。／サイパンの島民は、眼を円くして進捗する諸工事を見守つてゐた。黒い煙を吐いて汽車が走り出すと、彼れらは線路の両側に堵列して、これに最敬礼をしたといふ。屈強な若者十数名が、機関車を綱引して見たいと申込んで来た。やらせてみたら、矢張り機関車の方が強かつたとは、うそのやうな話である。一日、百数十名の島民を汽車に乗せた。みな汽車に乗つてみたがつてゐるから、乗せて呉れまいかという申込みなのである。彼れ等が盛装を凝らしてこれに乗つたことは勿論であるが、目的地に達しても、彼れらは降りやうとしない。曰く、『こんなに早く来る筈がない。ウソだ。ウソだ』と。」

10 松江春次の忍苦と確信

「松江は建設事務所の進行中、旧西村、殖産兩耕地の中に、強大な敵の潜んでいることを知つて駭然とした。兩

耕地に赤腐病の多いことは初めから知つてゐた。甘蔗は風害、虫害、鼠害等によつて損傷すると、そこから微生物が入つて赤腐を發し、茎が全部赤くなつて製糖の原料にならなくなる。松江は両耕地の赤腐病を鼠害のためだと考へてゐた。／だが不安だ。鼠害にしては赤腐が余り多すぎる。甘蔗の茎を割つて見ると、長さ三四分の暗褐色の虫がある。台湾では全く見たことのない小虫だ。しかしこれも一種の害虫であつて大したことはないのだらうと片付けてゐた。ところが実は、これが世界糖業史に大きな暗影を遺してゐる觥象虫であつたのだ。彼れがこれを知つたのは、事業着手後六ヶ月の、十一年六月のこと。彼れは駭然として背筋の寒くなるのを覚へた。／だが今更どうにも仕様がなではないか。進むのだ。進んでこの大敵を撃破するのだ。それより外に途はないのである。同年四月南洋庁が設置せられ、民政部長手塚敏郎が初代長官に就任した。松江は手塚と協議をなし、南洋庁の援助を得て、極力これが捕殺に努力した。だが久しくその跳梁に委せてゐた耕地から、これを驅逐するのは容易なことではなかつた。／十二年三月、旧耕地の甘蔗をもつて製糖を開始した。無論もう大して期待はしなかつたがしかしそこにさけ出された現実には、また何といふことであるか。最新式一千噸工場が泣くのである。七月下旬まで四ヶ月かかつて産糖二万九百七十担。幹部以下みな天を仰ひで啞然とした。矢張り駄目だ。南洋は製糖に適しない。西村、殖産の失敗も無理がない。社内がそんなことであつたから、社外の批評は更にひどい。嘗て工場落成式に臨み、あらゆる讃辭を吝まなかつた人達が、今は思ひ切つた惡評を飛ばした。結局この第一回の製糖で得たものは二万俵ばかりであつた。／もう会社には資本の余裕がなかつた。資本金三百万円の内、百六十万円は前身会社の救済的引継に充て、残額百四十万円に東拓からの長期借入金二百万円を加へ、三百四十万円を以て、工場、鉄道、その他一切の施設をやつた。もう残額がないのである。よつてまた至急に資本を作らなければならぬ。だがその九月には、関東大震災。金に換へるため東京に運んだ二万俵の砂糖は、倉庫の中で灰になつた。松江は金策のため東京に歸つてゐた。だが東拓では震災の混雑で金が出ず、銀行は勿論相手にして呉れなかつた。松江は身辺の物を賣つて数万円を得、これを会社に提供した。／松江は十二月サイパンに歸つた。サイ

年の恐慌で一たまりもなく参つてしまつた。サイパン事業地の敗惨の跡は、西村よりひどかつたといふ。⁽³⁹⁾

すでに知れるように、西村・殖産の事業の先走により、一千人近くの移民は放りだされてしまつたのである。

大正一〇年に、この実態視察した松江春次（南洋興発社長）は、つぎのように語っている。

「実に荒寥凄惨を極めたもので、野に餓死ありと云ふ様な言葉も、その儘文字通りの事実とならうとする程、切迫したものであつた。総ての人の顔には生氣がなく、一二年前に移住してきたやうな人達は、鶏卵又は椰子の束をガラパンに在る南洋貿易の支店に持つてきては、米一握石油一瓶と交換して貰ふ惨状であつた。憔悴しきつた身体を破れ果てた衣服に包み、南洋の白日の下に彷徨憐れな人達の姿は、私は決して忘れることが出来ないものである。（中略）吹き曝しの工場も、椰子葉葺の宿舎も、皆見る蔭もなく痛み果てて、其の廃墟にも似たる失敗の跡には鷓鴣こそ鳴かね、そぞろに涙を誘ふものがあつたのである。⁽⁴⁰⁾」

9 松江春次の決意——「再建移民三千人」の動員

台湾をはじめとするわが国の糖業関係者は、ことごとく南洋群島を見切つていた。だが、当時、新高製糖の常務であつた松江春次は、この「新舞台」を見切つていなかったのである。松江は、「社業の前途に不安を感じ」、「南洋群島は、緯度氣候の關係が瓜哇、布哇（「ハワイ」引用者補記）に接近し、台湾などよりは遙かに糖業的」と判断した。また、「土地が狭いとはいつても、十万里以上の島が三四あり、それが鳥糞のために驚く程、肥沃」であることに着眼し、「糖業の基礎条件」は整つていると考えた。松江は、自らの考えを社長に具申したが、きき入れられずに退社する。

松江は大正一〇（一九二一）年二月に、現地踏査に出る。「サイパン島上陸後、チャモロ族の酋長の家に宿を

取つて、毎日密林中を歩き廻つた。彼れはタツボーチョー懸崖を攀ち上り、背面の広い平野を望むに至つて、土地狭小の不安から開放された。心に描く新式千屯工場計画が、この平原の中にそつくり入るのである。今迄の調査員達は、西村拓殖、南洋殖産の事業地だといふので、サイパンには余り注意を払はなかつた。サイパンを調査するものがあつても、この山の上まで、上つて見るのは皆無だつた。／彼れは続いてテニアンに渡り、面積七方里、殆んど全部が平坦で、六千余町歩の大耕地を得られることを実見し、且つロタ島の模様を想像して、この三島から砂糖年額百五十万担を出し得る確信を得たといふのである。／三月帰京して、石塚東拓總裁に会つた。石塚の方から会見申込である。一千の移民が飢餓に瀕しているといふことは、政府に取つても重大な問題であつた。手塚民政部長の報告で、移民窮迫の实情を知つた政府は、場合によつては全部これを引上げさせなければならぬとした。けれどもそれは最後の手段だ。東拓では九年秋、芦沢技師ら二名を現地に派して、移民の实情とこれを救済する途如何を調査させた。芦沢等の報告は、棉を作るがよいといふことだつた。石塚に会つた松江は、棉ではいけない。矢張り砂糖だとあつて、砂糖の有利なることを力説した。石塚大いに動き、移民救済のためには、犠牲を覚悟で、事業を起さなければならぬといふので、西村拓殖、南洋殖産、及び西村の債権者たる海外興業に対して、整理の交渉を進め、七月にはその条件に関する内談も出来たので、急拠砂糖事業を起すための再調査となつた。松江の外に東拓から二人、これに西村一松が加つて、八月東京発、二ヶ月を要して十月に帰つた。これで糖業着手といふことに確定した。／東拓は事業着手の順序として、先づ西村拓殖の五百万円を十分の一に減資、資本金五十万円とし、南洋殖産を同額の五十万で買収することにした。十年十一月、西村拓殖の資本金を三百万円（全額払込）に増加の上、これを南洋興業株式会社と改称した。松江春次は同社専務に就任した。西村、殖産の重役はみな退いて、東拓と海興の人がこれに代つた。」

大正一〇年一二月、松江はサイパンに旧西村事務所を本拠に、直ちに事業開始に着手する。「一千の移民は歡呼してこれを迎へ、サイパンの野は久しぶりで天日に映へた。新会社のサイパン製糖所は、甘蔗耕地三千町歩、

崎両県から連れて行つた。一松が総指揮で、一家をもつてする幹部がこれに加つたが、みな製糖事業には素人である。労働者また然りだ。チャランカの隣り、ヒナシスの丘付近から開墾を初めた。ところが労働者はみな漁夫上りだ。百姓やるより魚を取つた方が面白い。幹部もこれに共鳴して半日百姓、半日は魚取りといふことになつてしまい、立派な船を二隻造つた。／間もなく朝鮮から四百人ばかりの移民を入れた。これは明けても暮れても喧嘩ばかりをしてゐて、半日も真面目に働かなかつた。西村ではこれら多数の労働者に、食事を賄つて食はせてゐた。労働者は遊んでゐて大食した。自分で大食するだけでは足りなくて、人間の食事で豚を飼つた。豚は肥つた。怠惰なる労働者には天国であつた。しかしこれでもつて、事業経営者が肥る訳はない。事務所、工場、倉庫、宿舎、トロツコ線、みな完備した。大正八年春開墾地三百町歩、栽培甘蔗を工場に運んで、汁を搾つて煮詰めてみたが、これが砂糖にはならなかつた。甘蔗が全部赤腐病を發してゐた上に、正当な糖汁の処理を心得た技術者が一人もゐなかつたといふのである。砂糖にならなければ仕方がない。この汁で焼酎を作れといふことになつた。よつてこれを、タンクに貯へて置いたところ、このタンクがまたいけなかつた。汁はいつの間にか海に流れてしまつていた。／同年十一月、組織を改めて株式会社とし、西村拓殖会社と称した。資本金五百万円、社長西村惣四郎、事務同一松以下、重役はみな一族をもつてした。その年の暮、雑草に埋もれた甘蔗を刈つて製糖をやつてみたが、これもまた惨々であつた。しかも前後して火災に見舞はれ、熱病が流行して死亡者が続出した。しかし砂糖の相場はまだよかつた。九年五月、分密一俵五十円という熱狂的記録を出した。西村一族は望みをただこの好相場の持続に囑した。即ち海外興業、興業銀行から九十万円程の資金を借入し、これに最後の運命を托して、同年秋から第三回目の製糖に入つた。／けれども時既に遅し矣。製糖に入る直前から数年続いた戦争景気は、物凄いい反動の嵐を展開した。砂糖の運命もまた同じで、瓦落惨落、目もあてられぬ次第となつた。豪家西村一家の事業は、ここに全く夢と消えた。西村が事業着手後、三菱がこれを買収せんとして交渉した。ところが惣四郎これを拒絶して曰く『自分はこの事業を成功させ、一千万円を政府に献納し、南洋開拓の功に依つて男爵になるの

だ』と。ところが今や、男爵どころの話でない。一代の巨富を空しくして、数百の移民をサイパンの野に餓へしむるの悲運に落ちた。彼れは間もなく老ひの身を現地に運び、ただ見る荒涼たる夢の跡に、落つる涙を禁じ得なかつたといふ。⁽³⁷⁾

まさに、西村豪族は、「泡沫の如く消え」去ってしまった。だが、「糧道」を断たれた移民達はどうなったのか。「同じ頃、矢張りサイパンの野に、天日の暗きを嘆いているもう一つの移民群」⁽³⁸⁾があったのである。

「南洋殖産株式会社は、大正五年創立の南洋企業組合を、同年末に至つて改組したもので、資本金五十万円、全額払込である。渋沢同族会社を初め、川崎肇、岩崎清七、大橋新太郎、藤本雷太といった連中が株主であつた。同社がサイパンに製糖事業を起したのは、西村と同じく、矢張り大正六年のことだ（同社は比律賓のダバオの麻栽培に主力を注ぎ、資本金の半分以上をこれに注入したのであるが、これがうまく行かなくて致命傷を負つた）。サイパンに事業を着手するに際し、同社は小笠原地方から小作八十戸その他約三百人の移民を入れた。西村が島の南部を事業地としたに對し、殖産はこれを島の北部に取り、工場をカラベラに建て、事務所をタナバコといふところに設けた。事務所と工場の隔り三哩^{（三英里）}間に険嶮^{（けんけん）}な山があつた。即ち事務所連中は、毎日事務所に勢揃ひして、汗を拭き拭き、山道を辿つて工場に着く、もういい加減疲労してゐるから、一休み休んで、それから少しばかり工場の仕事を見てまた汗を拭き拭き山道を辿つて帰つて来るといふ勘定である。この間抜けさ加減が、この事業の前途を予約した。／製糖の成績は、西村より余程よかつた。西村がまだ製糖に着手しない大正七年に、既に三百樽からの砂糖を製造することが出来たのであるが、しかし西村が数百の労働者に、勘定の合はない賄をやつたのに對し、この殖産の社員どもは、勝手氣儘^{（勝手きまま）}に社金を使つた。西村の移民が社給の食量で豚を肥らせたのに對し、殖産の社員どもは、酒池肉林に豪遊した。殖産がいよいよいけなくなつた時、出納係の豪遊を見つけた本社が、人を派して現業地の金庫を調べさせたら、十六銭しかなかつたといふ。このような有様で、社運の榮へる筈がない。会社は先づダバオの事業で致命傷を負い、次でサイパンに於けるこの不始末をさらけ出して、大正九

7 南進開拓商社

明治二五（一八九二）年、「一屋商会」が「トラツク島」に支店を設けたが、同二八（一八九五）年に解散している。同二六（一八九三）年に「南洋貿易日益合名会社」が設立され、「ポナペ、トラツク、サイパン、グアム各島に支店を設置」した。同社は「三十九年、村山商会と合併、日益の二字を削つて南洋貿易株式会社」とな⁽²⁹⁾つた。

明治三十三年に「清水兄弟商会」設立（グアム島⁽³⁰⁾）、同四三年に「アガニヤ商会」が登場する。大正二（一九一三）年に「南洋興業合資会社」が生まれている。

第一次世界大戦直前の大正二年七月の時点において、南洋諸島でのわが国の商社の進出状況は、つぎのようであつた。

「南洋貿易株式会社	資本金十五万円	支店	サイパン、ポナペ、トラツク、ヤツプ
株式会社恒信社	資本金三万八千円	支店	パラオ
清水兄弟商会	資本金五万円	支店	グアム島
アガニヤ商会	資本金三万六千円	支店	グアム、サイパン
南洋興業合資会社	資本金五万円	支店準備中 ⁽³¹⁾	

これらの商社は、すべて貿易を目的としていた。恒信社は、「掘鋤、栽培に手をつけて見た」ともいわれる⁽³²⁾。なお、大正二年七月の時点での「在留邦人は西カロリン及びパラオ諸島に五十六人、マリアナ群島に五十一人」であつた⁽³³⁾。

8 「泡沫の如く消える」南方移民

サイパンを中心に、いわゆる南洋群島を、日本海軍が占領したのは、大正三（一九一四）年一〇月であった。同年一二月には、「臨時南洋群島防備隊司令部が、トラック島」に設置された。⁽³⁴⁾

「日本の財界は大戦の勃発（「第一次世界大戦…引用者補記」と共に、空前の活気を呈し、何をやつても儲かつて仕様がなかった。新占領地南洋群島は、忽ち投機の対象となつた」⁽³⁵⁾）のである。こうした好況は、大正九年までつづいた。同年、ベルサイユ条約により、この地域が日本の委任統治になる頃までの、短期間のことである。「泡沫の如く興つたものは、泡沫の如く消えざるを得ない」⁽³⁶⁾のであった。

ここではまず、「泡沫の如く興つたもの」を事例として掲げ、「泡沫の如く消え」た実態を語ることにしよう。「下関の豪家西村一家及び渋沢氏の愛婿尾高次郎を社長とする南洋殖産会社の製糖事業」をみてみよう。「下関の豪家西村惣四郎は、漁業を以て巨富を成した。大正五年、鯨の漁場発見のため、養子一松を南洋に派遣した。一松は船中、我が防備隊所属の一技手から新占領地に於ける糖業の有望なる話を聞いた。甘蔗の栽培、製糖工場の設備などその技手の説明で一通り諒解した。彼れは心中大いに動き、サイパン島に上つて島の状況を実査するとすぐに製糖事業の計画書を作り上げてトラック島に渡り、軍政庁本部に土地の貸下及び事業許可を出願した。彼れは下関に帰つて一族に諮った。時恰かも大戦のため、欧州の甜菜糖が全滅し、砂糖はこれから正に突然の暴騰期に入ろうとしている際であるから、西村一家は手を打つてこれに賛成した。もう鯨の漁場どころの話でない。六年二月、一族の出資をもつて、サイパン島に西村製糖所を設立した。事業地は同島タツポーチョー（標高四百メートルの山）の山裾に展開するチャランカの平野である。所要労働者は西村家漁業の本拠地たる山口、長

四七年の生涯中、二三年間を海外で生きたかれの業績は、つぎの一文に如実に示されている。

「当国の国是並に産業政策厳として存するに係らず、氏の真摯なる態度は、第二世ラジャを動かせるものと見へ、当初より千余英反を開墾し得ることになった。不幸にして氏はその翌年歿せるも、事業は鋭意遂行せられ、開墾終了後更に租借地を得て発展し、大正六年には日沙商會として鈴木商店系に依り資本金百万円の会社となつたが、大正九年には更に三万円に増資せられ、現在の払込二百万円に上つてゐる。創業以来經營比較的順調で、第二世ラジャ以来、現ラジャの格別な好意に依り、一九二三年には三千六百余英反に対し、九百九十九年の永代租借權すら破格に許可せらるゝに至つた。」

この資料に関して、入江寅次は、つぎのように解説している。なお、文中「護謨」とはゴムを意味する。

「事業は護謨栽培である。文中『当国の国是並に産業政策厳として存するに係らず』とあるのは、同国の産業は土人をして徐々に開発せしむるを国是とし、未開土人に不利益となる大資本家、大企業家の活動を制限してゐることである。土地、森林、礦物は一切国有だ。偶々真摯な資本家、企業家にこれが開発を許すとしても、決して所有權を与へず、またその利權を与ふるにしても、充分の戒心を怠らないのである。だから依岡が初めから一千余英反の開発を許されたといふのは、余く異例のことであつた。ラジャは国王である。」

6 高月一郎の実績

明治三九（一九〇六）年、高月一郎なる人物は、当時のフランス領インドシナへ渡り、開拓の道に踏み込んだ。高月は、大学卒業後、一時台灣總督府の役人をしていたのであつた。

高月は、「最初サイサル園を經營し、次で傍ら雜貨貿易を兼營し、苦辛努力の結果、相当の成功を収めたので、

更に河内から二十哩位離れたコンボイ農園を買収し、大々的に漆樹会社を設立するため、大正九年帰朝し、朝野有力者の共鳴するところとなり、愈々創立準備中、不幸病を得て逝去した。氏の開拓当初の苦心は到底想像も及ばぬ程である。台湾総督府からの退職金は全部事業資金に投下し、一隻の小舟を求めてアロン湾の真珠調査に取懸つたのであつたが、仏国官憲の厳しい監督の下で、非常に難渋したものであつた。⁽²⁷⁾

当時の農商務省は、高月の事業を支援していたようである。高月の友人井上雅二は、つぎのように語っている。「彼れは仏領印度支那に渡つて苦心致しました。初めは商売をして居つたのでありますが、二度目に帰りました時は、農商務大臣牧野伯等の賛成を得て仕事をやつたがどうしてもうまく行かぬ。何とかして仏領印度支那を開拓しなければならぬといふので、私共に一度行つて見て貰ひたいといふ空気が、農商務省あたりにあつた。そこで私は明治四十三年でありましたが、世界を廻つて帰りがけに、あそこに参りまして、高月君の農園を見て、帰朝後先輩に相談して金も二十万円ばかりであつたと思ひますが、とにかくこれで愈々やらうとする時、わが高月君は不治の病で倒れてしまつた。」

「海軍大佐加藤壮太郎の談に、『彼れはハノイの奥で、アタブ（纖維材料の草花類）の栽培に従事し、十二、三人の邦人を使つてゐた』とあり、明治四十三年外務省翻訳官補小林敬一郎の報告に、『海防市に仏人の援助によりて農作物を試作せる本邦人あり、小官がこの試作地を視察せるときは、恰も大豆、落花生、胡麻、馬鈴薯の種子を下したる所にて、其成績を究むるを得ざりしが、後に聞くところによれば、発芽後虫害を蒙り、結果は不良に終りたりとのことなり』——これが矢張り高月のことであらう。当時仏印度支那には約三百人の本邦人が在留した。しかしその大半は娘子軍であつたと記してゐる。

仏領印度支那開拓の先駆者としての高月の生涯は、必ず伝ふべきものがあらうと思ふけれど、著者は彼れについてこれ以上の材料を持たぬ。⁽²⁸⁾」

のである。

藤田敏郎は、つぎのように「娘子軍」を記録している。

「其の多くは誘拐されたものに係る。彼等姓名を偽称するが故に、外務省より取調べ帰国せしむべく命ぜらるゝ毎に多大の困難を感じたり。新嘉坡政府婦女保護者と協同し、漸く調製したるも、馬來半島、スマトラ、瓜哇等に至りては到底之を知るに由なし。偶々被誘拐者を物色し呼出すも、容易に実情を吐かざるを常とす。或時小西氏と誘拐者を呼出し取調ぶるに、曰く父母の許諾を得て香港に來り、更に当地に転航したるものなれば、誘拐されたるにあらずと主張す。或時會々其の挙動の不審なるを見れば主婦を帰宅せしめ、徐ろに尋問せしに、女泣いて誘拐され且可驚虐待に逢ひつゝある事情を告ぐ。

蓋し主婦の面前にて実情を告ぐれば、後に如何なる憂目に逢はんかと氣遣ひ、反対の言辭を言立つなり。依て再び主婦を呼び出し、早速帰国せしむべしを申渡す。主婦は紋切形の如く、千幾百弗を出じ抱へたる者なれば、六ヶ月の猶予を乞ふと歎願す。余之に歎願の請れなきを告げ、旅費の支出を命じ、次便にて長崎又は神戸に歸らしむることを命ず、新嘉坡の法律に、人を誘拐し且つ醜業を余儀なくする者には大なる刑罰あり、余より之を告発する時は直ちに罪人となるが故に、彼等之を恐れて承服するなり、斯くして主婦より旅費を支払はしめ、領事館より日本船の船長又は事務長に保護を依頼し、神戸又は長崎の官憲に引渡すなり。」

「娘子軍」の出身地は、「長崎、佐賀あたりが最も多く、福岡、広島、和歌山があり、偶には神戸とか大阪といふのもあつた。一口に長崎の女、若くは天草といふけれども、必ずしもそれに限つたことではない」のであつた。明治三五年、島村抱月はヨーロッパ旅行の途中、シンガポールに立ち寄り、「娘子軍」の実状に触れ、つぎのように書いてゐる。

「三月二十八日（三十五年）新嘉坡着上陸、見物、某旅館に日本料理の昼食を呼びたり。胡瓜もみのうまかりしこと、今に忘れず、例の馬來街といふのを過ぎる。怪げなる洋装して、髪は仏蘭西巻といふにかぶりたる日本婦

人の三人五人、店頭に卓を擁して頼杖せるものあり、居眠りせるものあり。一行の人々車上より指顧して、国辱なりと罵るものもあれば、国益なりと笑ふものあり。さすがに得堪へでか、顔を背くる女ありき。彼等が一代を思ふに、恋にあらず、慾にあらず、頼に血あり、顔に嬌羞ある間は、彼等ただ怨みに熱き涙をや命としけん。その涙涸れはててこそ眼元に浮ぶ今の笑は死よりも冷やか、泣くべき故郷を雲と見て身は浪枕の、揺れつ揺れつ、おかしう暮す月日なり。さるにてもこの地に上陸せる女兒等が、やがて読むべき身の因果経かと哀し⁽²¹⁾。

だが、「娘子軍」⁽²²⁾からゆきさんたちは、「もう泣くだけ泣いた」のであった。「何処で死ぬのも同じすバイ」、
「国へ帰れば×××と笑はれるデスもん」と、その落ち込んだ境遇に徹し切ってしまった。

5 依岡省三の南進への執念

「依岡省三は、明治二十四年、軍艦比叟に便乗して、グアム島、ニュー・ブリテン島、濠洲、ニュー・カレドニヤ、ズールー島方面を見て歩いた一行の中の一人である。彼れは土佐の人、明治二十一年、二十四歳にして小笠原群島中の火山列島を探查、同島を帝国の版図に編入せらるべきを当局に進言し、これを容れられたといふから、少壮既に図南の壮心、やみ難きものがあつたのであらう⁽²³⁾」。

日沙商会『南進のさがけ』において、かれの経歴はつぎのように紹介されている。

「三十一年ハワイに近き無人島ミッドウェイに航行してこれを踏査し、翌年琉球の大本島を開発して製糖事業を創始、更にグアム島に航して開墾、次でラサ島に渡り、種々企画上の調査をなし、四十三年蘭領ピンタン島に赴いて酋長との共同開墾の約を結び、次でボルネオのサラワツク王国に渡り、土地租借の大綱を定め帰朝、偶々風土病の冒すところとなり、四十四年一月、京都帝大病院に逝く、年四十七⁽²⁴⁾」。

その頃の在留日本人といへば、大部分娘子軍であつたが、この女達に、つきまとつてゐる男も相当にゐた。真面目な商業者は極く少なかつた。在留日本人は私達の苦闘を国辱だと批難した。箱を列べて、アンペラを布いて、その上に起居してゐたのだから、支那人にも劣ると見たのかも知れない。しかし私は行商が目的なのであつて、実力の増大するに従つて小売商、卸商、物産、農園といふ風に伸びてゆくことを念願した。そしてそのためにはどんな批難も、嘲笑もこれを甘受する腹をきめてゐた。⁽¹²⁾

4 「娘子軍」からゆきさんの進出

「からゆきさん」といへば、天草島あたりの女子で南方に出稼ぎに行く者たちをいう。「からゆきさん」は、天草島周辺の女子だけに限定されたとは思えない。

藤田敏郎の『海外在勤四半世紀の回顧』によれば、「明治二十九、三十年頃新嘉坡在留日本人は約千人にして、内九百人は女子にして、其の九割九分は醜業婦⁽¹³⁾なり」とある。

「新嘉坡」はシンガポールは、まさに日本人の南洋進出の門戸であつた。また明治期のアジア移住地の中心であつたといつてもよい。しかし、かれらの根幹をなした者は、「醜業婦」⁽¹³⁾「娘子軍」だったのである。

「古老に聞くに、新嘉坡に足を印したる日本娘子軍の第一人は、おヤスという美人であつた。彼等は初めから醜業婦として渡航したのではなかつた。彼女が風濤万里を物ともせず、遙々見知らぬ別天地に來た時には、まだ一人の日本男子を見なかつた。おヤスは即ち緑の黒髪を根本より切り落し、ボーイに変装して外人のホテルに住込み、その愛嬌と忠勤とはいたく主人の愛するところとなつた。その内多少の貯へも出来て事情にも通ずるに至りし時、二三の日本密航者の來りて、例の醜業を営み、非常の成功を収むるを見、彼女も遂にその群に投じたと伝

へられてゐる。是等先驅者の新嘉坡に渡来したのは、明治三十四年頃であつたといふ。さうする中、十四五年頃には五六十人の醜業婦を数ふるに至り、二十年頃には男女在留者百名以上となつた⁽¹⁴⁾。

塩見平之助は『南洋発展』において、つぎのように指摘している。「明治初年、横浜より日本女子を妻とせる一英人の、新嘉坡に移転して幾何もなく死去せしものあり、其妻男装して同地のヨーロッパホテルのボーイ稼ぎに従事せり。容色の衰へたりと謂ふにもあらず。遂に人に誘はれ、陋巷に賤業を始めたもの、実に南洋に於ける日本賤業の祖師様なりと伝へり」⁽¹⁵⁾。

また、一番ヶ瀬住雄は、つぎのように語っている。

「娘子軍の始めは明治四年横浜の人で、お豊さんという人がシンガポールに上陸したのが始めてであると云われて居ります。お豊さんは後に馬來人と結婚し孫、曾孫が出来ました。お豊さんは今も存命で、在留邦人間にカンボンカンボンのお婆さんと云われて居ります。カンボンとは馬來語で村という意味で、このお婆さんが村から村へ孫曾孫の家を廻つて歩く処から、カンボンカンボンのお婆さんという言葉が出たのであります。当時の婦人で、今一人馬來人と結婚してシンガポールに於て劇場を経営してゐる人が存命して居ります。明治十三年頃にはシンガポールに於ける約十人の娘子軍がアダップ屋根（ニツパといふ椰子の葉で葺いたもの）の小屋で働いて居つたといふことです」⁽¹⁶⁾。

いづれにせよ、明治三四（一九〇一）年ごろから、シンガポールに「娘子軍」が急増し、そこから四方へ散つたのである。これより先、明治二八（一八九五）年にシヤム（今日のタイ）在留邦人が、七八名おり、内二四名が「娘子軍」であつたという記録もみられる⁽¹⁷⁾。

「加藤壯太郎（海軍大佐）の話によると、仏領印度支那で、明治十八年と記された日本女子の墓を見たといふ。木下クニがボルネオに渡つたのが矢張十八年のことである。クニのことは相当に知られてゐる」⁽¹⁸⁾。

こうして、シンガポールをはじめ、インド、オーストラリア、ニューギニア方面にまで、日本女性が氾濫した

行商から身を固めて、さゝやかな商売を始めたものもあり、またさういう経験を経ざる邦人商店も出現した。特に新嘉坡方面には、娘子軍（後述…引用者）の活躍に従つて、早くから少数邦商の出現があつた……（中略…引用者）……。しかしこれら邦商の大部分は、支那商から日本品を仕入れて、支那人及び土人に売つた。従つて支那人のポイコットの影響は深刻であつた。この年、広東からバタビアに渡つた竹井十郎は、同地方に於けるさゝやかな邦商陣を代表して、この地方のポイコットの主魁を訪問して外交交渉を試みたり、バタビヤ市の蘭字新聞に論文を掲載して、一般支那人に警告したりして奮闘した。当時まだ同地には我が領事館の設置もなかつたのである。

このやうな事件が、各地の邦人行商に幸しなかつたことは勿論である。支那人のポイコットは、ほんの短期間で終つたけれども、これがため支那人の邦人行商に対する好意も下火になり、加ふるに行商者のポロイ儲け方もバレて来たので、土民もこれを手放しで歓迎するやうなことがなくなつてしまつた。

しかし邦人行商は、依然各地に活躍した。盛々薬館（オチニの薬）の丹澤善利が、数名の青年をつれて南洋に渡つたのが、明治四十一年、二年の頃であり、その薬が南洋各地に普及したのは、その後のことであつた。

南洋各地に於ける邦人行商の活躍中、その最も光彩を放つものは、堤林数衛とその一統の奮闘である。彼れが十六名の青年を率ひて瓜哇に乗込んだのは、明治四十年のことであるが爾後年々多数の青年を瓜哇に迎へ、遂に瓜哇全土に三十有余の支店を持つに至る経路などは儒夫をして起たしむるものがあるのである。彼れの回顧談に、私が十六人の青年を連れて、瓜哇に渡つたのは、明治四十年のことである。私はこの十六人の青年と一緒に、行商をやりながら瓜哇に渡つた。東京の銀座のまん中から車を引出して、横浜から船に乗り、神戸、上海、香港、新嘉坡などに上陸、僅かな時間を利用して商売をやつて行つた。

私達の商品は、行李にして三百個からあつた。この荷物の積降しを他人に委せたら、それだけでも少なからぬ経費を要する。骨は折れたがこれも自分達でやり、また成る丈け宿屋に止まらず、船の中に寝ることにした。私達の一日の費用は、一切合切で一人三十五銭宛であつた。初めからさういふ苦行は、青年達に取つて容易な

ことではなかつたであらうが、しかし一同はよくそれを堪え忍んで呉れた。尤も出発前の希望者は三十五人程あつたのだが、それを厳選したのである。

私は明治三十一年以後、数年間を瓜哇で暮した。郭春秧の許に起居し、郭と共に本邦勢力の南方進展のために微力を傾けてゐた。郭は支那の福建出身の台灣籍民で、台灣、廈門、香港、新嘉坡、瓜哇等を舞台に活躍した茶商である。児玉將軍に愛せられ、後また明石將軍に用ひられて、両將軍の台灣経営、及びこの台灣を足場としての本邦勢力の南方進展のために寄与するところ絶大であつた。原内閣當時勲五等に叙せられ、関東大震災後、勲四等に陞叙、一昨年を以て歿した。関東大震災の時には三十万円位投げ出したと記憶する。

私はこの郭のもとに於ける数年間の瓜哇生活中、つらつら南洋の支那人の生活を見た。印度人、瓜哇人、歐州人——さういふものの生活を見、事業を見、性格を見た。支那人の生活、及び事業は収入の限度できまる。どんな少ない収入でも、それを越へた支出をしない。事業も生活も、収入の増大を待つて、拡張し、向上させる。支那人の成功の基がこゝにある。

印度人個々の力は微弱である。しかし彼等はその力を集合して強化することを知つてゐる。歐州人は本国の力を背景とし、文明の機關を巧みに利用することによつて成功する。品物を売るにしても、みな正札つきで簡單明瞭にやる。

然らば日本人は如何。私は以上の各人種の特質を、全部わが身に移し、これを充分に發揮し得るものは日本人であると思つた。そして私は自らこれを実行して見やうと思つた。青年十六名を率ゐての私の渡航は、即ちこの信条に發したことである。

一同スマランに到着き、さて東京銀座出發以来の旅費と、売上とを計算して見ると、差引百五十円ばかりの儲けであつた。つまり利益の中から船賃その他を差引いても、なほ百五十円の儲けがあつた訳だ。私はそれから満四ヶ年といふもの、足を棒にして瓜哇全土を歩いた。どんな小さな部落でも足跡の及ばぬところはなかつた。

五六回も通つた。最後の日に大隈の執事、謂ひて曰く、誠に相済まなかつた。紹介状が遅れたのは、実はかういふ次第なのだ。貴下に紹介状を渡すことに反対したものがあつた、矢張り執事の一人だが、そのものゝ反対といふのは、どこの馬の骨だか判らぬものに、矢鱈に紹介状を書くのはよろしくないといふのである。一つはこの頃、さういふものが多いからでもあるが、しかし伯爵はさういふ理由で貴下の手に未だ紹介状が渡つてゐないことを知ると、非常に怒つて、即刻書け、お前は南洋といふところが、日本とどういふ関係にあるか知るまい。南洋の事情を詳しく知つて置くことは、日本のために大切なことだ。ところが金持は行かず、老人は行かず、一般青年もまたこれに心を向けない。偶々こゝに勇氣鬱勃たる青年の現はれるあり、大いに歓迎してこれを援けなければならぬではないか。郵船会社は国家から多額の補助を受けてゐる。有為の青年を無賃で運べないといふ理由は断じてない。いま直ぐに書いてやれ——、かういふ事情で実はけふ貴下の来るのを待つてゐた次第である。

勝海舟も、副島を激励した。⁽¹⁰⁾」

3 売薬行商による南進

日露戦争以前（明治三十七年以前）において、日本人の「南洋進出」は、きわめて微々たるものであつた。入江寅次によれば、「明治三十六、七兩年中、本邦移民会社が比律賓に輸送した邦人は、三千九十六人に達し、これに兩年中の自由渡航者二千二百余人を加へると、五千三百人を越へる」といふ。

しかし、日露戦争当時から、様相は一変するのであつた。

「日露戦争当時から、邦人行商の活動が開始され、戦争が終つて内外の局面が安定して来ると、更に馬來半島に於ける護謨企業への進出となり、邦人南進の氣運は勃然として湧いて来た。無論戦後、大陸へ向つてするものゝ

勢ひはこの氣運に幾倍した。しかもその多くは国策の作用であり、戦勝心理の發現に過ぎなかつた。南進の氣運の勃興は、その反射的作用でなくて、寧ろその作用の拡大だと見てよからう。」

「日露戦争が勃発し、日本軍の連戦連勝の報が響き渡ると、東洋の有色人種の血は躍つた。南洋の支那人（日中国人…引用者）は、いたるところで日本人を歓迎した。遂に日本軍の大勝に歸し、戦局の終るを見ると、彼等の歓迎の仕方はまた大変なものであつた。土民の心も躍つた。日本人は偉いもんだなと感心した。行商の主力部隊は売薬である。馬來半島、瓜哇、スマトラ、ボルネオの方にまで、この薬屋が伸びて行つた。土民も支那人も、この薬屋からいふなり放題で薬を買つた。

土民はこの売薬行商をもつて、医術の心得もあるものと思つた。薬屋の方でも如何にもさうである如く振舞つて、ひどいになると聴心器、検温器などを持つて歩いて、この病氣にはこの薬と、いゝ加減にやつて歩いた。旅順、奉天戦争から歸つたばかり、胸に従軍徽章や赤十字徽章をブラ下げて、鼻下にヒゲを生やし『この薬は日本の陸軍省で特製し、こん度の戦争に用ひたもので、日本がロシアに勝つたのは、この靈藥あつたがためだ』といはれて見れば、土人も支那人も、さうかと思つた。支那商も、土民の村長も、よろこんで彼等に一夜の宿を呈供した。

美術研究のため欧州へ行く筈の一青年が、途中新嘉坡あたりで、南洋行商のペラ棒に儲かる話を聞き、目的を変更して瓜哇に渡り、売薬行商を始めて見ると、矢張り面白い程儲かつた。彼れはその後、美術研究など思ひ出す機会もなく、瓜哇に落付いて商売に励んだ。いま瓜哇邦商の元老といはれ、且つ同地邦商の成功者の一人といはれる、小川利八郎がそれである。彼れが前記の如くして瓜哇に渡つたのは、明治三十八年であつた。

しかし南洋に於ける売薬行商の黄金時代といふのは、そう永く続かなかつた。明治四十一年、日支間に辰丸事件といふのが起り、これが南洋に波及して、各地在留支那人は日本品に対するポイコットを敢行した。これが南洋支那人の日本品に対するポイコットのそもその始めである。このポイコットは猛烈であつた。当時既に売薬

両洋の間を航する諸船舶に対しては、此馬來半島は非常の障害物に有之候、今一箇の船舶をして仮りに東面なる仏領西貢より英領印度の錫倫に航するものとせば、必ず此赤道近き新嘉坡迄航出せざるを得ず、即ち北緯十度（西貢）より一先づ一度二十分（新嘉坡）に航し、又転じて北に向ひ、凡そ六度なる錫倫に北上せざるべからず、抑も此迂廻の航路を採る所以は、即ち馬來半島なる長条形の地脈北より来りて南に向ひ、東西両洋の中間に立て赤道近く迄突出すればなり。扱若し右のクラー地峽近傍に我が帝國人民を移住せしめ、此大荒漠の地を占領したる後、機に乗じてクラー地峽左右の好位置を測り一条の運河を開鑿したらんには、我帝國の馬來半島に於ける領地は坐して東西両洋の商權を占むるは之を掌に指すが如し。」

当時の外相榎本武揚は、斉藤幹の願いを入れて、明治二六（一八九三）年一〇月に調査を実施させている。調査旅行の光景は、大要つぎのようであつた。

「斉藤のこの旅行には、肥後の人、津田静一が同行した。津田は早くから南洋發展の雄圖を懷き、この年初めて新嘉坡に渡つたのであるが、偶々斉藤の旅行の計画あるを聞き、冀ふてこれに従つたものである。津田の実弟熊谷直亮は当時シャムにあり、邦人のための移住地建設の計画を抱いて、画策大いに努めてゐた。この熊谷が、當時日本の友人に宛てた手紙などは、意氣の旺なるものがあつて面白い。

小生着暹以来、既に内地に探查する三度、或は南山を越え、北河を渡り、蛮地到处、唯々辛楚と艱難とのみ、実に小生の頭上には毒蛇あり、小生の脚下には猛虎あり、小生の呼吸中にはマラリヤあり、途に当れる鯨鰐一たび躍れば人をして忽ち痛死せしむ。大丈夫雄圖を万里の外に籌らす、また党派競争の比にあらず、併し金さへあればスタンレーの暗黒亜弗利加探検も屁にもあらざる事かと存候。

今春は早々北地の遊歴を致し、遂に哀州の古都及び日本村の旧跡を訪ひ申候。日本村の旧跡は盤谷を距る一百余里、哀州の城外にあり、老樹扶疎、冷煙荒野を掠め、今や唯だ其名あるのみ、即ち一木標を樹て『日本村の旧趾』と大書し、又裏に『明治二十七年一月二十一日大日本熊谷直亮建之』と記し、野花冷水、聊か以て山田

仁左衛門の英魂を弔ひ申候、時恰も月明に有之、四辺の風景は殊更三百年前の偉業を追想せしめ、転た感慨の至りに有之申候。一詩あり

絶代雄国長不存 遠人好效弔英魂

千秋唯有古都月 乱草荒烟日本村

尚植民事業に就ては、已に魚屯潭より哀州を経て沙羅保利に亘る湄南河の右岸、土地豊饒、水陸至便の地所二里四方を借受くる事に農商務省と特約最早相整ひ、已に植民地第一駐留場と定めたる殺石塩より湄南迄の所は受取申候、要するに暹羅の山河は、頻りに日本人の渡航を相待ち居候まゝ些し彈丸黒子の競争を罷めて波を越え、海を渉るの壮図に御着手被成候ては如何、小生は蜜酒を市場に買ひ、諸君の御来暹を相待可申、先は是迄草々如此に御座候

明治二十七年二月三日。」

明治二十七年以降の動向は、つぎのようであつた。

「二十七年五月には、鈴木錠蔵が日本吉佐移民会社の佐久間貞一の旨を受けてシヤム視察、大井憲太郎が、数名の部下を伴つて、新嘉坡に渡つたのもこの頃だ。彼れは支那人と提携して、貿易に従事したのであるが、もとより政界の曲物、気焰ばかり上つて事業の方はうまく行かず、幾何ならずして姿を消したが、数名の部下には落付いて、生業に従事するものがあつた。副島八十六が、船賃もなく、小遣錢もなく、持前の剛情一つで新嘉坡に渡つたのは、三十年三月のことだ。彼れは大隈候（当時伯）の紹介で、日本郵船のボンベイ通ひの貨物船（広島丸）に、無賃乗船を許されたのであるが、この間に大隈の南洋に対する見識が窺はれて面白い。

副島は大隈の郷里佐賀の出身だが、無名の青年のことだから、勿論一面識もない。先づ十五六回通つて初めて会ひ、書物から得た南洋知識をバラ撒くと、大隈はひどく感心したらしく、よろしい、船の方を心配しやう。紹介状を書いて置くから後で取りに來いといふ。その後いくど足を運んでも、紹介状なるものを呉れない。また十

(8) 図に入る可き機があつた。然も当時閣臣の小志弱行の為に果す能はずして止んだ、今にして之を終天の恨事とする。」

とはいえ、入江寅次の指摘しているように、

「マリヤナ、カロリン両群島買収の建議があつた頃、政府がこれに手をつけなかつたのは、単に領土獲得に就いての熱意が足りなかつたばかりでなく、これに手を出そうにも、勝手が分らなかつたのであらう。買収費の工面も困難であつたのだらう。当時の政府は南方の形勢如何といふやうなことには、大して力瘤を入れてゐなかつた。従つてこの方面に対する知識といふものも、案外幼稚であつたやうだ。」と評価すべきであらう。

ここで先覺者の動向を跡づけてみよう。

「明治二十二年には、菅沼貞風がマニラに渡り、二十三年には田口卯吉等の南島商会設立及びその活動となり、二十五年岩本千綱、石橋禹三郎等の渡邉(ニシヤムニタイニ引用者)、佐野常樹の比律賓(ニフィリピンニ引用者)調査、二十六年には新嘉坡(ニシンガポールニ引用者)駐在二等領事齊藤幹の馬來(ニマライニ引用者)半島南部西海岸一帯に亘る大調査が行はれた。齊藤は役人だが、この調査は自分の見識と念願により、特に乞ふて実施したのである。」
「二十五年駐独公使青木周蔵が、その赴任の途次新嘉坡に寄港し、齊藤を訪ねて海峡植民地の事情、及び馬來半島に於ける邦人今後の發展策如何につき、齊藤の見るところを叩いた。齊藤は二年前から新嘉坡に駐在したことで、よく語つた。特に邦人今後の發展策如何の一条になると、立論なかなか正大で、青木も非常に共鳴した。齊藤曰く、今頃自分のやうな議論をしても、人は相手にして呉れぬだらう。しかし自分は真剣に、そうでなければならぬと考へてゐる。いづれ帰朝の節は上司にも話して見る積りだが——。青木曰く、帰朝の節などといはずに、いまずぐ外務大臣に願ひ出て、調査旅行の許可を得てはどうか。榎本外相も今丁度、邦人の海外發展のため、適当な植民候補地を得ることに意を注いでゐるのだ。それは急いだ方がいゝと。齊藤は然らばとあつて、私信を以て榎本外相に調査旅行の許可願ひを出した。五月十五日(二十五年)付である。齊藤はその私信の中に、

青木との問答を逐一書いてゐる。」

問答は、つぎのようである。ここに、移住地開拓の意欲が強烈にみられ、当時の先覚者の意図も示されている。「斉藤 先きに申述候は、総て馬来半島中部より以南に掛け英國領地現今の大勢に有之候共、此半島中部以北の地即ち暹羅國領と称する彼の荒漠未開の大野は、クラー地峽より東部海岸に沿ひケランタン部を経てツリンガノ一部に至る間、其面積蓋し南部の英領地に譲らず、然れども全部実に未だ開けざる蛮域にして、詳細の事情を知ること出来不申、然し此地東面の海岸パターンと申す所有之、是は千八百十三年頃に於て、カビテン・ヒボン氏始めて此半島を西面より東面に掛け巡視したる際、右パターンに上陸し、茲に仮根拠地を定め、而して始めて暹羅國に航せしといふ事歴あり、又千八百二十六年に方り英國と暹羅國との間に締結したる条約に於て、右ケランタン部及びツリンガノ一部の獨立を認定せしことあり、其外此北部は曾て暹羅國の征服するところとなつて、現今同國の保護の下に立ち居れるも、是れ唯だ其名あるのみにして、実は統轄なき蛮民の部落たるに過ぎ不申候、乍去馬来半島の地形より推量すれば、此暹羅領即ち北部の地は無論耕作を施すに堪え、又金鉾山、錫鉾山多き事疑ひなき義と存じ候右の次第に付、幹竊に考ふるに若し我政府に於て此荒漠の大野に我帝國人民を移し、開墾耕作の二業に従事せしめば、後來其利益蓋し鮮少のものには無之義に候。乍然当地方は尚ほ實に蛮域にして内地の視察は勿論、海外に沿ひたる地方の旅行と雖も、容易にその目的を達すること能はず、故に是等地方に移民することは最初の取調に就き多少の入費と人数を要する次第に候。

幹が愚考にては、可相成は我が軍艦一隻巡洋の機会を以て当新嘉坡に寄航為致、夫より当半島の東部海岸に沿ひ暹羅國に至る海面の土地を視察し、若し適當の住地あらば暹羅政府に請ひ、我人民の移住を承認せしめ、之を根拠として漸を以て事を謀らば、将来我東亞に於ける位地及び勢力を振張するの一助たるべしと思惟す。

公使 誠に然り、猶詳説ありや

斉藤 請ふ更に一步を進めて此地方後來の大勢を申上度は、即ちクラー地峽の事に有之候、御承知之通只今東西

二月に、述懐して、つぎのように語っている。

「今を去る十六七年前、我が小笠原島の島統きとも称すべき西班牙領の、マリアナ群島及びカロライン群島を買上げ、尚ほ進んでニューギニアの一部に植民を試みんとする意見を建議した人がありましたが行はれなかつた由その後ボルネオの北海岸にして、我九州地方と伯仲すべきサバー（サラワクか）と称する土人を一百五十万円にて、その領主たるウエルネー及びスルーの酋長より譲り受け得べき機会がありまして、時の内閣に謀りました人があつたが不幸にしてその言は用ひられなだと申します。」

文面は、あたかも「建議」を榎本以外の人物が提言したかのように残されているが、榎本自身の建議であつたとみてよい。また、明治九年一月七日付の書簡にはつぎのように書かれている。

「右土族等いづれも愚痴にて方向を失ひたるものに可有之に付、嚴重の罪を申付ずして巨魁といへども死一等を怒し、兼て手前建言致置候南洋諸島へ移され候様、実は今便にて岩倉内府迄一筆差上申置候。」

右の文中の「右土族」とは「神風連及び前原一誠等の変に関係せるもの」である。

明治二四年二月一二日付で榎本は、南進を実現するための「南洋商会」のひとつ「恒信社」社長横尾東作宅に一通の書簡を送っている。

「懷遠丸は十二月二十五日横浜出帆後、同三十一日午前小笠原島二見港に無事安着、薪水その他用意相済し、一月七日同港出帆、風順に船早く、同十五日マリアナ群島中ガム（リグアム…引用者）に安着、一同壮健、同所より不日直ちにカロリン群島に出帆致す可き趣申越、商況は別に不申越候得共、目的は素より該島にあらざれば報告なきも無理ならず、右の音信は以外に早く相届き候、何れ野中万助氏より原信の写御廻し可申候得共先は不取敢小子より右の趣及御通知候也。」

榎本武揚の南進への熱情は、強烈なものであつたことがうかがい知れる。恒信社横尾東作の所有である「懷遠丸」は、こうして榎本の南洋進出論を生みだした。同船長加藤末吉に横尾東作は、つぎの手紙を送っている。

「此般の輸入、諸子分骨^{ふんこつがいしん}蠱身の結果、大に株主の喜悅を表し、益々社務を拡張し、二三航海の後、船舶の数も増加することに決す。社運果して盛大の時は、諸子亦大に満足を得て、是迄の辛酸を海上に一洗され、且隨意株主となる事も自由なり。諸子尚奮発して社運の盛大を計画せられよ。是遍^{へん}に諸子に希望す。予の今日より断言する事如前陳、諸子夫れ勉めよ。」

七〇トンの帆船「懷遠丸」は、日本の製品を積み込み、南洋諸島の原地人と交易し、南洋諸島の産物を入手して帰国したのであらう。

イギリスがフィジー諸島を獲得したのは、明治七年、フランスがタヒチ島とその周辺諸島を領したのは明治一〇年、ドイツがマーシャル群島を入手したのは明治一八年であり、同年にイギリス・ドイツ・オランダ三国がニューギニアを分割している。

こうした国際情勢のなかで、わが国の南進は着々と進展していった。

2 先覚者の活躍

地理学者でジャーナリストであった志賀重昂（一八六三—一九二七）は、明治二八（一八九五）年に、つぎのような回顧談を語っている。「先年ニューヘブリデス群島を占領するが宜いだらうといふことを、同島在留の英人より海軍大臣、外務大臣に言つて来た。拙者にも同様のことを言つて来ました。」

また、徳富蘆花の実兄徳富蘇峰（一八六三—一九五七）は、『近世日本国民史・鎖国篇』において、つぎのように記している。

「青木氏（＝子爵青木周蔵…引用者補記）曰く、予の欧洲にあるや、南洋の某島、僅々数百万円にて、我が帝国の版

I 南進への眼

1 榎本武揚と南進論

オランダ留学後、江戸幕府の海軍奉行を務め、明治維新後に海軍中将・海軍卿として活躍した榎本武揚（一八三六—一九〇八）は、日本の南進論を唱えた最初の人物かと思われる。榎本は、明治七（一八七四）年に当時の「露国」公使に任命され、同一年までロシアに在勤したが、同地在住中の明治九年九月一二日付の自宅宛の書簡に、つぎのようにしるしている。

「先使御送被下候小笠原写真を一冊の手折本と為し、其表紙に手製のカルファニ仕掛けにて『日本領南洋群島之真景小笠原之部榎本所蔵』といふ文字を銅版にして取附候積りにて、銅版は既に出来上り申候、手前は小笠原島より尚以南にあるラドローネン諸島をもイスパニヤより買入れて、日本領と為す事を先頃建言し、当節は朝廷に於て評議最中の由、先達而寺島より申越せり。是は種々込入たる見込有之事にて一寸は申上兼候、右の次第につき小笠原島等の写真は別して楽しみにながめ申候。」

右の書簡にみられる「ラドローネン諸島」とは、どこを指すのであろうか。榎本は、明治二六（一八九三）年

凡例

- 一、表記は原則として原典の通りとしたが、旧漢字は概ね当用漢字に変えた。
- 一、明らかに誤植と思われるもののみは訂正したが、疑いがあると思われるものは原典の通りとし、判断不可能な箇所は□で表示した。
- 一、見出しはすべて編者がつけたものである。
- 一、出典は註として巻末に一括して掲載した。
- 一、編者の補足説明は、本文中にポイントを落して挿入した。

今野 敏彦
藤崎 康夫
編著

移民史 II アジア・オセアニア編

VI

マライ半島移民

- 1 マライ半島移民候補地——185
- 2 マライ半島移民候補地調査・開拓・失敗——186
- 3 ジョホール河沿岸のゴム園——189
- 4 ゴム園の経営法——192
- 5 「娘子軍」の追放——193
- 6 からゆきさんの墓が哭く——195

VII

タイ移民

- 1 「シャム殖民会社」の設立——199
- 2 岩本千綱作成の「契約書」の悲劇——201
- 3 移民への誘惑とブカノン鉱山労働者への転身——202
- 4 岩本千綱の苦痛と宮崎滔天の登場——204
- 5 滔天の移民団——206
- 6 移民団の悲劇——208

VIII

ニューカレドニア、フィジー島、ガードルupp島の移民、その他

- 1 ニューカレドニア労働移民の労働条件——211
- 2 日本人労働移民の待遇と暴動——212
- 3 ニューカレドニア移民の変遷——214

4	ニューカレドニア日系移民の実態	218
5	フィジー島およびガドルップ島移民	221
6	グアム島農作のための契約移民	224
7	太平洋島移民	224
増補	インドネシア移民とフィリピン残留孤児	

1	インドネシア移民	227
2	フィリピン残留孤児問題	237
	〈資料〉フィリピン残留孤児の今後の身分確認手続き	242

註	248
---	-----

関係地図	256
------	-----

アジア・オセアニア移民年譜	261
---------------	-----

ダバオ邦人開拓史年代表	270
-------------	-----

移民者数	274
------	-----

解説	277
----	-----

6	古川拓殖会社の創立と事業	84
7	日本人経営の農業会社の乱立	85
8	日系ダバオ移民の伸長とアメリカの警戒	87
9	「南洋拓殖株式会社」	90
10	第一次ダバオ土地問題	93
11	第二次ダバオ土地問題	95
12	第三次ダバオ土地問題	100
13	第四次ダバオ土地問題	102
14	ダバオ土地問題の要約	112
15	日系ダバオ二世の教育問題(1) 開拓当初の状況	114
16	日系ダバオ二世の教育問題(2) 一九三〇年代の小学校の設立	116
17	日系ダバオ二世の教育問題(3) 二世教育への情熱	119
18	日系ダバオ二世の教育問題(4) 早熟・混血・教師	122
IV	フィリピン移民(Ⅲ) 太平洋戦争と移民	127
1	ダバオ移民二世の証言(1) 西村テル子	127
2	ダバオ移民二世の証言(2) 萩尾行利	137
3	開戦前夜の寸描	141
4	日本軍の奇襲上陸	144
5	日系ダバオ移民の犠牲者	145

V

オーストラリア移民

- 6 勝利を信じる日系ダバオ移民——147
- 7 アメリカ軍への罵声——148
- 8 東條内閣の青木大東亜大臣のダバオ訪問——151
- 9 “教育報国”の幻想——153
- 10 古川義三の“九死に一生”の奇遇——154
- 11 “勤労報国隊”——155
- 12 日系ダバオ移民への鼓舞——156
- 13 日系ダバオ二世の学童疎開——157
- 14 全日系ダバオ移民“軍属”となる——158
- オーストラリア移民……………165
- 1 明治初期の日本人移民の誘致——165
- 2 兼松房次郎の活躍——日豪貿易の先駆者——167
- 3 明治二〇年代のシドニーの日系移民——169
- 4 クインズランド行き契約移民——171
- 5 木曜島移民——174
- 6 木曜島移民の先駆者たち——175
- 7 木曜島移民と金融者との契約書——177
- 8 白豪主義と移民制限法——178
- 9 移民制限法実施後の日系オーストラリア移民——182

緒言

I

凡例

12

I 南進への眼

15

1 榎本武揚と南進論

15

2 先覚者の活躍

17

3 売薬行商による南進

22

4 「娘子軍」IIからゆきさんの進出

26

5 依岡省三の南進への執念

29

6 高月一郎の実績

30

7 南進開拓商社

32

8 「泡沫の如く消える」南方移民

33

9 松江春次の決意——「再建移民三千人」の動員

36

10 松江春次の忍苦と確信

38

II フィリピン移民(I)

43

1 菅沼貞風とマニラ

43

2 田口卯吉の活動

45

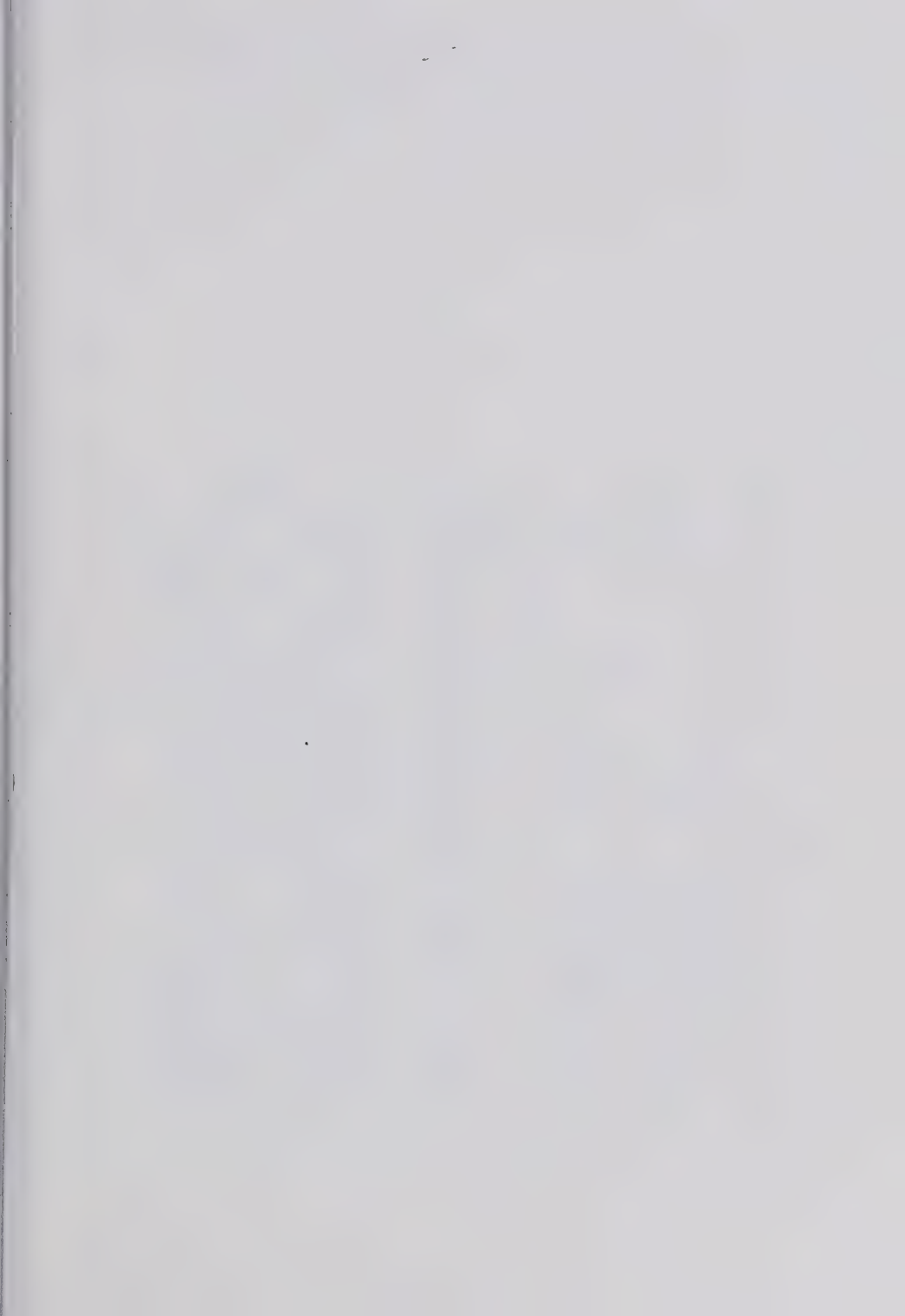
3 「実践商船隊学校」の設立建議

47

III

フィリピン移民(Ⅱ)

4	ベンゲット移民前史(1)	48
5	ベンゲット移民前史(2)	51
6	ベンゲット移民前の日本人の数	52
7	ベンゲットへの日本人移民の誘致の過程	54
8	日本人移民の募集要項	56
9	ベンゲットへの日本人移民	57
10	移民争奪戦の様相	58
11	ベンゲット日系移民の道路労働の実態	59
12	日本人移民の苦悩(1)	60
13	日本人移民の苦悩(2)	61
14	日本人移民の苦悩(3)	66
15	ベンゲット道路の完成と日系移民	68
16	ベンゲットからダバオへ	70
1	ダバオ移民の起こり	73
2	ダバオ移民の労働実態	76
3	初期ダバオ移民の渡航と分布状態	78
4	太田恭三郎と初期日本人農業会社	80
5	ダバオの景観(第二次世界大戦終結前)	82



移民史

Ⅱ アジア・オセアニア編

目次

外在留邦人約三〇万名のうち、およそ七・五パーセントが、「からゆき」(唐行の字があてられる)であったともいわれる。

いずれにせよ、アジア各地で最下層の労働に従事する人びとが、移動をはじめたのである。明治政府の「南進」政策は、きわめて雑駁なものであった。だが、日清戦争の勝利と日露戦争の勝利を過信した権力者は、「南進」への夢を抱いた。

本書は、アジアの日本人移民の姿を、復元したものである。当時の状況を知る人びとの証言をもとに、またアジア各地で発刊された邦人向けの刊行物によって、アジアの移民を復元することに努めた。ただし、台湾・朝鮮・千島・南樺太・中国東北(満州)への日本人労働力の移住は含まれていない。敗戦当時、中国東北への農業移民は約二七万、また千島・南樺太には約二八万の移住者があった。これらの移民については、別個に説明されなければならない。

幕末から明治初年にかけての時代は、欧米から数多くの考えが導入された。それらをもとに「亜細亜」Ⅱアジアの世界が展望され、欧米のアジア侵入に対抗した「興亜」の動きと、日本の欧米化を念願する「脱亜」の流れのなかに、「亜細亜」への侵入が台頭する。この動向は、やがて「東亜」や「大東亜」へと継承され、昭和二〇(一九四五)年に終焉することになる。この間、「大亜細亜主義」Ⅱアジア主義の下に、アジア侵入の限りをつくし、その最前哨に移民

が配置されたのであった。

アジア移民の歴史は、日本のアジア主義と膨張主義の歴史の犠牲を物語る。圧倒的に優勢な欧米列強のアジア侵出に対抗した権力者の蔭に、アジア移民の悲劇があった。そのアジア移民の悲劇は、いまここに歴史の証左として残されなければならない。

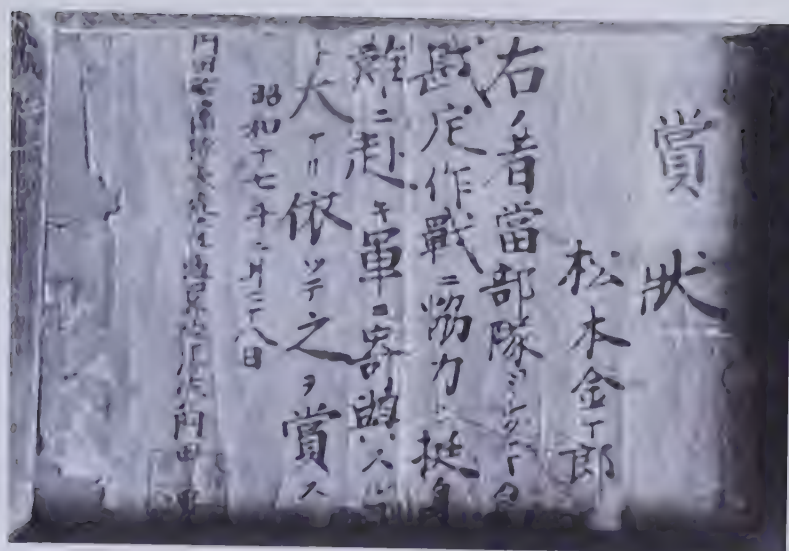
なお、アジア移民に関する文献は、きわめて少なく、本書もまた、稀少な資料を用いて上梓せざるをえなかった。本書は、『移民史Ⅰ南米編』の続刊であり、環太平洋移民を把握するためのものである。

「亜細亜」の覇権の悪夢は、再現されてはならないことを、ふたりの編著者は強く訴えたいと思っている。

一九八五年三月

今野 敏彦

藤崎 康夫



戦争に協力した移民に与えた軍の賞状

バゴホ族の機織 (ミシタ・イロ)



緒言

倭寇^{わこ}や南蛮貿易を契機とした向化倭人（朝鮮半島定住者＝移民）と東南アジア各地の日本人町の出現は、室町時代から江戸時代初期までの、およそ三〇〇年間にみられる。だが、徳川幕府の長い鎖国政策は、日本人の海外往来を禁じ、いわゆる海外移民は停止した。人びとの社会的移動は、長く禁圧されてしまったのである。

慶応二（一八六六）年に、徳川幕府は海外渡航禁止令を解いた。その結果、欧米に渡った人びと（幕府・各藩の留学生、在留外国人とその家僕など）は別として、アジア各地へ日本人移民が流れた。かれらの多くは、人身売買にかかわる売られる側か売る側の無法者であり、あるいはまた「からゆき」とよばれた売春婦たちであった。明治初期から昭和初期までに、売春業者の手を経て海外へ売春婦として流出した「からゆき」の多くは、日本の大陸侵略およびアジア侵行にともなう娼樓の繁盛を背景として生まれた。九州北部、西部（天草島、島原半島）の出身者が多いといわれるが、出身地はさらに広範なものであったとみてよい。一説によれば、大正初期の海



ダバオの日本人移民



焼き払って畑をつくる（ダバオ）



マニラ麻畑 (ミンダナオ島)



ラミー麻挽き (太田興業株式会社)



古川拓殖会社20周年記念・ダリアオン大運動会（1935年）

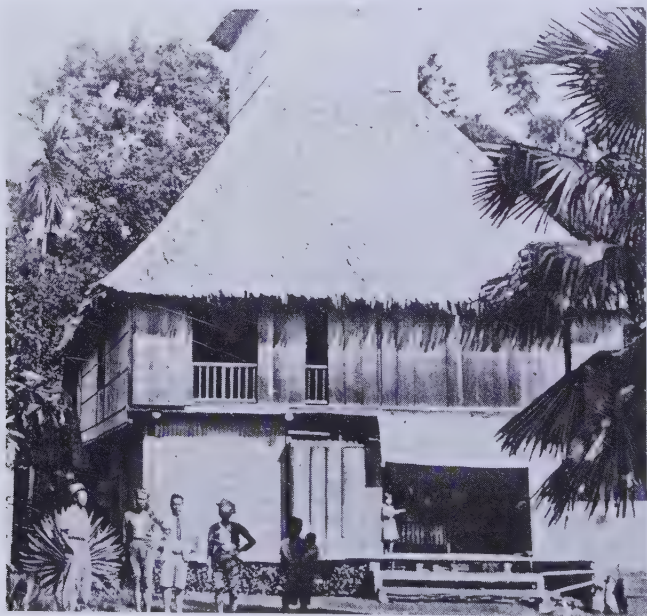
ダバオ港（幸写真館アルバムより）





日系移民と現地人

(ミンダナオ島)



バゴボ族の家



ダバオの日本移民の子供たち（1983年）



ミンダナオ島の混血
日系人たち(1983年)



ダバオの日本人小学校



ダバオの日本人旅館（幸写真館アルバムより）



ダバオ在留日本人の慰霊塔

ミンタルの太田恭三記念碑（ミンダナオ島）





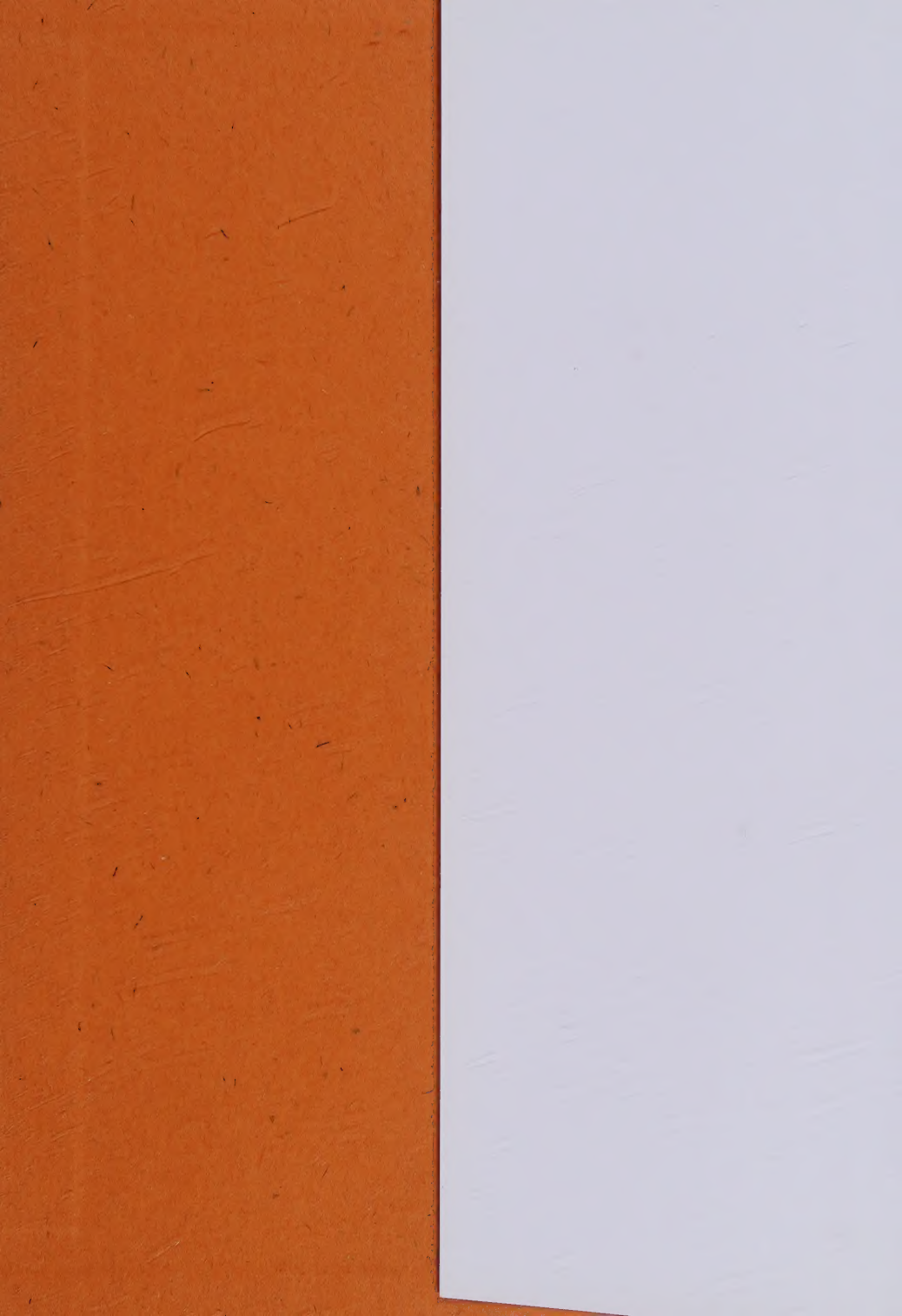
〔Ⅱ〕
アジア・オセアニア編

今野敏彦
藤崎康夫 編・著

増補



新泉社



増補



[Ⅱ]
アジア・オセアニア編

今野敏彦
藤崎康夫 編・著



新泉社